
いつか王子様かお姫様が

境 京亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか王子様かお姫様が

【Nコード】

N1566G

【作者名】

境 京亮

【あらすじ】

街が桜に彩られた4月。都内の一画に位置する私立円舞学園。^{エンブガクエン}その学校に向かう一台のキャデラック。キャデラックの持ち主は隼瀬^{ハヤ}美優貴^{セミユキ}。円舞学園の新生入生にして、天下無敵のお嬢様。今までとは違う、新たな環境、新たな出会い。そして、お嬢様は恋をする。

プロローグ

桜の花びらが舞っていた。

春の暖かい日差しを浴びて、車道を車が、歩道を自転車^が、人が進む。

のろのろと走る車の列の中の1台。

その車は、歩道の親子連れや自転車に乗った学生、対向車のドライバーの興味を引いているらしく、人々の視線を一身に受けていた。ピンクのキャデラック。

磨き上げられた車体はキラキラと輝き、色と相まって存在感を一際高めている。

クラシカルとも言えるその車の内部には3人の人物。

1人は白髪で柔和そうな瞳をし60代くらいの男。

キツチリとした黒服姿で、口元には穏やかな微笑みをたたえている。

この男は白い手袋をはめ、左側の運転席でハンドルを握っていた。その男の横、助手席には若い男が座っていた。

真新しいグレーのブレザーに白いワイシャツを身につけ、赤地に銀色の細いストライプが入ったネクタイを締めている。

長めのサラサラとした黒髪の下に、細いスクエアタイプの眼鏡。その奥には知的そうな切れ長の瞳。

その男は、視線を自分の手元の書類の束に落としている。長い指で書類をめくり、若い男は口を開いた。

「... それでは、報告を続けます。本日からお嬢様^{エンフガクエン}がお通いになれるのは、私立円舞学園。広大な敷地を有し、敷地内には中学校と高等学校が併設しています。中・高を合わせた総生徒数は新入生を含め2,158人。お嬢様のご要望に最も近い学園かと存じます」

そう言って、男はルームミラーに視線を送る。

男の位置から、後部座席に座る人間が鏡の中に見えた。

鏡の中に若い女がいた。

その娘は、眼鏡をかけた男と同じデザインの女子生徒用の制服に身を包み、顔を窓の外に向けている。

手入れの行き届いた艶やかな長い髪は、オレンジ色。

その髪は、染めたものではないことが見て取れる色合いだった。

長い睫が、パッチリとした茶色の瞳を縁取っていた。

腕組みをした女は、ゆっくりと流れていく歩道の桜並木を眺めている。

不意に、娘は言った。

「…覗き見とは感心しないな。守人^{モリヒト}」

眼鏡の男は、慌てたように鏡の中の娘に頭を下げた。

「申し訳ございません！この影山^{カゲヤマ}守人^{モリヒト}、浅はかでございました！」
後部座席の女は目だけを守人の方に動かし、楽しそうに微笑んだ。

「まあいい。許す」

そう言って、娘は首を前に向けた。

「守人。春とはどんな季節だ？」

娘は、守人を試すかのように訊ねる。

守人は下げていた頭を上げ、

「この守人、愚考致しますに…。始まりの季節ではないかと」と、ゆっくり答えた。

「始まりの季節か。正しい。…だが、応用が利きすぎる。何の始まりか分かん。面白くないぞ」

そう言いながらも、娘は不敵に笑っている。

「いいか、守人。春とは、恋の始まりの季節だ。人々は新たな場所で出会い、惹かれあい、恋に落ちる！」

娘は組んでいた腕を広げ、

「もちろん、違う季節でも恋はできる。しかし、春の恋は発生率が違う！それは、人の動きに合わせ、ロマンスの女神も動き始めるからだ。女神の力が作用して人はときめく！人が人を想う力は計り知れない。それゆえに、春は人の心が狂うのだ！春こそが、ロマン

スの女神の仕事初めと言えるだろう！」

と、大衆を前にした政治家のようにして演説をうつと、一仕事終えたようにフウとため息をついた。

その娘が言葉を続けている間、守人は鏡に写る娘をじっと見つめていた。

娘がため息をついた瞬間、守人の瞳から一筋の涙が流れた。

涙は堰をきったかのように流れ出し、守人はブレザーから白いハンカチを取り出す。

守人はハンカチで両目の涙を拭いながら、

「…こ、心、洗われました」

と、震える声で言った。

娘は満足そうに微笑むと、運転する男に向かって、

「先崎^{センザキ}。あとどれくらいで着く？」

と、訊いた。

先崎^{センザキ}林太郎は首を少し右に向け、

「あと5分程かと」

と、瞳が物語る通りに柔和な声で答えた。

「そうか」

娘は笑顔のまま腕を組み直し、

「急がせるようだが、出来る限り早く着くようにな」

先崎は頭を下げると、

「かしこまりました」

そう答えて、フロントガラスに顔を戻す。

「守人」

涙を拭い終え、ブレザーにハンカチをしまった守人に、娘は語りかける。

守人は未だ興奮覚めやらぬといった調子で、

「はっ」

娘は心から楽しむように微笑み、

「面白くするぞ。私達の高校生活を！」

守人は首を左に曲げ、背筋を伸ばしたままで頭を下げた。

「かしこまりました。お嬢様」

お嬢様と呼ばれた娘、ハヤセ ミユキ隼瀬美優貴は再び窓の外に目を向ける。

キャデラックをポカンした表情で見送る人々の真上に、桜の木々が等間隔に並んでいる。

先ほどと変わらず、花びらは絶え間なく、ヒラヒラと、風にふかれて舞い上がっていた。

第1幕：1年7組にて

私立円舞学園の北校舎は、新入生のざわついた雰囲気満ちていた。

誰もがおろしたてと分かるグレーの制服を着、眩しいくらいに白い上履きを履いている。

上履きの側面には学年を表す青いラインが入っている。

ある者は楽しそうに笑い、ある者はぎこちなく笑い、またある者は緊張した様子で席についていた。

北校舎の3階、1年7組の教室。

浮き足立った空気の中で、鈴森なな（スズモリ ナナ）は人目もはばからずに大きな欠伸をした。

眠たそうな目をして、ななは机に頬杖をつく。

ななも例にもれず、キチンと制服を着込んでいる。

ななの肩のあたりまでのびた黒髪が、窓から流れ込んだ風にサラサラとなびいた。

教室には、すでにいくつかのグループが出来ているらしく、出身校や趣味の話題で話に花が咲いていた。

その中で、ななは独り退屈そうに、教室前方の黒板の上にある壁掛け時計をぼんやりとした様子で眺めていた。

黒板の前に固まる2・3人の男子が、談笑の合間にななの方をチラチラと盗み見していた。

教室の出入り口の開け放した戸からも、廊下を歩く男子が足を止めて、教室の奥に陣取ったななを覗き見している姿が確認できた。

その男子達の目には、テレビに出てくるモデルを見たかのような輝きが、共通してあった。

「あのう、すみません。通してください」

2つある出入り口の、前方に位置するほうから声がした。

ななは何気なく、といった様子で扉を見やる。

出入り口にたむろした男子をかき分けて、1人の少女が8組の教室に姿を現した。

その少女は、ななよりも少し長い栗色の髪を黄色のヘアピンで留め、淡い黄色のフレームの眼鏡をかけている。

少女は、真新しい学校指定の鞆を左手に提げて、オーバル型の眼鏡越しに瞳をキヨロキヨロと動かした。

ななは座ったまま、少女に向かって片手を軽く上げる。

その少女はななを見つけると、嬉しそうな顔をして駆け寄った。

「おはよう。 なな」

可愛らしい声で、少女は一日の挨拶をななに言った。

「おはよう。 りる香^{リルカ}」

と、ななは少しハスキーな声で紙屋りる香^{カミヤ リルカ}に向かって答えた。

「さつきクラスの表見て、びっくりしたよお」

そう言つて、りる香は大げさに片手を振る。

「また同じクラスになるなんてね。これで何年目かなあ？」

ななは頬杖をつくのをやめて、

「中1からだから……。4年目じゃない？」

「4年かあ。この広い学校で、また同じクラスになるって珍しいよね。これは運命の赤い糸で結ばれてたりするかもねえ」

と、笑いながら言うつりる香に向かって、

「それはねーわね」

と、ななは少し口元を緩ませて、言った。

縦に5列ならんだ内、ななは真ん中の列で、席は後ろから2番目だった。

ななの後ろの席をあてがわれた生徒は、まだ登校してきていない。机の横のフックに鞆がさがっていないことから、それは明らかだった。

「私の席はどこかなあ」

と、りる香は教室の中をのん気に見回して訊く。

「机の右隅に名前が貼つてあるわよ」

「あつ。なるほどねえ」

りる香は教室に点在する、誰も座っていない席を次々とまわり、やがて、廊下側から数えて2列目の先頭の席に鞆を置いた。

「ついてないなあ。最前列かあ」

生徒の合間を縫って、ななの席に戻ってきたりる香は、不服そうに唇をとがらす。

「まあ、すぐに席替えするでしょ。それまでの辛抱よ」

と、ななは気休めのように言った。

「それにしても、人が多いね」

「ああ。なんか1年だけで14クラスあるらしいわよ。この校舎には1年しかないんだってさ」

と、ななはあまり興味のなさそうな調子で答えた。

「ここ、中学もあるからね。やたら人は多いわよ」

りる香は感心したように、

「ふうん。よく知ってるね」

「別に。その辺で喋ってるのが聞こえただけよ」

サラリと言って、ななは教室の中を見回す。

何人かの生徒が、慌てたようになな達から視線をそらした。

「色んな人がいそうだねえ」

と、りる香は深く考えていないような調子で答えてから、何かを思い出したように、

「あ、そういえば」

「どうしたの？」

と、ななはりる香の言葉を促すように訊いた。

「さっき来るときにさ、変な車を見たんだあ」

「変な車？」

「うん。ピンクの車。なんか、今の車みたいにカクカクしてなくて。どっちかっていうと昔の車っぽかった」

と、思い出すように天井を見つめながら、りる香は言った。

ななは頼杖をつくとき、呆れたようなニュアンスを含みながら、

「ピンクか。物好きね。今時サンダーバードじゃあるまいし」

「もしかしたら、この学校の人かもしれないねえ」

ななは、ぶつきらばうではないが本当にどうでもよさそうな口調で答えた。

「そうかもね。まあ、私に迷惑かけないんだったら、何でもいいわ」

3階の全ての教室や廊下は、話し声や笑い声、物音に埋め尽くされ、ある種の騒音の渦中にあつた。

そのとりとめのないザワザワとした空気が、段々と異なる性質のザワザワした空気に変わっていった。

何か、特定の対象に向けられているようなざわめき。

廊下の方から起きた異変に、7組の教室にいる生徒も少しずつ気づき始めているようだった。

2人組みの女子が、野次馬根性を発揮した様子で教室から出ていく。

りる香は不安そうな顔でななを見た。

「何かあつたのかなあ？」

「さあ」

素っ気なく答えながらも、ななは視線を開かれた戸に向けている。ななの位置からは、廊下の一部しか見えない。

その一部も男子の背中に遮られている。

ざわめきの源は1年7組の教室に近付いているらしく、ざわめきもそれを追うようにして、3階端の7組の教室に近づいていく。

戸口にたむろしていた4・5人の男子が、驚いた様子で廊下に出ると同時に、1人の男子生徒が7組の入口に現れた。

背の高い、スマートな体つきの男子。

グレーのブレザーが、オーダーメイドのように体に合っている。

その両手には2つの鞆を提げていた。

知的そうな顔に眼鏡をかけたその男子は、教室を素早く見回す。首の動きに合わせ、黒髪の前髪が揺れた。

その男子生徒は、影山守人だった。

「格好いい…」

りる香は、思わずといった様子で呟いた。

守人は戸口から一步離れると、自分がやってきた方に向かって恭しく頭を下げる。

そのままの姿勢で守人は、

「お嬢様。こちらでございます」

と、使い慣れていない不自然さを感じさせない口調で言った。

廊下側から、凜とした快活な印象を与える声が答える。

「そうか。ご苦労だったな」

その言葉が終わりきる頃には、先ほど守人が立っていた位置に女子生徒が立っていた。

黒っぽいスカートからスラリとした脚が伸び、背中まで届く髪の色はオレンジ色。

その髪は、廊下の開け放された窓からの風で、そよそよと揺れている。

パツチリとした明るい茶色の瞳。

馬上の女騎士のような、凛々しく整った顔立ち。

口元は満足そうな心情を物語るかのような形で、結ばれている。

その女子生徒は、紛れもなく隼瀬美優貴だった。

「綺麗え…」

再び、りる香は思わず、といった様子で呟いた。

美優貴は周りなど気にならない様子で、スタスタと教室の列の間を歩き始めた。

その後を、守人は少し距離をおいて、ついていく。

廊下から、複数の好奇の視線が美優貴を追う。

教室内では、誰もが無言で美優貴の行動を見つめる。

やがて、美優貴は自分の席を見つけたらしく、1つの机の上に片

手をついた。

その席は真ん中の列の最後尾、なの真後ろの席だった。

「一番後ろか。悪くないな」

楽しそうに言って、美優貴は片手を守人に向かって伸ばす。

守人は2つある内、左手の鞆を床に置くと、残った鞆を両手で持ち直した。

その鞆の取っ手を、美優貴の指に滑り込ませるように通す。

美優貴は受け取った鞆を机の横のフックに掛け、

「守人。自分の席を探していいぞ」

「ありがたき幸せでございます。それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

守人は計算された角度であるかのように頭を下げると、足元の鞆を手に取り、残りわずかとなった空いている席を探しにいった。

美優貴は、教室の中をゆっくりと見回した。

教室の生徒はあんぐりと口を開けて、美優貴を見つめている。ななは例外で、体をひねり、ただ美優貴を見上げているだけだった。

自分の前の席に座っているななに視線を止めた。

「ん？」

美優貴は確認するかのように、ななに顔を近付ける。

ななは反射的に、といった様子で体を引く。

「何？」

と、ななは少し目を細めて訊いた。

美優貴は真面目な顔で、じつとななを見つめてから、

「…なるほどな」

と、意味深に言って、顔を離した。

「しかし…」

そう呟き、美優貴は、両の手のひらをこめかみに当てた。

口づけをするかのように唇を少しだけとがらし、髪に沿わせるように指をゆっくりと後ろに流す。

その間、瞳は考えごとをするかのように閉じられていた。美優貴の仕草を見つめていた男子は、感嘆するかのような息を吐く。

美優貴は、何かに気付いたように両の目を見開き、片手を腰のくびれに当てた。

「…ああ、自己紹介がまだだったな。私の名前は隼瀬美優貴。今日からこの1年7組に籍を置くことになった。よろしく頼むぞ」と言つて、ななとりる香を交互に見やる。

りる香はハツとした表情になり、慌てた様子で、

「あ、えつと、紙屋りる香です。こっちこそよろしくね」

ななは体をひねったままで、

「私は鈴森なな。よろしく」

と、りる香とは対照的にあっさりと自己紹介を済ませた。

守人が自分の鞆を置いてきたらしく、美優貴の斜め後ろに立っていた。

「この者は影山守人。守人も今日からこのクラスに籍を置くことになる。私共々よろしく頼む」

そう言つて、美優貴は背後に視線を送る。

「よろしくお願い致します」

守人はゆっくりと、頭を下げる。

つられた様子でりる香は、深々とお辞儀をした。

「よろしく」

と、ななは口調を変えずに言つてから、

「隼瀬さん、と影山くんはどういう関係なの？」

と、周りの生徒が気になっているであろうことを訊いた。

「美優貴でいい」

「次からそうするわ」

「関係は簡単だ。私は守人の主。守人は私の執事だ」

「執事？」

美優貴の答えに生徒の囁き声が、波紋のように広がる。

「そうだ」

ななは、美優貴の整った顔を見つめ、

「…そうなの」

「そうだ」

そう答えて、美優貴は滑らかな動作で首を斜め後ろに動かす。

「守人。始業式の開始時間は？」

守人はブレザーの内ポケットから銀の懐中時計を取り出し、パクツと蓋を開く。

「午前9時30分に開始予定です。現在の時刻が午前9時06分ですので、じき移動しなければなくなるかと」

「そうか。それと守人。今、私達は目立っているんじゃないのか？」

守人は時計をしまい込み、教室を見回す。

守人は何の威嚇も感じさせない表情で、ただ見回しているだけだった。

それでも、今まで美優貴たちを物珍し気に眺めていた生徒が、守人の視線から逃れるように顔を逸らした。

廊下から覗いていた生徒も、蜘蛛の子を散らしたように7組の教室から離れていく。

守人はギャラリが無くなったことを確認すると、美優貴に向かって頭を下げる。

「ご苦労」

「勿体無きお言葉でございます」

美優貴の労をねぎらう言葉に、守人は答える。

やがて、廊下から教師が移動を促す声が聞こえ、北校舎は当初のざわつきを取り戻すこととなった。

第2幕：石畳の坂から

「りる香とななは中学の時からクラスメイトなのか」

と、美優貴は少し驚いた様子で言った。

「そうだよ」

と、りる香はニコニコとした顔で答えた。

「高校が一緒というのは珍しくない。だが、クラスも一緒なのは珍しいな」

「そうだよねえ。珍しいよねえ」

「2人は運命の赤い糸で結ばれているんじゃないか？」

「そう思うよねえ」

「いや、それはねーわね」

と、ななは間髪入れずに否定した。

美優貴達は教師の指示に従い、北校舎から講堂まで移動している最中だった。

ガヤガヤと騒がしい団体の中で、美優貴とりる香は2人並んで階段を下りている。

その後ろにななと守人が続く。

守人の後ろには誰も下りてくる者はおらず、ななと守人が最後尾だった。

「すごいよねえ。講堂があるなんて。私は、入学式は体育館かと思ってたよお」

と、りる香は大きな独り言のように言った。

ななは、上下に揺れるりる香の後頭部を眺めながら、

「どこでやるんでもいいけど、靴を履き替えなくちゃいけないのは面倒くさいわ」

と、言葉通り面倒くさそうに言う。

4人は階段を下り終わると、人の流れに続いて階段正面の正校口に向かった。

縦に立ち並ぶ無機質な金属製の靴箱。

その前には生徒が詰めかけ、靴を履き替えていた。

少し薄暗い中に、開け放されたガラス扉から日の光が入り、光の中で埃が空気に合わせて流れていく。

「どれが自分の靴箱が分からなくなるよねえ」

と、りる香は困ったように言う。

人の混み具合が薄らぐと、美優貴は7組と書かれたプレートが置かれている靴箱に近づく。

「そうだな。プレートが無ければ手間取るだろう」

そう言って、美優貴は列の中ほどにある小さな扉を開けた。

美優貴の行動を見て、ななは少し意外そうな口振りで、

「へえ。自分で開けるの？」

「そうだ」

美優貴は指先にダークブラウンのローファーをぶら下げて、

「靴箱は大事だからな」

と、自信に満ち溢れた表情で言った。

美優貴がローファーをタイルの上に置くと同時に、守人は上着の胸ポケットから折りたたみ式の靴べらを取り出し、両手で美優貴に向かって差し出す。

「ご苦労」

靴べらを受け取り、美優貴は手慣れた手つきで革靴を履いた。

守人は美優貴が脱いだ上履きをげた箱にしまい、美優貴から靴べらを受け取ってから、自分のげた箱を開ける。

「席は最前列で、げた箱は一番下かあ。ついてないなあ」

しゃがみながらブツブツとりる香は文句を言う。

ななは靴を履くと片足を上げ、指で上げた足の方の靴のかかとを直す。

右のかかとを直し、左のかかとを直し、爪先でトントンと床をつつく。

その動きをしながら、ななは外に向かった。

外に出ると、ななは眩しそうに目を細める。

北校舎は、校舎の中では最も正門に近い所に位置していた。

北校舎から正門までは緩やかな下り坂になっていて、敷石がひかれている。

入学式が行われる講堂は正門のすぐ横、北校舎から見て左側にあった。

講堂は現代的なデザインの建物で、ザラザラとした岩肌のような濃いグレーのタイルで覆われている。

一面ガラス張りになっている1階部分が入口になっていて、その中に生徒の行列が吸い込まれていく。

ガラスには赤と白に縁取らるた入学式の看板が立て掛けられていた。

正門の右手、講堂と向かい合うようにして教職員用の駐車場や通学バスのバス停があった。

なながぼんやりと正門までの風景を眺めていると、「どうした？」

と、美優貴が声をかけた。

ななは横に並んだ美優貴に向かって首をひねる。

2人の背丈はほぼ変わらないが、ななの方が僅かに身長が高い。

美優貴の髪は太陽の光を受けて、教室の時よりも色が明るい。

その髪は穏やかな風に吹かれるがままになっている。

ななの黒髪も、自身の肩を撫でている。

ななは訊いた。

「その髪、染めたの？」

美優貴は耳の辺りをそよいでいた髪をつまみ、目の前に持っていた。

「染めてないぞ。元々この色だ」

美優貴は何でもなさそうに言う。

「父も同じ色をしている。遺伝だろう」

「へえ」

美優貴は髪を風に任せるように、つまんでいた指を開いた。

「ちよつと、おいてかないでえ」

りる香の声に美優貴とななは振り向く。

りる香は靴を履き替えるのに手間取ったらしく、くつひもが不格好に結ばれていた。

小走りで外に出てきたりる香の後ろから、守人がゆっくりとついてきた。

美優貴は悪戯っぽく微笑むと、

「グズグズしてるとおいていくぞ。ただでさえ最後なんだからな」と言つて、スタスタと歩き出した。

「あつ、待つてえ」

と、りる香は美優貴の後を追うように小走りになる。

美優貴が先導するようになかたちになり、前の生徒との間にできていた距離がだんだんと縮まる。

りる香は美優貴の横を小走りで進み、美優貴の後ろになな、ななの横に守人が並ぶ。

石畳の坂は駐車場を避けるように左にカーブを描いており、道の両側を紫陽花の植え込みが飾る。

紫陽花の花は咲いておらず、緑の葉が太陽の光を浴びているだけだった。

講堂の横には平地に作られたスペースがあり、その中央には噴水があった。

スペースには設立者らしい人物の像も置かれていた。

前を歩く生徒達の喋り声の他に、遠くのほうから歓声が聞こえた。その声に反応するように、美優貴は足を止めずに声がした方向に顔を向ける。

ななとりる香も美優貴と同じ方向を向いた。

坂のすぐ下に広がる駐車場の奥に、フェンスに囲まれたテニスコートがあった。

テニスコートは4面あり、使われているのは美優貴達から見えて一

番手前にあるコートだけだった。

コートの中を、ショートカットの女子とポニーテールの女子が動き回っていた。

両者共、髪の色は黒い。

女子テニス部らしく、フェンスの中にいるのは青いジャージ姿の女子だけだった。

10数人の女子が試合中のコートの周りを取り囲み、プレイヤーがボールを返すたびに黄色い声をあげている。

「テニスかあ。いいなあ」

と、りる香は羨ましそうに言う。

「でも、りる香は運動音痴だから止めたほうがいいん…」

ななは言葉を詰まらせた。

美優貴が急に立ち止まり、よそ見をしていたななは美優貴にぶつかった。

そのことに驚いたななは、言葉を詰まらせたようだった。

「どうしたの？」

と、ななは美優貴に訊く。

美優貴はななの問いかけに答えず、ただコートの方を向いている。こぼれ落ちそうな程に見開かれた瞳。

呼吸を止めた器官。

その表情は、信じがたい光景を目にしたかのようだった。

小さく開かれた唇が小刻みに震えだす。

「どうしたの？」

と、ななは先ほどよりも深刻な口調で訊く。

美優貴はななの方にふらつくように向き直ると、ななの両肩に手をかけた。

ななの肩を美優貴はガツシリと掴む。

「ちよつと…」

と、ななは少し慌てたように言う。

美優貴がななに体重をかけているらしく、体勢が斜めになってい

る。

美優貴はなの胸元に額を押し当て、苦しそうな息をつく。
りる香はオロオロとななと美優貴を交互に見ながら、

「だ、大丈夫？」

ななは美優貴の肩の近くに両手を浮かせて停止している。

守人はハツとした表情で美優貴を見やってから、美優貴が見ていた方向に顔を向ける。

守人の目が細くなり、何かを探しているかのように素早く視線が動く。

「わ、私、先生呼んでくる！」

りる香はそう言って、数m先の講堂に向かって走り出した。

美優貴の肩が上下に動き、駅伝でタスキをつないだ直後の選手のような呼吸に変わった。

ななは、より心配そうに声をかけた。

「大丈夫おっ」

ななの言葉の途中で美優貴が動いたことで、ななの気遣いの言葉は未完に終わった。

美優貴がななを下から押し上げるように膝を伸ばしたかと思うと、一歩二歩とななの方に足を進める。

「ちよつと、待つ」

ななは美優貴に押されるがまま、後ずさる。

美優貴は歩みを止める様子はない。

「危ないっ、からっ」

と、ななは後ろを引きつたら顔で見ながら言う。

ななは重心が後ろに持っていかれた様子で、背中を反らせ、後ろ向きで進む。

徐々にその歩幅が短くなり、ななはバック走を強いられるかたちになった。

バタバタと安定しない足元。

「倒れるっ、からっ、待って！」

ななは身の危険を知らせる声を上げながら、バック走を続ける。
ななのバック走は、坂を真っ直ぐ進んでいなかった。
斜めの進路。

それは講堂の横、噴水のある広場のようなスペースに向かう進路だった。

坂との境目にある階段を大股でまたぎ、ななは美優貴に押されて広場に入る。

噴水の周りに並ぶ石造りのベンチ。

ななはそのベンチのひとつにぶつかり、

「うっ！」

と、驚きの声を上げて、ベンチに尻餅をついた。

ななは痛そうに顔をしかめながら、美優貴を見上げる。

美優貴は下を向き、息を荒くしていた。

片手を胸に押し付け、ふらつく足取りで、広場の奥へ向かう。

ななは深呼吸をしながら、視線で美優貴を追った。

ななのすぐ横では噴水が涼しげな水の音をたてていた。

その噴水の奥、美優貴の進む先に1本の木があった。

太い幹が、その木が過ぎしてきた歳月を表している。

桜の木。

桃色の花に包まれた枝は、隣に建つ講堂の屋根にまで届いていた。
根を避けるように、桜の周りには石畳がひかれていない。

美優貴は地面がむき出しになった桜の根元に近付くと、よりかか
るようにして左手をつける。

右手は相変わらず、胸に押し付けられ、苦しそうな表情も変わっ
ていない。

「お怪我はございませんか？」

声に、ななは振り向いた。

ななのベンチの後ろに、背筋を伸ばした守人が立っていた。

真剣な表情。

ななはネクタイ越しにシャツの襟に指をかけて、服の内側に風を

送りながら、

「…あんなに声を出したのも、あんなに動揺したのも初めてよ」と、落ち着きを取り戻した無表情で言った。

「左様でございますか」

「…6歳の時に、独りでエレベーターに閉じこめられた時でも、あんな大声は出さなかったわ」

守人は、ななに向かって深く頭を下げ、

「いかに非常事態とはいえ、鈴森様を危険な状況下においてしまったこと、この影山守人、主に代わりまして深くお詫び致します」

と、真面目な口振りで謝罪した。

ななは風を送りながら、

「…別にいいわよ。頭をあげて」

「申し訳ございません」

守人は頭をあげた。

ななは、桜にもたれかかる美優貴を見ながら、

「…彼女、持病かなにかあるの？」

と、気遣うように守人に訊く。

「仰る通りにございます」

と、守人は重々しい口調で答える。

「悪いの？」

「それはそれは重い病でございます」

そうと言って、ななは慎重な口振りで、

「心臓の病気？」

守人は首を横に振る。

「いいえ。違います。慢性的な恋わずらいです」

「は？」

ななは、守人の方に顔を向ける。

ななは顔を奇妙に歪ませ、

「慢性的な何？」

守人はななの顔を真っ直ぐに見据え、

「恋わずらいです」

と、はつきり言った。

ななは言葉を失い、呆れたように口を開けた。

守人は美優貴の方に顔を向け、

「入学初日に再発されるとは…。やはり我が主は、私のような愚かな者には計り知れないお方です」

と、高揚した様子で言う。

ななは考えをまとめるように、人差し指で鼻の頭を叩いた。

「…つまり、彼女は恋に落ちたと？」

「左様でございます」

「確か、彼女はテニスコートを見てたわよね？」

「左様でございます」

「私が見た限り、あそこには女子しかいないように見えただけ？」

「左様でございます」

「…彼女、同性しか愛せないタイプの人なの？」

守人は首をゆっくりと振る。

「いいえ。決してそのようなことはありません。お嬢様は、人類全てを愛することが出来るお方なのです。男性も女性も関係ないのです」

真顔で語る守人に向かって、

「…そう」

と、ななは疲れた様子で言った。

ななに一礼をしてから、守人は桜の木の方に向かう。

石畳に響く足音に気付いたように、美優貴はゆっくりと顔をあげた。

美優貴は荒く呼吸を続けており、上下する肩はますます激しくなっていた。

大きな瞳は熱っぽく潤み、頬は上気して赤くなっている。

美優貴は震える声で、

「…も、守人、おかしいぞ。苦しい。心臓が締め付けられるみた

いだ。以前にも感じたことのある、この痛み…。こ、これは、なんだ？」

守人は一歩進み出て、静かな口調で、

「この守人、愚考致しますに…。お嬢様、それは恋なのではないかと」

美優貴は口をOの形に開き、崩れ落ちるかのように地面に膝をついた。

美優貴は空を仰ぎ、両手を桜の枝をつかむように伸ばし、

「これが…、恋？」

と、信じられないといった口調で言う。

守人は片足をつき、王に謁見を許された騎士のようなポーズをとる。

「左様でございます」

美優貴は伸ばしていた手を下ろし、胸の前で交差させて、自分を抱きしめた。

「これが、恋か?!」

守人は両手を広げ、

「それが、恋でございます!」

ななはベンチに座り、美優貴と守人の様子を眺めていた。

美優貴達は問答を情熱的に続けている。

舞台役者のように全身を使って動いている美優貴達を見ながら、ななはため息混じりに呟いた。

「…あいつら、めんどくせーわね」

第3幕：保健室の主

北校舎の1階。

美優貴達が在籍する1年8組の教室の真下に位置するところに、学園の保健室があった。

教室と同じ広さの部屋。

部屋の両脇に、パイプベッドが3台ずつ並び、ベッドを囲うように、カーテンのレールが天井に設置されている。

白いカーテンがひかれているのは、廊下側から見て右側の中央のベッドの周りだけだった。

部屋の中央には保健医が使うデスクがあり、そのデスクは出入り口がある壁とは逆の壁に近いところに置かれていた。

デスクの上の丸い壁掛け時計が、11時46分を指している。

保健室の窓のからは、校舎の中庭の花壇や、石畳、ベンチが見えた。

美優貴はベッドの上で目を覚ますと、ゆっくりと上体を起こした。

カーテンに遮られた周りをぼんやりとした様子で見回しながら、

美優貴は片手で口元を押さえて、小さな欠伸をした。

美優貴の起きた気配に気付いたらしく、カーテンの外からスリッパがパタパタと音をたてて動いた。

カーテンがシャーと軽い音をたてて開かれ、美優貴は眩しそうに少し目を細める。

「あ、起きたね。気分はどう？」

カーテンを開けた人物は美優貴に訊く。

「…悪くないな」

美優貴は身だしなみを整えるように、両手を動かす。

「ここはどこだ？」

と、美優貴は訊いた。

「ここは保健室。それで、私は保健室の先生。名前は堤愛子^{ツツミ アイコ}」

カーテンをまとめながら、愛子は答えた。

「式の途中で倒れちゃう子はよくいるけど、式の前に担ぎ込まれたのは初めてよ。びっくりしちゃった」

と、愛子は笑いながら続ける。

美優貴は愛子をじっと見つめ、

「先生」

「何？」

「失礼ですが、身長は何cmですか？」

と、丁寧な言葉遣いで美優貴は訊いた。

愛子はバツが悪そうな顔を美優貴に向ける。

「…139。やっぱり先生に見えない？」

そう言つて、愛子は美優貴がいるベッドから離れ、デスクの横で腕組みをした。

ウェーブがかかった色の濃い、茶色の長い髪。

造りが小さい顔の中で、小型犬のような瞳が目立っていた。

青いブラウスに黒いスカート。

その上に羽織る白衣はサイズが合っていないらしく、袖がまくられている。

愛子は八重歯を見せて、

「子どもっぽく見える？」

と、軽く舌つ足らずの可愛い声で訊いた。

美優貴は思案する瞳で愛子を見つめた。

瞬間、何事かに気付いたような顔をしてから、美優貴は優しくそうに微笑む。

「…そうかも知れませんが、気になさることはありませんわ。先生はとても魅力的に見えますもの」

愛子はキャスター付きの椅子に腰掛け、美優貴の枕元に向かってコロコロと音をたてて移動する。

愛子は美優貴を上目遣いに見つめて、

「そう思う？」

と、自信なさそうに訊く。

美優貴は掛け布団を掛けたまま、体育座りのように膝を抱えた。
美優貴は優しい微笑みを絶やさず、

「ええ。とてもチャームिंग。私が保証しますわ」

そう言つて、愛子の頬に左手を伸ばす。

美優貴は愛子の頬に直接触れずに、1cm程の間をあけて、頬から顎までの輪郭に沿つて指先を滑らせた。

愛子の目の前で軽く人差し指を立て、魔法使いが魔法の杖を振るような動きをすると、美優貴はフツと艶っぽく笑う。

愛子は美優貴の指を追うように見つめた。

美優貴は両手の指を組み合わせ、愛子に向けたまま、膝の上に頭をのせた。

愛子はハツとした顔をして、ブンブンと頭を振る。

「駄目よ！先生をからかうなんて！」

と、怒つたように言う愛子の顔は、ほんのりと赤くなっていた。

「怒るわよ！えっと…」

勢いをなくし、言葉を探すように手を動かす愛子を、美優貴は楽しそうに眺め、

「隼瀬美優貴です」

と、ゆつくり言つた。

愛子はますます顔を恥ずかしそうに赤らめて、両手を振り回し、
「怒るわよ！隼瀬さん！」

美優貴は微笑むのを止めて、愛子に顔を近付けた。

「先生。お聞きしたいことがあります」

と、美優貴は真面目な顔で囁くように言う。

愛子は荒げた呼吸を整えながら、

「何？」

「ある生徒のことをご存知じゃありませんか？」

「生徒？」

そう訊きながら、愛子は脚を組む。

美優貴は顔を窓の外に向ける。

中庭を新入生らしい男子生徒が、挙動不審な様子で歩き、上級生の女子のグループが華やかな笑い声をあげて通り過ぎていく。

美優貴は夢を見るように遠い瞳をして、詩を朗読するように語り始めた。

「…その方はテニス部に所属されています。長く艶やかな、烏の濡れ羽色の髪。黒髪をポニーテイルにまとめ、その方が動かれる度に、髪が生命を得た喜びを表すように踊る。彫像のようにバランスのとれた肉体。太陽に愛でられた肌は小麦色に焼け、その弓手には白いラケット。溢れんばかりの笑顔の中で、瞳は明るさの中に憂いを帯びた気色を称えています。ご存知ないですか？」

語り終えた美優貴は、愛子に向かって顔を向ける。

「ううん…」

愛子は組んだ脚をプラプラと揺らし、右手の人差し指と親指で下唇をプニプニと摘んだ。

「テニス部で、ポニーテイルね。学年も分からない？」

「青いジャージのズボンに、赤いラインが入っているのが見えませんでした」

「それじゃあ、高校の2年生か」

愛子はううんと唸って下を向いていたが、やがて、

「…多分、松さんね。松^{マツヒロミ}広美さん」

と言つて、顔を上げた。

「松広美さん…」

と、美優貴は呟くように言った。

愛子は自分に自信をつけるように頷くと、

「多分ね。私が思い当たる、ポニーテイルの娘は松さんだけ」

「そうですね。ありがとうございます」

そう言つて、美優貴はニコツと笑う。

美優貴の表情から、愛子は慌てたように顔をそらす。

美優貴は掛け布団をのけながら、

「先生。お手数ですが、廊下にいる男子生徒を呼んでいただけませんか？」

「誰かいるの？」

愛子は驚いた顔をして、

「何で分かるの？寝てたのに」

美優貴はきちんと揃えた脚をベッドから下ろし、

「います。私がここにいますのですから」

と、キツパリとした口調で言い切った。

愛子はそれでも納得していない表情で立ち上がると、スリッパをパタパタいわせて出入り口に向かった。

戸を開き、愛子は顔を外に出した。

愛子はまず右を向き、次に左を向く。

左を向いた愛子の視線の先に、門番のように守人が立っていた。

愛子は廊下に出ると、コホンと咳払いをして、守人を見上げる。

腰に手を当て、背伸びをして。

それでも、守人と30cm以上の身長差があった。

「あなた、隼瀬さんの友達？」

と、愛子は威厳を出すように低めの声で訊いた。

守人は一礼をすると、

「私はお嬢様の執事にすぎません。我が主が呼びでしょうか？」

「執事？」

目を丸くした愛子は、フクロウのように首を傾げる。

「守人」

と、開け放された保健室の中から美優貴の声が守人を呼んだ。

「失礼致します」

守人は一礼をすると、愛子の横を通って保健室に入る。

美優貴は上履きを履き終え、ベッドの傍らに立っていた。

守人は美優貴の前に立つと、頭を下げたままの姿勢で、

「お呼びでしょうか」

「そうだ。どうして私はここにいます？」

と、美優貴は口調を普段通りに戻して訊いた。

「はい。お嬢様は恋わずらいであることを自覚されました後、気を失ってしまわれました。その為に、保健室にお運びした次第にございます」

美優貴は思い出したように、

「…ああ、そうだったな。視界が暗くなる前の、桜の花びらを覚えてる」

愛子は背伸びをしたまま戸口に立ち、美優貴達の様子をポカンとした表情で眺めている。

「よし。移動するぞ」

「かしこまりました」

美優貴は守人の先に立って廊下に向かう。

愛子の前で美優貴は足を止めて、

「先生、もう1つだけお訊きたいことがあります」

と、少し下にある愛子の顔を見つめて言った。

愛子は胸をそらせて、

「何？」

「今日は、上級生の授業はないのですか？」

「ええと…」

爪先立ちを止めて、愛子は下唇をつまむ。

「…無いわね、確か。今日は部活がある子しか来てないわ」

美優貴は微笑んで、

「そうですか。ありがとうございます」

美優貴は愛子の耳元に顔を寄せて、

「…またご厄介になるかもしれません。その時は、お願いしますわ」

と、囁いた。

目を丸くした愛子の前で、美優貴は優雅な印象を与える微笑みを投げかけた。

「ご機嫌よう」

微笑みとともに美優貴は保健室から去っていった。
守人は愛子に一礼をしてから、美優貴の後を追う。
守人によって扉が閉じられ、保健室には愛子1人が残された。
静かな保健室には、中庭の笑い声が届いていた。

美優貴は廊下をズンズンと進みながら、

「守人」

と、背後をチラリとも見ずに守人に話かける。

「ご用でしょうか」

「動くぞ」

美優貴は言葉と裏腹に立ち止まり、守人に向き直る。

オレンジの髪がフワリと空気中を舞う。

直立する守人に向かって、美優貴は大きな瞳を向けた。

その瞳はギラギラとした猛禽類のような輝きを放っている。

美優貴は精鋭を前にした將軍のように、力強く言った。

「全ては、あの方の愛情を得るために。愛をつかむために。隼の狩りを見せてやる！」

美優貴達が去ってから、5分後。

保健室のドアをノックする者がいた。

部屋の片隅にある大きな鏡の前で、マリリン・モンローのような

ボーリングをしていた愛子は、慌てた様子で白衣を直し、

「どうぞ！」

ガラガラと音をたてて、戸が引かれた。

「すいません。隼瀬さん、いますか？」

そう訊いた人物は、ななだった。

ななは片手に鞆をぶら下げ、もう片方には折り畳まれたプリントを手にしている。

「ああ、さつき隼瀬さんを連れてきてくれた子ね」

パタパタとななに近づき、

「隼瀬さんなら、少し前に出てったわよ」

と、愛子は言った。

「…そうですか」

そう言つと、ななは手にしたプリントを忌々しそうに、目を細めて見つめる。

ななは顔を愛子に戻し、

「どこにいったか分かります？」

「分からないなあ」

「…そうですか。お邪魔しました」

ななは保健室の扉を閉めて、ブラブラと来た廊下に戻った。ため息をつき、廊下に戻るななの背中に向かって、

「ちよつと待って！」

と、愛子の声が届いた。

ななが振り返ると、白衣をひるがえして、愛子が廊下を走ってきていた。

スリッパで足を滑らしそうになりながら、愛子はななの前でブレーキをかける。

「…そう言えばね」

愛子は呼吸を整えてから、

「隼瀬さんがね、さつきテニス部の部員について訊いてきたの」

ななはうんざりしたように眉を寄せて、

「…テニス部員ですか？」

愛子は、ななの表情の僅かな変化に気付かない様子で、

「そう。もしかしたら、テニス部の見学に行ったのかもしれないよ」

ななはため息混じりに、

「そうかもしれませんね」

「お役にたつたかしら？」

と、得意気に愛子は訊く。

ななは鞆を持ち直して、

「ありがとうございます。でも…」

「でも？」

言葉を切ったななを、愛子は不思議そうに見つめる。

「廊下は走っちゃいけないんじゃないですか？」

「あつ」

ななに指摘された愛子は、即座に顔を恥ずかしそうに赤らめる。

愛子は腕組みをして、ななを睨みつけると、

「先生の揚げ足とりなんて駄目よ！怒るわよ！」

と、裏返った声で叫んだ。

第4幕：木陰の決闘

体育会系の部室が立ち並ぶ、円舞学園敷地内の南東。

人目を避けるようにして、部室の裏側にある植え込みの中を歩く2つの人影があった。

「先輩、本当に行くんですか？」

後ろにいた男が、前を歩く男に不安そうな声で訊く。

男は振り向きもせず、歯切れのいいハツラツとした声で答えた。

「当たり前だ」

前を歩く男は、逆立った黒い短髪。

後ろの男は長めの茶色い髪をしていた。

2人共白いウィンドブレーカーを羽織り、それには円舞学園サッカー部のロゴが刻まれている。

短髪の男よりも長髪の男の方が、日焼けした顔をしていた。

「でも、先輩。まだ明るいつすよ」

後ろの男は植え込みの周りに植えてある、木々の枝が遮る空を見上げた。

太陽が真上近くにあることが、葉の間から洩れる光で分かる。

「下田あ！」
シモダ

前を歩く男の怒声に、シモダ ツグトシ下田次利はビクツと体を硬くする。

「はいっ！」

短髪の男は立ち止まり、

「…暗い中でしか場所取りができねって思ってるのは素人だと、静かに語り出す。

「まだ明るい内にポジションを確保しておく。そうすることで、そのポジションの利点や欠点が見えてくる。それが出来るのが、プロだ」

「でも、覗きにプロも素人も…」

「馬鹿野郎！」

下田の言葉を男は遮り、下田に向き直った。
精悍な顔立ち。

その瞳には、強い意志が宿っていた。

男は握り拳を顔の前に構え、

「覗きは決闘だ。覗く相手に敬意を払え。それが出来るか、出来ねえか。プロッてのは、覗きに本気な奴らのことだ」

握り拳から親指だけを立てて、男は自分を指した。

「俺もその1人だ」

下田は男を打たれたように見つめ、

「先輩……」

男は下田の胸に握り拳を押し当て、微笑んだ。

「馬鹿野郎。慎さんと呼べ」

タカスキ シンイチロウ
高杉慎一郎はそう言つと、再び歩き始めた。

下田は離れていく高杉の背中を見つめ、

「最低だ……。最低なのに……」

下田は口を半開きにさせて、

「……なんで、あんなに恰好いいんだ」

そう呟くと、植え込みにガサガサと分け入り、高杉の後を駆け足で追った。

「慎さん」

「おう？」

「どうして慎さんは覗きにこだわるんですか？最近はカメラもあるのに……」

高杉は短く、楽しそうに笑い、

「馬鹿野郎。カメラなんざ卑怯じゃねえか。見つかったら、その場で色々終わる。それが、覗きのルールだ。それにな……」

高杉は肩越しに下田を振り返る。

「……カメラ越しの女体なんぞ、しょせんは本物じゃねえ。言ってみりゃレプリカだ。レプリカは本物には勝てねえ」

「レプリカ？」

「おう。例えばだ。ボツティチェッリの『ウィーナスの誕生』って絵があるだろ？よくファミレスとかの壁にかかっている絵だ」

下田は、ああと言って、

「貝殻の上に裸の女が乗っかってるやつっすね」

と、思い出したように言う。

「おう。あの絵は美しい。文句ねえ。俺はあの絵とドリンクバーがあれば、ファミレスで2時間過ごせる」

「2時間？」

と、下田は信じられないといった様子で言う。

「ってか、過ごせた」

「経験済みですか？！」

と、更に驚愕の表情で下田は叫ぶ。

高杉はケロリとした顔で、下田の反応を無視した。

「つまりだ。しょせんは点の集まりでしかねえレプリカでも、あんなに美しいってことは、本物はどうでもねえことになる」

下田は髪をかきあげ、

「なんでですか？」

「本物には、描いた人間の跡があるからだ。近くで見ねえと分かんねえぐらいの手直しの跡。微妙な絵の具の量の違い。絵が過ぎてきた年月。まあ、『匂い』ってやつだな。俺は絵の専門家じゃねえが、それぐらいは分かるつもりだ」

と、高杉は顔の前の枝をかき分けながら言った。

高杉は続ける。

「覗きつてのは、常に本物が見れるんだ。常に美術館に行っているみてえなもんだ。それに比べりゃ、カメラ越しは点の集まり。レプリカだ」

下田は高杉がよけた枝に顔をぶつけ、

「…なるほど」

と、痛そうに顔をしかめて言った。

「それにだ、覗きつてやつは視覚だけじゃねえ。覗いたときの天

候、時間、空気、音、気配。これでも全部じゃねえが、とにかく自分をとり巻く全てが覗く者の記憶に残るんだ。それらが相まって、記憶をより美しいものにする。…思い出ってのは、常に美しくなきゃいけねえ」

言い終わると、高杉は下田に爽やかな笑顔を向けた。

下田は心服した様子で、

「…さすがです」

高杉は前を向いて、

「よし、そろそろ着くぞ。先に行ってる山下ヤマシタが寂しがってるかもしれねえな」

と、声を落として言った。

突然、高杉達の前方の植え込みがガサガサと動いた。

高杉は瞬時に険しい顔つきになり身を伏せる。

「慎さん！俺です！」

小声で高杉を呼ぶ声と共に、高杉のななめ前にある植え込みの間から眼鏡をかけた男が顔を出した。

その眼鏡をかけた男は、高杉や下田のように日焼けをしておらず、色白い顔をしていた。

黒い前髪が、綺麗に切りそろえられている。

この男も、サッカー部のウィンドブレーカーを羽織っていた。

高杉は男に近づき、

「山下か」

と、安心したように言った。

ヤマシタ エンミ
山下善三は緊張した表情を高杉に向け、

「慎さん、問題が発生しました」

と、表情の通りの声で言う。

高杉、下田も山下の横にかがみ込む。

「何があつた？」

「先客がいます」

「先客？」

高杉の言葉に、山下は顔を先客の方に顔を向けることで答えた。
植え込みから、高杉達は顔を覗かせる。

植え込みのすぐ前に、隙間無く建ち並ぶ、コンクリート打ちっぱなしの部室の壁。

壁には、薄汚れた鉄格子がはめ込まれた窓が並ぶ。

その窓の1つに、2人の人物が立っていた。

隼瀬美優貴と影山守人。

美優貴は背伸びをして、窓の鉄格子を掴んでいる。

「お嬢様。いかがでしょうか」

美優貴の背後に立つ守人が尋ねた。

美優貴は鉄格子を手放し、手の埃を払うようにパンパンと手を叩く。

「悪くはない。だが、あまり見通しはよくない。木に登る方がい
いかもな」

と、真上の枝を品定めしながら答える。

「左様でございますか」

美優貴は何かに気付いたように、高杉達が隠れている植え込みの
方に視線をやった。

身を固く、表情を緊張させる下田と山下に向かって、高杉は自嘲
気味に笑い、

「…バレたな」

と告げると、潔く立ち上がった。

下田と山下も慌てて立ち上がる。

美優貴は片手を腰に当て、高杉を見据える。

高杉は仁王立ちで、美優貴を見返す。

両者とも睨みつけているのではなく、相手の出方を見るように、
注意深そうに見つめていた。

高杉達の異様な空気に耐えられなくなったのか、

「あんたは誰だ!？」

と、下田は美優貴を指差して、動揺した声で言う。

美優貴は下田に視線をサツと動かす。

「無礼者！」

美優貴の短い言葉に、下田と山下は体を縮ませる。

高杉は表情一つ変えず、美優貴を見つめている。

美優貴は猛禽類のような瞳をして、

「人に名前を尋ねるときは、自分から名乗るのが礼儀だろう！」

下田と山下は、親に叱られた小さな子どものように黙り込んだ。

高杉はゆっくりと頷き、

「お前の言う通りだ」

高杉は植え込みから出て、美優貴の真向かいに立つ。

「慎さん……」

口を開きかけた山下を、高杉は片手で制する。

高杉は息を吸い込むと、一騎打ちでも挑むかのような声で、

「円舞学園高校2年10組、高杉慎一郎！サッカー部所属！ポジ

ションはフォワード！またの名を」

高杉は武士を思わせる厳しい表情で、

「『フィールドの出版禁止用語』だ」

美優貴は不敵に微笑み、

「円舞学園高校1年7組、隼瀬美優貴！部活動は無所属！またの

名を」

言葉を区切り、相手の反応を楽しむようにして続けた。

「『愛が恋して、恋が愛した者』だ」

対峙する美優貴と高杉。

両者共に残りの人間が眼中に無いかのように見詰め合っている。

高杉は真剣な表情で訊く。

「隼瀬美優貴。お前は何故ここにいる？」

美優貴は不敵な笑みのまま答える。

「高杉慎一郎。お前と同じ理由だろう」

「覗きか」

「そうだ」

「そこは女子テニス部の部室であり、更衣室だ」

「分かっている」

「…まあ、深くは訊かねえが」

高杉は解せないように目を細める。

「しかし、分からねえ。お前は女だ。覗かなくても、真っ正面から部室に入れるじゃねえか。何故そうしねえ？」

美優貴は不敵な笑みのまま、瞳を輝かせ、

「覗きの方がドキドキするからに決まっている！」

「何っ!？」

高杉は驚愕の表情と共に、立ち眩みを起こしたようによるける。

「慎さん！」

下田、山下が同時に叫び、高杉を両側から支えた。

高杉は片手で額を押さえ、体を支えるように膝の上にもう一方の手をやった。

美優貴は表情を変えず、高杉の様子を窺っている。

高杉は地面を見つめ、

「…もう1つだけ、訊かせてくれ。何故、覗く？カメラを仕掛けることも出来るじゃねえか」

と、震える声で訊く。

美優貴は断言するように、答えた。

「覗きは常にリアルタイム！それが礼儀だ！」

高杉は崩れ落ちた。

「慎さん！」

両手両膝を地面につき、高杉は電池が切れたように動かなくなつた。

「しっかりして下さい！慎さん！」

山下達が高杉を揺さぶる。

下を向いた高杉の頭が、何の抵抗も示すことなく揺れる。

「慎さん！」

「…17年」

「えっ？」

高杉が呟いた言葉に山下達は揺さぶる手を止めた。

ポツリポツリ呟くように、高杉は静かに語り出した。

「…17年間、生きてきた。今まで、色んなやつらに会ってきた。だが、俺の考えを聞くするやつはいても、最初っから俺と意見が合うやつはいなかった。…やっと、見つけた」

高杉は顔も上げず、

「隼瀬美優貴。今、この時から、お前を兄弟。いや、『ブラザー』と呼ばせてくれねえか？」

山下、下田は驚いたように顔を見合わせ、計ったようなタイミングで美優貴に顔を向ける。

美優貴は驚いたように、少しだけ目を見開いた。

数秒の後、美優貴は高杉達に近付く。

高杉を見下ろし、美優貴は右手で高杉の肩を叩く。

「…顔を上げてくれ。ただし、私のスカートの中を見ないようにな。…ブラザー」

そう言って、美優貴は1歩後ずさる。

目を見開き、高杉は顔を上げる。

優しく優雅な笑みを浮かべた美優貴が、握手を求めるように右手を差し出していた。

素早く立ち上がり、ズボンで手についた土をはらい、高杉は美優貴の手を固く握る。

晴れやかな笑顔で、高杉は言った。

「…よろしくな。ブラザー」

自分より目線の高い高杉を見上げ、美優貴は言った。

「こちらこそ。ブラザー」

美優貴は自分の背後を振り返りながら、

「ブラザー、紹介する。あそこにいるのが影山守人。私の執事だ」
「執事？」

高杉は、美優貴の視線の方に疑問符が浮かんだ顔を向けた。

美優貴がかじりついていたテニス部の部室の窓に、一番近い木の下。

そこに、白いハンカチで顔を覆って、『心が洗われている』守人がいた。

「…あんたら、何してるのよ」

その場にいた全員が、声のした方向に首を向ける。

高杉達がやってきた方向とは真逆から、ななが建物の壁に沿って進んできた。

美優貴は意外そうに、

「どうした、なな？」

ななは植え込みと建物の間にある狭い地面を歩きながら、

「あんたと影山君にプリント渡すように言われたのよ。あんたが倒れたときに一緒にいたってだけで、押し付けられたの」

と、無愛想な声で言う。

「…影山君、なんで泣いてるの？」

「いつものことだ。りる香はどうした？」

「帰ったわよ。入学祝いの買い物だった」

「そうか。ああ、紹介しよう。こちらは高杉慎一郎。私のブラザーだ」

と言って、美優貴は高杉を示す。

「ブラザー？」

ななは美優貴と握手をしたままの高杉を見る。

瞬間、ななは面倒くさそうに両目を細めた。

「鈴森です」

あっさりと挨拶して、片手に持ったままのプリントを美優貴に渡そうとする。

しかし、なながプリントを差し出すと同時に、美優貴は高杉に向き直った。

「こっち向けっつーのよ」

美優貴は、ななの怒りがこもった平坦な声が聞こえていない様子

で、

「ブラザー。テニス部の松広美さんについて、何か知らないか？」と、高杉に訊く。

高杉は目を細めて、

「…松か。俺が分かるのはスリーサイズと、下着の好みくれえだ」「何言ってるのよ」

ななの言葉が聞こえていない様子の美優貴と高杉は会話を続ける。美優貴は少し残念そうに、

「そうか」

高杉は申し訳なさそうに顔を曇らせ、

「すまねえ」

「いや、気にするな」

高杉は何事か思いついた表情で、

「…もしかしたら、『うっちゃん』なら何か知ってるかもしれないね」

美優貴は不信そうに眉を寄せる。

「『うっちゃん』？」

高杉は頷くと、

「新聞部のやつだ。色々知ってる。あいつなら力になってくれるだろう」

「…そうか。ありがとう、ブラザー」

笑顔を向ける美優貴に、

「ブラザー。困ったことがあったら、俺のクラスに来てくれ。力になる」

と、高杉ははっきりした口調で言った。

「分かった。頼りにしてるぞ。ブラザー」

美優貴達は握っていた手を大きく振って、手を離れた。

「ブラザー。今日は、この場所は譲る。行くぞ、守人。せっかくだ、ななも行こう」

守人はハンカチをしまい、

「かしこまりました」

と、涙声で答える。

ななはプリントを目の前でひらひらとさせて、

「だから、私はあんた達にプリントを…」

美優貴はななの抗議めいた言葉を無視して、ななが来た方向に向かって歩き出した。

「だから、聞けっつーのよ」

と、ななは横を通り過ぎた美優貴に向かって言った。

美優貴は振り返り、

「そうだな。どうしてこの場所が分かったんだ？」

「それじゃねーわよ」

ななは、足を止めない美優貴の後に続きながら、

「テニス部の部室に行ったら、裏からあんたらの大声が聞こえただけよ」

「なるほどな」

美優貴達の立ち去る姿を、高杉は嬉しそうな顔で見送る。

「…ブラザー。今日は、いい日だ」

と、腕を組んだ高杉は、心からそう思っているように言った。

その高杉の後ろでは、下田と山下が、仲間外れにされたかのような哀愁漂う表情で、ぼんやりと突っ立っていた。

第5幕：中庭と暗黒街

「なんだ。これは」

「見ての通りじゃない」

「見ての通りか」

「見ての通りよ」

1年生のいる北校舎と、向か合うようにして立っている南校舎。どちらの建物も似たような外観をしていたが、北校舎が3階建てであるのに対して、南校舎は4階建てだった。

この2つの校舎の間には、保健室からも見えた中庭が、細長い形で広がっていた。

中庭は講堂へと続く道と同じような石畳になっており、所々に木製のベンチが置かれ、中央には花壇が造られていた。

中庭は上履きで歩くことが許されているらしく、北校舎と南校舎の間を、上履きを履いた生徒が行き来している。

美優貴、なな、守人の3人は中庭の南校舎の入り口近くにいた。

南校舎の入り口の横にある、大きな掲示板の前で、美優貴は考えこむようにこめかみに手のひらを当てる。

電車一両分ほどの長さの掲示板。

その掲示板の多くが、新入部員勧誘のポスターに埋め尽くされていた。

その掲示板の中で、新聞部だけは固有のスペースを確保されているらしく、貼られた記事の上に、『学内新聞』と手書きで書かれたプレートが掲げられている。

そのプレートの下には、3枚の新聞が開かれた状態のまま、画鋏で留められていた。

美優貴は掲示板を眺めながら、

「……と言うことは、この学校には新聞部が3つあることになるな」と、大きめの声で言う。

「そうかもね」

と、ななはいつでもよさそうに言う。

守人は、泣いた後の赤い目をして静かに立っていた。

3種類の新聞の見出しはそれぞれ異なり、誌名も異なっていた。

最上段の新聞は『円舞学園新聞』。

次段は『ワルツ・タイムズ』。

下段は『エンブスポーツ』。

下段の新聞にいくほど誌面がカラフルになり、文字も大きくなっている。

上から下へ、視線を行ったり来たりさせながら、

「『うつちゃん』がいるのはどれだ？」

と、美優貴は呟いた。

ななは鼻の頭を人差し指で叩きながら、

「あのさ、帰っていいかな。お腹空いたのよ」

と、無感動なハスキーウォイスで言う。

「元々、私はあんた達にプリントを渡しにき…」

ななの言葉を、下卑た笑い声が遮る。

美優貴と守人は声のした方を振り返った。

ななは諦めたような口調で、

「…今度は何だっつーのよ」

美優貴達が固まっていた、掲示板の真向かい。

花壇を挟み、北校舎に近いところのベンチに笑い声をあげている

男子生徒がいた。

その3人の生徒はネクタイを外しており、内2人は上着の前も留めていなかった。

中央にふんぞり返るように座った金髪の生徒は、シャツのボタンも第3ボタンまで開けており、いやらしい笑い顔を作っている。

金髪の男の右側に足を組んで座る男は、黒いニット帽を目深にかぶり、可笑しそうに肩を上下させていた。

大声で、品のない笑い声を上げている男は、ベンチの背もたれに

腰掛けていた。

スキンヘッドで眉毛の無い、体格のいい男で、上着は着ていなかった。

前を開けたワイシャツの下に、赤いタンクトップを着ているのが見える。

ななは白けたような顔で、3人の男を眺めた。

「…何？あの、暗黒街の住人みたいな連中」

と、ななが呟く。

美優貴は片手を腰に当て、じつと男達を見つめている。

美優貴の斜め前に立つ守人は、表情と体勢こそ変えていないが、周囲の状況を確認するように瞳を動かしていた。

校舎間を移動する生徒達は、巻き込まれないようにするためか早足で移動している。

金髪のリーダー格らしい男が左手をあげる。

その指を、複数のゴツゴツとした銀色の指輪が装飾していた。

金髪はニヤニヤとした顔のまま、

「おいおい、それぐらいにしておけよ、アンソン。可哀想じゃねえか」

と、陰気そうな声で言う。

アンソンと呼ばれたスキンヘッドの男は、未だに可笑しそうに、

「でもよ、キラー。何にも知らねえんだぜ。学園（がくえん）のことをよお」

と、野太い声で言う。

「かわいいじゃねえか。なあ、B・B？」

キラーの言葉に、ニット帽は無言で頷く。

でもよ、と言ってアンソンは続ける。

「普通はよ、思わねえよな。新聞部が3つもあるなんてよ。」

「この学校には新聞部が3つあることになるな」

と、アンソンは美優貴の真似をしたのか、高い声を出して言った。顔をますますにやけさせたキラーは、

「…止めるって、泣いたらどうするんだ。ここはセン公の目と鼻

の先なんだぜ？」

と、クツクツと笑いながら親指で左側を指す。

職員室は北校舎、保健室の横に位置している。

北校舎の中庭に面したドアは、職員室の左隣に位置していた。

3人は再び笑い声をあげた。

守人は薄く目を細めると、ゆっくりと前に進み始めた。

等間隔に分けられている花壇の間の石畳を通り、守人は3人に近づく。

アンソンが、ベンチの前に立った守人の前に進み出た。

ポケットに両手を突っ込んだまま、

「どうした？お兄ちゃん？」

と、ヘラヘラとした表情でアンソンは訊く。

身長は守人の方がわずかに高かったが、体格はアンソンの方が遙かに筋肉質だった。

アンソンは首を突き出し、品定めをするように守人を眺め回す。

守人は静かに立っていた。

その瞳は、ステンレスのように冷たい色をしていた。

守人達の方をうかがいながら、

「影山君、何しにいったの？」

と、ななは心持ち心配そうなニュアンスを含ませて、美優貴に訊く。

美優貴は、ななに答えた。

「さあな」

守人が動いた。

直立不動の体勢だった守人が、右腕を素早く、振り上げた。

脇を締め、腰の捻りも加えた守人のアッパーが、アンソンの顎を捉える。

歯と歯が打ち鳴らされ、相殺されるような鈍い音を立て、アンソンの大きな顔が上空を仰ぐ。

アンソンはグラリと頭を揺らすと、足の力が抜けたように膝をつ

く。

左膝、右膝、左肩、頭、右肩の順に、アンソンは石畳に体を叩きつける。

他の2人は何事が起こったか分からない様子で、ただアンソンが倒れるのを笑ったままの表情で眺めていた。

キラの笑顔が、だんだんと引きつったものへと変わる。

「アンソン？」

キラの問いかけにアンソン――安村――は答えず、地面を枕にしたまま動かない。

守人は素早く移動し、未だに現状を理解していない様な顔のB・Bの前に立つ。

ニット帽を左手で鷲掴みにして、B・Bの鼻の下に拳を当てる。

引き寄せるように左手を引き、回転を加えた守人の右拳は正確に

B・Bの人中を射抜く。

守人が頭から手を離すと、B・Bは折り曲げるように上体を倒した。

キラは顔を青ざめ、哀願するように震えた声で、

「B・B!？」

B・Bこと馬場は前屈をしたまま、腕をだらんと地面につけている。

守人はキラを見下ろす。

吉良――キラ――は怯えきった顔で、守人を見上げる。

冬の雪山にいるように震える吉良を、守人は何の表情も無く見下ろしている。

「守人。そこまでだ」

美優貴の言葉に反応して、守人は顔を美優貴の方に向ける。

美優貴は守人に向かって歩を進める。

美優貴の後ろを、ななが距離をおいて、ついてきていた。

美優貴に守人は深々と頭を下げ、

「勿体無きお言葉にございます。お嬢様のお許しなく、独断で勝

手な行動をとってしまいました。申し訳ございません」

「許す。守人の気持ち、嬉しく思う」

守人は地面に頭がつきそうな程に体を折り曲げ、

「身に余る光栄にございます…」

と、高ぶる感情を抑えるような声で言った。

美優貴は、震え続ける吉良を見下ろす。

「おい」

「はいっ！」

美優貴の言葉に、吉良はパプロフの犬のように答える。

「どうして、学内新聞が3種類ある？」

姿勢を正した吉良は、

「新聞部が内部分裂を起こしたからです！かなり昔の話らしいです！全部、新聞部発行ってことになってますが、実際はほとんど別の部活です！部室も別々らしいです！」

と、ハキハキとした声で言った。

美優貴は判決を下す裁判長のように訊く。

「そうか。お前は新聞部の『うっちゃん』を知ってるか？」

「はい！新聞部の『うっちゃん』といえば、『タイムズ』の部員です！」

「そうか。部室はどこだ？」

吉良は指を南校舎に向け、

「南校舎の2階から渡り廊下で、文化部の部室棟に繋がっています！部室の場所までは分かりません！」

キビキビと、吉良は答える。

吉良の言葉通り、南校舎2階の右端が延長したように伸び、その先には南校舎と同じような外観の建物が繋がっていた。

部室棟も中庭を囲むように建てられている。

1階の入り口が、美優貴達の位置からも確認できた。

「そうか。ご苦労」

「とんでもないです！」

吉良は座ったまま、守人のような美しい角度で頭を下げる。

「行くぞ。守人。なな」

「だから、私は……」

ななの抗議の途中で、美優貴はスタスタと部室棟に向かう。

ななはため息をついた後、安村と馬場を見やり、美優貴の後を追いかける。

守人は美優貴達に続きかけて、足を止めた。

守人は美優貴達の背中に目を向けながら、頭を下げたままの吉良に向かって、声をかけた。

「…次に我が主を愚弄したときは、全身全霊にて排除する」

吉良は目を見開き、ビクリと体を引きつかせる。

「お忘れなきよう」

そう、低い声で吉良に警告して、守人は美優貴達の後を追った。

吉良は守人の警告で金縛りにでもあったかのように、ビクリとも動かなくなった。

南校舎から出てきた女子生徒が、地面に突っ伏した安村や、深く頭を下げた吉良と馬場を不思議そうに見ながら足早に中庭から去っていった。

第6幕：うつちゃん

「ご苦労」

入り口で革靴から来客用のスリッパに履き替え、美優貴達は部室棟の中に踏み入った。

日の光が弱まった室内では、わずかな光を空気中の埃が跳ね返して存在を現している。

守人が用意したスリッパを履き、入り口の正面の壁に貼られている配置図を美優貴は眺めた。

「あ。ありがとう」

ななの分のスリッパを並べた守人に、ななは礼を言う。

守人は一礼をもって答えた。

守人は土間の片隅に美優貴とななの靴をキチンと並べてから、ボロボロの段ボールの中から自分が使うスリッパを手にとった。

美優貴は片手を腰、もう一方の手では配置図を指差し、

「『ワルツ・タイムズ』は3階だな」

と、よく通る声で言った。

美優貴の声が、配置図横の階段に反響して聞こえる。

色あせ、黄ばんだ大判の紙を眺めて、ななは、

「文化部だけでも、結構あるわね。ここ、4階建てだしさ」と、別段驚いた様子でもなく言った。

「そうだな。ななも気に入る部活があるかもしれないな」

そう言って、美優貴はななに顔を向ける。

「部活なんて入る気ないわ。面倒くさい」

一本調子で答えるななに、

「ひとそれぞれだな」

と、美優貴は頷いた。

美優貴達は階段に向かった。

北校舎の階段よりも幾分か狭い階段を上る。

どこからか人の喋る声が聞こえ、どこか遠くで楽器の鳴る音が聞こえた。

1階と2階の踊場で、ななは、

「影山君て、喧嘩強いのね」

と、しんがりを務める守人に言った。

守人は目を伏せ、

「とんでもない事でございます。あれは教養の1つに過ぎません」と、控え目な口調で答える。

先頭的美優貴は、

「守人。何だったかな？守人の使う武術は」

と、答えが分かっているような口振りで訊いた。

「はい。オトナシンエイリユウ音無陰影流でございます」

「ふうん。聞いたことないわ」

そう言ったななに、

「至極、ごもつともなことかと存じます。陰影流は、古来より一部での口伝にて伝えられているのみでございますので」

と、守人は解説する。

「へえ。珍しいのね」

「どんな武術であれ、全ては使う者次第だ」

口を開いた美優貴を、ななは見上げる。

背筋を伸ばした少女の動きに合わせてオレンジの毛先が揺れる。
3階。

全ての階の階段は部室棟の左寄りに設置されている。

階段の左横、建物の端にはトイレがあった。

右手に曲がり、美優貴達は木が敷かれた廊下を進む。
ななは左手に並ぶ窓の外を眺める。

左から北校舎、中庭、南校舎。

遙か遠くには、森のように生い茂った木々が見られる。
「聞いているのか！」

突然聞こえてきた怒声に、ななは少し目を見開く。

その声はどこかの部室から聞こえてきたらしく、くぐもって聞こえた。

顔色一つ変えずに、美優貴は目的の部室まで進む。

「いいかい！？まだ原稿が出来てないのは君だけなんだよ！！」

酸欠気味の男の怒声は、突き当たりの部室から数えて2番目の部屋から聞こえていた。

その部屋には、『ワルツ・タイムズ』と書かれた白いプラスチックのプレートが掲げられていた。

守人が素早く、滑るようにドアに近づき、ドアノブに手をかける。軽く拳を握り、守人はノックをする。

その音は乱暴でもなく、静かすぎるものでもない、熟練のホテルマンを思わせる音だった。

「どうぞ！」

男の怒気をはらんだままの声が伝わる。

守人はドアノブを回し、内開きのドアを開ける。

「失礼致します」

そう言う守人は会釈をして、美優貴の後ろにさがる。

美優貴は戸口に立ち、部室内をぐるりと見回す。

美優貴達の教室の半分ほどの広さの部屋。

窓はドアと向かい合う壁にしかなく、それ以外の壁をスチール製の書類棚が占めている。

無理矢理詰め込んだファイルや、カメラやフィルムが並び、書類棚には物が溢れかえっていた。

部屋の中央には授業で使うような机が、小学校の給食時のように寄せられていた。

10台以上ある机の上には例外なくノートパソコンと、プリントや写真が山積みされていた。

机には、5・6人の男女が座り、忙しそうに作業している。

ある者はキーボードを叩き、ある者は書類に赤ペンを走らせ、ある者は写真を机に広げてブツブツ呟きながら品定めをしていた。

部屋の奥、他の机から少し離れた場所に窓をバツクにして事務机が置かれていた。

編集長と書かれた三角錐が片隅に乗った事務机には、眼鏡をかけた細長い顔の男子生徒が座っていた。

編集長の前には背の高い女生徒が後ろに手を組んでいる。

その均整のとれた体つきの女生徒は、長い脚の片方の足首をグリグリと退屈そうに回していた。

編集長は眼鏡の奥の目を苛ついたように吊り上げ、

「何の用!？」

と、神経質そうに訊く。

美優貴は部屋に1歩踏み入り、

「『うつちゃん』はいるか!？」

と、舞台女優のような大きな声で訊く。

美優貴の声に驚いたように、部員は手を止めて、ドアの方を見やる。

編集長も予想外の反応だったらしく、目を丸くし、口をポカンと開けて美優貴を見つめる。

間。

間。

間。

遠くの方から、どこかの部活の掛け声が聞こえてきた。

編集長の前に立っていた女子が振り向く。

その女子は上着の代わりに黒い袖なしのセーターを着ており、ネクタイはしていなかった。

シャツのボタンは2つ目まで開けている。

ショートカットの艶やかな金色の髪は、寝癖でボサボサになっていた。

歯と歯の間に、煙草のように深緑色の鉛筆をくわえ、明るい緑色の瞳を美優貴達に向けた。

その女子は鉛筆を上下に動かした後、嬉しそうに目を細めた。

女子は鉛筆を口から離し、

「私私！うっちゃんは私だよ！」

そう言いながら、編集長から足早に離れる。

「そういうワケで、編集長！ちよつと出て来ます！」

「うっちゃん！」

「ちよつとちよつとだけですよ！」

編集長に向かって、笑顔で鉛筆を振りながらドアにうっちゃんは向かう。

美優貴を押すようにして部屋から出ると、うっちゃんは編集長の怒声から逃げるようにして、

「ついてきて、ついてきて！」

と言って、廊下をスタスタと進む。

美優貴達3人を引き連れたうっちゃんは階段を上がり、4階の上まで進んだ。

屋上に続くドアは閉ざされており、『生徒立ち入り禁止』、『開放厳禁』と貼り紙がしてあった。

「ちよつとちよつと待ってね」

鉛筆をくわえたうっちゃんは、スカートのポケットをゴソゴソとあさり、銀色の鍵を取り出す。

鍵をドアの鍵穴に差込み、回した。

ガチャリとした音が、施錠が外れたことを告げる。

「その鍵、どうしたんですか？」

と、ななが少し興味を引かれたように尋ねる。

うっちゃんはドアを開き、

「それは、秘密秘密」

と、ニコニコと笑いながら言った。

ドアが開かれ、太陽に照らされた屋上に出た。

正午を少し過ぎた太陽は、時間の分だけ西に傾いていた。

灰色のタイルの隙間から、所々にタンポポが咲き、割れたタイルの破片がそこかしこに見られた。

うつちゃんは肩が凝ったように腕を回しながら、
「いや、助かった助かった。お説教が長くてさ。どうしよっかな、
って思ってたんだ」

と、ほっとしたような口調で言う。

美優貴とななは、屋上からの眺めを確認するように見回す。

北校舎、講堂、グラウンド、桜。

駐車場から学外へと続く道も見られた。

「いい眺めだな」

と、美優貴は嬉しそうに言う。

うつちゃんは楽しそうに笑いながら、

「そうそう。私のお気に入りの場所なんだよ。あんまり柵に近づきすぎると、先生に見つかっちゃうかもしれないから、注意だけだね」

と、鉛筆をくわえたまま、軽い調子で言う。

美優貴はうつちゃんに向き直り、

「私は隼瀬美優貴。こっちは鈴森なな。こっちは影山守人だ」

と、後の2人を紹介した。

ぼんやりと景色を眺めていたななは、

「鈴森です」

と、気がついたように言った。

守人は慇懃に頭を下げる。

うつちゃんは益々楽しそうに微笑み、

「なるほどなるほど。君達が隼瀬美優貴ちゃん、鈴森ななちゃん、

影山守人君ね」

と、順に顔を向けながら言う。

美優貴は少し目を細めた。

「私達のことを知っていたような口振りだな？」

「もちろんもちろん」

美優貴に答えてから、うつちゃんは頭をかき、思いたすように目を瞑る。

「…隼瀬美優貴ちゃんは、隼瀬コンツェルン社長の一人娘。影山守人君は美優貴ちゃんの執事。鈴森ななちゃんは、小・中学校の時のあだ名が『サイボーグ7号機』だっけ？」

美優貴は不敵に口元を結ぶ。

守人は少し驚いたように目を開く。

ななは明らかに不機嫌な顔つきをしていた。

「…なるほど。ブラザーの言っていた通りだな。情報通というのは本当らしい」

「ブラザー？」

と、うつちゃんは聞き返す。

「サッカー部の高杉慎一郎だ」

指を鳴らし、うつちゃんは鉛筆を上下させ、

「高杉ちゃんの紹介か。なるほどなるほど」

と、納得したように頷く。

「おっと、私も自己紹介しなくちゃね。私は酒匂川有喜^{サカワガワウキ}。言にくい名前だから、うつちゃんでもいいよ」

有喜は軽やかな足取りで守人に近寄り、見上げる。

「君、背高いね。何cm？」

「はい。182cmでございます」

「なるほどなるほど。私よりちょうど10cm高いのか」

美優貴は横から有喜を見つめる。

有喜は美優貴の視線に気づいたらしく、

「何何？」

美優貴は有喜の胸元をじっと見つめている。

有喜の胸は服の上からでも分かるほどに大きく隆起しており、開いたシャツから覗く谷間が、更にそれを強調していた。

美優貴は有喜を見上げ、一言、

「触つてもいいか？」

その言葉が終わるか終わらないかの内に、美優貴の後頭部にななの平手打ちが飛んだ。

スパアンとした小気味良い音が屋上に広がる。

「何をする！？」

頭を押さえ、美優貴はななを睨む。

「あんたこそ、何しよーとしてんのよ」

ななは仏頂面を美優貴に向ける。

「まだ触っていないぞ！訊いただけだ！」

「訊くんじゃねーわよ」

「見事なバストだぞ！？後学の為に触りたくなるだろう！？」

「ならねーわね」

「そうか、分かったぞ。自分は手遅れだと思っているんだな」

「…目線下に向けんじゃねーわよ。少なくとも、りる香よりは」

ある『わよ』

「見たところ、私よりは『ない』けどな」

「あんまり変わんねーわよ。それに、私は着痩せするタイプなの」

「そうか。身体測定が楽しみだな！」

「そうね。ウエストが『あつたら』意味ねーもののね」

「何だと？私のウエストのどこに『ある』と言っただ？」

「そっくりそのまま返すわよ」

有喜は美優貴達のやり取りを可笑しそうに見ていたが、やがて耐えきれなくなつたように笑い声を上げる。

鉛筆を指に挟み、目に溢れた涙を片手で拭う。

楽しそうにハハハと笑い、

「いやいや、面白いね、君達は」

と、息も絶え絶えに有喜は言う。

美優貴は拗ねたようにななから顔を逸らし、

「うっちゃん。私はうっちゃんに頼みがあつて来たんだ」

と、考えを切り替えるように切り出した。

「何何？」

と、有喜は笑いの余韻が引いていない様子で訊く。

「テニス部の松広美さんについての情報が欲しい」

と、美優貴は機嫌をそこねた小学生のような顔をして言う。

「ああ、松ちゃん？」

有喜は鉛筆をピコピコと動かし、

「具体的には？」

と、寝癖だらけの頭をかきながら訊く。

「何でもいい。趣味や、休日の過ごしかた。好みのタイプや好きなシチュエーションも知りたい」

「へえ。偏ってるね」

うーんと唸り、有喜は頭をかく。

思案中の顔を何事か思いついたような顔に変えようと、有喜は美優貴の顔を覗き込む。

美優貴は別段動揺した様子も無く、有喜を見返す。

「了解了解。私の分かる範囲でなら、調べてあげるよ。ただしただし」

有喜は人差し指で自分を指差し、

「何か面白いことやるんだったら、私も混ぜてくれるかな？」

美優貴は気前よさそうに微笑み、

「いいぞ。パーティは賑やかなほど楽しいからな」

「交渉成立」

そう言って、有喜は右手を差し出す。

美優貴は有喜の右手を握りかえす。

守人は感激したように顔を伏せて、肩を震わせる。

ななは呆れたように景色を眺めた。

暖かい日差しが降り注ぎ、ななは眠気を払うように伸びをする。

伸びをして、頭を軽く振り、ななは疲れ切った張りのない声で呟いた。

「…お腹空いた」

第7幕：3階端の朝と昼

入学式、翌日。

朝の気だるさが混じったざわつきの中、ななは北校舎の階段を上っていた。

低血圧そうな顔で、ななは3階まで向かう。

ななは右手に鞆、左手には運動会にでも持っていくような、3段の重箱が包まれた風呂敷をぶら下げていた。

通り過ぎる生徒が、不思議そうに桜色の風呂敷を眺めている。

3階に着き、人混みが左右に別れる中、ななは7組の教室がある左手に曲がった。

左側にある窓から、正門方面の眺めが見える。

ななは、学園まで続く遠くの桜並木を、欠伸混じりに眺めた。

「ちよつと、すんません」

男子生徒が、誰かを呼び止める声が聞こえた。

ななは気にする様子もなく、足を動かす。

「あの、ちよつと、スズ…モリ、さん！」

ななは自分のことと気付いたのか、背後を面倒くさそうに振り返る。

足早に教室に向かう生徒の中、ななに向かって走り寄る男子生徒が2人。

無表情にななはその2人を見つめ、

「…誰？」

2人は顔を見合わせてから、情けない顔をななに向ける。

「昨日会ったじゃん！下田だよ！こいつは山下！ほら、慎さんと一緒にいた！」

と、下田は自分と山下を指差して言う。

山下はウンウンと頷きながら、

「そうだよ」

ななは平均的な身長の下田と、平均よりも低い身長の山下を交互に見て、

「そうなの」

「そうなのって…」

下田達は絶望的な顔をして肩を落とす。

「それで、何の用？」

と、2人の様子を一向に気にするふうでもなく、ななは訊いた。

山下はずれた眼鏡を押し上げて、

「あのさ、隼瀬さんに今日の昼休みは空けといてって、伝えてくれないかな」

「なんでも、慎さんが隼瀬さんと話がしたいだって」

と、下田が山下の言葉を継ぐ。

ななは、無愛想だった表情に、更に不機嫌そうな感情を加えた。

「…何で、私が伝えなくちゃいけないのよ」

「いや…、だってさ」

言い訳がましく、下田は続ける。

「昨日、俺達怒られたしさあ…」

頭をかきながら、

「顔合わせ辛いつていうかね…」

と、山下は下田に続く。

情けなく背中を丸める2人を見て、ななはため息をつく。

「…伝えておいてあげるわよ」

ななの、憐れみが混じった言葉に、2人はホツとしたような顔をした。

「助かったよ。ありがとう！」

と、山下は両手を合わせて言った。

「いや、本当助かった」

そう言ってから、下田は気になった様子でななの風呂敷を指差す。

「あのさ、ところで、それ何？」

ななは下田の指した物を見つめてから、ゆっくりと2人の顔に視

線を戻した。

「お昼ご飯よ」

「それが？」

ななのキツパリとした答えに、山下は疑問符のついた言葉を返す。
風呂敷をポカンとした顔で見つめる2人に向かって、

「まだ用があるの？」

と、ななの平坦な声が尋ねる。

2人は、我に返ったような顔になった。

「いや、もう無い」

と、慌てた様子の下田が顔の前で手を振りながら言う。

「そう。じゃ、隼瀬さんよろしく」

と、下田の拳動が移ったように、山下はペコリと頭を下げた。
た。

下田、山下の兩人は、そそくさと廊下を戻っていった。

人の流れの中、ななは1人佇んでいた。

窓からの風が、ななの髪を撫でる。

ガヤガヤとした声の中に、ある会話が合った。

「入学2日目にして、男子を振ったのかあ。それも2人！」

と、驚いたような声。

「ななは、中学の時モテたのか？」

と、興味深そうな声。

「そうだよ。クールな感じだからねえ」

「断り続けていたのか？」

「そうだよ」

「人に思われていることが、どれほど偉大か……。だが、ななは入学初日に他人の後頭部を叩く女だ。2日目で他人を振るかもしれないな」

「へえ。そんなことがあったんだあ」

「そうだ。そんなことがあったんだ。守人、そうだな？」

「…申し訳ございません。この影山守人、その瞬間に視界がブラ

ツク・アウトしてしまい、確認することが出来ませんでした」

と、申し訳なさそうな声。

「ねえねえ、誰が叩かれたの？」

ななは鉄仮面のように、感情を感じさせない顔で突っ立っていたが、やがてゆっくりと体の向きを変えた。

ななの不機嫌そうな視線の先。

7組の教室の入り口。

その入り口から顔だけを覗かせる3つの顔があった。

トーマスポールのように縦に並んだ顔は、下からりる香、美優貴、守人の順に並んでいる。

なな以外の廊下にいる生徒は、3つの顔に気付くと、驚いたように体をビクつかせた。

ななは不機嫌な顔のまま、トーマスポールに近付く。

ななは顔を守人からりる香まで動かし、最後に美優貴の顔を見つめる。

「…何してるのよ」

と、ななの無感動な声が訊く。

「ななを見つけたら、取り込み中のようにだったからな。見守っていたんだ」

と、美優貴の顔が悪戯っぽい微笑みを浮かべて言った。

「そうだよ」

と、りる香のニコニコとした顔が相槌を打つ。

ななは、守人の顔を見上げる。

ななの無言の問いかけに答えるように、

「左様でございます」

と、真面目な表情の守人の顔は答えた。

「そう」

そう言って、ななはもう一度視線をスライドさせる。

三者三様の顔を眺めてから、

「…おはよう」

と、ななは諦めの極致の口調で言った。

「お腹空いたあ！」

4時間が終わり、授業中の静けさを取り戻すように騒がしくなった中、りる香は小学生のように両手を広げて言った。

生徒はそれぞれ、教室を出たり、弁当箱片手に思い思いに移動していた。

教室に、様々な食べ物の入り混じった、食欲を誘う香りが広がり始めた。

ななは、教室の廊下側の壁に並ぶロッカーに近付くと、自分の名前が書かれた扉を開ける。

ロッカーの中から重箱を取り出すと、ななは自分の机に戻った。重そうな包みを机の上に置き、ななは机の横に立つ。

赤と黄色のチェックのクロスを片手に、

「なな、美優貴ちゃん！一緒に食べようよあ」

と、りる香は机をかき分け、移動しながら言った。

クロスは、楕円形の弁当箱が包まれていると分かる形に変化していた。

美優貴は教科書を片付ける手を止めて、顔を上げる。

「そうだな。一緒に食べよう」

そう、ななに言ってから、美優貴は窓際を見やる。

窓際の列、前から3列目に守人の席があった。

美優貴が視線を送った頃には、守人は席を立ち、美優貴の席に向かい始めていた。

守人は、ピクニックに持っていくような藤のバスケットを手にしている。

両手でバスケットを持ち、守人は主人に向かって頭を垂れた。

その頃。

1人の人物が、猛スピードで中庭を移動していた。

南校舎から北校舎に向かって、高杉慎一郎は速度を落とすことなく駆け込んだ。

新入生は、突然乱入してきた上級生を恐れるように道を空ける。

上着とネクタイを翻し、高杉は3段抜かしで階段を駆け上がる。

高杉の躍動感溢れる動きに合わせ、手に持った白いコンビニの袋が豪快に揺れる。

真剣な表情の高杉は、3階まで上がると、左に曲がった。

全速力の高杉の前は、モーゼが海を割った時のように人混みが裂けている。

1年7組の扉の付近に、談笑しながら教室を出ようとする、3人組みの女子がいた。

その少女達の眼前、開かれた扉の前に高杉が急ブレーキをかけて現れる。

高杉の巻き起こした風が、少女達の髪を揺らす。

3人娘は、突然目の前に現れた高杉を、驚いた様子で見上げている。

高杉は、息切れ一つしておらず、汗もかいていない。

上着の前は開けていて、ネクタイも緩めていた。

着崩した格好だが、高杉の顔立ちのせいかな、だらしくは見えなかった。

高杉は3人娘の真ん中にいた、黒い三つ編みの少女を見つめ、

「すまねえが、隼瀬美優貴はいるか？」

と、静かな口調で訊いた。

「えっ、あっ、えっと……」

三つ編みの生徒は慌てふためいた様子で、首を教室の後ろに向ける。

他の2人もつられたように教室の中を振り返り、高杉も首をそちらに向けた。

鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして、高杉に視線を送る生徒達の中に、高杉の存在に気がついていない様子の美優貴達はいた。ななと美優貴の机を向かい合わせ、食卓の準備を進めている守人。自分の椅子を抱えて、机の間を移動しているりる香。ななは守人が作業する横で、りる香と自分の弁当箱を下げて突っ立っている。

美優貴は自分の席についたまま、バスケットの中を眺めていた。美優貴は、教室内の異変に気付いた様子で顔を上げる。

美優貴は高杉を見つけると、

「ああ、ブラザーか」

そう嬉しそうに言って、椅子から腰をあげる。

高杉は3人娘に向かって、

「助かった。ありがとう」

3人は、ペコリと会釈をして高杉の横から教室を出ていく。去りながらも、3人は高杉に興味津々な視線を向けていた。高杉に近づく美優貴の後ろに、作業を中断させた守人が続く。守人は、宝箱でも運んでいるかのようにバスケットを手にした。た。

クラス内は、食事の手を止めて美優貴達の様子を伺っていた。椅子を抱えたまま、りる香はななに向かって、

「ねえ、あのおつとこ前の人、誰？」

と、小声で訊く。

ななは重箱を机に置き、

「変態よ」

と、素っ気なく答える。

美優貴は高杉の前に立ち、

「ブラザー。早かったな」

「そうでもねえ」

と、高杉は美優貴を見下ろして答える。

「話があるのか？」

「おう」

そう言って、高杉は短髪の頭をぐるっと動かす。

「できれば、人が少なえ場所がいいんだがな…」

高杉が目を細めて、言葉を濁した直後。

「あれあれ？高杉ちゃん？」

と言う声が、廊下から教室に届いた。

高杉は声のした方に首を回す。

美優貴は腰に手を当て、高杉の横顔を見上げている。

高杉は声をかけた人物を確認すると、

「うっちゃんか」

「奇遇奇遇」

豆乳の紙パックを持った手を振り、有喜は笑いながら言う。

有喜は前日と変わらない格好で、髪も寝癖だらけだった。

廊下の生徒の好奇の視線も構わずに、

「高杉ちゃんも、美優貴ちゃんに用があるの？」

と、有喜は7組に近づきながら訊く。

「おう。うっちゃんもか？」

「そのとおりそのとおり」

有喜は高杉と並んで、美優貴の前に立つ。

有喜よりも、高杉の方がわずかに身長が高い。

「やあやあ、美優貴ちゃん」

と、有喜は楽しそうに目を細めて言う。

新たな人物の登場で、りる香は再び、

「ねえ、あのボインな人、誰？」

と、ななに訊く。

ななは、素っ気ない態度を崩さずに答えた。

「うっちゃん先輩よ」

「どうした？うっちゃん」

と、新たな来訪者に向かって、美優貴は意外そうに訊く。

「おやおや？」

と言つて、有喜はストローをくわえる。

「昨日の話、覚えてないのかな？」

ニヤニヤと笑いながら豆乳を飲む有喜に向かって、

「もう調べたのか？」

と、美優貴は感心したように訊く。

「そのとおりそのとおり。聞きたい？」

「そうだな」

そう言つて、美優貴は教室を見回す。

美優貴達に興味本位の視線を向けていた生徒達が、慌てた様子で

食事を再開した。

美優貴は呆れた顔をして首を横に振る。

「ここでは駄目だな」

そう言つてから、美優貴は守人の持っているバスケットに視線を止める。

バスケットを見つめながら、

「…ピクニックでもするか」

と、美優貴は呟く。

「ピクニック？」

と、高杉が聞き返す。

「そうだ」

美優貴は高杉達に向き直り、有喜を見上げて、

「うつちゃん、昨日の場所を貸してくれないか？」

「なるほどなるほど」

と、有喜は合点がいった様子でポケットを探り、部室棟の屋上の鍵を取り出す。

有喜は視線の高さに鍵をつまみ上げ、

「確かに、ちよつとしたピクニックかもね」

美優貴はなな達に視線を送る。

美優貴の楽しそうな瞳を見返し、ななは疲れたようにため息をついた。

なの横では、未だに机を抱えたままのりる香が、視線を美優貴となな間を行ったり来たりさせていた。

開かれた窓から、中庭の生徒の笑い声が教室まで届く。それほどに、1年7組は静かだった。

第8幕：ピクニック

部室棟の屋上は、前日と変わらない暖かい日差しに照らされていた。

風は穏やかで、春一番とはほど遠いものだった。
中庭から、昼時の騒々しさが小さく届いている。

「高いなあ。私の家も見えるかなあ」
と言いながら、りる香ははしゃぎ回っている。

守人は屋上を中心付近の小石を熱心に取り除いていた。
ドア付近には、ななと美優貴。

「何で、私まで連れてこられなくちゃいけないのよ」
と、美優貴に抗議するなな。

「一緒に昼食を食べようと言っただろう？」
と、当たり前のことのように美優貴は返す。

高杉は屋上の手すりに屈みこみ、中庭の様子を見下ろしていた。
開きっぱなしのドアから、

「お待たせお待たせ」
と、反響した有喜の声が足音と共に屋上に届く。

屋上に現れた有喜は、小脇に緑のギンガムチェックのレジャーシートを抱え、口には鉛筆をくわえていた。

「よく取材で使ってるから、あんまり綺麗じゃないけどいいかな？」
「？」

抱えた手とは逆の手で、シートをポンポンと叩きながら、有喜は訊いた。

片手を腰に当てていた美優貴は、いいぞと言うと、顔を自分の執事に向ける。

「守人」

守人は作業する手を止め、ハンカチで指先についた汚れを拭って
から、美優貴の前に進み出た。

「お呼びでしょうか」

と、一礼した守人。

「そうだ。シートが見つかった。後は分かるな？」

と、美優貴は主の表情で言う。

「かしこまりました」

守人は有喜からレジャーシートを受け取り、先ほどまで小石を除けていた場所に広げる。

有喜は守人を眺めながら、

「大したもんだね」

と、感心した言葉を軽い調子で言った。

美優貴は有喜と同じく、守人を眺めながら、

「そうか？真面目なだけだと思うぞ」

と、簡単に自分の執事を評価する。

ななは、独り静かに弁当を見下ろしていた。

「いただきます」

言うが早い、りる香は弁当のミートボールを口に放り込んだ。
レジャーシートに車座になって、美優貴達は座っていた。

りる香の右隣に陣取ったななは、きちんと両手を合わせて、

「いただきます」

ななの前には、バリケードでもはられているように重箱が広げられている。

3段の重箱は、それぞれ果物と野菜料理、焼き物、おにぎりと分かれており、バラエティに富んでいた。

「いただきます」

ななと同じように、左隣の守人は言うと、美優貴のものよりも大型のバスケットの中から長方形のサンドイッチを取り出して静かに口元に運ぶ。

守人のバスケットは中身が上下2段に分かれており、上部には白

いテーブルクロスが畳まれて収められ、美優貴の食卓用品が収納されているようだった。

バスケットの手前には、白い円柱型の水筒が置かれていた。

守人の左隣の高杉は、コンビ二のおにぎりを頬張りながら、何やら真剣な表情で、なの弁当の辺りを見つめている。

幼稚園児のようにニコニコと笑いながら弁当をつくりの香の右隣では、有喜が足をシートの外に伸ばして座り、携帯用の簡易食をかじっている。

「じゃ、そろそろ報告といこうかな？」

有喜は体を捻り、美優貴の方に顔を向ける。

両手で四角いサンドイッチを頬張っていた美優貴は、コクリと頷いた。

有喜は短くなった簡易食を放り込み、大して噛まないで飲み込む。フウと息をついてから、有喜はスカートのポケットから折り畳まれたコピー用紙を取り出した。

「まずまず始めに。美優貴ちゃんが知ってたっているのはこの人で間違いないかな？」

そう言つて、有喜はコピー用紙を美優貴に渡す。

美優貴は小さな口を広げてサンドイッチを口に入れると、渡された紙をじつと見つめる。

一枚のカラープリント。

写真を拡大コピーした紙には、1人の少女がテニスをしている様子が写し出されていた。

その少女は、真っ白なテニスウェアに身をつつみ、テニスボールを追っている。

黒髪のポニーテイルが跳ねた状態で静止し、ラケットを伸ばす腕には汗が輝く。

必死にボールを追いかける瞳、細く開けた唇。

紙の中のコートの上で、精一杯プレイしている少女は、確かに昨日美優貴が心奪われた人物だった。

ヒマワリの種を頬袋に詰め込んだハムスターのように、サンドイッチを頬張った美優貴は、うつとりとした様子で目を細める。

美優貴の様子をニヤニヤとした顔で眺めていた有喜は、

「間違いないみたいだね」

美優貴の隣にいた高杉が、美優貴の肩越しに写真を覗く。

高杉は遠い目をして写真を眺めてから、

「…レプリカだな」

そう呟くと、体勢を元に戻した。

有喜は高杉の視線の先を追った。

高杉の視線は、やや下を向いて固定されている。

シートに対して低空飛行する高杉の視線は、なの重箱の辺りを目掛けている。

当のななは高杉の視線に気付いていない様子で、無表情のまま重箱の中身を減らしていた。

りる香はブロッコリーをつつきながら、

「相変わらず、ななはよく食べるなあ」

と、食事の手を休めることのないななを眺めながら言う。

「ななちゃん、ななちゃん」

有喜に呼びかけられ、口をモグモグと動かしながら、ななは顔を有喜に向ける。

「気をつけてね」

と、楽しそうに言いながら、有喜は高杉を指差す。
ななとりる香は先導されたように高杉を見る。

高杉は遠い目をして、視線を固定したままだった。

有喜は面白がっている様子で、

「高杉ちゃんがね、『桂浜の坂本龍馬みたいな顔』してる時は、大体スケベなことを考えてる時だから」

りる香は高杉の顔をじっと見つめてから、

「本当だあ。何だか雰囲気似てますねえ」

と、驚いた様子で有喜に言う。

「うんうん。今はななちゃんの生脚を見つめてたんじゃないかな。多分多分」

有喜の言葉に、ななはピクリと眉を動かし、高杉の視線の先を追う。

有喜の指摘通り、高杉はななの横座りした両脚を凝視していた。いやらしさを全く感じさせない、日本の行く先を見つめている男のような顔で。

口の中の物を飲み込み、

「高杉先輩。訴えますよ」

と、ななは淡々と言う。

高杉は顔をゆっくりと上げて、真剣な表情でななを見つめ返す。

高杉は重い口を開いた。

「…覚悟はしている」

「してんじゃねーわよ」

りる香は感嘆しながら、

「格好いいねえ」

と、しみじみとした口振りで言う。

「それはねーわね」

有喜はなな達のやり取りを可笑しそうに眺めていた。

その肩をハムスターのままの美優貴が叩く。

「何何？」

有喜は尋ねるが、口いっぱいにものを詰め込んでいる美優貴は、松広美の写真を指差すばかりで答えない。

有喜が頭をガリガリとかいて、口を開きかけた時、

「失礼致します」

と、守人の声が割って入った。

守人は美優貴の背後、シートの外に、片膝をつけて控えている。

有喜は驚いた様子で、

「いつの間に間に？」

「はい。先ほどからでございます」

そう答える守人は、細身の白い水筒を手に使っていた。
水筒のフタに中身のオレンジジュースを注ぎ、守人は美優貴に手渡す。

美優貴はモゴモゴと守人に言ってから、ジュースを流し込んだ。
苦しそうな顔をして口の物を飲み込んだ美優貴は、

「松広美さんの情報はどうしたんだ？」

と、有喜にキラキラとした目を向けて訊く。

「了解了解」

ニカツと笑い、有喜は頭をかきながら、報告を始めた。

「^{ガイシングミ}松広美ちゃんは、私や高杉ちゃんと同じ2年生。クラスは8組。
外進組だね」

美優貴はコップを守人に差し出しながら、

「外進組？」

「うんうん。^コ学園って中学もあるでしょ？それで、中学からそのまま高校に進んだ生徒のことを内進組、^{ナイングミ}違う中学から来る生徒を外進組って言うの。今、ここで言うのと、私以外のみんなは外進組だね」
再びジュースで満たされたコップを口元に運び、

「うつちゃんは内進組か。…続けてくれ」

と、美優貴は促す。

「クラブはご存知の通りテニス部。2年の中じゃ、トップクラスの腕前で、大会でもいい成績を残してるね」

有喜は何かに気付いたような顔をして、

「おっと、ごめんごめん。知りたいのはこんな情報じゃなかったね。松ちゃんの趣味は部活と占い、あとは犬の散歩」

「占い？」

「タロットとか、トランプ占いとか。簡単なやつだね」

「松さんは犬を飼っているのか？」

「うんうん。ゴールデン・レトリバーのジン。雄4才」

と、有喜は指を4本立てて答える。

「そうか」

美優貴はジュースをちびりと飲み、

「続けてくれ」

「了解了解。松ちゃんの休日はほとんど部活。部活が無い日は家でゴロゴロしてるみたいだね。友達と遊ぶ時も、自分から誘うタイプじゃないってさ」

高杉を睨みつけるのに飽きたのか、

「どこで調べてきたんですか？」

と、ななは訊く。

有喜はニカツとした笑顔をななに向けて、

「それは秘密秘密」

ななは有喜の答えを予想していたかのような無表情で、漬け物を口にした。

「続けるよ。松ちゃんの好きなタイプとシチュエーション！」

瞳を猛禽の目に変えて、美優貴は有喜を見つめる。

「物静かな、知的な人だってさ。図書室なんか似合いそうな」

「図書室が似合う？」

と、イマイチ話の内容を理解していなさそうなる香が声をあげた。

りる香は美優貴の背後にいる守人を見る。

りる香につられて、高杉以外の4人が守人の方を向く。

守人は視線から逃れるように目を伏せた。

高杉は、見つめる対象をりる香の脚に変更していた。

美優貴は有喜に向き直り、

「シチュエーションはどうした？」

「シチュエーションはね。黄昏時の屋上で、2人つきり」

有喜は、両手の人差し指を立てて顔の前に構えた。

「静かに、熱い思いを告白されて、そ・れ・で…」

そう言って、有喜は人差し指をゆっくりと近づけ、2本の指をくつつける。

美優貴はコップを置き、

「そうか。ありがとう」

と、微笑みを有喜に向けた。

「いいっていいって」

有喜はカラカラと笑いながら言っ

「そう言えば、高杉ちゃんも話があるんじゃないかなかったっけ？」

と、高杉に視線を向ける。

りる香の脚から美優貴に注意の矛先を向けて、

「そうだった。ブラザー」

「ブラザー、どうした？」

「松のことだ。松はテニス部の練習が終わってからも、自主的に残って練習してる。だから、覗くんなら、こっちも居残らなくちゃならねえ」

「あんたはそれしか考えてねーの？」

ななの鋭い言葉が聞こえなかった様子の美優貴と高杉は、

「そうか。居残り練習か」

「おう。昨日は休日練習みてえなもんだったからな。授業の後の練習になったら、終わるのは8時くらいにはなっちまうな」

「そうか。ブラザー、ありがとう」

「礼には及ばねえ。当たり前じゃねえか」

力強い握手を交わす2人。

何故か拍手をするりる香。

楽しそうに笑う有喜。

ハンカチに顔をうずめる守人。

ななは周りの光景を見回して、

「…めんどくせーことになりそうね」

と、小さく呟き、たけのこの煮物に箸を突き刺した。

第9幕：作戦名は

「ななちゃんななちゃん」

呼び止める有喜の声に、ななは振り返った。

昼休みが終わる5分前。

ななと有喜を残し、他のメンバーは階段を降りている最中だった。美優貴とりる香の話し声が上がへと届いていた。

有喜は屋上へと続く扉に鍵をかけて、銀色の鍵をポケットに突っ込んだ。

ななは足を一段下に下ろしたままの格好で、

「何ですか？」

歯と歯の間に鉛筆をはさんだ有喜は、ニカツと笑うとななの肩に手を回した。

上体を倒し、少し驚いた顔をしているななの耳元に顔を寄せ、

「私の勘だけどね…」

と、有喜は楽しそうに囁き、

「今日、何かやるよ。美優貴ちゃん」

無表情に戻ったななは、片手で鼻の頭をかいた。

「根拠はあるんですか？」

サラツと有喜は答えた。

「根拠は勘勘」

「そうですか」

「そうですよ」

飄々とした態度の有喜を横目に見て、

「何で私に教えるんですか？」

有喜はななから離れ、階段を下り始めた。

足音をたて、ゆっくりと階段を下りながら、

「深い意味はないよ。なんとなくなるとなく」

と、有喜はクシャクシャの頭に両手を回して言う。

ななも有喜に続いた。

ななは何事かに気がついた様子で、口を薄く開いた。

「うつちゃん先輩」

「何何？」

首を僅かに後ろに向けて、有喜は続きを促す。

あつちこつちにはねた有喜の髪の毛を眺めながら、

「さつき言つてなかったですけど、松先輩に彼氏はいるんですか？」

と、相変わらずの無感動な声で訊いた。

有喜は鉛筆を上下に動かし、

「いないいない。情報だと、昔も今もね」

と、即答した。

有喜は続ける。

「誰と誰がくつついたとかいう話は、広まりやすい噂の1つだね。つまり、手に入りやすい。みんな思春期だしね。まあ、もちろんもちろんガセの中にはあるけど」

言い終わると、有喜は何事か企んだ顔つきになった。

有喜はななを振り返る。

悪戯っぽく微笑んだ顔をななに向けて、

「どうしたの？ 美優貴ちゃんのことか気になるの？」

と言つて、有喜は自分より数段上のななを見上げる。

ななは足を止めずに、

「うつちゃん先輩は、何で隼瀬さんが松先輩のことを訊きたがるのか、気にならないんですか？」

と、動揺していない口調で言い返す。

「質問で返されたか」

うつちゃんは楽しそうに微笑み、

「別に気にならないならいい。面白そうだしね」

「そうですか」

「ななちゃんはどうなの？」

階段が終わった。

薄暗い中に、中庭からの光が入り込んでいる。

玄関先では、美優貴達がななと有喜が来るのを待っていた。

緑のシートは高杉が小脇に抱えている。

ななは美優貴達を眺めながら、

「私は、面倒なことに巻き込まなければ、どうでもいいです」と、答えた。

「それでは、今日のホームルームはこれで終わりにする。日直」

1年7組担任、飯塚^{イイツカ}は、威厳を出そうと努力しているような口調で、ホームルームの終わりを告げた。

廊下側の列、最前列に座る体格のいい男子生徒が太い声で、

「起立」

ガタガタと椅子を動かす音をたてて、大儀そうに立ち上がる生徒達。

「礼」

「ありがとうございました」

バラバラと気のない声が、教室のあちこちから上がる。

飯塚教諭はスポーツ刈りの頭をペコリと下げて、厳格な教師のように口元を結んで教室から出ていった。

白いYシャツを着た、ヒョロヒョロとした撫で肩の背中が教室から去ると、教室は途端に騒がしくなる。

ガタガタと机や椅子が動く音や、喋り声。

授業が終わった直後のゆるんだ空気の中、ななは無表情で机の上に鞆を置いた。

真新しい教科書とノートを、鞆の中に詰め込みながら、ななは何気なくといった様子で後ろを見やる。

ななの後ろの席の美優貴は、帰り支度をしていなかった。

美優貴は、髪をまとめるように両手を頭の後ろに回し、軽く唇を

突き出している。

瞳はしっかりと閉じられていた。

自分の帰り支度を済ませたらしく、守人が鞆を下げて美優貴の机に向かう。

守人は美優貴の真横に立つと、主に向かって頭を下げた。

美優貴は目も開けずに、

「守人。来たか」

と、分かりきっていたかのような口振りで言った。

「はい。影山守人、参りました」

と、頭を下げたまま守人は主に答える。

「そうか」

そう言ったきり、美優貴は再び黙り込んだ。

ななは、中断していた帰り支度を再開した。

黙々とノートを詰め込むななの前に、りる香がニコニコと微笑みながらやってくる。

ずれた眼鏡を押し上げて、

「なな、美優貴ちゃん、影山くん！帰ろうよう」

と、りる香は言った。

「そうね」

と、ななは感情を感じさせない声で答え、鞆の留め具をパチンと閉めた。

「美優貴ちゃん達は？」

と、背伸びをしながらりる香は訊く。

ななも美優貴を振り返る。

美優貴は頭から両手を離し、首をゆっくりと横に振った。
オレンジ色の長い髪が揺れる。

美優貴はぱつちりとした両目を開き、りる香を見上げ、

「…そうしたいところだが、私は急な用ができてしまった。すまないな」

と、悲しげな微笑で言った。

りる香はしょんぼりとした顔で、残念そうに、

「用があるのかぁ。それじゃ、しょうがないねえ」

「明日は一緒に帰ろう」

と、美優貴はりる香を慰めるように言った。

りる香はニツコリと微笑み、

「うん！約束だよ」

ななは、守人をチラリと見やった。

守人は直立不動の姿勢で美優貴の傍に立っている。

その知的な印象を与える顔は、ななと同じように無表情だった。

ななは、何気なく、といった様子で美優貴の机の上に視線を移動させ、眉をひそめた。

美優貴の机の上に広げられたままの数学の教科書とノート。

教科書に半ば隠れているノートの左側の上部に、美優貴が書いた文字があった。

形の整った書体で横に並んだ文字。

『ラブはラブでもLOVEゲーム！愛のウイニング・ショット大作戦！』

ななは、見てはいけない物を見てしまったかのように顔を逸らし、椅子から腰を上げた。

ガヤガヤと話し声が騒がしい中、

「美優貴ちゃんいる？」

と、有喜の飄々とした声が美優貴達の元に届いた。

美優貴達4人は入り口の方に顔を向ける。

教室から出て行く生徒達を避けながら、鉛筆をくわえた有喜が7組の教室に入ってきた。

1年生達は、昼休みにも現れた寝癖頭の上級生に好奇の視線を向ける。

クラスの中を見回しながら、

「お邪魔するね」

と、有喜は軽い口調で断りをいれる。

クラスに残っていた内の大部分が、不意をつかれた顔で会釈のよ
うなものを返す。

足取りも軽く有喜は美優貴達に近づいた。

「うつちゃん先輩、ホームルーム終わるの早いですねえ」

と、りる香がのんびりと言った。

有喜は鉛筆を指にはさみ、

「そんなことないない。ここの先生の話が無駄に長いだけだよ」

美優貴は椅子に座ったまま、長身の有喜を見上げ、

「うつちゃん、どうしたんだ？」

と、不思議そうに訊いた。

有喜は、横に並んだなに意味ありげな視線を送ってから、

「理由は簡単簡単。美優貴ちゃん、何かするつもりだね？」

ニヤニヤと笑い、美優貴に言った。

ななは目を細めて、有喜を見やる。

守人は相変わらずの静かな表情。

りる香は口を半開きにさせて、顔をうろつろと動かしていた。

美優貴は有喜を見返し、不敵に微笑んだ。

「理由は？」

有喜は鉛筆をくわえ直し、

「勘勘」

と、美優貴に答えた。

美優貴は不敵な笑みを崩さずに、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

廊下とは違い、教室のざわつきは幾分かおさまっていた。

美優貴の動作に、教室の注目が集まる。

美優貴は腰に片手をあて、有喜を見上げる。

「うつちゃんの勘は正しい」

と、美優貴は答えた。

美優貴は言葉を続ける。

「私には、１つ計画がある。今日それを実行に移すつもりだ」

ななは机の上のノートに再び視線を落とし、口をへの子に曲げる。
ななの反応に気がつかなかった様子の有喜は、
「私も混ぜてくれるかな？約束約束だね？」

と、ニヤツと笑って美優貴に訊いた。

美優貴は少し首を傾げ、

「…混ぜるのは少し違うな。観戦というのが適當だな。それで
もいいか？」

「それでもいいよいいよ」

「そうか」

突然、りる香が仲間外れにされたことを恨むかのように、

「2人共、何話してるの？私も混ぜてよう」

と、しかめっ面を作って割り込んだ。

有喜はりる香の頭をポンポンと叩き、もう一方の手でななを指差した。

「こつちの2人もいいかな？」

有喜の提案に、ななは眉をひそめて、

「私はいいです」

と、有喜に言う。

そのななに向かって、

「せっかく混ぜてくれそうなんだから、行こうよう」

と、すっかり機嫌を直したりる香は言った。

ななは油が切れたロボットのようになぎこちない動きで、顔を美優貴に向けた。

渋面のななに向かって、

「いいぞ」

と言って、美優貴は白い歯を見せた。

有喜は満足そうに微笑み、

「それじゃ、決定決定」

りる香も嬉しそうに微笑み、

「よく分かんないけど、よかったねえ。なな」

と、ななに言う。

ななは答えず、眉をひそめたままだった。

美優貴はななの様子に注意を払わずに、

「作戦決行は、7時半くらいだ。だから、みんな一度家に帰った
ほうがいいかもしれない」

と、話を続ける。

「美優貴ちゃんはどうするの？」

と、りる香。

「私は色々準備がある」

「高杉ちゃんにも声かけとく？」

と、有喜。

「そうだな」

「了解了解」

美優貴は何かに気付いたように、目を見開いた。

「ああ、そうだった。作戦名を言ってなかったな。作戦名は……」
言葉を途切らせ、美優貴は机のノートに視線を落とした。

下がった美優貴の頭。

その頭に向かって、ななのダウン・スイングの平手打ちが飛んだ。
ものの見事に決まった、平手打ちの音。

更に注目が集まった中、美優貴は頭をグイッと上げて、

「何をする!？」

と、鉄仮面のななに向かって声を荒げた。

「言っんじゃねーわよ」

と、対照的に淡々とした口調でななは言い返す。

「作戦名は重要だろう!？」

「それほど重要じゃねーわよ」

「重要だ!物事に名称をつけることを疎かにするな!」

「その名前に問題があるのよ」

「どこにあるというんだ!？」

「どこもかしこも、100パーセントだっつーのよ」

「そんなはずは無い！見事な作戦名だ。守人、そうだな？」

そう言って、美優貴は守人を見やる。

守人は相変わらざるの直立不動の姿勢。

端正で知的な表情。

その眼鏡の奥の切れ長の瞳は、どこか遠い目をしていた。

有喜は守人の顔の前に腕を伸ばし、ゆっくりと手を振った。

守人は、遠い目をしたままの無反応。

「あれあれ。気絶かな」

と、有喜は軽く言う。

美優貴は溜め息をついて、

「放っておけばすぐ直るが…」

美優貴は背伸びをして、守人の横顔に顔を近付ける。

恋人の頬に口づけをするかのように、美優貴は顔を寄せた。

美優貴は右手をメガホンのように形作り、その手を守人の耳元に近づけて、

「…バウムクーヘン」

と、呟いた。

即座に、守人の目に光が戻る。

守人はハッとした表情で周りを見回し、背伸びをしたままの美優貴に向かって、頭を下げた。

「申し訳ございません！おそれながら、この影山守人、ブラック・アウトしておりました！」

と、動揺を隠しきれない声で守人は言った。

かかとを地面につけ、呆れた顔で美優貴は頭を振る。

「全く、困ったものだ」

と、美優貴は溜め息混じりに言った。

美優貴の言葉は、美優貴の近くににいる者にしか聞き取れないほど小さな声だった。

離れて眺めていた生徒達が不思議そうに頭をひねっている。
ポカンした表情のりる香と有喜。

ななは2人のやりとりを眺め、無表情でポツリともらした。
「…何でバウムクーヘン？」

第10幕：コートでは、お気に召すまま

午後7時38分。

太陽は沈み、暗い青色に円舞学園は染め上げられていた。

校舎に灯る明かりは、職員のいる職員室にしかついていない。

窓から、非常口を示す緑色のぼんやりとした光がもれている。

体育会系の部室があつまる棟には、まだいくつかの部室に明かりがついており、話し声が外まで聞こえていた。

女子テニス部の明かりは落とされていた。

部活動で疲れた様子の生徒達が、だべりながら学内を歩いている。ある者はバス停のある正門へ。

ある者は自転車置き場のある裏門へ。

革靴をスニーカーのようにかかとを潰して履き、靴の裏をこすらせる音が石畳から産まれる。

教師の下校を促す声。

生徒の生返事。

円舞学園は夜を迎えようとしていた。

そんな中、テニスコートは眩しい明かりに照らされていた。

青々とした植え込みの中、背の高い照明が闇からコートを浮かび上がらせる。

フェンスに囲まれた緑と茶色のコート。

白いライン、張られたネット。

コートに入る入り口から見て、左から2番目のコート。

ネットで仕切られたコートの手前側に1人の少女がいた。

頭の高い位置でまとめられた、黒髪のポニーテイル。

テニス焼けした肌。

高校2年生を表す赤いラインが入った青いジャージ。

上着の前は開いており、白い半袖の体操着が見えていた。

足元にはボールが入った白いバケツ。

松広美はコートのベースラインの外側に立ち、左のボールを数回弾ませた。

右手首の白いリストバンドで額の汗を拭い、広美は真剣な瞳をネットの奥に向けた。

左側のサービスボックスの周りにはレモン色のボールが散らばっていた。

サービスボックスの奥深くに、横一線にならんだ5つの空き缶。缶にはそれぞれ番号が書かれていた。

左から1番、2番、3番、4番、5番。

広美は、細く息を吐き出し、

「2番」

と、小さく呟いた。

広美はトスアップの体勢に移行する。

ボールとラケットをゆつくりと下げる。

左手が振り上げられる。

ボールが空中に舞う。

曲げられていた右肘が、ボールをとらえるために、伸ばされる。

伸びきった体が宙に浮く。

激しく、小気味いいインパクト音が静かなコートの中に満ちる。

その音の直後に、カァンという金属製。

ボールが直撃した空き缶が、カラカラとむなしい音をたてて転がった。

広美はネットに駆け寄り、残った空き缶を確認する。

広美が当てた獲物は、一番左端の空き缶だった。

がつくりと肩を落とし、広美は疲れたような笑顔で、

「…もう少しなんだけどなあ」

と、呟いた。

「これは無理なのかなあ…。漫画の読みすぎかな。いや、でもなあ…」

と、ブツブツ呟きながら広美はベースラインを通り過ぎ、フェン

スのそばにあるベンチに近付く。

青いベンチの上には、広美の物らしい荷物が乗せられている。

カバンに黒いスポーツバッグ、黒いラケットバッグ。

開けっ放しのスポーツバッグの中に手をつ込み、広美は透明のペットボトルを引っ張り出した。

広美は顔を嫌そうに歪ませ、

「げ」

スポーツ飲料が入っていたのであろうペットボトルは、すっかり空になっており、底の方にすずめの涙ほどの水滴が溜まっていた。

「……しょうがないか」

そう諦めたように呟き、広美はペットボトルをバッグに突っ込んだ。

フェンスの扉を押し開け、ラケットを持ったまま広美はコートから出る。

広美は右に曲がり、植え込みに囲まれた小径をブラブラと進んだ。フェンスのちょうど途切れた所で道が開ける。

用具入れのプレハブなどが置かれた、小さな広場のようなスペース。

広美は、プレハブ横に設置された長細い水道に向かった。

コートの明かりがぼんやりと届き、並んだ蛇口が鈍く光った。

広美は蛇口をひねり、溢れ出る水道水を口に流し込む。

2、3口で飲むのを止めて、広美は口元を拭いた。

水を止め、広美は来た道をブラブラと戻る。

ラケットで肩をポンポンと叩きながら、広美は顔をフェンスの中に向けた。

その広美の目が、驚いたように見開かれる。

広美の視線の先、コートの中に、制服姿の女子生徒が立っていた。強すぎる光の中、広美に後ろ姿を向けている少女。

少女が立っているのは、先ほどまで広美がサーブを打っていた位置。

足元にはボールが入ったバケツ。
オレンジ色の長い髪。

ぼんやりとした様子の背中は、ピクリとも動かない。

広美は気まずそうな顔をして、コートへと続く扉を開けた。

ギイという金属音に気付いた様子で、制服の女子は振り返る。

光の中、髪が揺れた。

細く開かれた、小さな唇。

はつきりとした瞳が、広美を捉える。

広美は、扉に手をかけたまま足を止めた。

ベースラインに立つ端正な顔立ちの娘は、茶色の目を真っ直ぐに
広美に向ける。

身動きがとれなくなったように、硬直した広美。

その広美に向かって、コートの少女はペコリと頭を下げた。

「申し訳ありません」

伏し目がちに少女は言う。

「勝手に入ってしまいました。扉が開いていたものですから、つ
いフラフラと…」

「え、ああ…。うん」

そう答えた広美は、落ち着かない様子で扉を閉める。

広美はコートの中に向き直り、少女と目を合わせないように努力
している様子で、

「えつと…、新入生？」

と、少女の足元を見ながら訊いた。

スラリとした脚。

左手で新しい鞆を手にし、左手に添えられた右手には小さな文庫
本。

「はい」

広美はラケットをもてあそびながら、

「えつと…、テニスに興味あるの？」

「…子どもの頃、少しだけ習っていました」

「へえ。そうなんだ…」

広美は、会話に困った様子でラケットをクルクルと回した。

広美はチラッと下級生の顔を見る。

穏やかな微笑みの少女は、広美をただ見つめ返す。

広美はすぐさま視線をそらし、ポツリと言った。

「…ボール、打ってみる？」

「えっ!？」

少女は驚いた様子で目を見開き、

「いいんですか？」

「うん」

そう言つて、広美はラケットを差し出した。

少女は一度自分の荷物を見下ろしてから、周りをキョロキョロと見回す。

「持つててあげる」

少女は恥ずかしそうに顔を赤らめ、

「すみません」

と言つて、鞆と文庫本を広美に手渡した。

代わりにラケットを手渡し、広美はベンチまで下がる。

フェンスに寄りかかり、広美は文庫本のタイトルに目を落とす。

表彰状のように蔓に縁取られたデザインの白い本。

タイトルは『お気に召すまま』。

「シェイクスピア…」

と、感心したように広美は呟いた。

ポーンポーンとボールの弾む音に広美は顔を上げる。

「あの空き缶を狙えばいいんでしょうか？」

と、少女は広美を振り返らずに訊く。

広美は、しまったという顔になり、慌てた声で、

「あ！あれは私が適当に作った的だから、別に…」

少女は広美の言葉が終わらない内に、トスを上げる。

ラケットを持った腕の肘が上がり、ラケットヘッドが落ちる。

ボールを追う、少女の明るい茶色の瞳。
つられたように広美もボールを追う。

狙いを定め、力を溜め、少女は跳んだ。

髪が舞い、スカートが浮かび上がりそうになる。

インパクト音。

ボールが左端の空き缶を仕留め、缶が吹き飛ぶ。

いびつにへこんだ缶は不格好に転がり、フェンスで止まった。
静寂。

広美は驚いた様子で少女を見つめる。

少女は表情もなく、バケツからボールを取り出す。

先ほどの動作を繰り返し、少女はサーブを打つ。

インパクト。

金属音。

吹き飛んだのは、3つ残った内の左の缶だった。

缶は残り2つ。

少女はただ、動作を繰り返す。

インパクトの瞬間、ラケットをわずかに操作し、ボールをコント

ロールする。

その姿は、バランスが崩れることなく維持されていた。

左の缶が飛ぶ。

右の缶が飛ぶ。

4球で、4つの缶がサービスポックスから無くなった。

呆気にとられた顔で、広美はただただその光景を眺めていた。

少女は髪の乱れを直し、ゆっくりと広美に向き直った。

ポカンとした表情の広美に、少女はラケットを差し出す。

両手で白いラケットを差し出し、

「ありがとうございます」

と、少女は微笑む。

広美は未だに信じられない様子で、言われるがままにラケットを受け取り、荷物を少女に手渡す。

ペコリと頭を下げ、

「お邪魔しました」

そう言つて、少女は扉に向かう。

広美はハツとした表情になり、

「待って！」

と、扉を開いた少女に向かって声をかけた。

少女は広美に向かって小首を傾げる。

広美は真剣な表情で、

「あなた、名前は？」

少女は広美の目を見返す。

広美も目をそらさなかった。

少女は口を開いた。

「…隼瀬美優貴と申します」

「隼瀬美優貴さん…」

美優貴は微笑み、

「ご機嫌よう」

そう、広美に告げてコートを去つていった。

コートから離れ、美優貴は闇の中に姿を消していく。

明るい色の髪が、やがて黒く染まり、夜に混じる。

その様子を、広美はじっと見つめていた。

「…何これ？」

と、植え込みから顔を突き出したななはこぼした。

「いやいや、なかなか面白かったよ」

と、ななの横から顔を突き出した有喜は楽しそうに言う。

有喜の右隣のりる香は感心した様子で、

「美優貴ちゃんって、テニス上手いねえ」

りる香の横では高杉が、

「さすがはブラザー。見事な生脚だ」

と、誇らしげに言う。

「影山君、その変態ひつぱたいといて」

ななの言葉に、高杉の横にいる守人は答えない。

守人は声を殺し、涙を拭うことに専念していた。

高杉は真剣な口調で、

「みくびるなよ、鈴森。俺は兄弟に手え出すほど落ちちやいねえ」
「どーでもいーわよ」

りる香は驚いた様子で、

「ふうん。高杉先輩と美優貴ちゃんて、兄妹だったんだあ」

「りる香。面倒くさくなるから黙ってて」

りる香は恐ろしさを感じさせない怒り方で、

「何だとお」

と、ななに反発する。

有喜は口元を押さえ、笑い出すのをこらえていた。

テニスコートから程よく離れた植え込みの間に、なな達は陣取っている。

なな達は昼休みの時のレジャーシートを細く折り畳んで敷き、並んで美優貴達の様子を観戦していた。

コートを離れた美優貴が、なな達の方に近付く。

片手をひらひらと振り、

「おかえりおかえり」

と、有喜は美優貴を迎える。

ガサガサと植え込みをかき分け、美優貴はななの隣に座った。

薄暗い中、ななは隣に座り込んだ、美優貴の横顔を横目で見つめる。

美優貴は空を見上げ、

「隼の狩りは」

周囲の者の注意を集めて、美優貴は言葉を続ける。

「隼の狩りは電光石火、ダイナミックにしてアクロバティック。自然界最速の降下で、獲物を仕留める。万一仕留めそこなっても、

確実に致命傷を与える。つまり、一撃必殺だ」

ななは、美優貴に顔を向けた。

「隼ね……」

そう呟いて、有喜は頭をガリガリとかく。

有喜は、美優貴の言葉を理解した様子で、ニヤニヤと笑い、

「なるほどなるほど。それじゃ、今回はどうなのかな？」

と、美優貴に訊いた。

遠い目をして美優貴は星空を眺めていたが、不意に満足げな表情をして、

「インパクトを与えることは、間違い無く成功した。悪くないな」と、晴れやかな声で言った。

「作戦の第1段階は完了だ。『ラブはラブで……』」

作戦名の途中で、ななの平手打ちが美優貴の後頭部をとらえる。

インパクト音。

真横に座って叩いたにしては、大きすぎる音だった。

「言わなくていいっつーのよ」

と、ななは無愛想に言った。

コートの中でボールを拾っていた広美は、ななが美優貴を叩いた音が聞こえたらしく、キョトンとした顔で、周りをキョロキョロと見回していた。

第11幕：勧誘の嵐

「すごい人だねえ！何人いるのかなあ？」

と、りる香ははしゃいだ様子で言った。

りる香の横で、美優貴は中庭の騒然とした光景を眺め、

「分からないが、大変な賑わいだな。広い学校だけはある」

と、満足そうに言う。

『ラブはラブでもLOVEゲーム！愛のウイニング・ショット大作戦！』の第1段階を美優貴が行った日の翌日。

放課後の学内は、入学式の日とは違う騒がしさで満たされていた。ありとあらゆる場所に色とりどりの看板が立てかけられ、会議に使われるような長机が青空の下に運び出されていた。

年末のアメ横のように生徒がうろついている中を、ポスターや手持ち看板を持った生徒が縦横無尽に駆け回り、新入生をとらえては話しかけている。

真新しい制服姿の生徒の中には、明るいグレーのズボンやスカート、パステルカラーの黄色に白いストライプが入ったネクタイをした中学生も混じっていた。

美優貴、なな、りる香、守人の4人は、北校舎から中庭へと続くドアのところに立っていた。

ななは手元の薄いパンフレットに視線を落とす。

修学旅行のしおりのようにホッチキスでまとめられた冊子の表紙には、『円舞学園部活動一覧表』と書かれていた。

新入部員の勧誘。

美優貴達の目の前の光景は、それ以外の何ものでもなかった。

生徒の往来が激しい中、美優貴達は道の真ん中を占領していた為、歩を進める生徒が迷惑そうな顔をして美優貴達の脇を通っていく。

ななは前に立った美優貴の背中をつつき、

「邪魔になるから、進まない？」

頭を少しだけ背後に向けて、

「ああ、そうだな」

と、美優貴は答え、守人に視線を送った。

最後尾に位置していた守人は、美優貴の前に進み出て頭を垂れる。
一礼の後に、守人は人混みの中に入っていた。

美優貴も守人の後に続く。

「あつ、待つてよう」

と、りる香は人の流れに混ざっていくオレンジの髪を追った。

ななは慌てた様子もなく美優貴達に続いた。

キヨロキヨロと周囲を見ながら、

「どこから行く？」

と、りる香は訊いた。

「そうだな。右から順に見ていこうか」

と、美優貴。

「そうだねえ」

守人は万事心得た様子で、右に曲がる。

「ななはどこか見たい部活はあるのか？」

と、美優貴は振り返って訊いた。

ななは興味なさげにパンフレットを眺め、

「…『小早川秀秋研究会』」

と、素っ気なく答えた。

美優貴はゆっくりとまばたきをして、

「随分局地的だな」

ななは美優貴を見返し、

「冗談よ」

「冗談か」

美優貴は眉間にシワを寄せて、

「真顔で言つと冗談に見えないぞ」

「気をつけるわ」

「ななのポーカーフフェイスはすごいからねえ」

と、りる香は振り返り、

「今までババ抜きで負けたことないんだよね？」

「そうね」

「大したものだな」

と、感心した様子で美優貴は言った。

その言葉の直後、美優貴は真剣な顔つきで瞳を細め、足を止めた。同時に守人も立ち止まり、後ろを向いたまま進んでいたりる香が守人の背中にぶつかる。

眼鏡の位置を直しながら、キョトンとした顔で守人を見上げ、

「影山君、どうしたの？」

と、りる香は訊く。

美優貴に合わせるようにして立ち止まったななは、体ごと向き直った美優貴を、少し驚いた様子で見つめていた。

人の流れは美優貴の異変に気付くことなく流れていく。

ななの後ろを歩いていた2人組の男子が、笑いながら美優貴達を追い抜かしていった。

「守人」

と、美優貴は背中合わせになった守人に声をかける。

美優貴は落ち着いた声で、

「守人から見ても、左だな？」

「仰せのとおりでございます。お嬢様からご覧になって、右の方角、恐らく南校舎からでは、と愚考しております」

と、冷静な守人の声が答える。

美優貴は満足げに微笑み、

「正しい」

そう言うのと、南校舎の方に顔を向けた。

斜め上を見上げる美優貴に促されるようにして、ななも美優貴の視線の先を追う。

美優貴と守人を、驚いた顔で見えていたりる香も、南校舎に向き直った。

4 階建ての校舎。

南校舎の3階廊下は生徒達が行き来していた。開かれた窓の内、ちょうど美優貴の真横にあった部分に、2人の人物がいた。

1人は、カメラマンが使うような本格的なカメラを構えた酒匂川有喜。

もう1人は、真っ黒で大きな双眼鏡を手にした堤愛子。

ニコニコと笑った有喜は、鉛筆を口にしている。

愛子は目を丸くして、ミニチュアの人に紛れた美優貴を見つめていた。

「いやいや、バレちゃったか」

と、楽しそうに笑いながら、有喜は頭をかく。

その横では愛子が、

「別に、隼瀬さん達を覗いてたんじゃないわよ。偶然ね、見つけただけなのよ」

と、大袈裟なりアクションで弁解した。

南校舎の入り口の隅に、美優貴達は集まっていた。

南校舎の中には新入生の勧誘をしている生徒はおらず、帰り支度に教室に戻る生徒や、だべりながら家路につく生徒が出たり入ったりしていた。

相変わらずの寝癖頭で、有喜は首にカメラをかけて、壁にもたれている。

有喜の豊かな胸に押し上げられたカメラのレンズが、キラリと光った。

愛子は白衣の下に薄紫のブラウス、黒に近い茶色のタイトスカート、ベージュのストッキングにスリッパといういでたち。

愛子は首に双眼鏡をぶら下げている。

「それにしても、よく分かったわね」

と、愛子は感心したように言った。

「大したことではありません。なんとなく、見られている気がしただけです」

そう美優貴は答えた。

長身の有喜と、小柄な愛子を交互に眺め、

「あそこで何をしていたんだ？」

と、美優貴は問い詰めるでもなく訊いた。

「取材取材。今年の新入生勧誘の様子の撮影だね」

と、有喜はカメラをポンポンと叩きながら答える。

「私は、酒匂川さんに誘われて」

と、愛子は大きな双眼鏡をいじりながら答えた。

有喜は、悪戯っぽく微笑み、

「だってだって、愛子先生、迷子になってたから」

愛子は顔を赤くして、有喜を睨みつける。

「迷子になんかなってないわよ！人の流れが激しかったから、戻れなくなっただけ！」

「そうやって、小さい子は迷子になるんですよ？」

ますます顔を赤くさせて、

「怒るわよ！サカワラワさん！」

と、愛子は声を荒げる。

愛子の声に反応し、辺りにいた生徒が好奇の視線を向けた。

有喜は可笑しそうに笑い、愛子はすねたように口を一字に結ぶ。

美優貴は楽しそうに微笑み、その横でななは鼻の頭をかいた。

美優貴の背後では、守人が彫刻のように静かに立っている。

りる香はニコニコと笑って、

「先生って、部活の顧問はしてるんですか？」

と、愛子に訊いた。

愛子は赤いままの顔で、

「してないわ。でも、オススメの部活なら知ってるわよ。よく生徒の相談を受けるから、部活には詳しいの」

「すごいですねえ」

と、心からそう思っている様子でりる香は言った。

愛子は得意気に腕組みをして、

「先生ですからね。当然よ」

盛り上がったりる香と愛子の横で、笑い泣きの涙を拭いながら、

「そうそう、美優貴ちゃん。テニス部は見にいったの?」

と、有喜は訊いた。

「いや。まだだぞ」

と、腰に手を当てた美優貴は答える。

「なるほどなるほど。ちなみに、この中庭に並んでるのは文化系ばかりだから、体育会系の部活はないよ」

美優貴は納得した様子で頷き、

「そうか。どうりでブラザーに会わないはずだ」

「高杉ちゃんはサッカー部のグラウンドだね、多分多分。一応、

あれでエースだから」

有喜の言葉に、ななは疑わしそくに目を細める。

ななの反応に気づいた様子で、

「しかもしかも。見た目がいいから高杉ちゃん目当てで、女子サッカー部に入る娘もいるんだよ」

と、有喜はニヤニヤと続けた。

ななは渋い顔をして中庭に顔を向ける。

「さすが、ブラザーだな」

と、誇らしそくに美優貴は言う。

「まあ、正体を知ったら大体の娘は幻滅するみたいだね」

「それで、テニス部はどこで勧誘をしているんだ?」

「テニスコートだね」

美優貴は軽く首を傾げて、

「昨日のコートか?」

有喜は鉛筆を上下に動かし、

「昨日のコートだね」

「そうか」

そう言つと、美優貴は思案するように瞳を閉じた。
手のひらをこめかみに押し当て、ゆっくりと指先を後頭部まで移動させる。

その指先が頭の後ろで触れ合つた瞬間、美優貴は瞳を開いた。

「ねえ、美優貴ちゃん」

と、愛子と話していたりる香が美優貴に声をかける。

美優貴は穏やかに微笑み、

「どうした？」

「先生がね、部活の案内してくれるって！やったねえ」

と、りる香は嬉しそうな顔で言つた。

「そうか。それは助かるな」

外の賑わいを眺めていたななは、頭を美優貴達の方に戻した。

「それじゃ先生、案内をお願いしまあす」

りる香の言葉に、満足そうな顔で頷くと、愛子はわざとらしく咳払いをした。

「先生についてきなさい！片っ端から教えてあげるわ！」

そう声高らかに宣言して、愛子は中庭へと向かう。

りる香が愛子のすぐ後ろに続いた。

りる香と、りる香より10cmほど背が低い愛子の背中が、校舎から出ていく。

「うつちゃん先輩はどうするんですか？」

と、ななは訊いた。

有喜はカメラを手にして、

「私は、ここでもう少し撮ってみるよ。仕事だしね」

「そうか」

と、美優貴は残念そうに言つた。

守人は美優貴達の先に立って、愛子とりる香の行く先を視線で追っている。

「それじゃ、またな」

そう言つて、有喜に背中を向ける美優貴。

ペコリと会釈をして、ななも背中を向けた。

美優貴とななが、中庭を見つめる守人に近づいた時、突然、

「ちよつとちよつと待つて！」

と、有喜の声があがる。

振り返る美優貴となな。

2人の髪が、フワリと舞う。

振り返った瞬間、有喜が構えたカメラからシャッター音が生まれた。

目を大きくしている美優貴と無表情ななな。

その2人を、ファインダーから顔を上げ、目を細くした有喜は眺める。

「記念記念の1枚だよ」

と、悪びれた様子もなく有喜は言つた。

「影山ちゃんは入りきらなかったみたい。ごめんね」

有喜の言葉に、美優貴とななは守人に視線を送る。

守人は首だけを有喜の方に向け、

「お気持ちだけで」

そう言つて、頭を下げた。

「くら！」

と、可愛い怒声をあげて、愛子が守人の横に並ぶ。

目を吊り上げ、腕組みをした乱れ髪の愛子は、

「置いてっちゃうわよ！」

愛子の後ろでは、人混みにもみくちゃにされたりる香が、髪を整えながら現れた。

怒り顔の愛子と、困り顔のりる香。

衣服と髪をグシャグシャにされた2人を見て、

「…そんなに混んでる？」

と、ななは呟いた。

「あつ、愛子先生！」

「愛子先生！寄ってって！」

「愛子先生、勧誘手伝ってよ！」

「あなた、新生？可愛い！」

女子生徒に囲まれた愛子とりの香。

2人とも小動物やぬいぐるみのように、女子に引っ張られている。

「ちよつと、離さない！怒るわよ！」

「待つてくださあい！」

2人の悲痛な声は受け入れられる様子もなく、引っ張られるままになっている。

少し離れて愛子達の様子を眺めている美優貴となな、守人の3人。
「なるほどな」

と、納得した様子の美優貴。

「こういうことか」

「こういうことね」

と、隣でなな。

「どうする？」

「どうしようもねーわね」

「そうだな」

「どうするの？」

美優貴はななの方を向いて、

「私はテニスコートに行く。ななも行くか？」

ななは無感動な顔を美優貴に向けて、

「私はいいわ。適当にまわってから帰る」

「そうか。それじゃ、またな」

「またね」

別れの挨拶を済ませ、美優貴は体の向きとは逆方向に向き直り、歩き出した。

守人はななに一礼をした後で、美優貴に続いた。

人の流れに消えていく美優貴と守人をななは目で追う。

愛子達を囲んだ黄色い声の渦は止まず、時間がたつに連れて、ますます激しくなっていた。

渦中の2人は、疲れた様子で抵抗するでもなく、引っ張られるがままになっていた。

第12幕：再会は偶然に。を装って

女子テニス部のコートは、黄色い声で埋め尽くされていた。

フェンスに取り付けられた、『女子テニス部』の手書きの看板は、カラフルな画用紙に描かれたキャラクターが縁取られている。

看板の下の長机には真っ白なテニスウェア姿の女子が数人腰掛け、押しかける生徒の相手を大きな声でしていた。

30人以上はいるであろう女生徒達は、机の上のノートに自分の連絡先を記入したり、手渡された入部届けを手にしてコートの中に入ったりしている。

フェンスの内側では、テニス部員が新生入生にサーブを見せたり、ラケットの持ち方を指導したりしていて、テニススクールの初心者向けコースのような景色を作り出していた。

そんな中、松広美は浮かない表情でフェンスに寄りかかっていた。テニスウェアの部員が大半を占める中、広美はテニス部のロゴが入った黒いウィンドブレーカーに身を包んでいた。

憂鬱そうに溜め息をついた広美の背中を、フェンス越しにある女生徒がつつく。

鈍い反応をして、広美はフェンスの方を向いた。

「こら、2年。サボッてないで勧誘しなさい」

そう言っただけの白いテニスウェア姿の女子は、大量のビラを脇に抱えている。

広美よりも身長が低く、髪も短い丸顔の女子は、怒ったような顔で仁王立ちしていた。

広美は疲れた顔で、

「そんなこと言わないでよ、麻実^{マミ}。私、知らない人って『駄目』
なんだからさ」

「そういう言い訳こそ、『駄目』だよ」

川崎麻実^{カワサキ マミ}は、週刊誌ほどの厚さのあるチラシを顔の高さまで持ち

上げ、

「こんなに余ってるんだから！これ配り終わらないと、グラウンド20週なんだよ。連帯責任で2年全員！私、嫌だからね」

踏ん切りがつかない様子の広美は、フェンスにしがみつき、

「でもなあ……」

「でもないの！どっちにしろ、サボッてたら先輩に怒られるよ」

と、母親のように麻実が広美を叱る。

「うーん……」

相も変わらずずつく広美に業を煮やしたのか、麻実がズカズカとフェンスの内側に入り込んで、金網を鷲掴みしていた広美の手首を握る。

驚いた顔を向けた広美に向かって、麻実は怒りを込めた笑顔と共に、

「行・く・よ」

そう言って、広美の腕を引っ張る。

顔から血の気が引いた顔で、

「痛い痛い！行くから、行くから、離して！力強すぎるって！折れる折れる！」

と、広美は麻実に握り締められた左手首を押さえながら必死そうに叫ぶ。

広美達のやり取りを、制服姿の女子達は呆気にとられた様子で見つめ、テニス部員の女子はそちらへの注意をそらすためか、声を一際高くしていた。

女子テニス部が使用しているコートは、青々とした植え込みに囲まれている。

校舎に最も近い道は、植え込みの間の小道を通って、石造りの階段を上るコース。

その階段を上がりきったところに、5人の部員が立っていた。その内の2人は広美と麻実。

広美以外の部員はテニスウェア姿だった。

前を通る生徒の流れに向かってビラを配りながら、

「女子テニス部、お願いしまーす！」

と、麻実の元気な声。

麻実に続いて他の部員も、

「お願いしまーす！」

広美は独り俯きがちに、

「…します」

と、ボソリと言った。

3人組みの女子にビラを配り終えた、お団子頭の部員が、

「松っちゃん、テンション低いね。大丈夫？」

と、心配そうな表情で声をかけた。

「駄目」

と、瀕死の状態を思わせる広美が答える。

「甘やかさないでね」

と、麻実が口を出した。

「ただ人見知りなだけなんだから」

お団子の生徒は、へえと言って、

「意外。知らなかった」

と、驚いた声を出した。

広美は力無く笑い、人の流れに視線を戻す。

中学生、高校生、新入生、上級生。

様々な人々が行き交うのを眺めていた広美は、不意に顔の動きを止めた。

だんだんと目が見開かれていき、口が小さく開かれる。

麻実は、ポカンとした表情をしている広美に向かって、

「広美。どうしたの？」

広美は慌てた様子で、チラシと、麻実とを見てから、

「ごめん！ちょっと出てくる！」

と言って、麻実に自分のノルマのチラシを押し付けた。

「えっ、ちよっ……」

麻実は目を白黒させて、走り出した広美の背中をを見送った。

両手にチラシを持ち、

「もう！」

と、麻実は怒りの声をあげる。

納得がいけない顔の麻実の視線の先には、広美の動きに合わせて跳ねるポニーテール。

さらに奥では、長いオレンジ色の髪が、ちょうど人影に隠れるようとしていた。

中庭周辺よりはまばらな人の流れは、正門へと向かう。

くだらなく歩く生徒の間を、広美は走る。

競走馬の尾ようにポニーテールをなびかせ、視線は一点に固定したまま。

広美の視線の先には、人の影に見え隠れしているオレンジのロングヘア。

その後ろ姿の横には、誰も並んでいなかった。

石畳の坂道を、勢い良く広美は下る。

広美に追い抜かされた生徒が、目を丸くして広美の背中を見送る。オレンジ髪の女生徒にあと数mと迫ったとき、広美は右腕を伸ばした。

その右手が、女生徒の肩を掴む。

肩を掴まれ、不意を突かれたように少女の足が止まる。

肩を掴まれた少女は、ゆっくりと振り向いた。

目を丸くして、広美に端正な顔を見せた少女は、隼瀬美優貴だった。

広美は大きな安堵の息をつき、

「良かった！人違いじゃなかった！」

と、安心した様子で言う。

美優貴は優雅に微笑み、

「昨日の方ですね？昨日はお邪魔しました」

広美は頭をブンブンと横に振り、

「いいの、いいの！それより、少し話聞かせてくれない？時間ある？」

と、興奮した様子で早口で言う。

「時間がありますけど…」

そう言って、美優貴は少し困ったような顔すると、

「あの、手を離していただけませんか？別に逃げませんからハッとした表情で、

「ご、ごめん！痛かった！？」

と、広美は急いで手を離す。

美優貴は広美に向き直り、掴まれた肩を撫でながら、
「少し」

と、穏やかに答える。

「ごめんね、つい…」

と、申し訳なさそうに言う広美。

「お気になさらないください。立ち話もなんですから…」

そう言って、美優貴は自分の真横を指差す。

「あちらに座りませんか？」

広美は美優貴の指の先、自分の左手側に顔を向けた。

美優貴の指差した場所は、講堂横の噴水広場。

数あるベンチには、先客は誰もいなかった。

重力に逆らい、空に向かう水流は、地球の法則で力なく落ちていく。

心地よい水の音の奥には、入学式の日と変わらず、桜の木が枝を広げていた。

美優貴、守人と別れた後。

ななは愛子とりる香を放置して、中庭をブラブラと歩いていた。どこの部活を覗くでもなくななは歩き、やがて中庭と道の境目にたどり着いた。

石畳の道は左右に伸び、左は正門の方へ、右は裏門の方へと伸びている。

ななの正面には、北校舎に入りきらない職員室や、特別教室がある東校舎があった。

今はその前にも勧誘の部員が立ち並び、道行く生徒に声をかけている。

無表情で鼻の頭をかき、ななは東校舎に背中を向けた。その背中に、

「鈴森」

と、声がかかった。

億劫そうにななは声がした方に顔を向けて、眉間にシワを寄せた。ななに声をかけた人物は、高杉だった。

「独りか？」

そうウィンドブレーカーを羽織った高杉は尋ねた。

高杉の後ろではサッカー部の看板を手にした下田と山下が従っている。

「そうです」

と、ななは素っ気なく答えた。

高杉は意外そうな顔をして、

「そうか。ブラザーと別行動ってのは珍しいな」

「：今日で、出会って3日目なんですけど」

高杉は短く笑い、

「そんなことは大したことじゃねえ。関係ねえさ」

ななは視線を高杉の背後に移した。

下田、山下の両人は看板を高く掲げ、

「求む！新入部員！」

「円学^{エンガク}サッカー部に新たな歴史を！」
と、口々に叫んでいる。

「何か興味がある部活はあったか？」

そう尋ねる高杉に、ななは視線を戻した。

「特にないですね」

「そうか」

高杉は短髪の頭をかいて、

「ブラザーもか？」

「隼瀬さんが興味あるのは、テニス部だけじゃないですか？」

と、仏頂面でななは返す。

「テニス部……」

そう呟いて、高杉は険しい顔つきになる。

味方の裏切りに気づいた武将のような表情で、

「しまった……。俺としたことが！」

と、吐き捨てるように言うと、高杉はななにツカツカと歩み寄る。

高杉は真剣そのものの瞳で、ななを見つめてから、パンフレット

を持ったままのななの右腕を掴んだ。

普段よりも目を数m見開いたななに向かって、

「鈴森。頼みがある。付いてきてくれ」

そう言うと、高杉は正門の方へ向かってズンズンと進み出した。

呆氣にとられ、慌てふためきながら、

「慎さん！？」

と、素っ頓狂な声を出す下田と山下。

高杉は振り返らずに、

「すまねえ！お前らは勧誘、続けててくれ！」

と、大きな声で詫びを入れる。

呆然と立ち尽くす2人のサッカー部員。

人の流れに乗りながら、足早に歩く高杉に向かって、

「先輩、離してください。どこ行くんですか」

と、ななは平静そのものの声で抗議する。

前を見据えたまま、高杉は、

「女子テニス部だ」

と、歯切れのいい声で答える。

ななは、高杉に掴まれた自分の手首を見やりながら、

「何ですか？」

相変わらずの口調で、高杉は答える。

「テニスウェアだ」

「はい？」

迷惑そうに片目を細めたななに、

「女子テニス部の勧誘は、大体の部員がテニスウェアでやってるんだ。すっかり忘れてた。これを見逃す手はねえ」

と、高杉は言う。

「それで、何で私が必要なんですか？」

高杉は自信に満ち溢れた、爽やかな笑顔をななにに向けて、

「間近に見るには、女連れがいいからな。設定としては、『同じ中学から来た後輩に、部活の案内をする先輩』ってことでどうだ？」

抑揚のない、ななの冷淡な声が、

「ふざけんじゃないわよ」

高杉は気にする風でもなく、

「まあ、タダとは言わねえ。礼はする。美味しいお好み焼きでもおこるぜ」

高杉の言葉に揺り動かされた様子で、

「お好み焼き…」

そう呟いて、ななは考え込むように眉間をくもらせた。

高杉は前に顔を戻し、

「おう？」

と、疑問符のついた声を出して、足を止めた。

高杉の手を振りほどき、ななは高杉の横に並ぶ。握られていた手首をさすりながら、

「どうかしました？」

と、ななは訊いた。

ななと高杉が立っている場所は、テニスコートへと続く階段にほど近い場所だった。

すぐ左側には北校舎がある。

石畳の道は、北校舎の端から緩やかな下り坂になり、正門まで向かっていた。

カーブを描く道には、バス停へ向かう生徒がゾロゾロと歩いている。

高杉は講堂の左側をアゴでしゃくり、

「…あれは、ブラザーじゃねえか？」

と、ななに尋ねた。

促されるように、高杉が指摘した方にななは注意を向ける。

段々と日が落ちかけた中、噴水広場の前に立ち止まっている2人の人物。

立ち止まっているのはその2人だけで、周囲の生徒達は坂を下る足を止めていない。

米粒ほどの大きさの2人。

その内の1人は鮮やかなオレンジ色の髪をしていた。

ななは手首をプラプラと振りながら、

「多分、そうですね」

「もう1人は…、テニス部だな。あの服の色は」

高杉は目を細め、

「…ってことは、松か」

そう言うのと、プラプラしていたななの手首を再び掴み、ズンズンと歩き出した。

勧誘に精を出すテニス部員を通り過ぎたところで、

「どこ行くんですか？テニス部はあつちだと思えますけど」

と、自分の後ろを指差しながら、ななは告げる。

前を向いたまま、高杉は後ろを振り返らない。

「ブラザーが気がかりだ。まずは、そっちを片付ける」

高杉はニツと笑い、

「色と義理とを秤にかけりや、義理のが重い。そういうもんだ」

ななは高杉の後ろ頭を見上げ、テストを前にした赤点常習者のような深い溜め息をついた。

「…どうでもいいけど、お好み焼きは忘れないでくださいね」

第13幕：黄昏近付く噴水広場は

円舞学園の校門へと続く坂道は、小高い丘の地形を削るようにして造られている。

石畳の道は、北校舎から見ると途中で2つに別れており、その内1つは正門への下り道。

もう1つの道は、下り坂に沿うが、下ることなく続く平坦な道。

ななと高杉は後者の道を足早に進んだ。

なな達の選んだ道は、人の波が途切れたように生徒の姿が少ない。

「高杉先輩」

と、腕を引っ張られたままのななは、引っ張っている張本人に呼びかけた。

「何だ？」

と、少し首を後ろに向けて高杉は応じる。

「こっちの道でいいんですか？」

「おう。横、見てみる」

高杉の言葉に従うように、ななは右に視線を向けた。

道の右、下り坂に面した側には転落防止用の柵が並んでいる。

黒ずんだ、モダンなデザインの柵。

その向こうには、平地に広がる街が見える。

高杉は言う。

「ここからなら、噴水広場が見下ろせる」

柵の正反対側には、柵のデザインに合わせるようにして建てられたと思われる、外壁にレンガを使用した建物が2つ並んでいる。

手前の2階建ての建物は、『円舞学園資料館』と入り口に看板が掲げられていた。

奥に位置する4階建ての建物の前には石碑のような大きな石があり、その石には『図書館』と達筆な字体で彫り込まれていた。

道は図書館まで続き、図書館の前には小さな広場のようなスぺー

スがあった。

柵に沿って、木製のベンチが数脚配置されている。

突然、

「おう？」

と、高杉が声をあげる。

高杉の声に反応し、左側に並ぶレンガ造りの建物を眺めていたななは、顔を正面に向けた。

図書館前広場の中央には大きなモミの木が植えられている。

その青々とした針葉樹の下、1人の男子生徒がピンと背筋を伸ばして立っていた。

木陰に立った影山守人は、なな達に気付くと2人に向かって頭を下げた。

高杉は足を止める。

再び、ななは高杉の手を振りほどき、無表情な顔をして手首をさする。

「影山。そんな所に立ってちゃ、見れねえだろ？」

高杉はそう言って、親指を噴水広場の方に向けた。

ニツと笑い、高杉は、

「俺達と一緒に、そのベンチに座らねえか？」

高杉の指し示す先。

そこには、1脚のベンチがあった。

ベンチの背もたれの前には柵。

その柵の向こうでは、薄い桃色の桜の花が景色を遮っていた。

ベンチに座り、手を伸ばせば届きそうな程、近い距離で広がる桜花。

斜め上からの太陽に照らされた花びらは、濃い陰影をつけている。その桜の木は、噴水広場に根付いていた。

守人は桜から、高杉とななに視線を移動させて、

「お言葉に甘えさせていただきます」

と、落ち着いた口調の答えに会釈を添えて返した。

「それで、お話って何でしょうか？」

と、美優貴は隣に腰掛けた広美に訊いた。

「あ、えっと…」

と、言葉を濁した広美。

落ち着かない様子の広美は、自分に顔を向ける美優貴を見返さずに、目の前の噴水を眺めている。

日が傾きかけた学園は、だんだんと黄昏時の色に染まっていく。

水しぶきをたてて落下する水流。

せわしなく広がる波紋。

ベンチに腰掛けた美優貴と広美。

2人の座る間には、人1人分ほどの空間があった。

美優貴は膝の上の鞆に手を乗せて、広美の言葉を待つように、黙っている。

広美は指を組んだり開いたりしながら、

「…あなた、テニス部に入る気はない？」

と、意を決した様子で言った。

美優貴はゆっくりとまばたきをして、

「テニス部に、ですか？」

と、不思議そうに聞き返した。

「うん」

広美は、昨日の光景を思い出しているように、噴水を遠い目で見つめた。

「…凄いコントロールだった。あの実力を活かさないなんて、もったいないわよ。昔、少しだけやってたなんて、信じられない。あなたなら、すぐにレギュラーも狙えると思うわ」

言い終わると、広美は美優貴の方に顔を向けた。

「どうかな？」

美優貴は広美の視線を避けるように、顔をそらした。

悲しげにうつむき、鞆を見つめる美優貴。

美優貴は口を開いた。

「…お気持ちは嬉しいです。だけど…」

「だけど、どうかしたの？」

と、広美は不安げに言葉を促す。

美優貴は悲しそうに微笑み、

「…私、テニスはできないんです」

と、ポツリとこぼした。

広美は体ごと美優貴に向き直り、

「どうして？」

と、勢い込んで訊いた。

美優貴は片手を、そっと胸元へ運んだ。

「…胸が、苦しくなるんです。特にテニスをすると。…持病の発作で」

目を見開き、

「持病って、病気のこと？」

と、確かめるように広美は聞き返す。

美優貴は小さく頷き、

「…先日、見つかったんです。本当に、数日前」

広美は言葉を失ったかのように、口をあぐりと広げた。

「突然、胸が締めつけられるようになって…。それ以来運動は、

『特にテニスは』出来なくなっただけです」

ハッとした表情で、美優貴は広美に顔を向け、

「そんなに重くはないんです。ただ、今は安静にしていなければならぬだけで…」

と、弁解するように早口で言った。

「えっと…」

うつたえた様子で、広美は、

「あの、ごめんね。知らなかったから…」

と言うと、頭を下げた。

首を横に振り、体を広美の方に乗り出すと、

「気にしてません。ですから、頭を上げてください」

と、美優貴は言う。

「ごめん…」

もう一度謝罪し、広美は顔を上げた。

顔を上げた広美と、身を乗り出していた美優貴の視線がぶつかる。

美優貴が広美の方に身を寄せていたため、2人の顔の距離は、15cmと離れていなかった。

互いに、顔の距離に驚いた様子で目を開いているが、動く気配はない。

日は段々と傾き、2人の顔に影を作り始めている。

噴水広場前の坂道を下る生徒達は、2人の様子に気付く様子もなく、家路についている。

水流は絶え間なく続き、遙か遠くから勧誘の声が小さく届いた。

見つめ合うこと数秒間。

時間が流れていることを思い出したかのように、広美は顔を真正面に向けた。

「…えつと」

言葉を探すように、広美は、落ち着かない動きをしている自分の手元を見つめた。

広美の頬は、夕暮れ時のせいか、ほんのりと赤い。

相変わらず美優貴は、広美との間に片手をついたまま、体を向けていた。

「…もし、よろしければ」

美優貴の言葉に反応し、広美はチラリと、横に座る下級生を見やっ

った。

美優貴は顔を伏せている。

垂れ下がった前髪が、風で揺れる。

美優貴は続けた。

「…練習を見学に行ってもいいでしょうか？」

と、感情を押し殺しているような、小さな声で訊いた。
「えっ？」

驚いた表情で、広美は顔を美優貴に向けた。

「今のところ、入部はできませんが…」

「見に、来てくれるの？」

と、広美は恐る恐るといった調子で訊いた。

ゆつくりと、美優貴は顔を上げる。

美優貴の瞳は、風邪をひいたように潤んでいた。

優美さときこちなさが混じり合う、はにかみがちな微笑。

その微笑みとともに、

「…はい」

と、美優貴は答える。

広美は嬉しそうに、

「大歓迎よ！あなたほどの腕があれば、みんな喜ぶよ！今は激しく動けなくても、えっと、アドバイスでもしてくれれば」

と、弾んだ声で言う。

「あつ、でも…」

美優貴は躊躇するように、

「見ず知らずの私に、口出しされたら、こころよく思われない方もいらつしやるかもしれません。ですから、できれば昨日のような練習の見学をしたいのですけど…」

「昨日の練習って、私が独りで残ってた練習のこと？」

キョトンとした様子で尋ねる広美に対して、

「はい。私も、他の部員の方々に体のことを説明するのは、少し気がひけますし…」

と、美優貴は語尾を小さくして答えた。

合点がいったように広美は頷き、

「…分かった。じゃ、そうしようか」

と、明るく言った。

広美の言葉に相槌をうつようにして、チャイムが鳴り始めた。

校舎のほうから聞こえてくる小さい、単調な音に、広美は慌てた様子で立ち上がる。

「ごめん、私、そろそろ戻らなくちゃ。今日はどうする?」

美優貴はゆっくりとまばたきをして、

「…お邪魔でなければ、見学させていただきたいです」

「分かった。それじゃ、昨日と同じくらいの時間に来てね」

そう、明るい口調で告げて、広美は美優貴に背を向ける。

「あの、すみません」

広美の背中に向かって、美優貴はためらいがちな声をかけた。

「何?」

と、不思議そうに広美は振り返る。

ベンチにちょこんと座った美優貴は、広美の顔を熱っばい瞳で見上げている。

「あの…、お名前を教えてくださいますか?まだ、伺っていないので…」

「あつ」

広美は恥ずかしい思い出を思い出したように、照れた仕草で両手を組み合わせ、視線を伏せた。

「…そうか、まだ、自己紹介してなかったっけ」

と、消え入りそうに小さい声でブツブツと言ってから、

「…えっと、私は、松広美。高校の方の2年」

と、動作が物語る通りの口調で言った。

美優貴は、恥いっただ様子の上級生を見上げ、愛おしそうに微笑む。

美優貴は口を開いた。

「…それでは、松先輩。また、お会いしましょう」

伏せていた顔を上げて、

「う、うん。えっと、それじゃ、またコートで!」

そう口早に告げると、広美は広場の出口へと駆けていった。

軽い音をたて、足音は美優貴から離れていく。

小さくなっていくポニーテイル。

美優貴は背筋を伸ばし、広美の背中を見つめている。

独り残された少女は、小さく呟いた。

水の音にかき消されそうなほど、小さな声で。

「…ご機嫌よう」

「…終わったみてえだな」

なな、高杉、守人の3人は並んでベンチに腰掛け、噴水広場の様子を見下ろしていた。

下の広場から、広美が駆け足で出ていく。

左端に座っていたななは無表情で腰を上げ、

「…それじゃ、もういいですね。高杉先輩」

高杉はななを見上げて、

「おう。見たところ、悪い状況じゃねえらしい。それじゃ、次はテニス部だな」

ななは面倒くさそうに両目を細め、

「…やっぱり、行くんですか？」

と、立ち上がった高杉に訊いた。

「当たり前だ！」

と、高杉は澀刺とした声で答える。

その時、無言で噴水広場を見つめていた守人が、音も無く立ち上がった。

右隣の守人を見て、

「どうした、影山？」

と、高杉は訊く。

真剣な表情の若い執事は、ただ一点を見つめているだけで、高杉の言葉に答える気配はない。

守人の視線の先を、ななは追い、ベンチに座る美優貴にたどり着いた。

噴水広場の美優貴は、相変わらずベンチに腰掛けている。

しかし、先ほどの姿勢とは異なっていた。

美優貴は上半身を折り曲げ、全身を小刻みに震わせていた。

両手は胸に押し当てられているらしく、上半身に隠れている。

「ブラザー？」

高杉は柵に駆け寄り、

「どうしたんだ、ブラザーは…！ありや、ただ事じゃねえ！」

と、大真面目な顔で口早に言うのと、北校舎の方に向かって走り出した。

ななは、美優貴の症状が分かっている様子で、ため息をつきながら高杉の後に、徒歩で続いた。

守人の背中をチラリと見やるなな。

不意に、守人は手すりを左手で掴むと、体を浮かせた。

地面を蹴り、腰を捻り、長い脚が柵の上を通り過ぎる。

オーブンカーのドアを開けずに、車外へ出るような動き。

躊躇する様子や、予備動作は一切ない。

守人は滑らかな動作で柵を越えると、自由落下運動に抵抗せずに、姿を消した。

ななは口を半開きにさせ、守人の行動を制止もせずに見ていた。

守人が姿を消して1、2秒後。

音で我に帰った様子で、ななは柵に近づいた。

下では、守人が姿勢よく立ち上がり、歩きはじめたところだった。

校門へ向かう生徒達の列に、足を止める者はいない。

ななは、信じられない、といった様子で目を細め、

「…嘘でしょ」

とだけ呟き、早歩きで高杉が走り去った道に向かった。

噴水広場に降り立った守人は、美優貴が座るベンチへと向かった。

美優貴は、体の中心を外敵から守るように体を折り曲げている。

呼吸は、入学式の日と同じように荒い。

全身は呼吸に合わせて動き、震えは止まっていなかった。

守人はベンチに座す主の前に進み出ると、騎士のように片膝をついた。

視線を落とし、頭を下げ、

「影山守人、参りました」

苦しげに息を吐き出し、美優貴は震える声で応える。

「…そ、そう、か…」

身震いをして、美優貴はゆっくりと体を起こす。

顔を上げた主を、守人は見上げた。

噴水の頂上を見上げるようにして上げられた美優貴の顔は、風邪をひいた小学生のように赤い。

伏せていた時は髪に隠れていた耳も、真っ赤に染まっている。

苦悶の様子を伝える眉間、細められた潤んだ瞳。

涙に濡れた睫が、太陽光にキラリと輝く。

両手は心臓を握り締めるように、胸に当てられていた。

歯を食いしばり、大きく息をつき、

「も、…守人。この、心ぞ…は、大、き過ぎ…る…！」

と、息も絶え絶えに美優貴は言う。

守人は、じつと、美優貴を見上げたまま、言葉の続きを待っているようだった。

美優貴は続ける。

「…わた、しの！、体には…、収まり、きら…ないっ！マッコウ、ク、ジラツに、移植しろ…！」

守人は視線を下げ、

「…この影山守人、『お嬢様の御心臓は、お嬢様以外の地球上の如何なる生物にも収まることはできない。』と思考する次第にございます」

美優貴は横目で、坂道を見やった。

ちょうど、高杉が坂を勢いよく駆け下り、噴水広場の前を通り過ぎたところだった。

美優貴は、守人の言葉に対して苦しげに微笑み、

「…そう、か。な、らば、せめて、冷静につ、さつ、せろ」

「かしこまりました」

そう答え、守人は立ち上がる。

浅い呼吸を繰り返し、美優貴はゆっくりと瞼を閉じる。

赤らめた顔は斜め上を向き、両手は膝の上の鞆の端を握り締めている。

穏やかな風に、美優貴のオレンジ色の髪が揺れた。

守人は、上を向いた主の顔を見つめると、スッと頭を下げる。

「…失礼致します」

と冷静そのものの声で言うと、守人は体を折り曲げた。

背筋を伸ばし、地面とほぼ水平になるように上半身を曲げる。

守人の顔が、美優貴の左頬に近付く。

ラウ・ロマンス映画のワンシーンのような光景。

守人の背後の噴水は、水を押し上げ続け、桜の木は花びらを舞わせている。

守人は美優貴に口づけをするでもなく、右手を美優貴の耳元に添え、一言だけ呟いた。

「…バウムクーヘン」

その瞬間。

紅潮していた美優貴の顔は、普段の顔色に急激に戻った。

沸き立ち、沸騰していた血液が急激に冷やされた様子で、美優貴はブルリと身震いをした。

守人は体を起こし、再び地面に片膝をついた。

両目をバッチリと見開き、美優貴は汗で額に貼り付いた前髪を整える。

鼓動を確かめるように片手を胸に当て、

「…危なかった」

と、美優貴は息を吐き出した。

「まさか、あれほどの近距離で見つめ合うとは思わなかったから

な。…『ときめき』がヘモグロビンと共に体中を巡り巡って、隅から隅まで行き渡ってしまった」

と、普段の調子を取り戻した様子で言った。
静寂を破るように、

「ブラザー！」

と、大きな声がかかり、美優貴は声の主の方へ顔を向けた。

坂道の方から、好奇の視線を背中に受けた高杉とななが、美優貴達に向かって歩いていった。

ななは隣の高杉に、

「…何で通り過ぎたんですか？」

と、冷めた口調で訊いた。

「つい、駆け下りることに夢中になっちゃった」

と、高杉は大真面目な口ぶりで答えた。

美優貴は髪を軽く整えから、腕を組んだ。

美優貴のベンチに近付き、足を止めるなと高杉。

「なるほどな」

美優貴は現状を察した様子で、目の前の3人を眺め、

「皆の心遣いはありがたい。だが…」

言葉を区切り、不敵に微笑む。

「覗き見とは感心しないな」

美優貴の言葉に、気分を害されたようにななは返した。

「…あんたが、それ言うの？」

第14幕：朝の舞台

美優貴と広美の再会の日の翌日。

朝。

北校舎に限らず、学園内は生徒達の発する倦怠感に満ちていた。澆刺とした挨拶は少なく、気の抜た欠伸混じりの挨拶がそこしこで交わされている。

ガヤガヤとした中を進みながら、紙屋りる香は頬を膨らませた。

「置いてけぼりにするなんて、ひどいよお」

と、本人は怒りを込めているらしい口調で、隣のななに向かって文句を言う。

ななは階段を上る脚を止めずに、

「…だから、謝ってるじゃない」

と、しかめっ面の上に無愛想なことを言った。

「謝ってないよお」

ななは面倒くさそうにため息をついてから、

「ごめん」

数秒間、咎めるようにしてななをじっと見た後に、りる香は二へラと笑った。

「それなら、許す」

と満足げに言って、機嫌が治った様子で鼻歌を歌い始めた。視線だけを横に並ぶりる香に向けて、

「…朝から元気ね」

と、不機嫌かつ冷淡なハスキーウ、オイスでななは言う。スキップでもするように階段を上がりながら、

「うん！朝ご飯、食べてるからかなあ」

と、屈託のない微笑みで、りる香は答える。

「ななは食べなかったの？」

「…食べたわよ」

「パン？ご飯？」

「…シリアル、を」

「を？」

「1箱半」

りる香は、ふうんと言うと、ズレた眼鏡を押し上げ、

「それじゃ、ななには『足りなさすぎる』ねえ」

と、驚いた様子もなく返した。

ななは無言で頷いた。

2階と3階の中間にある踊場に差しかかった所で、

「昨日は、私と愛子先生を置いてけぼりにしてから何かあったの？」

と、りる香は訊いた。

ななは近視のように両目を細めた。

「…別に。何も」

「それならいいやあ」

りる香は安心した様子で言うと、

「美優貴ちゃん達、来てるかなあ」

そう言つて、ななに先立ち、小走りで階段を駆け上がった。

ななは7組の方へと向かうりる香の背中を、大型犬のような欠伸をしながら見送った。

りる香とは対照的に、ノロノロと歩を進める。

マイペースで教室へ向かうななは、1年7組の教室の手前、1年6組の教室の前でゆっくりと足を止めた。

右目が鬱陶しそうに細められる。

真正面を向いた、ななの視線の先。

1年7組の扉の前には人だかりができていた。

群れをなしている生徒達の手には学校指定の鞆がぶら下がり、中には肩からスポーツバッグをかけた生徒も見られる。

数十人の人だかりの一番後ろでは、背伸びをしたりる香が、首を伸ばしてピョンピョンと跳ねていた。

足取りを一段と重くして、ななは自分のクラスへと近付いた。
ななに気がついた様子で、りる香は振り返った。

「あつ、なな」

不自然なほど静まり返った、人だかりの構成員達は、口を半開きにさせて教室の中に視線を集中させている。

りる香の傍で、ななは立ち止まった。

「何かあったのかなあ」

ななは、さあと答えてから、

「でも『嫌な予感』はするわ」

と付け加えて、人混みをかき分けた。

ぼう然と立ち並ぶ背中の間を縫うようにして進む。

ななが最前列にたどり着いた時、教室の中に席に着いている者はいなかった。

廊下側の壁の、正面の壁に並んだ窓ガラス。

開かれた窓。

その窓際の一つに、オレンジ色の長い髪をした女子生徒の背中があった。

頬杖をついているらしく、窓枠に上半身をもたれかけている。

予感が的中したのか、ななは意外そうな顔はしていない。

「おはようございます。鈴森様」

守人の声に、ななは顔を向ける。

教室の内側、なな達が群がっている戸のすぐ横に守人が控えていた。

礼儀作法の手本のような美しい所作で頭を下げる守人に向かって、

「おはよう」

と、ななは返した。

「影山君、あたしは隼瀬さんじゃないんだし、普通に挨拶してくれない？」

困ったように目を伏せ、

「申し訳ございません。ワタクシ私にとっては、現在の対応が『普通』で

「ごきますので、如何ともし難いのでございます。ご容赦くださいませ」

と、申し訳なさそうに言う守人。

じつと、守人を見上げ、

「それじゃ、『様』は止めて。あと、せめて『です・ます』で。

少なくとも、学校にいる時はそうした方がいいわ」

守人は両目を軽く瞑ってから、

「かしこまりました」

「…まあ、いいわ。それで、この状況はどういうワケなの？隼瀬さんが、クラスメイト立ち入り禁止にでもしたの？」

ゆつくりと首を振る黒髪の若執事。

「いえ。我が主は、ただ『窓辺で物思いに耽って』おられるだけです。私も何の命も受けておりません」

ななは、視線を背後の人混みに向ける。

「何で入らないのよ？」

人だかりが囁き合うようにざわつき、やがて、ななの真横を占めていた大柄な男子が野太い声で、

「いや、なんか入りづらい『オーラ』が…」

と、歯切れの悪い口調で言った。

他の生徒も同じ意見らしく、頷いたり、小声で囁きあったりしている。

「毎日、『オーラ』は凄いけどな」

「大物って言うか…」

「いや、今日の感じは違い過ぎるだろ」

「お姫様みたいだね」

「分かる」

胡散臭さそうに目を細め、口元を歪ませたなな。

「…めんどくせーわね」

吐き捨てるように言っと、ななは教室に足を踏み入れた。

慌てた様子のクラスメイトの塊を無視して、ななは窓辺の美優貴

に歩み寄る。

手近な机の上に重箱を置いて、ななは美優貴の横に並んだ。朝日に照らし出され、髪は金色に近い色合いになっていた。夢見るように微睡んだ瞳。

薔薇色に染まった頬。

断続的な甘い溜め息。

眠れぬ夜に、淡い月明かりに思いをはせているかのような姿。

ななに気付いた様子は無い。

ななは自由になった右手を上げ、美優貴の後頭部に向かって、しなやかに振り抜いた。

ハリセンと聞き間違えるほどに威勢のいい音が、教室と中庭に響く。

教室前の人だかりは再び呆気にとられた顔になり、中庭では南校舎に向かう生徒達が音の出どころを探すように頭を巡らし始めた。

守人は遠い目をして、凍り付いたように動かなくなった。

ガクンと頭を落とした美優貴。

ゆっくりと、象が起き上がるようにして頭を起こし、美優貴はななに顔を向けた。

そこで、初めてななの存在に気がついた様子で、

「…ああ、ななか。おはよう。今日も世界は美しいな」

と、美優貴は夢を見ているような微笑みで言う。

ななは鼻の頭を指先でかき、

「…もう一回、前向いてくれない？」

美優貴はトロンとした表情で首を傾げ、真正面に顔を向ける。

その瞬間、美優貴の後頭部を再びななの平手打ちが襲った。繰り返される周りの人々の反応。

ムクリと頭を起こし、美優貴はななに顔を向ける。

相変わらずの表情で、

「なな、どうした？朝から嫌なことでもあったのか？太陽は暖かく輝き、小鳥は美しい旋律を奏で、春風は慈愛をもって枝葉を揺ら

し、花々は我が身を誇るように、気高く咲いているというのに?」

と、片手を優雅に踊らせ、美優貴は歌うような口調で言う。

美優貴の言葉に、ななは顔をしかめた。

「なな、どうした? せっかくの顔形が台無しだ。そんな無粋な表情はよくない。不機嫌は美德とは言えないぞ?」

美優貴の言葉を見、ななは入り口の手前で硬直している守人に近付いた。

ななの様子を眺め、美優貴はのんびりと首を傾げている。

太陽光に映える長髪。

朝露に濡れたような瞳。

優しく結ばれた唇。

顔を向けた美優貴に対して、廊下のクラスメイト達は感嘆の溜め息で答えた。

ななは、背の高い守人を見上げ、

「影山君?」

数秒間の後、守人は意識を取り戻した。

「影山君?」

ななの存在に気がつくと、守人は頭を下げた。

「お呼びでしょうか?」

「隼瀬さんのことなんだけど。彼女、どうにかならない?」

そう言っ、ななは目線で美優貴を示す。

守人も自分の主に視線を向けた。

美優貴は片手を窓枠について、廊下側に体を向けている。

斜め下を向き、再び溜め息をつき始めた。

守人は言った。

「…今のお嬢様のお身体には、『ときめき』と『スウィート・メモリー』が満ち満ちておられます」

無愛想にななは答えた。

「へえ」

「お嬢様は仰いました。」

「今の私は糖度計を破壊できるほどに、甘い」

…と」

再び、へえと相槌を打って、

「…大変ね、身体も頭も。とにかく、彼女どうにかならない？授業も始まるしさ」

と、なな。

守人は恭しく頭を下げた。

「かしこまりました」

守人はキビキビとした無駄の無い足取りで、窓辺の主に近付いた。後ろからななもついていく。

ゆつくりと、美優貴は顔を上げた。

「…ああ、守人か。どうした？」

「失礼致します」

そう言って美優貴に一礼すると、守人は美優貴の耳元に顔を寄せた。

そして、一言。

「…バウムクーヘン」

突如、美優貴の微睡んだ瞳が、こぼれ落ちんばかりに見開かれた。唇がブルブルと震える。

両手を重ね、胸に押し付け、背中を丸める。

ガクンガクンと、数回身震いしたかと思うと、上体を仰け反らせるほど、急激に体を起こした。

長髪が、身を躍らせた鯨の様にダイナミックに舞い上がる。

深く、ビブラート気味に吐き出された吐息。

硬直。

ロマンス映画から一転、ホラー映画に変貌したワンシーンに、観客は息を飲んだ。

やがて、美優貴はゆつくりと片手を額に当てた。

「…危なかった」

と、溜め息と共に言葉を吐き出した美優貴。

ゆっくりと顔を下げ、美優貴は守人とななに視線を送る。

美優貴の表情は、普段通りのものだった。

「…物思いに耽り過ぎた。私の経験からすると、もう少しで大天使が見えるところだった」

と、真剣な口振りと表情で美優貴は言う。

ななは鼻の頭をかき、呟いた。

「…本当に大変ね。頭の中」

「何か言ったか？」

「何も」

「そうか」

美優貴は、ななの背後に視線をやった。

入り口では、数を増した人混みが道を塞いでいた。

呆気にとられた顔で教室を覗いている。

美優貴は首を傾げ、

「どうした、入らないのか？ホームルームが始まってしまっぞ」

と、人だかりに向かって、不思議そうに声をかけた。

1年7組の生徒達は、思い思いに困った顔を見合わせると、やがて、恐る恐るといった様子で教室に入り始めた。

ななはクラスメイト達の様子を確認してから、真正面に顔を戻した。

「…気付いてなかったの？」

美優貴は片手を腰に当て、

「何のことだ？」

と、不思議そうな口調を変えずに言う。

ななは口を開きかけたが、思い直した様子で、

「…何でもねーわよ」

ななの後ろから、ようやくといった様子でりる香が教室に入ってきた。

「美優貴ちゃん、影山君、おはよお！」

と、ニコニコしながら言うりる香。

美優貴は微笑んで、

「おはよう、りる香」

守人は一礼と合わせ、

「おはようございます」

「ねえねえ、何かあったの？私、後ろにいたから何も見えなかったんだあ」

「ん？」

美優貴は首を捻り、

「守人、何かあったのか？」

守人は冷静な口調で、

「いえ、何事も」

「そうか」

ななは、美優貴達の様子をチラチラとうかがっているクラスメイト達を眺めながら、

「…バウムクーヘンって何なの？」

瞬間。

表情を硬くさせた美優貴と守人。

教室は、少しずつざわつき始めていた。

美優貴は、何かを思い出したように、ああと言ってから、

「りる香、昨日はすまなかったな。置き去りにしてしまって」

と、りる香に話を振った。

ななは、諦めたように口元を歪める。

りる香はニコツと笑うと、

「それなら、許すよう」

「よかった」

と、美優貴は安心したような微笑みで答えた。

「昨日は、私と愛子先生を置いてけぼりにしてから何かあったの？」

と、りる香はななにしたものと同じ質問をする。

りる香の問いかけに、美優貴はフツと笑うと、りる香達に背中を

向けた。

流れるようにしなやかな髪が、レースのカーテンのように舞う。

「…何かあったところの話ではない」

美優貴の思い詰めた、静かな声。

「…そう、それはまさに蜜月。甘く、愛しい止まった時間！決して破れぬ不可侵の空間！これを蜜月と言わずに何と言う！」

最初は溜め息混じりに、後半は声を張り上げ、両手を上空に捧げる。

「今の私に愛は恋い焦がれ、恋は愛を囁く！ああ、この気持ちが伝わるだろうか？この、狂いだしそうなほどに体中を駆け巡る気持ち？！あの方を思い出すだけで、頭が、胸が、指先が！痺れるように麻痺していく！」

沈黙。

教室の中の視線は、美優貴に注がれている。

ポカンとした顔が並ぶなか、ななと守人だけは異なる感情を顔に表していた。

守人は感動の表情。

ななは呆れの無表情。

周りの反応を気にとめていない様子の美優貴は、ますますオーバーなりアクションで、オペラ座の舞台上に立っているかのように語り続ける。

「遙か昔の世界から、遙か離れた世界でも、繰り返されたは恋と愛。人が要らぬと言うならば、繰り返されるはずは無い！神が要らぬと言うならば、恋の神アモルが生まれるはずが無い！ならば私も従おう、そして誓いを口にしよう！先人達の過ごした時を！甘美な茨の道のりを！進み行くことを今！ここで！！」

片手を心臓に、片手を太陽に伸ばし、潤んだ瞳を狂おしそうに細める。

「…ああ」

長台詞を締めくくるように、美優貴は情感溢れる口調で囁く。

「…これ以上、あなた様に手を伸ばすと、蠟ろうで作られた私の指先が、溶け出してしまいます…」

1年7組の窓から手を伸ばした舞台女優に、教室の観衆は、中庭のギャラリーは、そして向かい合った南校舎の見物客はハトの群れが豆大砲を食った顔を向けている。

静寂。

鉄仮面を思わせる表情で、右手の素振りを開始したなの横で、

「そっかぁ！」

と、突き抜けた声をあげたりる香。

ニコニコと微笑む少女に注目が集まる。

「美優貴ちゃん、演劇部に入部ハイしたんだねえ」

と、りる香は邪気の無い口調で訊いた。

どこかの小鳥が、調子つ外れにさえずっている。

肩透かしをくらったように複雑な顔をしているクラスメイトを尻

目に、

「朝から練習なんて、気合い入ってるねえ」

と、りる香は呑気に続けた。

「夜のコートで2人っきりの居残り練習？」

「おう。ブラザーがコーチみてえに教えてた。松もブラザーも生き生きしてたぜ」

「昨日？」

「昨日」

「なるほどなるほど。そんなことがあったんだ」

「おう。そんなことがあったんだ」

軽い調子の有喜の声と、歯切れのいい高杉の声。

南校舎の4階、2年3組の前の廊下に2人はいた。

開かれた窓から、有喜は鋭角線上に位置する1年7組の様子を見下ろしている。

金色の寝癖頭をボリボリとかき、くわえ鉛筆をゆらゆらと揺らし、
「面白かっただろうね。見たかったな。妬ける妬ける」

そう言つて、隣の高杉を有喜はチラツと見やる。

短髪、緩んだネクタイ。

高杉は窓に背を向けた状態で寄りかかり、何の目的もなさそうに
3組の教室を眺めている。

有喜は再び1年7組に視線を戻した。

教室の窓際では、ななが美優貴の後ろで右手を振りかぶったところだった。

スパアン。

「高杉ちゃん高杉ちゃん。今日も『デート』はあると思う？」

高杉の返事はない。

有喜の視線の先では、頭を押さえた美優貴が、ななに向かって何
事かわめいている。

「高杉ちゃん？」

疑問文と共に有喜は高杉に顔を向ける。

隣の高杉は、幕末を生きた土佐の志士のような面構えで、教室に
視線を注いでいた。

ヒョイと高杉の視線の先を追う有喜。

3組の開かれた扉。

教室の前方では、部活の朝練が終わった直後の女子が3、4人談
笑していた。

笑い声をあげて、火照った身体を冷ますようにYシャツの胸元を
ゆるませている。

下敷きを団扇代わりに使い、髪をヘアピンなどで留めたりしてい
る無防備な姿。

健康的な風景。

それを見守る高杉。

「なるほどなるほど」

と、理解した様子の有喜。

楽しそうにニヤリと笑い、
「油断も隙もないね。さすが『フィールドの出版禁止用語』」

第15幕：2人だけのコート

「広美」

「何？」

「何かいいことあった？」

「へ？何で？」

放課後。

テニスコートに近い水飲み場に広美と麻実はいた。

2人共、上は白い半袖の体操着、下は青いジャージ姿だった。

麻実は蛇口からの水流を手で受け止め、バシャバシャと顔の汗を流している。

広美は、大判のタオルで汗を拭いながら、麻実の言葉を待っているようだ。

コートからはボールの弾む音と、プレイヤーへの声援が絶え間なく続いている。

水を止め、肩にかけたタオルで麻実は水滴を拭き取った。

再び、広美は訊いた。

「何で？」

じれったそうに訊く広美を、麻実はジツ見つめる。

顔半分をタオルで覆った麻実は、くぐもった声で、

「…今日は、随分と機嫌がいいじゃない。それに、動きの調子もいい」

麻実の言葉に、広美はニコツと笑う。

「そうかな？」

「そうだよ」

広美は、活きのいい魚のように目を泳がせて、

「えっと、ほら、あれだよ。私、今朝の星座占い1位だったし、ゆうべはタロットも絶好調だったし」

と、スラスラと言う。

「やけに饒舌じゃない」

と、広美ににじりよる麻実。

広美は後退りながら、

「気のせいじゃない？」

と、顔を引きつらせて、弱々しく言う。

広美の言葉に、麻実はバツサリと、

「気のせいじゃない」

引きつった笑みを麻実に向けていた広美は、限界と感じたのか、急に180度回頭した。

そんな広美の行動も予想していたように、麻実は浮き上がった広美のポニーテールを掴む。

首が斜め上で固定された広美。

全身の動きを停止したように、ピクリとも動かない。

引きつり、弱々しく笑う広美。

麻実はポニーテールをグイグイと引き寄せる。

「な・に・が・あつ・た？」

真上を向いた広美の耳元に顔を寄せ、麻実は低い声で、

「吐・け」

広美は表情通りの弱々しい声で答えた。

「…はい」

ボールの音。

走る足音。

ラケットの風切り音。

激しい呼吸。

主審の声。

女子テニス部の使用するコートでは、上級生の試合が行われていた。

真剣そのものの表情でコートを走り回るプレイヤー。

その一挙手一投足を、食い入るように見つめるフェンスの外の部員達。

ジャージ姿の部員達の間には、『エンブスポーツ』と書かれた腕章をつけた制服姿の生徒も2、3人見受けられた。

記者達は各々カメラを携え、シャッターを切っている。

そんな風景を眺めながら、広美と麻実の水飲み場で話していた。

「ふうん。年下のコーチね」

と、広美の話を聞き終わった麻実は考え深げに言った。

「うん」

と、広美は蛇口から落ちる水に片手を濡らしながら答えた。

キョロキョロと周囲を見回し、

「誰にも言わないでね。内緒だからね」

と、広美は小声で口早に言う。

「分かったから」

と、腕組みをした麻実は諭すように言う。

「……しかし、たった1日で他人のフォームを良くするとはただ者じゃないね。プロのコーチじゃあるまいし」

と、首を捻る麻実。

「うん」

と、勢い込んで相槌を打つ広美。

「私のクセもすぐに見つけたし、教え方も上手いし、フォームも教科書みたいに綺麗なの！びっくりしちゃった」

「ふうん。何て名前？」

麻実の問いかけに、開きかけた口を慌てた様子で閉じる広美。

麻実は、全てを察した様子で両の目を細めた。

「秘密か」

口を真一文字に結んだまま、コクンと頷く広美。

整った顔立ちを固くして、広美は麻実を見上げる。

どこかのコートのゲームが終わったらしく、黄色い声の歓声と短い拍手が起こった。

麻実は肩をすくめた。

「…まあいいや。深くは訊かないよ」

そう言つて、麻実は蛇口の水を止めた。

濡れた広美の右手、その指先から滴が滴り落ちる。

表情を明るくさせた広美の肩を、麻実はポンポンと叩き、

「しかし、スキヤンダルだけは避けておくれよ、広美君。君は我が部のエースなんだからね」

と、重々しげに言う。

目をパチクリとさせて、

「スキヤンダル？」

と、麻実の言葉を繰り返す広美。

麻実はウンウンと頷き、

「大会も近いんだから、妙なこと書かれたら嫌でしょ？『エンスポ』の方々はスポーツとゴシップが大好きなんだから」

と、親指でコートの方を示す。

ポカンと口を半開きにさせる広美に、麻実は続けて口を開く。

「ただでさえ、君は目立つんだからね。プレーも見た目も。挙げ句の果てに、『女子テニス部H・Mさん、放課後の熱愛デートinコート！』なんて書かれた日には…」

「ちよつと！」

と、顔をアタフタさせた広美。

「そんなことあるワケないじゃない！相手は女の子だよ?!」
数秒の間。

ほほう、と言つて、麻実は意地悪く微笑んだ。

「…コーチは女子か」

「あ」

しまった、という言葉が体現したような表情になる広美。

麻実はニヤニヤ笑いをやめる様子はない。

広美は急激に顔を赤くさせると、指先の水しぶきを麻実の顔面に向かって勢い良く飛ばした。

時計の針は7時32分を指していた。

薄暗いの中、劇場の舞台のように照らされたコートの中。

ラケットとボールが生み出す小気味のいい音。

ボールがフェンスにぶつかる金属音。

コートには、2人の人物の他に人影はない。

1人はジャージー姿の広美。

もう1人は、グレーの制服姿の美優貴だった。

金網に勢い良くぶつかり、コロコロと転がるボール。

フォロースルーの構えを解いて、広美はラケットをクルクルと回す。

「どうかな？」

広美はコートの横に立った美優貴に顔を向けた。

美優貴は転がったボールの行方を見つめている。

一面に広がった黄色い海の中を、速度の落ちたボールが進む。

やがて、ボールはビリヤードのようにぶつかり、止まった。

「そうですね……」

思案するように美優貴は髪を耳にかけると、広美に視線を移した。

「まだ、トスが安定していませんね。今のままでは、上げる高さでサーブの種類が分かってしまいます。もう少し、トスに注意してみましょう」

広美は顔を曇らせ、

「そっか。高すぎないように、とは思ってるんだけどなあ」

と、肩を回しながら、唸るように言った。

美優貴は穏やかに微笑み、

「少し休憩しましょうか」

と、軽く首を傾げ、表情通りの口調で言った。

考えを切り替えるように頭を回し、

「そうだね。そうしようか」

広美は額にうつすらと浮かんだ汗をリストバンドで拭い、

「身体は大丈夫？辛くない？」

と、不安げに訊く。

美優貴はフフフと楽しそうに笑うと、

「平気です。そんなに心配なさらないでください」

そう言っ、一歩一歩楽しむようにして、荷物が置かれているベンチへと向かった。

広美も美優貴の横に並ぶ。

青いベンチの上には、美優貴の学生鞆。

ベンチの横には、広美のスポーツバッグとラケットバッグ、学生鞆が置かれている。

鞆を膝の上に置き、美優貴は両膝を揃えてベンチに腰掛けた。

広美が美優貴の隣に座り、スポーツバッグの中をあさりだすと、

美優貴はさり気ない動作で鞆の留め具を外した。

広美はその事に気付いた様子は無い。

美優貴は、遠慮がちな様子で声をかけた。

「…あの」

片手にペットボトルを手にした広美は、

「何？」

美優貴は自分の足元を見つめていた。

爪先をグリグリと地面に押し付けている。

意を決した面持ちで、美優貴は口を開いた。

「あの、ご迷惑じゃないですか？私のような、部活に關係ない人間が口出しするのは…」

美優貴の声は堅かった。

広美は驚いたように目を丸くすると、ペットボトルのキャップを捻る。

「迷惑なんかじゃないよ」

美優貴は顔を上げた。

ハッとした顔を広美に向ける。

照れたように微笑んだ広美は、真正面に顔を向けていた。

「私って、人見知りなの。でも、なんか気になることには、それが当てはまらないんだよね」

「気になること？」

「うん」

「今回は、美優貴ちゃんと美優貴ちゃんのテニスの腕かな？」

と美優貴に答え、広美は恥じらいを隠すようにして、ペットボトルを傾ける。

美優貴は、ペットボトルを飲み干す広美の横顔を熱っぽい視線で見つめていた。

広美は、美優貴の方に顔を向けた。

「私は迷惑じゃない。だから、安心して私のコーチを続けてください」

潤んだ瞳で広美を見つめる美優貴に、広美は屈託のない笑顔を見せ、

「あんな出会い方したんじゃない方がおかしいでしょう？」

瞬間。

美優貴は、ハッとしたように目を見開いた。

薄く開かれた唇。

短く、強く、空気を吸い込む。

両手が固く握られる。

すぐさま顔を背け、俯く。

その横顔は赤く染まっていた。

美優貴の行動に、広美は、

「どうかした？」

と、心配そうに訊いた。

俯いた頭をフルフルと、小さく振って、

「…いえ、何も…」

と、消え入りそうな声答える。

「そう？」

それでも、広美は不安げな顔をしている。

美優貴は両手を胸元に当てる。

まぶたを閉じる。

鼓動を抑えるように息を吐き出す。

唇が合わさり、力強く両目を開いた。

スツと頭を起こし、体ごと広美の方を向いた。

「大丈夫で…」

軽い遠心力。

その力に合わせて、美優貴は右足を少し浮かせた。

膝から、鞆が浮くようにして放り出される。

革の鞆が落ちる音。

金具の外れた鞆が開かれる。

鞆の中身が、おみくじの棒の様にはみ出した。

文庫本が一冊、煙草の箱より二回りほど大きな箱が一箱、特に勢

い良く飛び出した。

「すいません！」

美優貴は慌てた様子でかがみこんだ。

空のペットボトルを指に挟み、広美は腰を上げる。

シェイクスピアの『お気に召すまま』の文庫本を拾い、紙の箱に

手を伸ばす。

「あれ？」

疑問符の声を漏らし、広美は小箱を手にとった。

黄色い紙の箱。

裏面には英語がびっしりと書かれている。

広美は箱を裏返す。

表には一人の人物が描かれていた。

ローブのようにゆったりとした服を身にまとい、天に向かって片

手を伸ばした男性。

男性の前にテーブルがあり、杯や大型のコインなどが置かれていた。

絵の上部にはローマ数字の1。

その数字に対応するように、下部にはアルファベットが並んでいた。

「ザ・マジシャン…」

「あつ」

美優貴の声に、タロットカードが入った箱を手にした広美は、

「美優貴ちゃん、タロットやるの？」

と、顔を向けた。

「…まだ、やったことは無いんです」

美優貴は鞆を抱きかかえ、上目遣いで、

「…興味があつて、先週、買ったんです。でも、やり方がよく分からなくて…」

と、気恥ずかしそうに答えた。

広美は箱を見やり、美優貴を見やった。

そして、にっこりと笑うと、

「それなら、私が教えるよ！」

「やり方、分かるんですか？」

「うんっ！」

広美は跳ねるようにして立ち上がる。

ポニーテールが浮き、肩甲骨の辺りを打つ。

「私、占い大好きなんだ！」

照明を背に、楽しそうな顔を美優貴に向ける。

美優貴はしゃがんだまま、強く、鞆の端を握り締めた。

第16幕：タロット占い

「一言でタロット占いって言ってもね、いろいろあるんだ」と言いながら、広美はハンカチをベンチの上に広げた。

「…はい」

真上にあるライトの光を受けて、ハンカチの上には広美の影が形作られている。

静寂の夜の闇。

コートに散らばったボールが、それぞれ黒く濃い影を伴っている。白と黒の犬がプリントされたハンカチの皺を伸ばすようにして、広美は綺麗に揃えた指先を滑らせる。

「それにね、カードの持つ意味もいくつかあるの。そういうトコは花言葉と似てるかもね」

美優貴は小首を傾げ、

「花言葉、ですか？」

広美は顔を上げずに、元氣良く、

「そう！」

ベンチを跨ぐようにして広美は座っている。

美優貴は広美のほうに向かって体を捻り、ベンチに腰掛けていた。「私はね、自分に都合がいいように解釈してるんだ。ほら、朝のテレビの占いとかも自分にいい結果のチャンネル探したりするでしょ？それとおんなじ」

美優貴は分かったのか分からないのか、曖昧な表情をして、

「…なるほど」

「あ、開けていい？」

と、広美はタロットの箱に手を伸ばして訊く。

「はい。一度開けていますので」

箱からカードを取り出し、サッと目を通す。

「…うん。やっぱり私が使ってるのと同じだ。箱が一緒だから、

多分そうだとは思ってたけど」

と、広美は独り言のように言う。

「小アルカナは…、知らないな。よく分かんないし。大アルカナだけで。えっと、スプレッドは…。ホロスコープは難しいか。ワンオラクルじゃ簡単すぎる…。1枚じゃなあ…」

真剣な顔つきでブツブツと呟き、作業する広美。

広美の姿を、美優貴は幸せそうな、穏やかな表情で見つめていた。広美は決心した様子で頷き、

「…うん。スリーカードにしよう。いいかな？」

そう言って、美優貴の顔を見上げた。

「はい。先輩におまかせします」

「分かった。それと、占いて、カードの持つてる意味とか自分で知ってないといけないんだ。だから、今日は手順って言うか、流れだけ説明するね」

「分かりました」

「では、まず…」

そう言って、広美は声の調子を整えるように、軽く咳払いをした。カードを持ったまま、両手を合わせ、目を瞑る。

心を落ち着かせるように、はっきりした口調で、ゆっくりと、

「あなたの占いたいことを決めましょう。あなたが知りたいことは何ですか？」

美優貴は、目の前に陣取った占い師の顔を、キョトンとした顔で見つめた。

間。

3秒後には、美優貴は顔を逸らし、耐えきれなくなった様子で吹き出していた。

広美はムツとした顔で片目を薄く開けた。

「…こっちは真剣なんだよ？」

と、たしなめるような口振りで言う。

口元に片手を添え、声を立てずに笑う美優貴。

「…す、すいません…」

口元から胸元へと手を移し、細く息を吐き出す。
小さく頷いて、広美に顔を向ける。

「はい。もう大丈夫です」

広美はジロツと美優貴を見てから、

「…それなら、よろしい」

再び両目を閉じ、

「それではもう一度。あなたが知りたいことは何ですか？」
と、厳かに質問を繰り返した。

「そうですね…」

悪戯っぽく目を細め、

「…それでは、恋愛について占って頂けますか？」
と、相手の反応を試すように言った。

広美は相変わらずの様子。

「…ふむ。分かりました。それでは占いましょう」

そう言うのと、広美はパツチリと両目を開いた。

ニツと笑い、

「雰囲気作り終了っ。それじゃ、始めよっか」

と、一気に砕けた口調になった。

「雰囲気作り？」

と、目を瞬かせた美優貴。

「うん！占いつて、雰囲気が重要じゃない？」

と、カードをハンカチの上に広げながら広美は訊いた。

「雰囲気、ですか？」

「そう！あ、でも、カードをシャッフルする前に占う事を決めておくのは重要だよ」

美優貴はコクリと頷き、

「なるほど」

「さて！」

広美は、パンツと両手を合わせる。

ハンカチの上には、ゲームがやりにくいカルタのようにカードが並べられていた。

所々折り重なった22枚のカード。

裏を向いたカードの上に、広美が濃い影を落としている。

「これから、カードを混ぜるんだけど…。トランプみたいなシャッフルはしないんだ。こんな感じに…」

そう言って、広美はカード群の上に両手を伸ばす。

空中をかき混ぜるように、円を描くようにグルグルと手を動かす。

「…混ぜるんだ。それで、その時には占うことを頭に置いておかなくちゃ駄目なの」

「念じるように、ですか？」

「そう。それで、もう大丈夫かなって思ったら、カードをまとめるの。えっと…。ここまで、大丈夫かな？」

と、少し不安げに美優貴を見やる。

安心させるように美優貴は頷き、

「分かりました」

「よかった。それじゃ、混ぜるよ」

安心した様子で広美は微笑み、手を伸ばす。

それから何事かに気付いた顔つきで、

「恋愛って、美優貴ちゃん、気になる人でもいるの？」

と、軽く訊ねる。

美優貴は、広美の視線から目を逸らさずに、

「はい」

と、真剣な眼差しで答えた。

広美は首を傾げて、

「同級生？」

美優貴はゆっくりと首を振る。

「いいえ。上級生です」

広美はニッコリと笑い、

「へえ。年上か…」

ウンウンと頷くと、カードの群に視線を落とし、両手をカードの上に置いた。

「美優貴ちゃんみたいに綺麗で優しい娘に、気になるって言われるなんて、その人は幸せ者だな」

広美はカードをかき混ぜ始めた。

美優貴は両手を祈るように組み合わせ、胸に押し付けている。

広美の言葉を噛み締めるかのように両目を閉じ、狂おしそうに顔を歪めていた。

広美は顔を上げずに、真面目な顔でカードをかき混ぜている。

静かに音を立てて、混ぜられていくカード。

秘めた思いに身を焦がされるヒロインを照らし出すように、強い光が美優貴の顔に降り注がれている。

1分後、広美が口を開いた。

「…うん。もういいかな」

頷き、カードをまとめ始める。

ハッとした顔で目を見開き、

「はいっ！」

と、美優貴は驚いたような声を出す。

「どうかしたの？」

と、ヒョイと顔を上げた広美。

細かく首を横に振り、

「いえ！何も」

「それならいいけど…。じゃ、続けるね」

「はい」

手際よくカードをかき集めながら、

「こんな風にカードを山にして…。準備は完了。後は占うだけ！」

仕上げに束でベンチをトントンと叩き、歪な面を揃える。

整えられたカードの山。

山を自身の手前にソツと置き、

「タロットには、いくつか占い方があって…。カードの並べ方によって占い方が違うんだ。この並べる形の事を『スプレッド』って言うの」

「『スプレッド』？」

「そう。それで、今日は3枚のカードを使ったスプレッドを教えます」

と、指を3本立てて広美は言う。

「スリーカードってやり方ね。スリーカードリーディングとか、スリーカードスプレッドとか言う事もあるけど、意味は同じ」

広美の指先をジッと見つめて、美優貴は、

「3枚ですか…」

「そう。やり方と解釈は簡単なんだ」

広美は山に手を伸ばし、1枚カードを手にして、ハンカチの上に置いた。

。

ハンカチの上部、広美から見て左側に置かれたカード。

広美は山からカードを取り、1枚目の隣に置く。

3枚目のカードは、右側に置かれた。

ハンカチの中央を横切るようにして並んだ3枚のカード。

「美優貴ちゃんから見て…。右のカード。コレが過去を意味してるの」

そう言っつて、広美はコートに最も近い場所に置かれたカードを指さす。

青と黒のラインが交差したデザインのカードの裏面。

「それで、真ん中のカードが現在の状況。左のが未来。そんな時間の流れになってるんだ」

と、次々と指差しながら、解説する広美。

目で追い、カードを指差しながら、

「過去、現在、未来、ですね？」

と、復唱する美優貴。

チラリと視線を上げた美優貴を見返して、広美はニツと笑う。

「そう！これで、後はカードを表にするだけ」

過去のカードに手を伸ばし、広美は集中するように息を細く吐き出す。

強く、まぶたを閉じ、開く。

「…いくよ」

美優貴はコックリと頷く。

「…はい」

カードがめくられる。

過去、現在、未来。

過去。

2頭のスフィックスに牽かれた車に乗った、武装した男。

『戦車』（ザ・チャリオッツ）の逆位置。

現在。

空に位置し、幻の獣達に囲まれた車輪。

『運命の輪』（ザ・ホイール・オブ・フォーチュン）の正位置。

未来。

絵の左右に立った、生まれたままの姿をした一組の男女。

『恋人』（ザ・ラウ・アーズ）の正位置。

「うーん…」

腕組みをして、広美は唸る。

カードを見比べるように視線を移す広美を、美優貴は真剣な眼差
しで見つめる。

「えーっとね…」

ゆっくりと上半身を前後させて、広美は五指の指先をソツと合
せる。

「これは、あくまでも私の解釈なんだけどね…」

考え、慎重に言葉を選んでいうような、たどたどしい口調。
指先を見つめ、言葉が続けた。

「その、美優貴ちゃんは、前の恋は、あの、えっと…」

「成就はしませんでした」

助け船を出すようにして、美優貴はソツと口を開いた。

申し訳なさそうな顔で、広美は上目遣いで美優貴を見る。

美優貴は穏やかな微笑みを絶やさずに、

「当たってます。…続けて下さい」

と、促す。

「…うん。それじゃ、続けるね」

ホツとしたような、気まずそうな複雑な顔をする広美。

「今は、気になってる人といい出会いをしたみたい、だね。正に運命的な出会い。それが、いい方向に動いてるみたい」

美優貴は、左手をギュツと握り締める。

「正に、運命的…」

と、甘い、吐息を漏らす。

熱っぽい視線。

広美は視線に気が付かない。

「そう。それで、最終的には…」

と、広美は『恋人』のカードを指差す。

「いい結果になるっ！」

元気な声で言い、広美は顔を上げた。

自信なさげな表情で、弱気な一言を付け足した。

「…と、思う」

どこか遠い目をした美優貴。

ぼうつとしたような表情。

ほのかに頬を染め、何かに憑かれたように、フラツとした動作で腰を上げた。

光に差され、明るい色に変わったオレンジの髪。

輝いた髪が、揺れる。

1歩、2歩、3歩と歩を進める。

スロー再生の映画のように、ゆっくりと空を見上げる。

戸惑った様子で、

「…美優貴、ちゃん？」

と、広美はためらいがちな声をかける。

美優貴は、ポツリと、

「…そう、ですか」

体の両脇にだらりと垂れ下がった腕。

ゆつくりと、両手が上がる。

掌をこめかみに当てる。

形の美しい指が、オレンジ色の髪に埋もれる。

夕陽に染まる海を渡る船団のように、後頭部に向かって指を滑らせる。

指が組まれ、誰かの耳元に息を吹きかけるように、息を吐き出す。

「…美優貴、ちゃん？」

広美の言葉に、美優貴はくるりと身を翻す。

振り返ると同時に指を離し、今度は体の後ろで指を組む。

「…先輩。次はカードの意味も教えて下さいませんか？」

微笑んだ美優貴の背後で髪が揺れる。

目を丸くした広美。

瞳と同じ形に口を広げている。

鳩が豆鉄砲を食った顔。

美優貴は小首を傾げる。

「先輩？」

「いやあ…」

頬を指先でかきながら、

「綺麗だなあ、と思って」

瞬間、不意をつかれたように目を開いた美優貴。

穏やかな表情で、美優貴は応えた。

「ありがとうございます。…でも」

1歩、足を踏み出す。

「先輩にはかないませんわ」

「…順調みてえだな」

「うんうん。そうだね」

光に満たされたテニスコートの外周、黒く暗い植え込みの中。
ちやうど美優貴達の座るベンチに向かい合うようにして、高杉と有喜は身を潜めていた。

高杉達は頭だけを植え込みからひょっこりと突き出し、言葉短に小声で囁きあっている。

「…このまま、何事も無けりゃいいがな」

「うん…。どうかなどうかな？」

高杉はゆっくりと、首を有喜に向ける。

2人の顔の距離は50cmも離れていなかった。

高杉はわずかに両目を細めた。

「何か…、知ってるのか？」

高杉の言葉に反応し、有喜は高杉を見やる。

有喜は緑色の目で高杉を見上げ、

「いやいや。何も」

と、有喜は軽い調子で言う。

一瞬の沈黙の後、高杉は口を開いた。

「そうか」

と、どこか納得しきっていない様子で、独り言のように呟く。

「でもね」

と、有喜は楽しそうな口調で顔をほころばせる。

「このままじゃ、終わらない気がするな」

高杉は顔を美優貴達の方に戻した。

有喜も高杉に合わせたかのようなタイミングで正面を向く。

無機質にくすんだ銀色のフェンス。

コートに散在するレモン色の球体。

その先では、2人の少女が楽しそうに話に花を咲かせている。
「根拠はあるのか？」

高杉は平静な声で訊いた。

「根拠は勘、勘」

有喜はリズムよく、あっさりと答える。

「そいつは参ったな」

高杉は疲れを取るかのように、首をくると回した。

「…うつちゃんの勘はよく当たる」

第17幕：真昼の目撃

木曜日。

昼休み。

円舞学園は生徒達で騒がしかった。

授業中の会話しなかった時間を取り戻すかのように、大きな笑い声をたて、たわいもないお喋りをしている。

南校舎の後ろには、中庭よりも広い石畳の広場がある。

円形の広場の中央には、天に手を伸ばす少女の銅像。

少女は喜びと悲しみが混じり合い、半々になったような表情をしている。

その一系纏わぬ少女の周りを、花壇がグルリと囲んでいた。

少女の像から見て正面には石畳の道が通っている。

石畳の向こう側にはグラウンドが広がっていた。

左手には南校舎、右手には中等部の校舎がある。

中等部の校舎も南校舎や北校舎と変わらないデザインだが、正面玄関の横には木製の看板が掲げられ、力強い文字で『円舞学園中等部』と彫り込んであった。

広場は高等部、中等部を問わずに生徒で溢れかえっていた。

少女の像の背後には、2階建ての白っぽい建物があった。

全体的に四角い建物は、広場側に大きな窓ガラスが使われている。窓際の席は生徒で埋め尽くされ、席に座っていない生徒も場所を探してうろついている。

その建物の中は特に騒々しく、飲食物の混じり合った匂いが充満していた。

円舞学園の学食。

白を基調とした内装は、全てのものに四角い調度品を用いていた。

ガラスの観音開きの扉から入り、左側には学食の券売機やカウンターが続いている。

学食の向かい、入り口の右手側には惣菜を中心とした売店が並んでいる。

一番手前に、場違いのように文具を取り扱う売店があった。

学食のカウンター、惣菜を扱う売店の前には人だかりができ、人々の声が飛び交っている。

開け放された学食の扉から美優貴、守人、なな、りる香の4人は広場に姿を現した。

空は快晴。

暖かい日差し、穏やかな風。

髪と制服をくしゃくしゃにしたりる香は、空気を目一杯吸い込んだ。

「空気が美味しいねえ。中は凄かったから」

と、のん気な口振りで言った。

りる香は両手で小さな白いトレイを持っている。

その上にはわずかばかりのキャベツの千切りと、揚げたばかりのチキンカツ。

4人は左に進み、南校舎へと向かう道をとった。

南校舎の中央に見えるドアは開いている。

ドアの上には、ひさしのように壁が薄く張り出されており、日陰を作っていた。

その先には南校舎の玄関があり、その更に先には中庭が広がっていた。

美優貴は隣に並んだりる香を眺めて、

「しかし、酷い有り様だな」

りる香は、満員電車に巻き込まれたような、バーゲンで奪い合われたブランド物のブラウスのような格好をしていた。

りる香はえへへと笑い、

「それにしても、すごい人だったねえ」

と、乱れた髪を直しながら言った。

美優貴は、肯定するように頷いてから、りる香を見て、

「りる香、ネクタイがほだけそうになっているぞ」

「本当？」

「直してやろう。じつとしてろ」

「うん」

整列をするかのように左手を体の横にぴったりとつけ、りる香は立ち止まった。

ちょうど日陰に入った所だった。

美優貴の5mほど後ろには、南校舎の入り口。

今は、生徒が絶え間なく行き来している。

美優貴はりる香の前に立ち、手際よくネクタイの位置を整える。

「私は止めたじゃない。りる香があんなトコ入ってたって、無事にすむワケないって」

ななは無感動に言っ、めくり上げられたりる香のブレザーの襟をさり気なく直した。

「そうだな。全員がアメフト選手のような体格をしていたからな。正に『肉弾戦』と言ったところか」

「うん。これだけですんで良かったよう。影山君がかばってくれてたおかげだよ」

と、ななの行動に気がつかなかった様子のりる香は、のほほんとした口調で言った。

顔を出来る限り後ろに向け、りる香は右後方に控える守人を見ようとしていた。

「影山君、ありがとう」

守人は、りる香と同じトレーを慎重な手つきで両手持ちしている。謙遜するように守人は目を伏せ、

「いえ、そのようなお言葉をかけて頂くようなことはしておりません。お怪我が無くてなりよりでございます」

「守人」

顎を引いて、りる香のネクタイに視線を落としていた美優貴は、上目遣いで守人を見た。

「人の礼というものは、素直に受け取っておくものだ。タフガイを氣取って何になる？」

そうたしなめる様に言っていると、再びりる香のネクタイに取りかかる。

「申し訳ございません」

守人は恥じ入った様子で頭を垂れた。

2滴ほどの薄紅色の水彩絵の具をたらしたように頬を染めた守人を、ななは珍しそうに眺めた。

「人も凄かったけど、声も凄かったなあ。耳元で怒鳴られたから。影山、よく買えたよねえ」

「ん。怒声の間隙を狙って注文したんだろう」

「器用だねえ」

「私の執事だからな」

と、美優貴は当然のことのように答える。

「答えになってねーわよ」

と、聞き逃さなかった上に、問いただすなな。

手を休めずに、気の無さそうな調子で美優貴は、

「そうか？」

「そうよ」

「いい匂いだねえ」

脈絡無く、カツを見つめてりる香は言う。

ななは呆れたように鼻の頭をかいた。

「確かにな。広美先輩は特にチキンカツが人気だと言っていた。

よし、終わったぞ」

仕上げにネクタイをキュツと締めて、美優貴は満足げ頷いた。

りる香は嬉しそうに、にへらと笑い、

「ありがとう」

美優貴は優しく微笑して、首を傾げた。

突然。

「…なるほど。購買に行きたがった理由って、それね」と、ななは平淡な声を出した。

「ん？」

視線を向けた美優貴に対して、ななは眠たげな両眼で見返し、「どうせ、松先輩が美味しいって言ってたんでしょ？」

美優貴は柳眉を吊り上げた。

「待て。『どうせ』とは何だ？『どうせ』とは？」

鉄仮面のような顔を向けたまま、ななは続けた。

「つまりは、単純だっつーことよ」

りる香は慌てた様子で、美優貴に場所を譲る。

美優貴は怒りを含んだ微笑みを顔に貼り付けて、ななに近付いた。口元は微笑んではいるが、美優貴の瞳は猛禽のそれと化している。

「誰が単純だと？」

と、表情とは違い、冷静な声色で美優貴は問いただした。

美優貴の視線、言葉を一身に受けても、ななの反応は変わらなかった。

「言わなきゃ分かんない？」

口元を挑戦的に歪め、

「単純か。しかし、美味そうな物があれば迷わず飛びつくような人間も、十分に単純と言えるのではないか？」

と言いながら、猛禽の眼をななの左手に向けた。

左手にぶら下げられた、安っぽい白いビニール袋。

薄いビニールの持ち手、中に入れられている容器の重みで少し伸びている。

ビニールからは惣菜の油っぽく、食欲を誘う香りが流れ出ていた。「さらに」

視線を落としていたななは、美優貴の言葉につられるようにして顔を上げる。

美優貴は片手を腰に当てて、首を軽く反らせる。

「それを実力で手にしたのならまだしも、他人の執事を使い―俗

な言い方をすれば『パシリ』か―手に入れた。餓えた生徒が押しかける売店の前に入らずに、自分は安全なところで眺めていただけだ。りる香は自分で買いにいったというのにな！実に強欲だと言えるのではないか？」

もう一方の手を広げ、声に合わせて、演説者のように振り回す。

周辺にいた生徒が、異変を感じたような視線を向ける。

鉄面皮を美優貴から逸らさず、ななが口を開いた。

瞬間。

「失礼致します」

遮るように、守人の声が割って入った。

グイッと、力づくで首を守人に向け、

「何だ、守人？」

と、美優貴は落ち着きを取り戻そうとする口調で応じた。

邪魔をされたななは、行き先を失った言葉を発散させるように、口をパクパクと動かしている。

守人は真剣な表情で、

「お嬢様、後ろをご覧ください」

「後ろ？」

右を向いていた美優貴は、そのまま時計回りに身体を反転させた。橙色の髪が広がる。

右足で回転を止め、真正面を見つめる。

前髪が、揺れる。

左側の髪が、美優貴の頬を打つ。

大きく、見開かれた両目。

短く、速く、吸い込まれた大気。

瞳から雫が消えた。

ななは、背後から美優貴の視線の先を辿った。

探るような目つきで美優貴達を見ながら通り過ぎる男子生徒。

薄く光が差し込む校舎の入り口。

すぐ右手には階段の側面が真っ白な壁を作り、その壁によりかか

るようにして、4人の女子生徒がお喋りを再開していた。

廊下を、上履きのかかとを潰した生徒が通り過ぎた。

中庭に面した南校舎入り口。

無機質に、規則的に並べられたスチールの靴箱。

その先は、暖かな日光に照らされた中庭がある。

そこに松広美がいた。

両手で抱え込むようにして、A4サイズほどの茶封筒を胸元に当てている。

落ち着かない様子で顔を上げたり下げたりしながら、目の前の人物と話していた。

広美の前に立っているのは、眼鏡をかけた茶髪の男子生徒。パーマをかけているのか、細い髪は緩くウェーブしている。

身長は広美より10cmほど高い。

優しい横顔をしていた。

男は2、3言葉をかけると、部室棟の方へ歩いて行った。

男の去り際にペコリと頭を下げると、広美はその場で見送った。

照れたように微笑んでいる。

頬が赤い。

広美はぶ厚い封筒を見つめ、そのまま南校舎に入ってきた。

周りに注意を払っていない。

美優貴には気がつかない様子で、にこやかに廊下を右に曲がった。

美優貴は沈黙を破った。

「守人」

「はい」

「あの男の後を追え」

と、口早に命じた。

「かしこまりました。それでは、お嬢様。こちらを」

守人は深々と一礼すると、美優貴にチキンカツを差し出す。

美優貴は背中を向けたまま、

「いらん。ななにくれてやれ」

「かしこまりました」

守人はななにチキンカツを差し出す。

「あー…」

ななは判断しかねた様子で、視線を守人、カツ、美優貴の後頭部に移した。

「…貰つとく」

そう言つて、守人からトレーを受け取った。

「失礼致します」

一礼して、守人は南校舎を突き進み、中庭の方へと消えた。
その間、残された美優貴達3人は無言で佇んでいた。

「美優貴ちゃん？どうかしたの？」

事情が飲み込めない様子で、りる香は首を捻っている。

「いや、なんでもない。心配するな」

と、美優貴は明るい口調で答える。

ゆつくりと、しつかりとした足取りで美優貴は歩き出した。

手前に開かれたドアのドアノブに手をかける。

そのドアノブを握り締め、開戦決意を固めた軍の司令官のように
呟いた。

「失恋には…。失恋には、まだ早すぎる…！」

美優貴は、決然とした足取りで南校舎へと入っていった。

りる香は、美優貴が何を呟いたのか聞き取れなかった様子だったが、

「あつ、美優貴ちゃん、待つてよう」

と、小走りについて行つた。

ななは急ぐふうでもなく、一步、足を踏み出し、止まった。

何かに気がついたような、急ブレーキ。

両サイドの髪が、振り子のように揺れた。

沈黙。

「…嘘でしょ？」

ななの視線の先。

そこには、開かれたドアのノブがあった。

わずかな光を受けて、滑らかな反射をしている金属の塊。

先ほど美優貴が握り締めたノブは、へこんでいた。

何かがぶつかったような損傷ではない。

強烈な力で締められたかのようにへこんでいる。

はつきりと、指の形が分かるほどにへこんだ痕跡は、美優貴が握り締めるまでは存在していなかった。

第18幕：事態は廻る

「写真部？」

「はい」

「それで眼鏡で茶髪。髪は長めか…。身長は？」

「170cm前後です」

5時限目と6時限目の間の休み時間。

騒々しい廊下。

ざわついた教室。

2年3組の教室の前に、有喜と守人はいた。

出入り口のドア横の壁に寄りかかり、有喜はくわえ鉛筆をゆらゆらと揺らしている。

ガリガリと寝癖頭をかき、

「学年は分かる？」

守人は有喜の真正面に、直立している。

「3年生です。上履きのラインが緑色でした」

「3年か…。なるほどなるほど」

エメラルドの目を楽しそうに細め、有喜は守人を見上げる。

「伊庭先輩だね。伊庭悠志先輩。^{イハ ユウシ}写真部の副部長。確か3年8組だったかな？」

「確かでしょうか？」

「その情報だと、間違いないない」

そう言って、有喜は身を起こした。

「写真部と新聞部は昔から仲がいいからね。新聞には写真が載るワケだから、当然だけど。特に特に、今の時期は運動部の春大会が重なるから、写真部にも助っ人を頼むんだな」

守人は、思案するように片手を顎に当てた。

「…助っ人ですか」

有喜はパチンと指を鳴らし、

「その通りその通り」

そう言って、ブラブラと窓辺に近づく。

「もちろん、新聞部でも写真は撮るけどね。カメラも人も足りない足りない」

窓の外に顔を向け、足りないことを強調するように手を振る。

守人は人の流れに視線を配り、有喜の右後ろに立った。

「そこで、写真部に依頼するんだ。写真と人員の提供をね。一定の期間、新聞部員同様に活動してもらうわけ。でもでも、ご存知の通り、ウチには新聞部が3つある。それで、その内の1つは…」

有喜はチラリと守人を振り向く。

守人は理解した様子で、有喜の視線に答えた。

「『エンブスポーツ』ですね」

「当たり前」

と、有喜は楽しそうに言う。

くるりと身を回し、窓に背を向ける。

腕を組み、片手をゆっくりと口元に運ぶ。

シャツ越しに、寄せられた胸が急激な谷間を覗かせる。

「だから、どうしても『エンスポ』に人数を割かれちゃうんだ。

でもでも、これは昔っからなんだけどね。スポーツ紙が、運動部の大会無視しても仕方ないって事もあるし。その関係で…」

有喜は鉛筆を指に挟み、大好物を目の前にしたかのように顔をにやつかせる。

「『エンスポ』。写真部の部員。運動部。この3者間でくつつく確率は高いんだな。しかし、伊庭先輩と松っちゃんか…。なるほどなるほど」

企み事を思い付いた小学生のようにニヤニヤしながら、有喜は鉛筆を口に運ぶ。

守人は少し戸惑った様子で、

「酒匂川先輩」

と、僅かに緊張した声をかける。

有喜はヒラヒラと手を振り、

「大丈夫大丈夫。ちよつとツボに入っただけだよ」と、軽く言う。

「そうですか」

守人は冷静な表情に戻ると、

「それでは調査の件、よろしくお願い致します」
恭しく言つて頭を下げた。

「了解了解。美優貴ちゃんにはそう伝えて」

「かしこまりました。失礼致します」

再び一礼した後、守人は階段へ向かつて廊下を進み始めた。

数秒間、守人の背中に有喜は視線を送った。

その顔は、にやけだすのを抑えるかのような、複雑な顔をしている。

行き交う生徒の中に、とけ込んだ守人の背中。

有喜は整った顔を天井に向ける。

白い天井。

長い天井。

白く細長い蛍光灯。

埃が全てを薄く包んでいる。

薄汚れた上の景色を眺め、有喜は齒と齒の間から息を吐き出す。

ニツと、口の端を吊り上げ、有喜は呟いた。

「…面白くなってきた、かな？」

帰りのホームルーム後。

バタバタとした教室で守人の報告を受けた美優貴は、机の中から教科書を出しながら、

「伊庭悠志か…」

と、呟いた。

「はい」

美優貴の机の左側に控えた守人は、真っ直ぐに主を見つめて答える。

教室の前の方では、りる香が大袈裟なアクションで帰り支度をしていた。

美優貴の前では、帰り支度を終えたなながゆっくりと立ち上がった。

美優貴は鞆に荷物を詰めながら、

「よし。守人、伊庭とやらを見張れ。何かあったら、すぐに私に知らせろ」

昼間とは違い、美優貴の口調は普段の凜とした威厳あるものに戻っている。

動揺している様子も無い。

「行け」

「かしこまりました」

忠誠心を体現した礼の後に、守人は教室を出た。

バスケットと鞆をぶら下げた執事が廊下に消えた。

守人と立ち替わるかのように、りる香が美優貴に近づく。

「2人共、帰ろうよお」

「ん」

鞆の金具を閉め、美優貴は立ち上がる。

「早く出ないと、掃除の邪魔になるわね」

淡々と言いながら、ななは教室の後ろにある掃除用具入れの前に立った数人の男子を眺めた。

美優貴は、所々へこんだグレーのロッカーをチラリと見やり、

「そうだな」

と言って、椅子を綺麗に戻す。

「あれえ？影山君は？」

「ああ。用事があったな。先に帰った」

「そうなんだあ。美優貴ちゃんは、真っ直ぐ帰る？」

「いや。私は図書館に寄りたいんだ」

「いいねえ。私も行きたい！」

「では、一緒に行くか」

「うん。それなら、宿題も一緒にやろうよ。いっぱい出されたし」

「ああ。それはいいな」

美優貴とりる香の会話の間に、ななはロッカーから重箱を引っ張り出していた。

無表情に美優貴達の元に戻り、

「おまたせ」

と言った、ななの両手はふさがっていた。

「それじゃ、図書館にレッツゴォ！」

小学生じみた掛け声と、幼稚園児じみたポーズで片手を挙げ、りる香は上機嫌で廊下に向かう。

その背中を眺めながら、

「…松先輩に会うまでの時間潰し？それとも、影山君の連絡待ち？」

と、ななは美優貴に訊く。

訊ねられた少女は不敵に微笑み、一歩足を踏み出す。

「両方だ」

「おう？」

南校舎を出て、高杉は足を止めた。

制服姿の高杉は、右肩に大型のスポーツバッグをぶら下げている。白いバッグにはサッカー部のロゴ。

ロゴの下には、青い系で小さく『S・Takasugi』と縫い付けてあった。

高杉は、中庭を挟んで向かい側の北校舎から出てきた守人に目を止めた。

守人は高杉の目線に瞬時に気付くと、その場で会釈をして部室棟

の方へと曲がった。

高杉は無言のまま、守人を視線で追う。

部室棟の入口付近では、伊庭悠志が2人の男子生徒が談笑していた。

高杉の背中に、生徒が後ろからぶつかった。

「キャッ」

女子の短い悲鳴と共に、軽い物が地面に落ちる乾いた音がした。パサッパサと紙が落ちる音。

ドサッと荷物が地面に置かれる音。

高杉が振り返ると、後ろでは黒髪の子が屈みこんで、慌てた様子で落とした物をかき集めていた。

高杉の物と同じように大きな黒いスポーツバッグと、青いラケットバッグを傍らに置いたグレーの制服姿の少女。

「すいま…」

丸顔の顔を上げて、謝罪の言葉を続けようとした川崎麻実は、申し訳なさそうな顔から、引きつった顔へと表情を変えた。

「高杉ッ。…君」

高杉は無言で片膝をつくと、散らばった物を拾い始めた。

困惑した様子で動きを止めた麻実を尻目に、高杉はテキパキと拾い集める。

十枚程の写真。

そのどれもが、麻実を写したものだっただ。

練習風景の物らしく、公式のユニフォームではなく、ジャージ姿だった。

金網越しに試合を写したようで、細く視界が遮られている。

高杉は写真の束を麻実に差し出した。

「あ、ありがとう…」

動揺した様子で写真を受け取り、麻実は目を伏せた。

高杉はジッと麻実を見つめ、ポツリと、

「…下着は、自分のサイズに合った物をした方がいい」

「は？」

不意を突かれた顔を向ける麻実の胸部を指差し、
「サイズが合わねえと、形が崩れる。パットを詰めてごまかして
もしようがねえ。大きく見せるだけが胸じゃねえぜ」
間。

麻実は顔を真っ赤にすると、憤然として立ち上がった。
全身を怒りでブルブルと震わせ、高杉を見下ろす。

羞恥心と怒りにまみれた両目を向け、

「最っ低！」

と、叩きつけるように言葉を吐き出し、ズンズンと南校舎から出
て行った。

周囲の好奇の視線が、去っていく麻実と、しゃがみ込んだ高杉に
注がれる。

その視線の多くが、高杉を見た途端に納得したような表情を見せ
た。

高杉は驚いた様子も傷ついた様子も無かった。

すつくと立ち上がり、制服の膝に付いた汚れを払う。

そして、何事も無かったかのように、悠々と中庭の方へ体を向け
た。

麻実は南校舎に沿うようにして中庭を進んだ。

広場へと向かう石畳通りにたどり着いた所で、麻実は写真を持っ
た手を胸に当てる。

真っ赤な顔をした麻実は、憤慨したまま、怒りの疑問を足元に吐
き捨てた。

「…何でバレたのよ！」

守人は高杉に会釈をして、部室棟へと向かった。
放課後、人の出入りが激しい中庭。

南校舎側にあるもので、最も部室棟に近いベンチ。そこに、有喜がのんびりとした様子で座っていた。長い脚をゆったりと組み、頭の後ろで指を組んでいる。有喜は守人に気がつくと、ニヤツと笑い、手招きした。守人は伊庭悠志が消えていった部室棟の入口を見やった後、有喜に近付いた。

「お呼びでしょうか？」

と、一礼の守人。

有喜は守人を見上げ、

「もしかして、伊庭先輩の見張りかな？」

と、普段通りの口調で訊く。

瞬間、思案するように表情を固めた守人。

「…はい」

守人の答えに、有喜は満足したように微笑むと、

「まだ可能性の段階なのに凄いなあ。そんな君に、いいモノを貸してあげよう」

そう言つて、スカートのポケットに片手を突っ込んだ。

そのまま、ポケットの中を探りながら有喜は立ち上がる。

「はいはい」

有喜の言葉と共に、守人の目の前に突き出されたのは、銀色の鍵だった。

鍵と有喜の顔を鋭く見つめて、

「…これは？」

「部室棟にある、旧生徒会室の鍵。今は使われてなくて、昔の資料が置いてあるだけの物置になってるんだ」

指を振るように、ゆらゆらと鍵を動かしながら、

「写真部の部室があるのが3階。階段から見が一番手前の部屋。」

それで、旧生徒会室は写真部のちょうど真上の部屋なんだな」

「真上？」

「そうそう。本当に偶然の産物。静かにして、床に耳でもつけて

れば、会話くらいは聞き取れると思うよ。…どうする?」

守人は催眠術の実験台にでもなったように、真剣な眼差しで鍵を見つめている。

右手を差し出し、丁寧な口振りで、

「謹んでお借り致します」

「その代わりその代わり。何かあったら私にも教えてね」

「かしこまりました」

有喜は守人の掌に鍵を置いた。

「交渉成立」

守人は、ほっそりとした長い指で鍵を包んだ。

「失礼致します」

一礼して、守人は部室棟へと向かった。

有喜は守人の背中を見送る。

「…さてさて」

ビンゴゲームに興じるような、楽しげな瞳。

羽毛のように軽く、有喜は独り呟いた。

「どう転ぶかな?」

第19幕：『恋人』（ザ・ラヴァーズ）

ガシャン。

ボールがフェンスに当たる。

ラケットを振り抜いたまま、広美は真剣な表情で正面を見つめている。

ボールがゆつくりと、静止する。

優しい拍手の音に広美は振り向いた。

視線の先で美優貴がベンチの横に立ち、穏やかに微笑んでいた。

「素晴らしいです」

と、拍手をする手を止めて、

「フォームのブレも抑えられています。それでいて、持ち味のダイナミックなプレイは損なわれていません。とても魅力的なものだと思います」

広美は照れくさそうに、ラケットをクルクルと回す。

手元を見つめ、

「…姿勢とか、あんまり考えたことなかったから。変に直しちゃうと、上手く出来ないかなって思ってたし…。メチャクチャが私の持ち味って言われたし…」

美優貴はゆつくりと、広美に近付いた。

「がむしゃら。メチャクチャ。その中にも美しさは必要です」

広美はパツと顔を上げて、美優貴を見つめる。

美優貴は、母親が子どもに子守歌を歌うときのような、優しい表情をしていた。

「美しい姿勢は勝利を呼びます。なにより、正しい姿勢の方が、より力強いプレイが出来たりするんですよ？」

広美は呆けた顔で美優貴を見つめていた。

口を半開きにさせている広美。

美優貴は小首を傾げ、

「先輩？」

広美はハツとした顔になり、

「いや！何でもないっ。休憩にしようか。うん！」

と口早に言つて、ベンチに向かつて歩き出した。

再び首を傾げた美優貴を背にして、

「…本当、綺麗な顔してるなあ」

と、広美は溜め息混じりに呟いた。

美優貴は頭を元の位置に戻すと、決意を固めるように両目を瞑つた。

猛禽の両眼が開かれ、数秒後には平静な色合いへと戻った。

足の裏で大地を確かめるように足を進める。

広美はベンチに腰掛け、学生鞆を漁っていた。

鞆から紙封筒を取り出す。

昼休みに広美が受け取った封筒。

美優貴は封筒をチラリと見やり、落ち着いた動作で広美の横に座を占めた。

「美優貴ちゃん、コレ見て」

「何ですか？」

「コレ」

そう言つて、広美は封筒から写真の束を取り出した。

輪ゴムでまとめられた、20枚程の写真。

輪ゴムを外し、美優貴に手渡す。

「昨日の練習の時の写真なんだ。写真部の先輩が、すぐに現像してくれて…」

「そうなんですか」

美優貴は写真の上に視線を滑らせる。

ジャージー姿の広美。

真剣な顔つきでボールを追っている。

ポニーテイルが暴れ馬の尾のように跳ね回っている。

映画のアクションシーンのような、派手な体勢でラケットを振り

回していた。

フツと可笑しそうに笑い、

「凄いですね」

と、美優貴は感想を漏らす。

「うん。これでも、大分抑えられてるんだよ？」

と、ペットボトルを弄びながら広美は言う。

「…美優貴ちゃんのおかげ」

恥ずかしそうに広美はペットボトルを口元に押し当てる。

その様子に、美優貴は嬉しそうに微笑んで、視線を写真に戻す。
何かを透かし見るような瞳。

写真を次々と眺め、ポツリと、

「…よく、撮れていますね。誰が撮ったんですか？」

ペットボトルを口から離し、

「うん。伊庭先輩っていつてね、写真部の副部長なんだ」

「そうなんですか」

ペットボトルの飲み口を眺め、

「テニス部の担当で、大会の写真はいつも撮ってくれて…。試合中はずっと見てくれるの。あ、あと、練習の時にも時々顔を出してくれて…。差し入れてくれたりして…」

と、言葉の区切りごとに、ボトルを揺らす。

透明のプラスチック越しに、スポーツドリンクがチャプチャプと波をたてる。

美優貴は小さな水面を見つめた。

「…どんな人なんですか？」

「優しい人だよ。あと、静かな雰囲気かな。無口ってほどじゃないんだけど…。試合中は声援とかしてくれるしね。でも、お喋りではないなあ…。口数が少ないって言うよりも、うん。物静か、って言うのかな。余計な事は言わないって言うのかな…」

姿を思い描くように、広美の眼がキョロキョロと動く。

静かに、美優貴は口を開いた。

「よく見てるんですね？」

「えっ？」

疑問符を伴った、広美の感動詞。

広美はキョトンとした顔を美優貴に向けた。

美優貴は広美を、ジッと見つめていた。

春の木漏れ日のように穏やかで静かな表情。

明るいつ茶色の瞳は、揺らぐことなく、はっきりと広美の姿を映し出している。

美優貴は唇を動かした。

「…好き、なんですか？」

「ええっ！？」

耳元でクラッカーを鳴らされたかのような、広美の顔。

「いきなり、何、言ってるの？突然っ…。そんな、ねえ…」

広美の顔に、恥じらうような色合いが流れ込む。

バツと顔を逸らし、

「どうしたの、いきなりっ、そんな…」

目がジェットコースターのようにグルグルと泳ぎ、大時化の海のようにペットボトルの中が荒れる。

「好意を抱いているか、訊いただけですよ？どうしたんですか？」

優しく、凜とした声。

「いや、そんな風に言われてもなあ…」

派手にペットボトルをいじり回し、美優貴をチラリと見やる。

美優貴は無言で見つめている。

強く、静かな瞳。

急かすような、茶化すような色は浮かんでいない。

眼球の奥に微弱なライトが存在するように、淡い光が瞳を包んでいる。

暖かな太陽を思わせる穏やかな色合い。

全てを包むような優しい気色。

瞳という存在ではないかのように、広美は美優貴の目を眺めた。

ぼんやりとした、意識が違う場所にあるような広美の瞳。たどたどしく、広美は視線から目を逸らす。頬が赤い。

美優貴の瞳に誘い出されるように、広美はポツリと呟いた。

「そんなの、…分かんないよ」

美優貴はゆつくりと、正面を向いた。

「…そう、ですか」

突然。

美優貴の鞆の中から、振動音が鳴り始めた。

くぐもった音が、定期的に鳴り止む。

「すいません」

驚いた顔の広美に告げて、鞆を持ったまま美優貴は立ち上がった。コートの出入り口に近づきながら、携帯電話を取り出す。

鞆から現れた、純白の電話。

艶やかな流線型のボディ。

平らな箇所は1箇所も無い。

背面のディスプレイも、平らではなく、カーブしていた。

上質な石鹸のように滑らかな電話を開き、通話ボタンを押す。

「私だ」

小さく、手短に美優貴は声を出す。

「失礼致します」

と、守人の静かな声。

「どうした」

美優貴はフェンスの外に出て、コートを見やる。

背中を向けた広美は激しく頭を振り、恥ずかしそうに唸っていた。

「伊庭悠志は部室棟内に残っています。先ほど、写真部の部員が退室しました。現在、伊庭悠志は1人です」

「うつちゃんから何か連絡は？」

「いいえ、何も」

「そうか。では、すぐそっちに向かう。待機している。帰宅しそ

うな気配を見せたら追え。その場合には連絡しろ」

「かしこまりました」

美優貴は電話を切った。

軽く息をついて、足早に広美の所に戻る。

美優貴の足音に気付いた様子で、広美は顔を向ける。

「どうしたの？」

顔の桜は散っていない。

「すみません。急な用事が出来てしまいました…。今日は、もう失礼します」

と、ペコリと頭を下げる。

「あ、そうなの？」

と、広美は腰を上げる。

「はい。親戚の子が急に電話してきました…」

「親戚の？」

「はい。ちょうど私の家に遊びにきていまして。寂しがり屋なものですから…」

「そうなんだ。いくつ？」

「…4歳です」

「そうなんだ」

再び、美優貴はペコリと頭を下げた。

「本当に申し訳ありません」

慌てたように手を振り、

「いや、そんな気にしないで！美優貴ちゃんはコーチなんだから…」

顔を上げ、ホツとした顔で美優貴は髪を耳にかける。

「そう言って頂けると助かります。それでは、また月曜日に。ご機嫌よう」

軽く首を傾け、美優貴は微笑む。

「うん。またね」

ピョコと片手を上げて、広美は、はにかんだように微笑んだ。

美優貴は広美に背を向けて、出入り口へと向かう。
ギィと、フェンスの戸を押し開けて、舗装されていない道へと足を踏み出す。

後ろ手に扉を閉め、薄い暗い中に向かって進み始めた。
弱い風が髪を揺らし、コートからこぼれた弱い明かりが髪を照らす。

目を伏せ、足元を見やる。

小石が混じった土の道。

靴が大地の音を立てる。

ポツリと、美優貴は呟いた。

「彼女は…、恋をしている」

風が流れる。

再び、美優貴は呟いた。

「彼女は恋をしている」

自分に言い聞かせるようなニュアンス。

美優貴は言葉を続けた。

「そして、それは私では、ない」

鞆の中の携帯電話は7時38分を表示していた。

「私ではない」

ななはシャープペンを動かしていた右手を止めた。

テーブルの上に置かれた携帯電話の背面ディスプレイに視線をやる。

19時38分。

教科書を閉じて、ななは正面のりる香に視線をやった。

りる香はテーブルの上に突っ伏し、気持ちよさそうに寝息をたてている。

眼鏡は外して、黄色のペンケースの横に置いていた。

顔の下には、薄すぎる枕のように、広げられたノートや教科書が

散乱していた。

円舞学園の図書館。

ななとりる香は図書館の1階にいた。

6人掛けのテーブルが並ぶ閲覧スペース。

周りには、背が高く、細長い木製の本棚が整然と並んでいる。

色の濃淡が異なる木材を組み合わせた市松模様の床。

埃っぽい空気は、爬虫類のように動きがない。

閲覧スペースには、なな達の他に5人の生徒がいた。

各々別のテーブルに座り、黙々とシャープペンを動かしている。

机上は参考書や問題集で埋め尽くされていた。

どのテーブルにも同じように、図書館のマナーと閉館時間がかかれたメニユースタンドが中央に置かれている。

ななはノートを閉じると、静かに椅子から立ち上がった。

ダークレッドの座部の古めかしい椅子。

椅子をそのままにして、ななはテーブルを回り込む。

真ん中の席で眠り込んだりる香の肩に手を伸ばし、ななは軽くトントンと叩いた。

りる香は起きない。

肩を掴み、ユサユサと揺らす。

「……んううん」

眉間にシワを寄せ、不機嫌そうな顔をするりる香。

りる香は起きない。

周りの生徒が、迷惑そうな顔をしてりる香を睨んだ。

ななはため息をついて、鼻の頭をかいいた。

思案する様子でりる香の枕元を眺め、ふと、視線を止めた。

りる香の左腕の下、広げられた英語の教科書。

その教科書の下から、プリント用紙がわずかにはみ出していた。

ななはプリントをつまみ、引き抜く。

英語の宿題プリント。

英文の穴埋め問題と、和訳が合わせて20問。

問題は一問も解かれていなかった。

A4のプリントを左手にして、ななはりる香の寝顔に視線を落とす。

右側を向いたりる香の横顔。

右手を斜めに伸ばしている。

右肘の辺りに、ななが手にしている物と同じプリントがあった。

こちらには、余白の部分にりる香の丸っこい文字で『月曜提出!』と書いてある。

ななはりる香の左側の席を見やった。

無人の席。

席はわずかに左を向いている。

30分程前まで美優貴が座っていた席。

その席を、咎めるような目つきでななは見つめた。

そのまま、ななはテーブル中央に視線を移す。

そば屋の品書きのような、アクリル製のメニュースタンド。

透明の板に挟まれた白い紙には、他の文字よりも大きく閉館時間が書かれていた。

『閉館8時30分』。

ななは渡り鳥のように視線を移した。

プリント、携帯電話の背面、りる香、アクリル。

鼻の頭をトントンと叩き、口元を歪める。

「めんどくせーわね」

小さく、囁くように呟いた。

ななは椅子の位置を真っ直ぐに直すと、プリントを折りたたみ始めた。

折りたたみながら、自分の席へと戻る。

たたんだプリントを置き、広げられたままのノートの1ページにペンを走らせる。

書き終わると、ノートをりる香の方に向けた。

ななは、たたんだプリントと携帯電話を手にして、図書館の出入

り口の方へと歩き出した。

空気が僅かに動く。

文字を書く音、ページをめくる音に、だんだんと遠ざかる足音が混じった。

相変わらず、りる香は寝息をたてている。

りる香に向けられたノート。

ななの細長い文字が、罫線を見捨てて大きく書かれていた。

『すぐに帰ってくるから、待ってなさい』。

第20幕：闇とライトは痛みを隠す

薄暗い闇の中、美優貴は進んだ。

風が弱く吹いている。

植え込みの中では、葉がカサカサとこすれ合っている。

美優貴は黙々と進んだ。

痛みを耐えるように、表情が堅い。

眉間にはシワが寄り、唇は真一文字に結ばれている。

両の拳は握り締められていた。

石段を上り、石畳の道へたどり着く。

上りきった所に、背の高い街灯があった。

石畳の道に沿って等間隔に街灯は並び、弱々しく光を放っている。

美優貴の真正面から右に伸びた北校舎、左側に位置した東校舎、

共に職員室の明かりはついていていた。

どちらも、暗い廊下に非常灯が緑の光を放っていた。

美優貴は後ろを振り向く素振りを見せたが、思い返した様子で、

止めた。

足元を見つめ、両目を細める。

握り締めた右拳。

小刻みに震える手をゆつくりと顔の前に運ぶ。

街灯の真下で、関節が白くなった拳が照らし出される。

目を瞑り、拳を額に当てる。

震えは止まらない。

歯を食いしばったまま唇を開き、震えた息を吐き出す。

夜の空気を吸い込み、息を止める。

強張った口を、こじ開けるようにして広げる。

ガクガクと下顎が震え、更に強く、両目を閉じる。

口全体をOの形に広げて吐息を押し出した。

震えが息に伝染したように震え、顔と拳の震えが治まり始めた。

美優貴は呼吸を繰り返す。

2回目に震えは治まった。

確認するように、拳を広げる。

強張った指はゆっくりと広がり、てのひらを見せた。

美優貴は、何かに気付いた様子でパツと顔を上げた。

右手の石畳から、小さな人影が近付いていた。

美優貴は、近付いてくる人影を見つめる。

やがて、小さく、乾いた音が伝わり始めた。

コツコツ…。

ローファアの靴底が、石を叩く音。

所々に作られた光の円を通り、歩いている女子生徒。

鈴森なな。

美優貴は右手を開いては、閉じた。

鞆を持つ手を持ち替え、左手も同じように繰り返した。

ななは美優貴に気が付いた様子で、歩くスピードを速めた。

美優貴はななの到着を待った。

ななの距離が10m程の辺りで、美優貴は不敵に微笑んだ。

「どうした、なな？何か用か？」

と、快活な、凜とした声で訊く。

「どうしたじゃねーわよ」

と、仏頂面のなな。

片手のプリントをヒラヒラと示して、

「英語の宿題、忘れてったでしょ？」

「ん？そうだったか？」

「そうだったのよ」

「そうだったのか。すまないな」

と、右手を伸ばす美優貴。

ななも、プリントを持った左手を差し出した時、

「ブラザー」

と、声がかかる。

美優貴は身を翻し、声がした方を向いた。

中央広場の方へと続く道から、高杉が大股にやってきた。

行き場を失ったプリントをプラプラと揺らし、

「また、このパターン？」

と、平坦な声をあげるなな。

「どうした、ブラザー？」

ウィンドブレーカーを羽織った高杉は、ジャージのズボンの砂を軽く落としながら、

「…全ての部活の覗きが終わった辺りで、うっちゃんから連絡が来てな。ブラザーを呼んでこいと頼まれた」

「迎えに来てくれたのか」

「サラツと最低ね」

「おう。電話に気付かないかもしれないからってな」

「そうか。…迷惑をかけたな」

高杉はフツと口元を緩める。

「ブラザー。そいつは言いつこ無しだぜ」

差し出された高杉の右手。

美優貴は嬉しそうに微笑み、高杉の右手を握る。

シェイクハンドの形のまま、

「ブラザー、今日の収穫はどうだった？」

と、美優貴は訊いた。

高杉は、決断を迫られた城主のような顔つきで、

「…俺は、女体にランク付けをするようなことはしねえんだが…」

あえて言うなら、今日は弓道部が良かったな」

と、重々しく口を開いた。

「弓道部か」

「おう」

ななの、嫌悪感が浮かんだ鉄仮面には気付かない様子で、高杉は続ける。

「元々、弓道着ってヤツはポイントが高え。凜々しく、程よい緊

張感があるからな。それでいて、どこか色っぽい」

「その通りだ」

「何のポイントよ」

「だが、今日は…」

高杉の表情が変わる。

脱藩の決意を固めた武士のような顔つきで、高杉は、

「…部員の1人の下着が、…紐パンだったんだ」

美優貴は目を見開く。

「何ッ、…だと？」

深く、高杉は頷いた。

「深紅の、紐パンだ…」

「深紅のッ…」

美優貴は目を細めた。

「…たまらんな」

「おう。たまらんさ」

と、低い声で高杉は答え、

「…弓道着、制服、ジャージー。その多くが、半分は下着だった。全てが美しい光景だ。だが…」

高杉はギリッと両目を瞑った。

気持ちを抑え、絞りだすような声で、

「その中でも、弓道着に深紅の紐パンは…。輝いていた…」

力強く握られた右手に、美優貴はソツと左手を添えた。

気遣うような口調で、

「もう何も言うな。ブラザー。…心の中に閉まっておけ」

高杉は目頭を押さえた。

「…すまねえ。つい、高ぶっちゃまった」

嫌悪感を露わにした、冷徹な声で、

「わけ分かんねえっつーのよ」

と、なな。

美優貴はななを見やり、

「分からないのか？」

と、不思議そうに訊ねる。

「見るだけしか能がない変態の理屈でしょーが」

「…そいつは違うぜ。鈴森」

高杉が目を開いた。

意志の強そうな、力強い眼光でななを見つめ、

「覗きつてのは、視覚だけじゃねえ。全ての感覚を使うんだ。それに、人が来る危険を察知する第六感もだな。目玉だけで貫き通せる程、覗きは甘くねえ。感覚を極限まで研ぎ澄ます行為。それが覗きだ。つまり…」

左の手で拳を形作り、胸を叩く。

「見るんじゃないねえ。感じるんだ…！」

美優貴は添えた左手に力を込めた。

「…ブラザー。よく、言ってくれた」

高杉は美優貴の熱い視線に応えた。

「分かってくれるか。ブラザー」

「私を誰だと思っている？」

高杉は気が付いたように笑い、

「そうだな。俺のブラザーだから、当たり前か」

見つめ合い、楽しそうな表情を浮かべる2人。

独り蚊帳の外のなな。

鉄面皮の表情で、ゆっくりと2人に近付く。

眠たげな瞳には、通り雨に濡れた日本刀のような光が宿っていた。

ダラリと下げた右手。

瞬間。

電光石火の如く、ななの右手が美優貴の後頭部を狙い打つ。

スッパアアアン。

振り抜いた右手を、流れるような動作で、上へと運ぶ。

踏み込み、右手を振りかぶる。

揃えられた指先。

銘刀を思わせるなの手刀。

ななは、全身を使って右手を振り下ろした。

明かりの下、刀身がサツと閃く。

高杉は、自分の額及び顔面に向かって業物の刃が振り下ろされるのを、ただ見つめていた。

部室棟の入り口、脇。

鉛筆をくわえ、有喜がぼんやりと寄りかかっていた。

入口を照らす安っぽい蛍光灯が、寝癖でメチャクチャなショートカットの金髪に陰影をつけていた。

有喜は美優貴達の姿に気が付くと、ひらひらと手を振る。

石畳の中庭に3種類の足音をたて、美優貴達は部室棟に近付いた。有喜は驚き、笑いだすのを堪えるような顔で、

「高杉ちゃん、どうしたの？その顔。似合ってる似合ってる」

高杉は精悍な、真面目な顔つき。

「…ちよつと、そこで辻切りにあつてな」

と、答えた男の両方の鼻の穴にはティッシュが詰められていた。鼻づまりの声で、高杉は、

「…止まらねえんだ。鼻血が」

「天誅ですよ」

と、無愛想な顔と声でななは言う。

美優貴は片手で後頭部をさすりながら、

「状況は分かるか？」

「うんうん」

と、有喜はにやつきながら答え、

「まだ伊庭先輩は出てきてないね。あ、それとそれと。伊庭先輩の情報もまだ途中なんだ」

「そうか」

ふと、何かに気が付いた様子で、美優貴は暗い建物の中に視線を

向けた。

闇の中から、グレーの制服が浮かび上がる。
土間の上で、守人は主を出迎える礼をした。

「うっちゃん」

「何何？」

「調査はもういい」

「何で？」

美優貴は猛禽の瞳で、有喜を見上げた。
不敵な笑み。

きつぱりとした口調で、美優貴は言葉を発した。
「本人に訊く」

第21幕：真実の口

パソコンの光が消えた。

暗い鏡となった画面に、伊庭悠志の顔が映りこむ。

オーバル型の縁無し眼鏡をかけた細い顔。

緩く、大きく波打つ髪を耳にかけている。

伊庭はパイプ椅子から立ち上がると、写真部の室内を見回した。
教室より二回りは小さい部室。

室内中央には、会議に使われるような長いテーブルが並び、その上にはパソコンやプリンター、スキャナー等の電子機器が座を占めていた。

空いたスペースにも雑誌やプリントが山になっている。

伊庭の背後には、黒くぶ厚いカーテンが閉められた、大きな窓。

左側の壁には、雑誌等に掲載された歴代写真部員の写真が所狭しと貼られていた。

大きさ、色合い、撮影方法様々な写真群。

下には三脚やビニールシートが乱雑に置かれ、その中にはバットやラケット、サッカーボールなども混じっていた。

正面の長い本棚には、ギッシリと本が詰まっている。

アルバム、写真関係の雑誌、写真家の写真集。

本棚のすぐ右手には、日に焼けて乾燥したオードリー・ヘップバーンのポスターが貼られたドア。

右側の壁には、年季の入った木製の棚。

埃まみれの蛍光灯の下、棚には様々な種類のカメラのケースが並んでいた。

伊庭は部室内をぼんやりと見回し、苦笑するように口元を緩めると、ゆっくりと立ち上がった。

瞬間。

部屋の外から、板の軋む音が室内に届いた。

廊下を進む人間が、足音の代わりに生み出す音。乾いた、軽い音は写真部のドアの辺りで止まった。

耳をすませるような顔つきの伊庭の視線の先で、ドアが開かれた。ノックも無く、勢い良く開かれた扉。

可愛らしい笑顔のオードリーが消え、代わりに1人の少女が姿を現した。

部室の空気が変わった。

廊下の暗闇、窓の外の中庭のわずかな明かりを背にした女子生徒。オレンジ色の長い髪。

凛々しく、整った顔立ち。

スラリとした脚で、室内に踏み込み、後ろ手に扉を閉める。

呆氣にとられた様子の伊庭をしり目に、物珍しそうに回りを見回す。

突然の珍入者の僅かな動作にも、支配されてしまうような空気。

伊庭は、持ち主でありながら、場に取り残されたように立ち尽くしていた。

パッチリとした瞳をゆつくりと動かしながら、

「暗室はないのか？」

と、訊く。

伊庭は、動揺を隠せない声で、

「暗室？」

少女は片手を腰のくびれに当てる。

「そうだ。ここは写真部だろう？」

「あー……」

落ち着かせる為か、意味の無い音を発してから、

「…暗室はここには無いよ。東校舎の方に、あるんだ。昔は、ここだったみたいけどね」

と、伊庭は幾分か落ち着いた声で言った。

少女は口をへの字に曲げた。

「…そうか。面白くないな」

少女は自然な動作で、オーバーに肩をすくめた。

「まあ、いい。私の名前は隼瀬美優貴。お前が伊庭悠志だな？」

白州に臨んだ町奉行のように、力のある眼。

美優貴の眼光に、伊庭は体を固くする。

「…そうだよ」

「そうか。では単刀直入に訊こう」

美優貴は言葉を切った。

沈黙。

伊庭は沈黙が耐えられなくなった様子で、美優貴を見た。

警戒する声で、

「何だい？」

「お前は、松広美さんの事をどう思っている？」

寝耳に氷水を打ち水されたような顔の伊庭。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

ポカンとした声で、伊庭は繰り返した。

「……………何？」

「聞こえなかったか？では改めて訊こう。お前は松広美さんの事をどう思っている？」

伊庭は、ズレてもいない眼鏡の位置を直し、

「どうって言われても…。いきなり、何なんだい？」

と、わけが分からないといった様子で頭をかく伊庭。

「黙れ」

真冬の湖面を思わせる声。

凍り付いたように動作を止めた伊庭を、美優貴は猛禽類の瞳で見定める。

「要領を得ないな。はっきりと答える。好きか、嫌いか、興味がないか」

伊庭は、美優貴から視線を逸らし、テーブルに両手をついた。

目を瞑り、指先でトントンと机上进行を叩く。

「…いや、どうしてそんな事を、君に言わなくちゃいけないんだ？」

と、冷静さを取り戻すような声で訊いた。

美優貴は皮肉っぽく口元を歪め、

「ほう？」

「そうだろう？ 第一、君は一体何なんだ？ いきなり現れて…。失礼にもほどがあるんじゃないか？ それに、俺は君と松さんの関係も知らないしね。どうして初対面の、全く知らない人に自分の個人的な感情を言わなければならんだ？ 答える義務も義理も無いよ」

言い終わると、伊庭は顔を上げて美優貴を見返した。

落ち着きを取り戻した様子の伊庭。

挑戦的な表情で視線を受け止めて、

「理屈だな。面白くない。それに、私には答えられない方が不思議だな。何故、答えられない？」

「だから、さっきも…」

「『相手が誰』であれ、『答えられない理由』を訊いているんだ」と、伊庭の言葉を美優貴は遮る。

伊庭は、僅かに視線を逸らし、詰まったように、

「それは…」

「何故答えられない？」

美優貴は足を踏み出す。

「相手が誰であろうとも、自分の気持ちに後ろめたい事が無ければ、答えられるはずだ。自分の意志に揺らぎが無ければ、躊躇ためらわなはずだ。お前は、何に臆している？ 何を恐れている？」

伊庭は、美優貴の動きに合わせ、体をずらす。椅子は斜めにずれ、伊庭は体を右に向けた。

美優貴は伊庭の前に立ち、見上げる。

「何もお前の気持ちを言い触らそうとして訊いているわけではない。さあ、1つ不安を解消したぞ。何故、答えられない？」 全て

を照らすような、力強い眼光。

揺るぎない言葉。

伊庭は、戸惑った様子で視線を逸らす。

「…そんな事は、他人に言うような事じゃない」

絞り出すような伊庭の声。

「ごまかすのか。何故、ごまかす？そんなに後ろめたいか、人に恋する事が？そんなに恥ずべき事か、愛情を抱く事が？気持ちを他人に知られる事が罪だとも言うのか？」

刹那。

美優貴の右手が、伊庭のネクタイを掴んだ。

獲物に襲いかかる隼のように速く、強く。

容赦なくネクタイを引き寄せ、叫んだ。

「人に恋して何が悪い！！！」

空気が、割れる。

大気が、痺れる。

風をはらい、大地を裂く雷鳴のような気迫。

万物を粉塵とするかのような気炎。

蛍光灯の光が、不調を示すように瞬く。

風が吹いたように、細やかな埃が舞い、窓ガラスがガタガタと鳴った。

美優貴と伊庭は、10cmも顔が離れていない。

隼の眼と化した瞳が、射殺するように伊庭を睨む。

人工の光が薄らぐたびに、美優貴の瞳が存在感を強くする。

伊庭は、獅子に追い詰められた草食動物のような、青ざめた表情になり、やがて、腰が抜けた様子で椅子に体を落とした。

脚が震えていた。

ネクタイを握ったままの美優貴を、取り付かれたように見上げている。

生唾を飲み込んだ喉仏が生々しく動く。

蛍光灯が、羽虫のように小さくジーツと音を立てている。

美優貴はスツと両目を細めた。

「…文字通り、『腰抜け』だな」

静かに言って、ネクタイを離れた。

力無く、布がダラリと垂れる。

美優貴は伊庭に背中を向けた。

マントのように、長い髪を翻す。

「もういい。邪魔したな」

美優貴は、ドアに向かって歩き出した。

決然と、颯爽とした足取り。

蛍光灯の不調は直らない。

美優貴はドアノブに手をかけた。

瞬間。

「…ま、待ってくれ」

沈黙を守っていた伊庭が、上擦った声を出した。

声の具合を整えるように、咳払いをしてから、

「待ってくれ」

と、再び同じ言葉を美優貴に投げ掛ける。

美優貴の目の前には、ドレスに身を包んだオードリーが、可憐な微笑みを見せている。

『ローマの休日』のアン王女。

背中を向けたまま、美優貴は静かに応じた。

「どうした？」

伊庭は、結び目が小さくなったネクタイを解いた。

「…分かった。言うよ」

シャツからネクタイを引き抜き、両手に持つ。

腿に肘をつき、手元をジッと見つめる。

ネクタイを握る。

伊庭は口を開いた。

「…俺は、松さんの事が好きだ」

背を向けたままの美優貴。

寂しそうな笑顔を形作り、ノブを握っていた手をゆっくりと開いた。

「…そうか」

美優貴はパツと室内を振り返った。

伊庭が顔を上げると、ドアの前には生き生きとした表情の美優貴がいた。

晴れやかな顔で、美優貴は片手を腰にあてがう。

「それならそうと早く言え。手間をかけさせるな！」

間。

美優貴の変わり身の早さに付いていけない様子で、伊庭は口をポカンと開ける。

「…は？」

腕を組み、スタスタと伊庭に近付きながら、

「しかし、お前はどうも根性が足りないな。それに、度胸も足りない。このままでは、振られる事は目に見えているぞ？」

伊庭の横に立ち、顔を覗き込むように、上半身を倒す。

明るい茶色の瞳に、目を丸くした伊庭を映して、

「分かっているのか？」

間。

「はあ」

咎めるように顔をしかめて、

「腑抜けた返事だな…。実に頼りない。よし、仕方ない！」

パツと身を起こし、鳩が豆大砲を喰った顔の伊庭を見下ろす。

美優貴は高らかに宣言した。

「私が特訓してやろう！」

言葉をなんとか引きずり出すように、伊庭は、

「…何の？」

ニツと挑戦的に微笑み、美優貴は答えた。

「告白に決まっているだろう！」

美優貴の言葉に感銘を受けたように、蛍光灯は不調の状態を脱し

た。

無音の部室棟3階の廊下。

写真部の部室から、美優貴と伊庭の声が漏れていた。

美優貴は、伊庭の土曜日と日曜日の予定を訊いている。

2階と3階をつなぐ階段に、なな達4人はいた。

守人以外の3人は、腰を降ろしている。

有喜は頭をかきながら、

「…なるほどなるほど。こう、転んだか」

と、普段よりも重い調子で言う。

有喜の右隣の高杉は、アイアンクローで自分の額を掴み、真一文字に口を結んでいる。

踊り場に立った守人は、沈痛な面持ちで目を伏せていた。

握られた拳が、痙攣したように震えている。

高杉の右横のななは、プリントを両手でつまみ上げ、ジッと見つめていた。

美優貴達が退室する気配を察して、移動するまでの数分間、4人は言葉を発さなかった。

美優貴と伊庭が写真部の部室から出た頃。

図書館では、業を煮やした図書委員にりる香が叩き起こされていた。

第22幕：愛と青春の土曜日

土曜日、正午。

部室棟屋上。

「遅いぞ！」

と、屋上の中央に仁王立ちした美優貴は伊庭を叱責した。

屋上の重いドアを開けたまま、伊庭は動揺した様子で、

「…何で開いてるんだい？」

と、美優貴に訊く。

「企業秘密だ！」

言い切った表情の美優貴。

納得していない様子で、周りを見る伊庭の肩に、ニユツと人間の
手が伸びる。

「まあまあ、そう言わないで下さいよ。先輩」

肩を叩かれ、振り返った伊庭の視線の先に、ニコニコと微笑んだ
有喜がいた。

伊庭は表情を固くして、

「酒匂川っ？」

「警戒しないで下さいよ。今日の私は安全安全」

そう言って、ニヤリと口元を吊り上げる。

警戒を解いていない顔つきで、伊庭は有喜の笑顔を眺める。

太陽の真下で待つ美優貴は、

「ぐずぐずするな！早くしろ！」

と、怒声を飛ばす。

「はいっ！」

条件反射のような返事をして、伊庭は屋上へ足を踏み出した。

ドアに寄りかかり、2人の様子を眺めながら、有喜はのんびりと
鉛筆をくわえた。

「よし。では始めるか」

制服姿の美優貴は、片手をウエストに当て、もう一方の腕を広げる。

「いいか？今日は土曜日だ。学校に来ている生徒は部活動に参加している生徒が大部分を占めている。ここは屋上。右は中庭、左は体育館だ。見られる心配はないだろう。声が聞こえたとしても、どこかの部活の掛け声に消される。心置きなく特訓できるぞ」

美優貴の正面に立つ伊庭は、キョロキョロと周りを見回す。

伊庭の左側の眼下には、無人の中庭が細長く広がる。

右側には、大きなアーチを描いた体育館の屋根。

風雨に晒された赤い屋根は、黒くくすんでいた。

屋根の向こうに、野球部の使用するグラウンドの照明が僅かに顔を出していた。

室内外を問わず、体育会系の腹から出している声や、ボール等の音が屋上に届いていた。

「ちなみに、場所の提供はうつちゃんだ」

「えつ、企業秘密はっ!？」

「ああ」

伊庭の指摘に、うつかりした様子で口を開き、

「すまん、うつちゃん。言ってしまった」

と、ドアに寄りかかった有喜に言葉を投げる。

「いいいいいよー」

と、軽い口調で有喜は手を振る。

美優貴のテンポに慣れない様子で、伊庭は眼鏡の位置を直した。

「よし。では始めるか」

「…どうするんだい？」

「ん？」

美優貴は軽く小首を傾げ、

「私が広美さんの役をやる。お前は自分自身の役をやる。それ以外に方法は無いだろう？」

「…なるほど」

と、ぎこちなく頷く伊庭。

満足げに頷き、

「よし。では、私は適当な所に待機する。お前は、私の所まで走ってこい。そして告白する。分かったか？」

伊庭は頭をかき、

「流れは分かったよ。…でも、走るのは必要かい？」

「当たり前だ」

キツパリと言い切り、美優貴は言葉を続けた。

「告白する時は、走って現れると、相場が決まっている！」

ドアが開けられた。

暖かい日差し。

穏やかな微風。

伊庭は頭を巡らし、一点に視線を止める。

右側―体育館側―の手すりの奥の方に、美優貴が独り立っていた。右手を手すりの上に添え、遠い目をして景色を眺めている。

伊庭は渋い顔をしてから、ヤケになったように走り出した。

美優貴は駆け寄った伊庭を見やる。

伊庭は大きく息を吐き出し、

「…あつ」

「カット」

出かけた言葉を断ち切られ、伊庭は拍子抜けした顔で、

「…何だい？」

美優貴はジッと伊庭の体を見回し、

「ネクタイが曲がっている。それに、ブレザーのボタンが1つ外れているな。髪型も少し崩れている。整えて、最初からやり直せ」

「そんな…」

と、自分の服装を確認しながら伊庭は言う。

美優貴はため息をついて、

「だらしな格好で告白されて、喜ぶ人間がいるか？身なりには
気を使え。自分が思っている程、人は自分を見ていないという言葉
があるが、1対1の時にはおかしな点が目につくものだ。さあ、や
り直せ」

「…分かったよ」

伊庭はドアへの道を小走りに帰りながら、

「…何でこんな事になったんだ？」

と、小さく漏らした。

伊庭は建物内に入ると、屋上のドアを閉めた。

ひんやりとした空気。

薄暗い中、服装の乱れを直す。

有喜はいなかった。

髪を直し、伊庭はドアノブに手をかけた。

ドアが開かれ、光が部屋棟の中に入る。

陽光の中、細かな埃が踊っている。

伊庭は、美優貴に向かって駆け出した。

美優貴の後ろで立ち止まり、髪を片手で整える。

太陽の光を受けた長い髪をなびかせ、美優貴は振り返った。

「あつ、伊庭先輩」

はにかんだ笑顔。

照れくさそうに、幾分か顔を俯かせ、両手の指先を合わせる。

「えっと、あの、私に用事って何ですか？」

先ほどの美優貴の口調では無かった。

照れた広美を思わせる口調。

落ち着きなく、顔を上げたり下げたりしている。

伊庭は驚いた様子で頭をかき、

「…ああ、それなんだけど」

「カット」

と、威厳ある声で美優貴は遮った。

目を一層丸くした伊庭。

腕を組み、

「テンポが悪い。まず、相手の方が先に来ているのだから、自分から話かけるのが筋だ。呼び出されて、不安がっているだろうしな」
流れるようにして、美優貴は言葉続ける。

「服装は問題無い。髪を直す前に、まず言葉をかける。」

「ごめん」

「遅くなった」

「待ったか」

のように簡単なものでいい。その後、身だしなみを簡単に確認しろ。あまりに服装が酷い時は、この限りではないがな。…最初から、もう一度だ」

仕上げとばかりに、伊庭を視線で射抜く。

圧倒されたように、伊庭は頷いた。

「…はい」

テイク9。

「カットッ」

「…今度は何が？」

「言葉がよくないな。凝りすぎて、逆に分かりにくい。それに長い。洒落た映画じゃないんだ。もっとシンプルにしろ」

「…そうかな」

「台詞に意識が集中すると、言葉に込める気持ちが薄れる。飾り立てるよりも、気持ちを素直にさらけ出せ」

「…さらけ出す、か。分かったよ」

「だが、初めて声をかけた時のくだりは良かったな。隣町の運動公園か」

「そう。中央広場の噴水の前で…。大会の日だったんだよ」

「出会いの場所か」

「そうだね。…彼女を意識して、初めて、声をかけた場所だよ」

「そうか。…だが、長いな。最初からやり直せ」
「…分かったよ」

テイク16。

「カット」

「…今度は、何が？」

「まだ照れがあるな。それでは相手に伝わらん。強いて言うなら、『恥じらう気持ち』が伝わるな。伝えるべき気持ちは『恥』ではない。『愛』だ。背を曲げるな。もっと胸を張れ。さあ、もう一度だ」
「…分かりました」

テイク29。

「カット！」

「…今度は、何が、まず、かつたんでしょう、か？」

「疲れを堂々と見せるな。お前は告白する相手の事を考えているか？相手は私ではない。広美さんだ。それを忘れるな」

「しかし、コーチ…！」

「しかし何もない。私は演じる事しかない。これから先はお前の頭にかかっている。イメージしろ。彼女の姿を、声色を！」

「イメージ…！」

「出来ないか？」

「…いえ。やってみせます！」

テイク35。

「カットオ！」

「…何が、足りないん、で、しょうか？」

「全てだ。いいか。身を焦がす程に熱く！虚構等有り得ぬ程に白

く！決闘に挑むが如く堂々と！それが告白の作法だ！頭に叩き込め
！」

「熱く。白く。堂々と……」

「そうだ。どれが欠けてもいけない。どれが足りなくてもいけない。
忘れるな！」

「分かりました！」

テイク48。

太陽は夕日へと姿を変えていた。

学内に聞こえていた声援やかけ声は、昼よりも薄らいでいる。

美優貴は静かに口を開いた。

「カット」

愕然とした表情の伊庭。

美優貴はソツと伊庭の肩に手を伸ばした。

伊庭は動揺した様子で、自分の肩と美優貴の顔に視線を動かす。

美優貴は優しく微笑み、

「……よくやった」

間。

伊庭は言葉がうまく飲み込めない、といった面持ちで、

「……コーチ？」

「合格だ」

柔らかい視線。

見上げる美優貴の視線を受け、伊庭の目元に透明の液体が溜まる。

眼鏡を外し、指先で両目を拭う。

「あ、ありがとうございます……」

感情を抑え、ブツ切れになった謝辞。

美優貴は伊庭の肩から手を離れた。

「だが、これで終わったわけではない。今日は、ほんの小手調べ
だ」

美優貴は手すりに両手をかけた。

太陽は夕陽へと姿を変えようとしていた。

そよぐ風が、美優貴の髪を撫でる。

満足げな横顔。

静寂。

伊庭は美優貴の横顔を見つめ、

「…どうして、俺にここまでしてくれるんですか？」

と、長い間の疑問であったような口調で訊いた。

「ん？」

美優貴は真正面から顔を動かさずに、

「簡単な事だ。私にとって、広美さんは大切な人だからだ」

「大切な…？」

「そうだ。だからこそ、幸せになつて欲しい」

美優貴は伊庭の方に顔を向けた。

真つ直ぐに、真剣な顔で伊庭を見上げ、

「お前の恋がどうなるかは、私にも分かん。ただ、私は半端な気持ちのままだて欲しくないのだ。告白もなく、ただズルズルと。半端な思いは彼女を苦しませる。真綿で首を絞めるようなものだ。苦しむ彼女は見たくない」

「コーチ…」

美優貴はニツと微笑み、

「要するに、さつさと決めろという事だ。中途半端は面白くない。しかし、面白くないのに、気になって仕方ないのでな。どうせなら、万全の状態で碎けてしまえ！」

「碎けてっ？」

と、強烈なフックを喰らったような顔で伊庭は聞き返す。

「当たり前だ！私から見れば、お前にはまだ広美さんは任せられん！」

と、熱を帯びた演説者のように片手を振り回して、美優貴は声を張り上げた。

屋上と部室棟内をつなぐ扉。
扉を押し開けて、有喜は屋上へと姿を現した。
有喜の視線の先には、演説を続ける美優貴と右往左往する伊庭の姿。

突然、有喜は何かに気がついた様子で背後を振り返った。

出入り口の部分で隠れた、屋上の北端には貯水タンクがあった。
白く、薄汚れた円筒状の物体。

その前に、守人が静かに立っていた。

「あれあれ？どこにいるかと思ってたら、そんな所にいたの？」

と、守人に近付きながら、有喜は訊いた。

一礼の後、

「はい。タンクの後ろに」

「お疲れ様様」

ピコピコとくわえた鉛筆を上下させて、

「ちよつと見ない間に、完全な師弟関係になってるね。あの2人

どんな熱血指導したの？」

と、美優貴達を振り返る。

「伊庭先輩はあんなキャラじゃなかったハズなんだけどなあ」

守人は姿勢を正したまま、感極まった様子で

「それはそれは熱いご指導でございました。まさしく太陽の如き

……」

守人の言葉は、自身の内ポケットから発生した振動音に遮られた。

守人は有喜に対して、深く頭を下げると、

「失礼致します」

と言つて、有喜に背中を向けた。

有喜から離れつつ、守人は携帯電話を取り出す。

薄く、黒い電話を耳に押し当て、

「はい。……先ほどの件についてですか？それでしたら……」

と、静かな声で応答する。

有喜は、守人の背中を見つめ、動向を楽しむように口の端を吊り上げた。

第23幕：特訓の名は

土曜日、午後8時。

ななは、自分の家から歩いて5分程の場所にあるコンビニエンスストアで携帯電話の通話ボタンを押した。

「もしもし」

ななの出で立ちは、黒い長袖のTシャツに、インディゴカラーのジーンズ、白いスニーカー。

シャツには大きなハートマークが描かれ、中央から色が白と黒に別れている。

ギザギザの線で分かれたハート。

白い側には黒文字で『丁』、黒い側には白文字で『半』と書いてあった。

「あつ、もしもし？りる香だよ」

と、ななの電話の向こうから、りる香の屈託の無い声が話かけた。ななは、目の前に並んだスナック菓子の棚をジッと眺めながら、

「うん。分かってる。何か用？」

「うん。ななって、明日は何か予定あるの？」

「予定？」

ななは、棚に伸ばしかけた手を止めた。

「…何もないけど、どうかしたの？」

と、りる香に答えて真っ赤なパッケージの袋を掴む。

「良かったあ。だったら遊ばあよ」

「別にいいわよ」

と、ななは答えて、真っ赤な袋の横にあった、緑の袋を掴む。りる香は嬉しそうな声で、

「それじゃあ明日、1時に学校の近くにある神社に集合ね」

「…え？」

ななは、足元に置いていたカゴの中に2つの袋を入れ、そのまま

鼻の頭をトントンと叩く。

仏頂面で警戒するように両目を細め、

「…何で神社なの？」

「うん。えつとねえ、美優貴ちゃんが神社集合って言ってたんだあ。手伝って欲しい事があるんだって」

「隼瀬さんも来るの？」

「そうだよ」

「何を手伝うの？」

「分かんない」

「…『手伝う』んじゃ、遊びじゃないんじゃない？」

「あつ、そうだねえ」

と、驚いた声のりる香。

ななは疲れたようなため息をつき、

「全く、この娘は…」

と、呟いた。

「なな、何か言った？」

と、りる香の脳天気な声。

「何でもねーわよ」

ふうんと言ってから、りる香は、

「それじゃあ、明日１時に神社ねえ。あつ、遅刻厳禁だつて！」

ななは、あーと気の無い声を出してから、

「…了解」

と、やる気の無い返事をした。

「じゃあ、明日ねえ。バイバーイ」

りる香は、子どもっぽく挨拶と共に電話を切った。

ななは、電話を折り畳むとジーンズの尻ポケットに捻り込んだ。

無愛想な顔と目つきで、商品棚の向こうを睨む。

棚の向こう、店の壁際に並んだ透明の扉の冷蔵庫の前では、ギターケースを背負った２人組の若い男が、大声でだべりながら品定めをしていた。

2つの背中、2つのケースから、ななは視線を目の前の棚に戻した。

両手を広げ、端から1つずつ袋をカゴの中に放り込む。

最上段の商品を全種類制圧し、2段目に標的を移した時に、ななは呟いた。

意識せずに口にした様子で、

「…嫌な予感しかしねーわね」

円舞学園は、小高い丘が敷地となっている。

頂上には校舎が建ち並び、傾斜を削り平地にして、グラウンドや野球場等が囲むように周りに密集していた。

敷地の下、丘の上の校舎の眼下には、都内北西部に位置する街並みが広がっている。

学園の東側、丘の傾斜が始まる辺りには神社があった。

天照大神を祭神とする神社の周りには、広葉樹とブロック塀。

住宅街の一面にある広い境内は、雄大な印象を与える木々と塀によつて外界の騒音が薄らいでいた。

アイボリーの塗料を塗られた鉄製の大鳥居。

石畳の参道。

剥き出しの地面。

落ち着きの無い鳩の群。

敷地の左側には、シャッターの降りた平たいガレージ。

石造りの二の鳥居から本堂までの20m程の間には、10数段の短い石段。

段の上には、厳めしい顔を風雨に削られた狛犬が鎮座していた。

口を開けた狛犬の後ろには、東屋のような屋根に紫外線を遮断された手水が水を満たしている。

「どういう事？」

「何がだ？」

「何がじゃねーわよ」

日曜日、午後1時。

力強く精巧な彫刻が施された本殿。

その本殿、狭いアパートの浴槽くらいの大きさはある寶錢箱の前に美優貴、なな、りる香、守人はいた。

4人に向かい合うようにして、伊庭が不安げな様子で立っていた。白いパーカーに両手をつつまんだままのななは、

「どういう事が説明しろっつーのよ」

と、斜めに被った黒いキャスケットの下にある無愛想な瞳を、美優貴に向けて、言った。

ななの右隣では、パステルピンクの春物のワンピースに身を包んだりる香が、口を半開きにさせて本殿を覗いている。

美優貴は腕を組み、口をへの字に曲げた。

美優貴の左後ろには、墨を流したように黒い執事服を身にまとった守人が、樹木のように静かに立ち尽くしていた。

「そうか。よし、では説明しよう」

「…その前に、ちよつといいかな？ いや、いいですか？」

と、軽く片手を上げて、伊庭が口を開いた。

伊庭はベージュのTシャツに長袖の赤いチェックのシャツ、ジーンズにスニーカーの大学生然とした服装。

「別に言い直さなくても…」

と、呟いたななの言葉をかき消して、

「どうした？」

と、美優貴は訊く。

伊庭は視線をエレベーターのように上下させて、美優貴を見つめる。

「コーチ…。凄い格好ですね」

と、感嘆の息と共に感想を吐き出した。

「ん？そうか？」

そう言って、美優貴は自分の体を確認した。

純白のスーツ。

漆黒のシャツ。

ウルトラマリンブルーのネクタイ。

あみだに被った白いソフト帽。

磨き上げられた白い革靴が、眩いばかりに光を反射している。

全て男性用の物だったが、オーダーメイドらしく、体に合っていた。

「…確かに凄いね」

と、ぶかぶかのキャスケット帽のなな。

ななの帽子には、陰陽太極図のバッチがつけられていた。

昨夜のＴシャツと同じように、『丁』と『半』の文字が取り込まれたデザインのバッチだった。

美優貴はウエストに手を当て、

「そうか？私の普段着は、いつもこんな感じだぞ」

と、何でもないような口振りで言う。

「どこの探偵物語よ」

「まあ、いいだろう。話を本題に戻すぞ。今日、ななとりる香を呼んだのは他にもない。ここにいる伊庭悠志の練習に付き合ってもらう為だ」

美優貴は伊庭を手で示し、

「昨日、私と伊庭は熾烈を極める特訓を敢行した。その特訓の結果、伊庭の実力は格段に上昇したと言える。しかし、いくらイメージで補えるとは言っても、私1人では限界があつてな。…そこで、いつその事、相手を限定しない方法をしたらどうかと進められてな。言うならば、告白の乱取り試合のようなものだ」

ななは面倒くさそうに目を細め、

「…一応訊くけど、誰の提案？」

と、誰の提案が見当がついているような口調で訊いた。

「うつちゃんだ」

と、単純明快な美優貴の答え。

帽子のつばを目深に引き下げ、

「やっぱりあの人か…。それで、先輩は来てないの？」

と、ななは訊く。

「ああ。何か用事があるらしい」

声には出さずに、

「逃げたな」

と、口を動かす鉄仮面のなな。

突然。

本殿の雨樋から繋がった、大型の鉄製の天水桶を覗き込んでいた
りる香が、素っ頓狂な声を出した。

「あつ、そうだぁ！」

境内の鳩が慌てた様子で飛び立ち、全員の視線がりる香に集まる。
りる香は顔を美優貴に向けて、

「美優貴ちゃん。どうして、今日は神社に集まったの？」

と、二ヘラと微笑んだ。

美優貴は不敵に微笑み、

「それには、もちろん理由がある」

と、言って前に向かって歩き始めた。

伊庭の横を通り過ぎ、

「…遙か太古の昔から、人は神や仏に、祈り、願った。その方法
は種々様々だ。また、その内容も種々様々。それは、日本も世界も
変わらない」

美優貴は足を止めた。

損傷が激しい狛犬が並ぶ線上。

その先には石段が下に向かって下りている。

美優貴は帽子を頭から取り、胸に当てた。

白いスーツの背中に、オレンジの髪が映える。

超満員の観客が押し寄せた舞台の上の役者の様に、美優貴は言葉

を続けた。

「お百度参りというものがある。百度の祈願で成就を望むというものだ。古くから親しまれてきた参詣方法だと言えるだろう。無論、今日この時までの歴史の中で、恋愛成就を願った者も少なくない。ならば！」

帽子を持つていない方の手を振り上げ、声を張り上げる。

「人が紡いだ愛の伝統、ないがしろには決して出来ない！先人達の恋心、感じぬ事こそ大罪だ！だから私は考えた。この志、どうにか生かせはしないかと。そして！思い付いたのだっ！」

バツと身を翻し、なな達に演者は顔を向けた。

「告白の特訓！お百度参り！この両者を組み合わせる事を！名付けて！」

激流のように激しく両手を広げ、

「『お百度告白』！！」

美優貴の凜とした声が、雲一つ無い青空へ向かって拡散する。

間。

間。

間。

雀が1羽、手水の水を飲みにやってきた。

伊庭は、時限爆弾の解体を命じられた一般市民のように生唾を飲み込み、

「…それは、一体どのようなもののですか？」

美優貴は伊庭に顔を向け、

「やり方は簡単だ。手順はお百度参りと変わらん。違う点は、本殿の前に告白する相手が立っている事と、口にするのが愛の言葉という事だけだ」

ななは、ポケットからゆっくりと右手を抜き、鼻の頭をトントンと叩いた。

大儀そくに口を開き、

「…つまり、神社なのに参拝しねーで、人間相手に告白する練習

するワケね。参拝形式まで使ってるっーのにね」

と、眠たげな瞳を美優貴に向けた。

美優貴は自信に満ち溢れた顔で見返し、

「そうだ！」

「罰当たり」

「どこがだ！」

ななの冷淡な言葉をバツサリと断ち切り、猛禽類の眼で、

「百度の願い！百度の告白！覚悟を見せる意味では変わらない！目の前で特訓を行う事で、神に仏に精霊達に！思いの程が見せ付けられる！一切の迷い無き者の覚悟！罪を犯すでも無いその覚悟！無下にする者がどこにいる？！」

威厳ある声が境内に広がった。

雀は小さく鳴いて、飛び立った。

間。

美優貴は満足したように口を結び、帽子をあみだに被り、快晴の空に顔を向けた。

伊庭は痺れたように立ち尽くしている。

りる香は、舞台に圧倒された様子でポカンと口を開けていたが、守人の異変に気がついた様子で、

「あれえ？影山君、何で泣いてるの？」

守人はハンカチで顔を覆い、

「…いえ。…何、でも…」

と、感涙にむせんだ涙声を出す。

その様子に、ななは帽子を被り直し、全身から絞り出すような深いため息をついた。

第24幕：境内問答

伊庭は走った。

水を打ったような静けさの中、石畳に軽快な足音をたてて境内を駆け抜ける。

息を切らす。

石段を駆け上がり、二の鳥居をくぐり抜ける。

シャツを翻し、髪が扇風機を前にしたように流れた。

本殿の前には1人の少女。

後ろ手に指を組み、体を前後に揺らしている。

伊庭は少女の前で立ち止まった。

両膝に手をつき、肩を上下させて、酸素を肺に送る。

決意を固めるように、呼吸を止める。

グツと身を起こし、真正面をしっかりと見据える。

「付き合って下さい！」

「いいですよ」

伊庭は拍子抜けした様子で、がつくりと肩を落とした。

その前では、りる香がニコニコと微笑みながら小首を傾げていた。

伊庭は非難めいた顔を美優貴に向けた。

「…コーチ」

「ん？」

本殿の横にある頒布所はんぷしょの前。

ガラス戸を挟んで、向かって左側には御守り等を販売するスペース。

右側には木製のベンチ。

ベンチには美優貴とななが腰掛け、ベンチの横には守人が立っていた。

「どうした？」

と、腕と脚を組んだ美優貴。

「いや、どうしたと言うか…」

言葉を探している様子で、伊庭は頭をかき、

「何か、違い過ぎませんか？ 雰囲気が…」

「だから、始めに言っただろう。乱取り稽古だ、と」

美優貴は、高すぎず低すぎない、清潔感を感じさせる声で続けた。

「当日、相手がどのような体調、心境かは分からん。自分の固定されたイメージのみを意識するな。昨日とは違うんだ。あらゆる状況に慣れる」

伊庭は隣でニコニコと微笑むりる香と、美優貴を交互に見やり、

「はあ」

「第一、りる香で違和感を感じるくらいだと、ななになったら目も当てられない状態に陥るぞ」

「どーゆー意味よ」

伊庭は、愛想も何も無いななをジッと見つめ、

「…なるほど」

「どーゆー意味です」

「よし、続ける。後、90回以上残っているぞ」

「…はい」

本殿に背を向けて、スゴスゴと立ち去る伊庭の背中を眺めてから、りる香は美優貴達に向かって、

「何だか、告白されるのってドキドキするねえ」

と、呑気に感想を伝える。

「ところで、先輩は誰に告白するの？」

「ん？」

りる香の問いかけに、美優貴は脚を組み直して、

「…いや、誰にかは決まっていらないんだ。彼は今年の文化祭でクラス劇の主演をやりたいらしくてな。その為に、度胸をつける練習をしているワケだ」

と、りる香から視線を逸らしながら、饒舌に答えた。

「へえ」

りる香は目をパチクリと見開き、

「今から練習するなんて気合い入ってるねえ。でも、大勢の人の前で告白するんだから、当然なのかなあ。私には出来ないよう」

と、独りで納得したように頷き、賽銭箱に寄りかかった。

その様子を見て、

「…りる香を見ていると不安になるな」

と、美優貴は声の大きさを落として言った。

目深にかぶった帽子の下から、

「…昔からよ。いつ誘拐されても不思議じゃねーわよ」

と、淡々と答える。

「近年、稀にみるスピードで誘拐されるだろうな」

「近年、稀にみる手軽さで誘拐されるわね」

美優貴達の会話をよそに、りる香は賽銭箱の中を覗き込み始めた。蒼天を綿のように白い雲が、陸亀のようにノロノロと流れていく。木々は木陰、屋根は物陰の形を作る。

大鳥居の前では、伊庭が何か物事に考えを集中しているような顔で準備体操をしていた。

静寂。

ベンチに浅く腰掛け、背もたれに背中を預けきつたななが、ポツリと言った。

「…静かね」

深く腰掛け、背筋を伸ばして座っている美優貴は、

「そうだな」

と、境内を眺めながら答えた。

石畳の上を、2羽の鳩が落ち着きのない仕草で歩いている。

美優貴達の背後の頒布所は、物音一つしなかった。

ガラス戸を通して見える室内にも、電気はついていない。

「神主さんとかも、いないのかしらね。静か過ぎると思うけど」

美優貴は、人の気配の無い建物の壁を見やり、

「日曜だからな。どこかに買い物にでも行っているのだろう」

と、気に止めていないような口調で答えた。

大鳥居の下で、伊庭が決心したように身構えた。

「…ねえ」

「ん？」

「どうして諦めたの？松先輩の事」

美優貴の横に立つ守人の表情が、固くなった。

伊庭が駆け出した。

地面を蹴る乾いた音が、静寂を蹴破る。

異変を感じた鳩が飛び立ち、りる香が慌てた様子で賽銭箱覗きを止めた。

伊庭の告白とりる香の返事が、再び行われた。

伊庭の問いかけるような視線に、

「さつきより、キレがいいな。その調子だ」

と、美優貴は答える。

「はいっ」

伊庭は自信がついた様子で答え、来た道を戻っていった。

りる香は、石畳の上を動物園の熊のようにグルグルと歩き回り始めた。

美優貴は、静かに口を開いた。

「…早過ぎる、か？」

「そうよ。松先輩が伊庭先輩の事を好きだって言う確証は無いんですよ？」

と、ポケットに両手をつっ込んだままの状態のなな。

「確証はある」

「あるの？」

「ああ。…私の『隼の眼』は誤魔化されん。彼女は伊庭に恋をしている。確実に」

ななは、チラリと美優貴を見やり、

「『隼の眼』？」

美優貴は真正面を向いたまま、流れるように、

「物の例え、とても思ってくれていい。だが、私には分かるんだ」
白い帽子に手をやり、膝の上に置いた。
髪を整えながら、

「彼女は伊庭に恋をしている。また、伊庭も彼女に恋をしている。
ならば、その恋を叶えさせる事が私の役目だ。私は、愛する人の悲
しむ顔は見たくない。それに…」

美優貴はななに顔を向けた。

穏やか微笑み。

優しい色合いの瞳。

薄い影の中、美優貴の明るい茶色の瞳が浮かび上がるように目立
った。

淀みの無い声で、

「愛し合う2人の間を邪魔するのは、野暮と言うものだろう?」

ななは、何事かを言おうとして口を開きかけたが、

「美優貴ちゃん!見て!」

という、りる香の大声に遮られた。

「どうした、りる香?」

2匹並んだ狛犬。

威嚇するように口を開けた狛犬の下で、りる香が片手をピンと伸
ばし、ピョンピョンと跳ねていた。

「狛犬の口の中で、10円見つけた!」

と、硬貨を手に、興奮した声のりる香。

楽しそうに白い歯を見せて、

「それは大発見だな!まだあるかもしれないぞ!」

と、勢い良く立ち上がり、美優貴は守人に帽子を手渡す。

国王の王冠を預けられた重臣のように、恭しく受け取る守人。

美優貴はりる香の方に向かって歩き始めた。

美優貴の背中をぼんやりと眺めて、ななは呟いた。

「…本当にそれでいいの?」

ぶっきらぼうな、小さな疑問符。

数秒の間。

守人がゆつくりと口を開いた。

「…お嬢様の名誉の為に、出過ぎた行為ではありますが、少しお話しさせて頂きます」

遙か頭上に位置した守人の顔の方に瞳だけ動かし、ななは言葉の続きを待つように、見つめた。

狛犬の周りでは、2人の少女が宝探しに夢中になっている。

軒下の陰の中、飾られた騎士の鎧のような姿勢で、黒髪の執事は言葉を続けた。

「…先ほど、お嬢様が『隼の眼』と仰いましたが、これは隼瀬家の当主に代々伝わる力の一つです」
間。

「…代々？力？」
と、渋面のなな。

片手の指先を鼻の頭に当て、視線の先の石畳を睨みつける。

「…影山君、漫画の読みすぎじゃない？受け継がれし力？呪われた血族とでも言うワケ？その力で復活した魔王を倒すとも言うの？」

「申し訳ありません。私は、あまり漫画は読んだ経験はありませんので、どうお答えすればいいのか…」

ななの皮肉に、守人は律儀に答え、

「鈴森さんの言いたい事は理解できます。あまり、現実的な話ではありませんから」

「現実も何も、ファンタジー100パーセントじゃない。特殊能力の類は、義務教育の間までしか信じちゃいけないのよ」

「それでも、信じてもらうしかありません。どうか、お嬢様にはそのような力があると思って聞いて下さい」

断固とした守人の言葉。

ななは鼻の頭に指先を当てたまま、叩く事を止めた。
目線だけを斜め上に動かす。

真剣な守人の横顔に、折れた様子で、両目を正面の石畳に戻した。

「…分かったわ。とりあえず、そういう事にしておく」

「ありがとうございます」

一礼の後、守人は静かに続けた。

「…『隼の眼』とは、見抜く力と伝えられています。直感、洞察力、本能、予測。その内のどれでも無く、その他にも該当するものはありません。もしかすれば、それらを複合した力なのかもしれません。何にしても、科学的な根拠は何もありません。ただ見抜き、知る力。それが『隼の眼』です」

なな鼻の頭を指先で叩き、

「…まるでエスパーね」

「私も、お嬢様や旦那様のお話をうかがっただけですので、詳しい事は何も言えませんが…」

ななは、信じきっていない様子を隠すように両目を閉じ、

「まあ、いいわ。とりあえず、そういう事にしておく。あとは何かあるの？」

「はい」

守人は主の帽子に視線を落とした。

「…先ほど、お嬢様は愛する方の悲しむ姿を見たくない、と仰いました。が、実際には『見たくない』ではありません。『見る事が出来ない』のです」

暗く、重い、守人の声。

ななは、帽子をかぶり直し、帽子のつばを目深に引き下げる。

つばの裏側を至近距離で見つめながら、

「どういう事？」

と、ななは訊く。

守人は目を伏せ、

「詳しくは言えません。立ち入ってはいけない領域の問題です。で。私の一存では…」

「自分で言っておいて？」

「申し訳ございません」

守人は、スツとななに顔を向けた。

眼鏡が、僅かに入り込んだ日光を薄く反射する。

「ですが、これだけは言えます。お嬢様は、愛する人がいなくなる悲しみを知っています。そして同じ様に、人を愛する喜びも」

ななは、視線を足元に落とした。

両手をポケットに入れて、だるそうに座ったまま、

「…ほとんど、説明になってないけど」

と、抑揚の無い口調で守人に言った。

「申し訳ございません」

と再び繰り返す、一礼の守人。

なな達の前、本殿の前。

晴れ渡った空の下、狛犬の周りの騒ぎには伊庭も加わり、更に騒々しくなっていた。

「コーチ、こんな展開は聞いてません！」

「馬鹿者！彼女が狛犬に興味が無いとは言い切れんだろう！」

「でも…！」

「ねえ、これってオスとかメスとかあるのかなあ」

「え？」

「はい。私は、口開けてる方が可愛いから、こっちがメスだと思うんですけど」

「コーチ！対応できません！」

動揺する伊庭。

マイペースのりる香。

生命力の塊のような笑顔で笑い、言いくるめる美優貴。

優雅に身体を動かし、言葉に合わせてしなやかに両手を振り回す。ななは、白いスーツ姿の少女の横顔を、ただ、ジッと見つめていた。

第25幕：ないあがらにて

円舞学園の下には、城下町のように街が広がっている。

円舞学園の最寄り駅である『円舞学園駅』の周囲には、駅前例にもれず、飲食店が軒を連ねていた。

飲食店群の中、駅から歩いて3分程の場所に一軒のお好み焼き屋があつた。

お好み焼き『ないあがら』。

夕暮れの色に染まつた、木造2階建ての店。

店名が入った赤いのれんの向こう、グラデーションのように透明なガラスと曇りガラスが入り混じったガラス戸には、『営業中』の小さなサインプレート。

その店内に、神社での特訓を終えた美優貴達はいた。

「なんだ。これは」

「見ての通りじゃない」

「見ての通りか」

「見ての通りよ」

「そうか、これが…」

と、美優貴は真剣な眼差しでテーブルを見つめ、

「…地獄か」

「何言ってるのよ」

なの突っ込みには答えず、美優貴は熱された鉄板をジッと見つめている。

店の中央には通路のようなスペースが取られ、通路を挟むように鉄板が備え付けられたテーブルが4台ずつ並んでいる。

店の奥には、レジ、鉄板付きのカウンター、調理場が場所を占めている。

レジ横の階段の壁には、『トイレは2階にございます』と貼り紙がしてあった。

「まあまあ、ななちゃん。細かい事は気にしない気にしない」と、通路を挟んで隣のテーブルについていた有喜が気楽な口調で言う。

薄手のカーキ色のミリタリージャケットに、黒いＴシャツ、ベージュのハーフパンツといった着こなしの有喜。

細身のシャツがボディラインを強調している。

有喜の前の席には、ヘラをおもちゃのように握ったりる香。

りる香の横には、『お百度告白』をやり抜き、疲れ果てた様子の伊庭が座を占めていた。

ななは、視線を自分のテーブルに戻した。

右隣には、真剣を前にした武士のように鉄板を見つめる無帽の美優貴。

帽子は椅子の背もたれにちょこんと掛けてある。

ななの前には、美優貴以上に店の雰囲気似つかわしくない服装の守人。

片手の白い手袋を脱ぎ、温度を確かめるようにその手を鉄板にかざしている。

守人の横には、ジャージにサッカー部のウィンドブレーカーを羽織った高杉が、凄腕の用心棒のように座っていた。

店には、なな達の他に客はいなかった。

「先輩達は今まで何してたんですか？」

と、ジロリと有喜と高杉を見やって、ななは訊いた。

有喜はニツと笑い、

「だから、言っただじゃない。私は取材。高杉ちゃんは練習。これでも大変だったんだよ。ねえ、高杉ちゃん？」

「おう。来月は大会だからな」

「運動部は大変だねえ。あつ、そうだそうだ」

と、有喜は思い出したように指をパチンと鳴らして、

「美優貴ちゃん、テニス部なんだけどね」
「ん？」

と、幾分か和らいだ顔を有喜に向けた美優貴。
疲れた頭を起こして、伊庭も有喜に視線を送る。

「来週の真ん中くらいから、テニス部の練習時間が延びるみたいだよ」

美優貴は、ほうと言って、

「そうなのか？」

「そうそう。大会前の最後の追い込みって感じだね。この時期はどこもそうかな？そうですよ、伊庭先輩？」

「確かに、そうだね」

「サッカー部もあるよね、高杉ちゃん？」

「おう。覗きにはいい季節だ」

と、話を振られた高杉。

剃刀が仕込まれたような目線を高杉に向け、

「何言ってるんですか？」

と、絶対零度のような声色でななは訊く。

向けられた言葉の銃口に臆する事無く、高杉は幕末の京都で恐れられた狼のような顔つきで答えた。

「時間が延びれば、それに合わせて疲労も増える。練習が終わった後、緊張の糸が切れた時の警戒心の無さは通常とは比べ物にならない。つまりは無防備って事だ」

「女の敵ね」

「おう。よく言われる」

「どの口がほざいてんのよ」

ななと高杉のやり取りを、眺めるとも無く眺め、

「半ば、か…」

と、美優貴は呟き、

「逸れたが、話は分かった。いつもすまないな、うっちゃん」
と、有喜に顔を向けた。

「いいよいいよ」

と、有喜の軽い声。

高杉をツンドラの瞳で見続けるなな。

「何で、ここに呼び出したんですか？」

「前に約束しただろ。美味しいお好み焼きでもおごるってな」

高杉はフツと顔を上げ、

「あの時は、世話になったな」

と、重々しい口調でななに告げる。

「あんたのせいで、私まで変な目で見られましたけどね」

「礼？」

と、美優貴が訊く。

「この間、先輩にテニス部の見学、付き合わされたのよ」

「高杉ちゃんの連れじゃ、変な目で見られるね。高杉ちゃん、大体の女子に警戒されてるから」

と、ニヤニヤ笑いながら有喜は楽しそうに言った。

「お待たせ」

と、酒焼けの大きな声が会話を遮った。

スキンヘッドに無精髭、ヘビー級のレスラーのような体つきの『ないあがら』の店主、安藤^{アンドウ}が調理場から姿を現した。

「ななちゃん。来る時は連絡してくれて、前にも頼んだじゃないか」

と、材料の入ったボウルを盆に載せながら、ガラガラ声でななに言う。

「突然だったから、仕方ないですよ」

「仕方ないって言ってもねえ……。大変なんだよ、仕入れとか」
表情を曇らせた安藤に、

「ななちゃんが来ると、何かあるんですか？」

と、有喜が軽く訊いた。

カウンターの安藤は背中を向けたまま、作業をする手を止めた。
思い出したいくない過去を思い出したように、俯く。

「…2年前、ウチで大食いチャレンジをやったんだ。話題作りだね。直径30cm、重さ1kgのお好み焼きを5枚重ねた『ないあがら大瀑布』。20分以内に食べきったらタダ。俺の自慢の一品だった…」

有喜は驚いた様子で、へえと言ってから、

「合計5kgか。大きいですね」

りる香はキヨトンとした顔で鉄板を見つめてから、伊庭に、

「先輩。30cmってどれくらいですか？」

と、小声で訊いた。

「色んなお客さんが挑戦しては、敗れていったよ。病院送りになったのも1人や2人じゃなかった…」

回想にふける安藤に、視線は集中している。

例外は鉄板を見つめている美優貴と、りる香。

そして、りる香に30cmの大きさを手で示している伊庭だった。

「でもね」

自嘲気味に安藤は微笑み、

「…ななちゃんが現れた事で全てが変わったんだ」

安藤の背中に向けられていた視線がななに集まる。

無表情のなな。

無表情のまま、膝の上から帽子を取り上げ、自身の顔を隠した。

「ななちゃんが来た時の事は忘れないよ。フラッと来て、クール

そのもので『大瀑布』を注文して、無表情に食べきり、冷めた声で言っただ。

「これ、もう1つ」

ってね。…そんな事が1週間続いて、ウチは大食いをやめたのさ。それ以来、ななちゃんが来る時には事前に連絡してくれるように頼んであるんだ。…仕入れの量を倍以上にしないでくれないからね」

沈黙。

表の通りから、夕暮れ時特有のざわつきが店内に届いていた。

入口のガラスから西日が差し込み、床に朱色の塗料をまいている。

なの横で、無言を貫いていた白いスーツの少女が口を開いた。

「この店は」

視線が美優貴に集まる。

「注文していた料理を出す前に、店の主が思い出に浸るのがルールなのか？」

腕を組み、安藤を見る美優貴。

見上げながらも、玉座から見下ろすような表情。

裁判官のように、厳しい視線。

気品に満ちた美優貴の態度。

自分よりもはるかに小柄で華奢な美優貴の視線から逃れるように、

「あ、ああ。ちよつと話過ぎたね。申し訳ない」

と、そそくさとボウルを運び始めた。

美優貴は呆れたように首を振る。

なのは帽子を膝の上に戻した。

ガラガラと軽い音をたてて、『ないあがら』の扉が開かれた。

「いらっ……」

歓迎の言葉を途中で止め、安藤は拍子抜けした口調で、

「何だ、お前らか」

複数の足音。

新たな客は、ズリズリと地面に靴をこすりつけて歩きながら、

「客に向かつて、お前らはねえでしょ。なあ」

「接客態度がなってねえぜ。潰れねえのが不思議……議」

巨大なナメクジの群れが進軍を止めた。

「お前はっ……！」

有喜とななは、背後を振り返った。

途端に、なの口元が不機嫌そうに結ばれる。

新たな3人の客。

テーブルの間に立ちすくんだ男達は、入学式の日、学園の中庭で守人に伸された3人組だった。

吉良はグレーのスウェットにサンダル、馬場は黒いダボツとした

ズボン、同色のパーカーのフードを目深に被っていた。

守人に、怒りと怯えが2対3の割合の視線を向ける安村は赤いタングトップにカーゴパンツという姿だった。

太い二の腕を振り上げ、

「あん時は、よくもっ…！」

と、安村は大声を出す。

守人は音も無く立ち上がった。

3人組は、打ち合わせでもしたように、同じタイミングで後退り、
「やるうつてのか?!」

と、安村が代表して訊く。

無言の守人。

右手の薄い手袋をはめ直し、ステンレスのように無機質な瞳を入口へと向ける。

冷血。

生命を感じさせない眼光に、激しく身震いをして、

「きよ、今日はいいいじゃねえか。なあ、アンソン。B・B」

と、上擦った声で言いながら、吉良は連れの2人を見やる。

半ばホツとした様子で馬場は頷き、視線を逸らした安村は震える手を不毛の後頭部に回した。

守人は何事も無かったように腰をおろした。

「あれあれ？先輩方、奇遇ですねえ」

と、場違いな程気軽に有喜が3人に話掛ける。

ようやく、周りが目に入った様子で、吉良は有喜に顔を向けた。

「うつちゃんじゃねえか！」

顔を奇妙に引きつらせる吉良と2人。

3人はそのまま、顔を隣のテーブルに向ける。

無表情のなな。

吉良達に関心が無い様子で鉄板を見つめている美優貴と守人。

「高杉…」

安村の呟く声に応じるように、高杉は顔をヒョイと向けた。

「よく見ると、所々怪我してますね、先輩方？」

と、椅子の後ろの脚に体重をかけながら、有喜は訊く。

有喜の指摘通り、有喜の視線の先の3人の顔には、アザや擦り傷、絆創膏が目立った。

「何か何かあったんですか？」

有喜達から一つ離れたテーブルにつきながら、

「…喧嘩だよ、喧嘩」

と、ボヤクように吉良は言う。

「喧嘩？」

「そうだよ！」

繰り返す有喜に、投げやりな態度で答えながら、

「高校に上がったくらいで、調子づいてるガキが多いんだよ。毎年、この時期はな！」

と、ドカリと腰を下ろしながら安村は続けた。

「アンソンの言う通りだ。だから、調子に乗った1年が喧嘩売ってたんだ。平日、休日お構いなしでな」

「…それに、自分達から叩き潰しに行くって事もあるな。出る杭は打たれる、か？」

吉良の言葉を、おしほりを運んできた安藤が、楽しそうに引き継ぐ。

吉良は安藤を見上げ、

「さっすが！分かってるう」

吉良の横では、馬場がウンウンと頷いている。

「でもまあ、いくら調子に乗っても無駄だけだな」

「結局、『三傑』（サンケツ）に相手はされねえよ」

吉良と安村がだべり始め、安藤は調理場へと足を進めた。

安藤が横を通り過ぎた辺りで、ななは、

「『三傑』？」

と、有喜に訊いた。

「あれあれ知らない？『円舞三傑』。ウチの学校で、やたら喧嘩

が強い3人の事だよ」

ああ、としかめ面で言つて、ななは、

「…マンガとかによくあるヤツですか」

「大分昔からあつたらしいよ。『三傑』の内の誰かを倒したら、倒した人が新しい『三傑』つてワケ。伝統みたいなモンだね」

大量のボウルを載せた大型の盆を手にして、安藤がテーブルに近付く。

「はい。お待たせ」

手際よくボウルを2つのテーブルに分けて、安藤は吉良達のテーブルに移動した。キャベツや天かす、紅生姜満ち、上には豚肉が載ったボウル。

ボウルを両手に、当惑がうつすらと浮かんだ瞳を手元に送る守人。高杉は、守人からボウルをヒョイと取り上げた。

「よく見てろ」

「分かりました」

高杉がテキパキとセッティングを整えるテーブルの隣。

伊庭が、幾分か疲れがとれた様子で鉄板に油をひく。

白いハケが艶やかな表面を作り上げていく光景を気にも止めずに、有喜は離れて座る吉良達に意識を向けていた。

有喜の前で、りる香は両手で割り箸を割る。

不格好に割れた割り箸をボウルに突っ込み、グチャグチャとかき混ぜる。

盗み見に飽きた様子で寝癖頭をボリボリとかき、有喜は正面を向いた。

几帳面に油をひく伊庭を見、りる香を見、りる香の手元を見て、有喜は可笑しそうに笑った。

「りるちゃんりるちゃん」

混ぜることに集中している様子で、りる香は、

「なんですか？」

「お肉は混ぜないほうがいいよ」

りる香、停止。

ハケを所定の位置に戻し、伊庭はりる香のボウルを覗き込む。
人力のミキサーにかけられた豚肉が、生地の中に埋没していた。
伊庭は、ショックを受けた様子のりる香を見て、氣遣うように、
自分のボウルを差し出した。

「換えようか？」

出だしを失敗したテーブルの隣では、高杉が手際良く調理を進めていた。

程良くかき混ぜた生地を熱気を放つ鉄板の上にのせる。

黄色とも黄緑色とも言い難い、ゲル状よりも固体に近い物体が、
箸に押し出されて溶岩のように落ちた。

溶岩の横には、事前に焼き始めていた肉が香ばしい香りをあげていた。

狼煙のように、煙があがる。

その過程を、割り箸片手に狩人のような臨戦態勢で見守っていた
ななは、ふと気が付いたように美優貴を見やった。

美優貴は腕を組み、脚を組み、高杉の手によって円形に整えられ
ていくお好み焼きのなりそこないを見つめていた。

ななの視線に気が付いた様子で、美優貴はチラリと視線の主を見
やる。

「どうした？」

「やけに静かね」

「そうか？」

「そうよ」

美優貴は両の掌をこめかみに当てた。

「そうかもしれないな」

両の眼を閉じ、指先を後ろに流し、

「私は猫舌黒帯だからな」

と、サラリと言う。

「…猫舌に昇段試験があるのは知らなかったわね」

高杉の手際を真剣そのものの顔で見学していた守人は、美優貴の言葉に顔を上げた。

「お嬢様、どうか御無理はなさらないで下さい」

前線へと向かう総大将に懇願する忠臣のように、守人は言う。

守人に対し、美優貴は家臣を勇気付ける城主のように、優しく微笑んだ。

「大丈夫だ。冷めてから食べる」

「大袈裟すぎるっつーのよ」

夕暮れは過ぎ、街は夜を迎えていた。

人工の光は闇を押し上げ、空までもが明るい。

小型の太陽が至る所に散在し、直接見られる事を拒絶するような光を放っていた。

車道を、ライトを付けた車が行き交う。

その中に、ピンクのキャディラックが一台。

車内には、『ないあがら』を後にした美優貴、守人、そして運転手の先崎がいた。

運転席の横、助手席に座る守人は、携帯電話を耳に当てている。

報告を聞くように、相手の声に聞き入り、

「…分かりました。ご苦勞様です」

と言つて、電話を切った。

薄型の携帯電話を執事服の内側に滑り込ませ、顔を僅かに後方に向ける。

後部座席では、帽子を目深に被った美優貴が、窓の外をぼんやりとした様子で眺めていた。

暗い車の窓には、うつすらと美優貴の顔が映っている。

「お嬢様」

美優貴は、窓の外を向いたまま、

「どうした？」

「お嬢様の御命令通り、作業は進行しています。今夜中に、7割は終了する予定です」

「そうか」

「はい」

会話が途絶える。

車外の街のざわめきが、移動する車の中にも入り込む。

車、道路、通行人、飲食店。

建ち並ぶ、歪な高さのビル群が、無機質なクリスマス・ツリーのよつに光をもらしている。

目深に被った白い帽子の下から、流れる光景を眺め、美優貴はポツリと呟いた。

「…まるで道化だな」

守人は顔を後ろに向ける。

美優貴は自嘲気味に微笑み、

「諦め、彼女から離れるでもなく。諦めず、彼女に思いを告げるでもない。衛星のように彼女の周りをグルグルと回っている。また、それだけでなく、恋敵―伊庭は気が付いてはいないだろうが―に口出しをする始末だ。人の間を行ったり来たり。キューピッドと言えは聞こえはいいが、あの子どもは、矢を射る対象に恋はしないだろう。だから、私とは違う。…私の様な立ち回りをする者を、道化と人は言うのだからな」

窓を向いたまま、淡々と静かに語り続けた美優貴。

美優貴の横顔を見つめてから、守人は沈痛の面持ちで、言葉を探すように視線を伏せた。

車内の沈黙に耐えきれなくなったように、遠くの方で車のクラクションが鳴った。

「お嬢様」

無言でハンドルを握っていた先崎が、穏やかに口を開いた。

「どうした？先崎」

「お嬢様は、先ほどから御自分の事を道化、と仰いますが…」

ゆっくりとした、柔らかな印象を与える声で、先崎は続けた。

「あえて申しあげますと、道化役のいない舞台と言うものは、どこか物足りないものでございますよ」

美優貴は目を驚いたように見開き、数回目を瞬かせた。

可笑しそうに口元を綻ばせ、

「…人生とは舞台、か。お前にはかなわんな。先崎」

「勿体無き御言葉でございます」

美優貴は座席に寄りかかると、帽子をあみだに被り直した。

いつも通りの明るい表情で、

「口の中を火傷すると、どうもいかな。考え方が悪い方へと向かってしまう。初めて食べたが、お好み焼きというものは、味はいがなかなか冷めないものだな」

守人は、安心した様子で体を真正面に向けた。

以前変わりなく、キャディラックは光の海を進んで行った。

ピンクのボディが光りを跳ね返し、背鰭を出して泳ぐイルカのよ
うな印象を与える。

その真上、光のボールを突き抜けて、黒い空には、大きな三日月
が顔を覗かせていた。

第26幕：昼間の邂逅

「うゝん」

月曜日、昼休み。

広美は食堂から出ると、小さい子どもがグズったような唸り声をあげた。

広美の横では、小柄な麻実が両手にスパゲティとコロツケののつたらトレイを手にしている。

晴天の下、太陽光に照らされた中央広場には、空腹に襲われた若者で賑わっていた。

チキンカツを片手に、広美は浮かない顔で、
「うゝん」

丸顔を広美に向けて、
「どうしたのよ。さっきから。身体測定の結果、そんなに悪くなかったでしょ」

と、麻実は面倒くさそうに訊いた。

俯きながら広美は、チラチラと麻実を見やり、

「身体測定は関係ないけど…」

「それじゃ、原因は何？」

「何でもないけど…」

「何でもないなら、唸らないでよ」

「でもなあ…」

齒切れの悪い広美。

「だったら、喋りなさいよ」

「喋るって言うか…」

「吐け」

「吐くって言うか…」

「吐・け」

2人は南校舎に入った。

行き交う生徒の流れは、薄暗い建物の中では、表情に影を落としている。

広美は、苦い薬でも飲んだ後のように顔をしかめて、
「私にもよく分かんないんだけど…。今まで気付かなかった事とか指摘されたりすると、変に意識しちゃう事ってない？」

麻実 は 真正面を向きながら、

「例えば？」

広美は、少し俯きながら、言葉を探すようにチキンカツを見つめる。

「例えば…。トランプでババ抜きする時とかに、

「いつも、右端のカードから取るね」

って言われたら、今まで無意識の癖みたいなものだったのに、変に右端のカードを意識するようになる？何か、考えてる中で右端のカードの事がやけに引つ掛かるって言うか…」

広美は隣をチラッと見やった。

階段を上り始めていた広美の横に、麻実はいなかった。

驚いた顔で広美は周りをキョロキョロと見渡す。

昼休みの解放的なざわつきに満ちた校舎内。

すれ違う生徒達。

麻実 は 階段の下 の廊下にいた。

立ち止まり、中庭に面した窓の外を見つめている。

広美は階段を下り、麻実の横に立った。

「ねえ。私の話、聞いてた？」

麻実 は 中庭の左側、部室棟がある方向に首を向けている。

「ねえ、麻実」

麻実 は パツと振り向き、両手の惣菜を広美に押し付け、

「ちよつと、コレ持ってた！」

と、口早に言った。

慌ててトレイを受け取りながら、

「何？どうしたの？」

「トイレ行ってくる」

「だったら、1回教室戻ってから…」

「我慢できないの！」

そう言うのと、麻実はずさずと階段脇に位置するトイレに向かって進んで行った。

残された広美は片手に自分のトレイ、もう一方の手に麻実の口ロツケがのったトレイ、そして、両の掌でスパゲティのトレイを支えていた。

中庭から差し込んだ日の光が、広美の手元から下を照らす。

困り顔で、まばらな生徒の往来に入った麻実を見送りながら、

「…どうしよう」

と、広美は呟いた。

直後。

「松さん？」

と、広美に声がかかった。

「はい？」

と、広美は背後を振り向くと、目を丸くして、

「い、伊庭先輩っ」

「どうしたの？こんな所で」

広美は、反射的とも言える速度で顔を伏せる。

瞳は回遊する魚のようにグルグルと回り、

「いえ、あの、えつとですね、友達がトイレに行っちゃいまして、待っててって言われたので」

と、口早に、細切れに言う。

「そうなんだ」

伊庭は眼鏡を指で押し上げ、

「道理で、1人分にしては多すぎるしね」

と、広美の塞がった両手を見やる。

「はあ…」

と、消え入りそうな広美の声。

「もしかして、松さんならそれくらいは楽勝かな？」
「っそんな事ないです！」

勢い込んで言った広美の言葉に、興味を引かれた周囲が広美に好奇の視線を投げた。

パツと周りを見て、顔を真っ赤に染めて、広美は再び俯いた。

跳ねに跳ねたポニーテールが、だらりと下がり、

「…すいません。いきなり、大声出して…」

と、消音装置が付けられたような声で言う。

「大丈夫。それくらいの方が、元気があっていいよ」

「本当ですか…？」

秋の紅葉のような顔で、上目遣いに伊庭を見やる。

「もちろん」

そう答えて、軽く口元を緩める。

胸の辺りから下を光に照らされた、伊庭の姿。

廊下の薄い明るさの中、伊庭の柔らかな微笑みに目が眩んだように、広美は目を伏せた。

真夏のトマトの様な顔色。

「ああ、そうだ。先週の写真、役にたった？」

「はい。すごく…」

「それなら良かった。また、練習にもお邪魔するよ」

「はい…」

四角い光の中で、伊庭の足が動いた。

「それじゃ、また。大会、期待してるよ」

「はい…」

光から伊庭が立ち去る。

固まった広美の横を、生徒達は、相変わらずの無関心で歩いていく。

仲間内で話し、笑い、陰口を叩く。

廊下の細く、長い空間に、満ちたざわつきは、扉や窓から外へともれだし、学園全体を包んでいた。

「我が友人ながら、分かりやすいよね」

南校舎1階、女子トイレ入口。

壁に隠れて、広美の背中とポニーテールを眺めながら、麻実は母親のように呟いた。

「自分の事なのに、鈍感なのよね。本当」

「そこがいいんじゃない？」

と、麻実の隣から、軽い調子の声。

「そうなんだけどね」

「いやいや、偶然とは言え、いいもの見れたよ」

麻実はジロリと横を見上げ、訝るように、

「本当に偶然？」

「偶然偶然」

「それならいいけど…」

再び視線を広美に戻し、

「とにかく、周りには内緒にしててよね。まあ、今までバレてないのも、なかなか奇跡的だけど」

「了解了解」

「…それにしても、今日はリアクションが大き過ぎるな」

「何かあったんじゃない？」

「何か知ってる？」

蛍光灯がついた女子トイレの中。

入口側の壁に寄りかかった酒匂川有喜は、楽しそうにニヤリと笑った。

「知らない知らない」

ピコピコと鉛筆を揺らし、麻実の返答を待たずに有喜は女子トイレから廊下に躍り出た。

昼休み、中庭の片隅。

部室棟の前のベンチ―金曜日の放課後に、有喜が座っていたベンチ―に腰掛けた美優貴は言った。

「まあまあだな」

ベンチの後ろには守人、前には伊庭が立っている。

「まあまあですか」

と、伊庭は苦笑いを隠す為か、眼鏡を押し上げて言った。

「まあまあだ」

腕組みをした美優貴。

「彼女は両手が塞がっていた。持つのを手伝った方がいいだろう。そのまま、教室まで一緒に行けば会話も長くなる」

と、伊庭を見上げる美優貴の瞳は、手違いをした家臣を玉座から見下ろす王のような威厳に満ちていた。

「しかし、彼女は友達を待っていたと」

と、食い下がる伊庭。

「ならば、また帰ってくればいいだけの話だ。仮に、教室に向かう途中でその友人がトイレから帰ってきたとしても、相手は学生だ。公園で迷子になった園児とは違う。泣き出しはしないだろう」

「…はあ」

と、言い負かされた伊庭。

落胆した様子の伊庭から顔を逸らし、

「しかし、お前と彼女は話が弾まないな」

と、悪戯っぽくニヤついて、からかうような口調で言った。

「聞こえてたんですか？」

「聞こえなかったが、遠目でも分かる。彼女はお前が苦手なんじゃないか？」

「え？」

「まあ、私は彼女ではないから何とも言えないが、な」

焦り顔の伊庭を横目に見て、美優貴は身軽に立ち上がった。

「とにかくご苦労。後は放課後だ。あまり思い悩むなよ」

と、伊庭を不安にさせた張本人は言つて、北校舎の方へと歩き始めた。

暖かい日差しの中、颯爽と歩き去る美優貴。

守人は伊庭に一礼すると、主の後を追った。

残された伊庭は、不安そうな表情で頭を掻いて、コーチの背中を見送る。

柔らかい風が花壇の花々を傷付ける事なく撫で、中庭に僅かな香りをまく。

敷石の上を生徒が歩き、陽光が照らし、微風が流れる。

昼休みも、丁度半分が過ぎていた。

第27幕：決戦は

「明日だ」

放課後、部室棟屋上。

まだ空は夕暮れの顔色を見せていない。

「明日？」

と、伊庭は美優貴に聞き返した。

屋上には美優貴と伊庭、守人、有喜、なな。

5人は、入口付近に固まっている。

「コーチ、何が明日なんです？」

美優貴は入口の正面の手すりの前に立ち、3人に背を向けていた。風に、長い髪が揺れる。

美優貴は片手を腰に当て、

「告白に決まっているだろう」

間。

「ええっ?!」

伊庭は動揺を隠さずに、

「急過ぎませんか？まだ今日までで2日間しか特訓していないですし……」

伊庭の動揺とは対照的に、有喜はのんびりと壁に寄りかかり、寝癖頭の後ろで手を組んでいる。

有喜の隣には、なな。

「ななちゃんななちゃん」

「何ですか？」

「りるちゃんは？」

「後から来ます」

と、無表情でななは言う。

ななの表情を、有喜は面白そうに細めた緑の目で見た。

守人は出入り口の扉をはさんで、有喜の反対側に姿勢正しく控え

ていた。

伊庭は、困惑したまま両手を軽く広げた。

「…コーチ。せめて、あともう少し時間を…」

「黙れ」

容赦なく、伊庭の言葉を叩き斬る美優貴。

「今しかない。もう少して大会も始まる。そうになると、大会に意識が向くだろう。大会が終わるまで待つ事ももちろんできるが、その頃まで特訓を続けた所であまり意味をなさないだろう」

ゆつくりと、美優貴は振り返った。

「伊庭」

「はい」

「なぜ、時間が必要なんだ？」

「…え？」

言葉に詰まり、伊庭はサツと下を向く。

「それは…」

美優貴は無言で伊庭の言葉を待った。

生唾を飲み込み、伊庭は衣擦れのような声で、

「…どんな結果にせよ、まだ、告白する事に不安があるんです。決心が、つかないんです。やった事は無いですけど、バンジージャンプの前の気持ちが必要な感じなのかな…？」

瞬間。

美優貴の瞳に、優しい光がよぎった。

「お前が躊躇する気持ちは理解出来る。だが、このままでは何も変わらない。悪戯に時間が過ぎるだけだ」

伊庭は美優貴の言葉に顔を上げた。

美優貴は頑強な城壁のように、微動だにせずに立っていた。

微風に髪のが揺れる。

学園から臨む眼下の街並みを背景に、美優貴の凛々しい顔が伊庭を見つめる。

気品と王者の風格を感じさせる表情。

「いいか。大事な事は、『慣れきって』しまう事ではない。『慣れ』とは僅かな安心を、『慣れきる』とは怠慢を産む。告白する気持ち、緊張感を鈍らせてはいけない。私が言った、告白の作法は覚えているか？」

「はい…」

伊庭は目を瞑り、右手の人差し指で眼鏡を押さえる。

深海から沈没船を引き揚げるように、ゆっくりと、

「…身を焦がす程に、熱く。虚構等、有り得ぬ程に白く。決闘に挑むが如く、堂々と」

美優貴は頷く。

「だからこそ、慣れきってはいけない。怠慢は人の心を錆び付かせる」

伊庭に向かって、歩を進め、正面で足を止めた。

伊庭の顔を見上げ、

「勝機はある。さっきのバンジージャンプの例えではないが、イメージだけでは飛べないぞ。踏み込む一歩が必要だ。イメージのトレーニングは私達としたらどう？後は、お前の心一つだ」

美優貴の瞳。

パツチリとした、明るい茶色の瞳。

力強い光、吸い込まれるような光。

ブラックホールの力を得た太陽のような、抗いがたい眼光。

闇を払い、吸い込み、打ち破るような眼光。

迷いは、無い。

その瞳に伊庭の顔が映った。

動揺した顔。

次に、落ち着き自問するような顔へと変わった。

守人と有喜は、相変わらずの様子で2人を眺めていた。

美優貴の瞳を一心に見つめていた伊庭は、自らに答えるようにひっそりと、口を開いた。

「…今の機会を逃したら、このまま逃げてしまいかもしれない。

気の無いフリをして、俺は卒業してしまうかもしれない。いや、きっとそうするだろう。そうやって、ズルズル来てしまったから。今回が、いい機会なのかもね」

縁無し眼鏡の奥、伊庭の目の揺らぎが消えた。

山間の湖面のように落ち着いた瞳に、美優貴の満足げな口元が映った。

「決戦は明日だ。いいな？」

伊庭は頷いた。

イシカミザワ

「場所は隣町の石神沢公園。中央広場の噴水前だ」

「石神沢公園……」

伊庭はハッとした顔で、

「あの運動公園ですか？」

「そうだ。お前が、初めて彼女に声をかけた場所だ」

美優貴は楽しげに、ニツと歯並びのいい白い歯を見せた。

「なかなかロマンティックだろう？」

突然。

それまで、感極まった表情で美優貴の言葉に聞き入っていた守人が、出入り口のドアノブに手をかけた。

音も無く、丁寧な所作でノブを捻り、ドアを開く。

ギイと金属が擦れる音をたてて、開かれた先に鞆を手にしたりる香が立っていた。

りる香は屋上へと足を踏み出した。

守人がドアを閉める。

自分に集まった視線の一つ一つを、キョトンとした顔で見返し、

最後に守人の顔で動きを止めた。

「自動ドアみたいだねえ」

会釈で答える涙目の守人。

「なな、待っていてくれたんだねえ。あれ？高杉先輩は？」

あからさまに表情が不機嫌になったななの横で、有喜はスキップのように明るく軽い口調で、

「高杉ちゃんなら、今頃保健室だよ」

「保健室？」

と、美優貴は両目を細め、声のトーンを落とした。

「何かあったのか？」

「いやいや」

くわえ鉛筆を指ではさみ、ニヤニヤと笑いながら、有喜は続けた。

「身体測定だよ」

「身体測定？」

と、美優貴の疑問符のついた声。

美優貴の言葉を引き継ぐように、

「私達は午前中で終わりましたよう。先輩達までは終わらなかったんですか？」

と、りる香が訊く。

「うんうん。普通はそうなんだけどね…」

思い出し笑いを耐えるように、有喜はクツクツと可笑しそうな声をたてて、

「何せ何せ、相手は高杉ちゃんだからね」

「どういう意味です？」

「みんな知ってると思うけど、高杉ちゃんは『フィールドの出版禁止用語』って言われるくらいのスケベ。これは生徒だけじゃなく、先生達にも知れ渡ってるんだなあ。それで…」

ニヤニヤ笑いが止まらない有喜。

「今朝、高杉ちゃんが教室で、

「女子の身体測定を覗く」

って言ったらしくってね。それを聞いた先生達が真に受けて、高杉ちゃんだけ別枠で身体測定したってワケ。今日は完全な監視体制だったみたいだよ」

ななは、鉄格子のように冷たい声で、

「…最低な警戒のされ方ですね」

美優貴は納得したように頷いた。

「ブラザーは、下心に一点も曇りが無い。だからこそ、やりかねないと思わせる事が出来る。流石はブラザーだ」

「下心自体が、曇りきってるっつーのよ」

聞いているうちに話の要点がズレた様子のりる香は、

「警戒されてるのかあ。凄腕だねえ。格好良いなあ」

「りる香」

「何？」

「ちよつと黙ってて」

「何だとお」

伊庭は眼鏡に手を触れながら、呆れとも感嘆とも判断つかない口調で、

「流石は高杉くんだね…」

美優貴は伊庭の胸元を人差し指でトンとつつき、屋上に並ぶ顔を見回した。

「よし。りる香も来た事だし、今日の特訓を開始するか」

第28幕：決戦前日、コート

「先輩」

「へ？何？」

「何かあつたんですか？」

「えっ？」

放課後。

テニスコート。

夜の闇の中、照明に照らされた舞台のような風景の中に、美優貴と広美はいた。

周囲にはボールが散らばっている。

美優貴は円舞の制服姿、広美は白い半袖の体操着に、青いジャージーのズボン。

広美は、ラケットをクルクルと回しながら、

「何にもないよ。どこか変、かな？」

ベンチの横で、コート上の広美を見つめる美優貴。

広美は美優貴の視線から逃れるように、瞳を右往左往させている。動揺の着ぐるみを着た広美を見て、美優貴は穏やかに微笑み、

「手元のブレが目立ちます。あと、全身に力が入り過ぎていますね。他にも気になる点がありますが、なによりも……」

と、半端に言葉を切る。

飛び回っていた視線を止め、恐る恐るといった面持ちで、広美は美優貴の顔を覗き見た。

オレンジの髪の少女は、自分に視線が向いたタイミングを計ったように、

「…何か気になる事があって、集中できない。そんな顔をしています。心ここにあらず、と言うほどではないですが、心の片隅にちらつくモノが、心の全てを乱している。と、言った所でしょうか」
息を呑み、目を丸くした広美。

心臓を鷲掴みされたような、どこかコミカルな表情の広美に美優貴は木漏れ日のような微笑みを向けた。

「休憩にしましょうか？」

「…うん」

と、伏し目がちに答える広美の頬は赤い。

トボトボとベンチに向かう。

美優貴は広美のリアクションを楽しんでいる様子で、ベンチに腰掛けた。

向かって左に美優貴、右に広美が座を占めた。

強い照明が、2人の顔に影を作る。

傍らのスポーツバッグに身を乗り出し、中身を漁る広美を横目に、
「…そろそろ春の大会ですね」

と、美優貴は天気の話でも話すように言った。

バッグを漁りながら、

「うん。そうなん…」

と、広美は相槌を打ちかけて、

「あっ！」

手を止め、目と口を大きく開き、広美は硬化した。
硬直。

真横の奇妙なオブジェを見て、美優貴は小首を傾げた。

「先輩？」

ポニーテールが薙ぎ払われるような勢いで広美は美優貴の方を向いた。

「えっと、あの、そのね、美優貴ちゃん？」

オロオロと狼狽する広美。

忙しなく両手をばたつかせる広美をしつかりと見て、

「何ですか？」

と、美優貴は優しく答える。

「えっとね、練習なんだけどね」

「はい」

「今の、時間よりもね、長くなるんだ」

「…練習時間が、通常よりも長くなる。と言つことですか？」

広美は小さくウンウンと頷いて、

「そう」

「いつからですか？」

「えっと、水曜から」

「練習時間が長くなるのが、どうかしたんですか？」

「だからね、他の人も遅くまで練習するようになるから、今までより…」

思い至つたように、ああと言つてから、

「そういう事ですか」

美優貴は小首を傾げ、足元を見やる。

濃く描かれた影。

自身の影、ベンチの影、広美の影。

「…それでは、私の見学もそろそろ終わりですね」

「えっ」

後ろ髪を引っこ抜かれたような広美の声。

遊園地から帰る間際の子どものように、消沈した顔で顔を伏せる。

美優貴は広美の顔を見ない。

カクテル・ピアノを思わせる、静かな言葉を続けた。

「元々、見学なんて長い期間するものではないですしね。丁度いいのかもしれない」

「他のみんなにも、キチンと説明すれば、大丈夫かも…」

「それでは、顧問の先生や上級生の立場がありません」

「それじゃ、休みの日は…」

「休日も練習があるのでないですか？」

あつ、と記憶が急浮上した声をあげて、

「そうだった…」

広美は様子を窺うように、上目遣いに美優貴を見た。

真正面を見つめる、端正な横顔。

遙か遠い景色を見るような目。

柔らかく結ばれた口元。

穏やかな優しい、無表情。

「別に、今生の別れではありません。会おうと思えば、いつでも会えます。同じ学校ですしね。今までよりも、回数が減るといいうだけです」

「そうだよね…」

ウンウンと頷く広美。

頷く度に、だんだんと気分が良くなった様子で、表情も軽くなる。

「…そうになると、今日と明日が1つの区切りとなりますね」

「そうだね、『区切り』だね」

区切りにこだわりを見せる広美。

「でも」

「でも？」

と、首を傾げる広美。

「今日の先輩には、気になる事があるようですし…」

「あつ」

コートに置いてきた動揺がブーメランのようにして広美に戻る。

ここで美優貴は広美に顔を向けた。

うつすらと頬を染め、下を向いた広美の顔。

瞬間。

美優貴は嬉しそうな、寂しそうな、判別のしがたい笑顔を浮かべた。

切り替えるように両目を閉じて、膝の上の鞆の金具に指をかける。

「…それでは、先輩の悩みを解決してみましようか？」

顔を上げた広美。

広美の視線の先の美優貴は、鞆の中に片手を入れていた。

数秒、カタカタと音をたてて中身を探る。

目的の物を手に取り、顔の横まで持つていく。

「私なりに、頑張つて覚えました」

フツと気恥ずかしそうに微笑む美優貴。
その手には、タロットカードの黄色い箱。
広美の呆気にとられた顔。

その顔を、神託を告げる魔術師が、大真面目な顔で見返していた。

第29幕：タロット占い・テイク2

乾いた紙の音。

紙の塊がかき混ぜられ、平穏とはかけ離れた流動を見せる。

カードの下に敷かれたハンカチは細かいレースに縁取られた、純白。

滑らかな表面。

片隅には流麗な字体、上品な青い糸で美優貴のイニシャルが縫い取られていた。

イニシャルの上部には、同色の糸で細やかな鳥の縫い取り。

翼を広げ、急降下する姿には、悪戯に威嚇するような荒々しさや猛々しさは無い。

気高く、強い鳥。

隼。

カードを混ぜる美優貴の口元は柔らかく微笑んでいるが、目元は真剣なものだった。

丁寧な指先。

厳かに儀式を続ける聖職者のような、静謐な威圧感。

美優貴の雰囲気呑まれた様子で、広美は神妙な面持ちで美優貴の動作を窺っている。

鍵盤から指を離すように指先が浮き、

「…あ」

沈黙を破った美優貴の声に、広美は、

「何？」

と、動揺した声で訊いた。

美優貴は広美とは対照的に落ち着いた口調で、

「何を占えばいいのか、お聞きするのを忘れていました。うつかりしていました」

「えっ？あつ、そうだね」

顔、目、両手を忙しくバタつかせて、自分を猛スピードで納得させる広美。

「そうだよな、うん。決めなくちゃ、占えないもんね。それはさうだね」

頷く広美。

「それで、何を占いますか？」

「うっ」

五指のそれぞれの先を合わせ、顔を伏せる広美。

暴れ馬と化していたポニーテールがおさまり、背中に着地した。両目をソワソワと動かし、

「えっとね……」

「はい」

「その……」

「はい」

「……………恋、とか」

火の玉が落ちた線香花火のような広美の声に、

「何ですか？」

と、悪戯っぽく美優貴は聞き返す。

モゴモゴと口を動かし、

「……恋愛運、とか」

と、線香の煙のように細い声で広美は言う。

煮上がったような顔の広美を見やって、美優貴は再びカードの束に手を伸ばした。

「分かりました。恋愛運ですね」

カードが混ざる。

広美は傍らに置いていたペットボトルを手に、チビチビと飲み始めた。

広がったカードが、集まる。

集まり、1つの山となるタロット。

白地に水色と黒の細い線が交差した裏面を頂点とした山の側面を、

美優貴は指で撫でるようにして整える。

山を手前に置き、博打の壺振りのように、上目遣いに広美を見やる。

「それでは、始めます」

「うん」

広美がコクリと頷いたのを見届けて、美優貴は山の上からカードを取った。

裏返したままのカードが、左から並ぶ。
3枚。

美優貴はチラと正面を見る。

広美は、食い入るようにカードを見つめていた。
流れるような手つきで、美優貴はカードをめくった。

過去、現在、未来。
過去。

一糸纏わぬ女性が、泉で杯を逆さにしている。
女性の上、満天の夜空には、一際大きく輝く星。

『星』（ザ・スター）の正位置。

現在。

草原、2匹の野犬が夜空に吠えている。

空には星々をかき消すように、憂いに満ちた月が昇る。

『月』（ザ・ムーン）の正位置。
未来。

真っ白な馬に跨った少年の背後には、生命力に溢れるひまわりが咲き誇っている。

その植物のライオンの群れを従えるようにして、空には大きな太陽が熱と光を大地に送る。

『太陽』（ザ・サン）の正位置。

カードの上部に書かれた数字は左から17、18、19。

「あれだけ混ぜたのに、順番通りだね」

「はい。それに、正位置ですね」

広美の言葉に、そう答えて、美優貴はこめかみに手のひらを当てた。

蝋燭の火を吹き消すように、軽く口をすばめる。

手のひらを滑らせ、指先を軽く組む。

思案する表情の美優貴。

「…なるほど」

パツと両手を頭の後ろから放し、

「分かりました。結果をお伝えします」

美優貴の長い髪が波打つ。

広美はペットボトルを両手で握りしめ、生唾を飲み込んだ。

「…先輩には、誰か気になる方がいますね。年上の方です。憧れの人、という言葉が正しいかもしれません。いつの間にか目で追っているとか…、その様なものでしょうか」

目をパチクリとさせる広美を尻目に、美優貴は詩の朗読でもするように、明瞭な声で続けた。

「先輩は今、自分の気持ちに悩んでいますね。その方に対しての気持ち、ただ憧れているだけなのか。それとも恋愛感情なのか。初めからそうだったのか。それとも、途中で変化したものなのか。自分でもよく分からない。それが不安の原因。違いますか？」

ベコリと中途半端な材質の音をたてて、広美の手にしたペットボトルがへこむ。

力の入った手元に視線を落とし、

「……………うん」

と、蚊がため息をつくような声で広美は答える。

「…でも、安心して下さい。迷いは、すぐに晴れるでしょう」

「えっ？」

パツと顔を上げた広美。

向かいに座る美優貴は、高名な芸術家が人生をかけて創作した作品のように形の良い指先を、右端のカードの上にのせていた。

『太陽』。

「夜は嘆きの時。昼は喜びの時です。そして、月も太陽も、突然入れ替わる事はありません。全ては移ろい、変わり行くもの。何事にも『兆し』があるものです」

「『兆し』…」

「その喜びの兆しを見逃してはいけません。ですが、もしかしたら先輩が気が付かなかっただけで、すでに兆しはあったのかもしれないね」

「見逃してた？」

「かもしれません。もし、そうだとするなら、近い内に何か大きな転機があると思います。例えば、夜明けの白じんだ空ではなく、日の出のような。兆しでは無く変化の始まりそのもの。今までの兆しとは比べ物にならないくらいの…」

顔を上げ、美優貴は締め括りの言葉を告げる。

「決定的な、何かが」

老練な魔術師のような、万物を見透かす眼光。

何世紀も生き抜いてきた樹木のような、静かな、圧倒的な存在感。「そうなれば、もう逃れる事は出来ません。その時の、先輩の感情に従うしかないでしょう。どうか、その感情を大切になさって下さい」

美優貴の厳かな雰囲気、広美は神託を受けた信者のように表情を固くした。

一転。

オレンジ髪の占い師は、フウと息をつく、髪を耳にかけた。

「如何でしたか、私の占いは。お役に立てそうですか？」

柔らかな笑顔。

薄暗く香のこもった小部屋から、屋外の木漏れ日の場面へとセツトを変えた舞台のように、驚異的な速さで気色を変えた美優貴。

場面の变化に追い付けない観客、広美はポカンと口を開けている。美優貴は小首を傾げた。

「先輩？」

「んうつ？何？」

と、ハツとした顔で広美。

「如何でしたか？私の占い」

「あつ、えつと……」

広美は瞳を手元に向け、言葉を頭で組み立てながら、

「…凄かった。過去も現在も、私にピッタリ。それに、何て言うか、『オーラ』が。才能あるよ」

「ありがとうございます」

と、美優貴はペコリと頭を下げる。

「ただ……」

「ただ？」

顔を伏せた広美は、言いにくそうに、

「…大きな転機つて、何かな」

と、不安げに訊く。

接続詞がおかしい広美の問い掛けに、美優貴は勿体ぶって、

「うーん……。そうですねえ……」

首を遅い拍子のメトロノームのように揺らした。

「例えば……」

「例えば？」

「恋愛なら……」

「恋、愛なら……？」

「告白、とか」

「えええつ！ー！」

幼児が描いた人物画のように口の線を歪ませ、ガバツと体を起こす広美。

そんな広美を意に介さず、美優貴は指先を頬に当てて、

「恋愛運の転機と言えば、告白の可能性は高いですね。相手の方も、先輩が気になって仕方がない、ということも十分考えられますし」

と、優しい口調で悪戯心をラッピングした口振りで続ける。

「いやっ、そんな、いきなりっ…！」

桜色から茹で蛸の赤へと顔色を変化させながら、

「そんな事、絶対無いってば！そんなっ、全く、もっ…」

動揺の最高値を更新し続ける広美。

美優貴は嬉しそうに微笑み、

「可能性の1つですよ」

「可能性って言っても…」

広美は赤い顔で口をムニムニと動かし、

「告白なんて…。した事も、された事も、無いし…。どうすればいいか…。あっ！」

こぼれ落ちた自分の言葉を押し戻すように、両手で口を押さえる。耳まで真っ赤にしながら、ペットボトル越しに美優貴を見る。

動揺し、潤んだ広美の瞳。

その瞳に、美優貴はしっかりと向き合う。

拳が、自らを鼓舞するように握り締められた。

「…告白とは、覚悟です」

「覚悟…？」

おずおずと聞き返す広美。

美優貴は頷く。

「はい。どんな結果になっても、今までの関係には戻る事は出来ないからです。今の生活を捨てると言ってもいいでしょう。告白される側は、その覚悟をうやむやにしていけません。刃を振り下ろすのなら、決然と。受け入れるのなら、はつきりと。覚悟するのはそっちの勝手だ、とつれない態度で返事する事はやめてあげて下さい」

「…覚悟」

広美はポツリと繰り返す。

美優貴は、娘を勇気づける母親のように微笑み、

「告白される側からすると、奇襲攻撃かもしれませんけど、ね」と、冗談めかした台詞を言う。

広美は美優貴の言葉を消化している様子で下を向いた。

「…さて」

グググッと指先を伸ばしてから、美優貴はタロットカードに手を伸ばした。

「もう少し休んだら、練習を再開しましょう」

第30幕：それは誰かの決戦の日

火曜日。

朝。

広美はキッチンからリビングに移動すると、脚の短いテーブルの上のテレビのリモコンを手にとった。

正面のガラス戸から、朝特有の混じり気の無い光が、リビングに雪崩れ込んでいる。

フローリングのリビング。

広美から見て右側には廊下へと繋がるドア。

閉じたドアの横には大きな姿見。

その鏡に映った広美の姿は、ジャージにテニス部のウィンドブレーカー。

髪は、元気なポニーの尻尾。

腫れぼったい目を細め、広美は欠伸混じりに、テレビの電源をつける。

プツツと音がして、朝のニュースを読み上げる、真面目な堅苦しい顔つきのスーツ姿の男性が画面に現れた。

単調な声をBGMに広美はリビングを見回す。

テーブルの上の雑誌。

テーブルの―広美から見て―左側にある黒い布張りのソファにはカラフルな彩色のクッション。

水色のカーテンが開けられた、大きなガラス戸。

ガラスの外には、ブロック塀に囲まれた小さな庭。

強い朝の光に照らされた庭には、小型のログハウスのような犬小屋。

小屋の前には、噛み潰すようにしてピンクのゴムボールをプレスしている、大型のラブラドル・レトリバーが寝そべっていた。

野生味に満ち溢れる愛犬に軽く微笑むと、広美は姿見にクルリと

体を向けた。

ポニーテイルの位置を気にするように、手をヘアゴムに伸ばし、頭をあらゆる角度から映し見る。

シマリスのように首を酷使する広美の横、テレビの中から、

「それでは、今日の占いのコーナーです」

と、女性キャスターの声が告げる。

「おっ」

小さいリアクションの声をもらし、左横のテレビに身を傾ける広美。

大袈裟で、華やかな音楽と映像が流れる。

「今日、最もラッキーなのは…」

ポップな字体で書かれた『1位』の文字が、魔法をかけられたティーポットのように踊った。

画面が切り替わる。

「乙女座のあなたです！」

「やった！」

小さなガッツポーズと笑顔を見せる広美。

「今まで頭を悩ませていた事が一気に解決しそう！人のアドバイスに従うと、いい結果になるかも！ラッキーアイテムは…」

と、画面に映る文字列を元気良く読み上げる女性アナウンサー。

「ポニーテイル！」

「おお」

口をOの字に広げ、目を丸くする広美。

驚いた顔のまま、鏡を見やった。

更に熱心な顔つきになり、ポニーに指先を踊らせる。
瞬間。

「あっ、そうだ」

と、何かを思い出した顔で、鏡に背を向ける。

再びテレビのリモコンに手を伸ばす。

2位から6位までの結果が並べられた画面にリモコンを伸ばし、

チャンネル替える。

「…の動物園では、昨日パンダの赤ちゃんが産まりました。この動物園のパンダは…」

可愛らしいVTRが流れていた。

檻の中の小さなパンダは、親に寄り添うようにして眠っている。

広美はパンダに目もくれず、画面の上を見つめていた。

VTRの上、左の隅には6：58の数字。

右の隅には『今日の占い』の文字。

その文字が左へと流れると、先ほどまで『今日の占い』の字があった場所に、1位の星座が流れ着いた。

1位、乙女座。

「おお」

画面の大部分を無視し、一部分を凝視する広美の先に並ぶ文字列。

『恋愛運が最高潮の1日。思いがけないドラマがあるかも。ラッ

キーカラーは黒』

「黒？」

ポツリと呟き、広美は自分のウィンドブレーカーに視線を這わせる。

服に空いた穴でも探すように体を動かし、信じられないといった口調で、

「…黒、だよ、ね？」

と、衣服に訊ねる。

ニユースは星座占いを無視するように、次の記事へと移動した。

「恋愛運…」

照れくさそうに微笑み、呟く広美。

再び、

「あっ」

と、気が付いた顔になり、ジャージのポケットに片手を突っ込む。

ポケットから、白い携帯電話が取り出される。

ドッグタグのようなストラップがついた携帯電話を開き、ボタンを押す。

愛犬が広い公園の大木によじ登ろうとしている画像から、占いサイトの画面に切り替わる。

画面を移動させ、乙女座の所で指が止まった。

『乙女座・総合運・星5つ（1位）』

「おおおっ」

ディスプレイを両手で顔に寄せ、三度驚いた口から喜びの声もれる。

乙女座をクリック。

データ受信中の画像が消え、緑色の背景の画面へディスプレイが替わる。

『全てが良い方向に向かっていくでしょう。特に恋愛運が絶好調！最高の運氣です。しっかりと自分の意志を持って決断する事がキーとなるでしょう。ラッキーアイテムはヨーグルト』

「ヨーグルトっ」

ロクに画面を見ずに携帯電話を折り畳むと、電話を手にしたままキッチンに飛び込んだ。

押し破るようになってドアが開かれ、早口に広美は言った。

「お母さん、ヨーグルト無いっ?！」

第31幕：昼休み・南校舎

昼休み。

2年10組の教室は、休憩時間に入ったにも関わらず、休み時間独特の騒々しさが存在していなかった。

開かれた扉から、時間通りのざわめきが、10組に忍び込む。

大部分の生徒が席にいたまま、恐る恐る教科書を机に入れる作業を行い、忍び足で友人の机に移動していた。

例外は2人。

1人は、教卓の横に立った、赤いポロシャツを着た男。

短く刈り上げた髪、よく焼けた肌。

体つきは締まっている。

男の太い眉の上、角張った額には青筋が山脈のように隆起していた。

「よし！お前の言い分を聞こう」

と、赤いポロシャツを着た国語教師、醍醐ダイゴはよく通る声で言った。

醍醐の前に立つ生徒は、怒りに塗りたくられた醍醐とは対照的に、静かに立ち尽くしている。

その男子生徒は、高杉慎一郎。

醍醐から視線を逸らさずに、高杉は口を開いた。

「…例えば、ミロのウェイナスが見たいとします。だが、俺にはフランスに行く為の金も無ければ、パスポートもありません。だから、そんな時には、本屋にあるパンフレットでも見るしか無いワケです」

「そんな事はどうでもいい！」

醍醐は声を荒げ、教卓を右拳で叩く。

優しさの失せた、暴力的な金属音と振動に、クラスの生徒達の表情が固くなった。

両目を軽く細める高杉。

醍醐は血管の浮き出た、筋肉質の腕を振り上げ、
「どうして、授業中に『こんなもの』を読んでいたのか訊いてるんだ!!」

醍醐の左手に持たれた『こんなもの』。

教科書やノートよりも大きな本。

大判、フルカラーの本の表紙には、若い女性の写真。

ショートカットの似合う、20歳前くらいの女性。

太陽の下、白い肌に真っ赤なビキニを来て、砂浜に寝ころんでいる。

『飯田ゆうな写真集』『TRIPLE RED』（トリプルレツド）。

飯田ゆうなの健康的な微笑みを振り回しながら、

「どうした！理由があるなら何か言ってみろッ！」

と、グラウンドの端から端まで届くような体育会系の怒声をあげる国語教師。

高杉は、荒波を前にした武者修行中の浪人のように後込みすることなく、眼前を見据えている。

「…俺は、その写真の女性の居場所も知らなければ、連絡先も知りません。だから、そんなレプリカに頼るしかないんです」

「だから!!」

怒声が高杉の言葉を遮り、再び教卓が地面を揺るがす。

「それは答えになってない！はぐらかさないで、はっきりと言ったらどうだ!!」

刹那。

高杉は両眼をカッと見開いた。

居合いの瞬間を思わせる気迫を込め、高杉は力強く、言い切った。

「彼女の体が見たかった！それだけです」

間。

間。

間。

醍醐は、高杉の気合いと言葉に虚を突かれたように表情を固めていたが、すぐに、

「……言いたい事はそれだけかアア!!」

沸点を超えた怒鳴り声を高杉に浴びせた。

体から湯気が出そうな程に顔面を紅潮させて、

「もう許さん!高杉、今から職員室に来いっ!お前のその根性を叩き直してやる!」

ますますスピードを上げて、飯田ゆうなの微笑みが教室の空を旋回する。

高杉は潔い顔つきのまま、チラリと飯田ゆうなの動きを目で追った。

緊迫した教室。

他の生徒達も、息を飲んで高杉達を見守っている。

そこに、

「失礼しまゝす」

と、軽い口調と軽いノックの音が熱気に水を差した。

緊張の糸が切られたように、声の主に視線が集まる。

10組の戸口に立った、長身の女生徒。

金髪の寝癖頭をボリボリとかきながら、

「あれあれ?お取り込み中でした?」

と、酒匂川有喜は場に似つかわしくない羽毛の声で言った。

「何の用だ、酒匂川!」

調子を取り戻した醍醐が、憤った声で訊く。

「いやいや」

有喜はくわえていた鉛筆を口から離し、

「ちよつとちよつと、高杉ちゃんにお話がありまして」

「高杉に?」

「高杉ちゃんに」

「駄目だ!こいつには、これからみつちりと、話をしなくちゃい

けないからな！」

と、醍醐は高杉に人差し指を突き付けて、忌々しそうに言う。
有喜は目線を動かす。

醍醐の顔、指先、先にある高杉の顔。

最後に、飯田ゆうなの顔。

合点がいったように、有喜はプツと吹き出した。

「何が可笑しい！」

と、荒い声で問いたただす醍醐。

可笑しそうに顔をにやつかせ、体をよじる有喜。

鉛筆をはさんだ片手をひらひらと振り、

「……いやいや、何でもありませんよ」

と、笑いをこらえた顔で言う。

「とにかく！」

怒りが煽られたように、醍醐はきつぱりと、

「今日は高杉には、話をしなくちゃならない。こんな事が今後も続くのなら、サッカー部の方とも話し合わくちゃいけなくなるからな」

「それは、ちょっとちょっとやりすぎなんじゃないですか？」

と、笑顔から一変、非難めいた顔つきになった有喜は言う。

「いや、そんな事はない！これはサッカー部だけでなく、運動部全体の問題にも発展するかもしれないからな。スポーツとは精神の鍛練だ。自分の勝手に振る舞うのはたるんでいる証拠だ！我が学園の運動部が、そんな根性の無い人間ばかりだと思われては、たまらない！」

頑として醍醐は譲らない。

困った相手を見るような目つきの有喜。

頭をかきながら、醍醐から高杉に視線を移す。

裁きを受ける高杉は、窓の外に目を向けている。

当事者の潔い態度に、有喜は諦めの匂いがする微笑みを見せた。
諦めの笑みから、普段の明るい笑顔に戻り、

「先生、ちよつとちよつと耳貸してもらえます?」

と、醍醐に向かって手招きする。

「何だ?」

怒りと憤りと不信感がミックスした表情で、醍醐は有喜に近付く。有喜よりも数cm背の高い醍醐の耳元に、有喜の手が伸びる。

僅かにかかとを浮かせ、有喜は伝言ゲームでもするように醍醐に囁く。

一言。

二言。

短い言葉の内に、醍醐の表情に変化が起こった。

憤怒の赤から、恐怖の青へ。

歩行者用信号機のような、極端な顔色の変化。

伝言ゲームの前の形相が10年前の事のように、青ざめた顔を有喜に向けて、

「さ、酒匂川…。どこで、それを…?」

と、蚊の寝息のような震える声で醍醐は訊く。

有喜は自分に向けられた醍醐の顔にニツと笑うと、そのまま耳元に顔を寄せた。

醍醐の顔の横に並ぶ、有喜の笑顔。

チエシヤ猫のような可笑しそうで、意地悪そうな、裏のある妖艶な微笑み。

「…大丈夫ですよ?先生」

羽が夜露に濡れたように、重く、艶やかな印象を与える声で囁く。

「私しか知りません。…『いまのところは』」

含みが過剰搭載された言葉を残し、有喜は醍醐から離れた。

醍醐は、有喜の言葉が漏れるのを防ぐように耳を手で押さえる。

「ところでところで」

と、有喜の普段の軽い声。

ニカツと笑い、

「高杉ちゃんに用があるんですけど、借りてもいいですか?」

有喜の言葉が到達するのに時間がかかった様子で、醍醐は数秒の後に、

「…ああ、いいぞ」

と、気の抜けた声で言う。

「あ。それとそれと。もう1つ」

と、思い出したように人差し指を立てた有喜。

「先生、女子テニス部の顧問ですよね？」

「ああ…」

「丁度良かった。今日なんですけど、2年の松広美ちゃん、貸してもらえます？練習の途中からでいいんで」

「松？どうして…」

醍醐は訝るように有喜を見たが、即座に、

「いや、分かった。好きにしろ」

ニヤリと笑って、有喜は鉛筆を口にした。

「それではそれでは。高杉ちゃんと松ちゃんはお借りしますね。」

高杉ちゃん

「おう」

有喜の呼び掛けに、裁きを待つ顔をしていた高杉が応じる。

有喜はペコリと醍醐に頭を下げ、教室から出て行った。

有喜に続き、高杉も廊下へと向かう。

開かれた戸口。

その手前で、高杉は足を止めた。

「先生」

背を向けたままの高杉。

「…先生の持っているモノは、後で取りに行きます」

と、首を僅かに後ろに向けて、高杉は言葉を続けた。

「後で、必ず…！」

家に残す妻と子どもに告げる、今生の別れの言葉のように言い残し、高杉は教室から出て行った。

元凶がいなくなった教室。

そこに残されたのは、写真集を手に呆然と立ち尽くす国語教師。
嫌悪感を露わに、高杉が出て行った戸口を睨み付ける女子達。
そして、感涙の眼差して戸口を見つめ、拳を握り締める男子達だ
った。

「うつちゃん、世話かけたな」

「いいっていいって」

「いつもすまねえな」

「いいっていいって」

南校舎、3階。

2年10組から移動して来た高杉と有喜は、同じ階の廊下の突き
当たりにいた。

2年14組を右手に見ながら、高杉は、

「それで、俺に何か用か？」

「うんうん」

と、有喜は窓の外を眺めながら言った。

スカイブルーの中を、きめ細かクリームのような雲が流れる。

標高の高い円舞学園。

東校舎の裏、森のような木々と植え込み。

緑の群の中に、テニスコートやグラウンド、部室棟等が点在して
いる。

学園の敷地の外には、駅前街並み。

開かれた窓から入り込んだ風が、有喜の寝癖の毛先をユラユラと
揺らす。

有喜はくわえ鉛筆のまま、

「今日、『ケリ』がつくみたいだよ」

と、サラリと言った。

武士の表情で14組を眺めていた高杉は視線を動かし、有喜を見
やった。

「そうか」

「そうそう。それでさ、高杉ちゃんにも来て欲しいんだって。伊庭先輩の見送りにね」

「分かった」

そう言って、高杉も窓の外を見やる。

「…ブラザーの決断が、どうなるのか。見届けるか」

と、高杉の静かな声。

有喜は楽しそうな横目で高杉見やり、鉛筆をピコピコと動かした。

第32幕：昼休み・中庭

「広美」

「何？」

「にやにや笑うの止めてくれない？」

「へ？してる？」

「してる」

昼休み。

広美と麻実は並んで南校舎に足を踏み入れた。

広美の片手にはチキンカツ、麻実の片手には真っ赤なペンキを叩きつけられたようなナポリタンのった白いトレイ。

開放感と空腹感、倦怠感が入り混じる校舎内を2人は進んだ。

「朝練の時にも言ったけどさ、今日は運勢が凄いんだ。絶対調って感じで」

と、嬉しそうな顔で広美。

「朝練の時にも聞いたわね。確かに」

と、呆れ顔の麻実。

「今日は、絶対いい事がありそうな気がするんだ」

「いい事ねえ……」

2人は並んだまま、2階へと向かう階段に曲がりかけた瞬間。

「松さん」

と、声がかかる。

2人は同時に振り返った。

広美は急速に全身を緊張させて、

「伊庭先輩っ」

伊庭はどことなく、ぎこちない微笑みで、

「ちよつと、いいかな？」

「い、今ですか？」

「うん。そう」

1人蚊帳の外の麻実。

丸顔を交互に広美と伊庭に向けてから、

「広美。私、先行ってるね」

「え?!」

慌てる広美を頭から無視して、麻実は軽やかな足取りで階段を上り始めた。

鼻歌混じりに去っていく麻実の背中を、オロオロとした瞳で見つめて、

「麻実…」

と、広美は不安げに、蚊の寝息のような声で呼び掛ける。

伊庭は困った様子で、

「えつと、松さん？」

「はいっ!」

広美の過剰なまでの反応に、周囲の視線が集まった。

一時的に、ざわつきが沈静化した校舎。

周囲をブンブンと見回し、広美は顔をトマトのように赤くして、

「すいません…。また、大声出しちゃって」

と、顔を伏せる。

伊庭も、広美につられるようにして周囲を見回し、

「いや…。大丈夫だよ」

と、声のトーンを落として言う。

2人は、前日と同じ窓の前に移動した。

南校舎の中に、ざわつきが蘇る。

窓際の陽光が2人の姿を暖かく包む。

広美は落ち着かない様子で、顔を上げたり下げたりしながら、

「えつと、あの、お話って何ですか？」

伊庭は軽く視線を落とした。

細く息を吐き出し、クツと拳を握る。

「…先輩？」

と、小首を傾げた広美。

広美の声が合図だったかのように、伊庭は目線を上げた。
決意の顔。

踏ん切りがついた様子で、伊庭は口を開いた。

「松さんに、頼みたい事があるんだ」

と、静かな守人の声。

「頼みたい事、ですか？」

と、美優貴の声。

「そう」

「えっと、その…。何をすればいいんでしょうか？」

中庭のベンチ。

北校舎側に並んだベンチの1つに美優貴とななは座っていた。

脚を組んで座る美優貴の背後には、夜空に伸びる影のように、守人が直立不動で控えている。

美優貴と守人の視線は真正面、南校舎1階の窓に向けられている。

窓辺には、伊庭と広美。

ガラスに遮られた先、緊張した横顔を見せる伊庭が口を開いた。

刹那。

「今日の放課後なんだけど、少しだけ俺に時間をくれないかな？」

と、伊庭の口の動きからコンマ数秒のタイムラグを置いて、ななの後ろから守人の声が言う。

ななが守人に頭を向けると、

「今日の、放課後、ですか？」

ななの横で、美優貴が広美の口の動きを追う。

怪訝な顔で美優貴を見るなな。

軽く微笑んだ口元の美優貴は、

「でも、私、放課後は部活がありますし…。部活の後だと、遅くなりますし…」

と、広美の口調を真似た声で続ける。

ななは南校舎の窓に視線を向けた。

小さなガラス製のスクリーンには、2人の役者と、背景、エキストラ。

困った様子でポニーテールが動き回る広美の前で、伊庭は自身の眼鏡を押し上げ、口を開く。

「…その点に関しては問題ないよ。顧問の醍醐先生には、許可を取ったから」

ガバツと顔を上げた広美。

「先生に？本当ですか」

「うん」

「そうですか…。でも、はい。それなら、大丈夫です」

伊庭はホツとした様子で微笑んだ。

「良かった」

「それで、あの、私はどうしたら…？」

「うん。…松さんに、来て欲しい所があるんだ」

「来て欲しい所、ですか？」

「そう」

「えっと、どこに行けば…？」

「それは…。秘密なんだ」

広美は首を傾げる。

「秘密、ですか？」

「うん。練習中に迎えに行くから、待っててくれればいいよ」

「はあ…」

キョトンとした顔の広美。

伊庭は深く呼吸をして、

「よろしく頼むよ」

広美は自らを納得させるように頷く。

「…はい。分かりました」

「それじゃ、放課後に」

「はい…」

伊庭は見せ場を終えた役者のような微笑みを見せて、窓辺から去っていった。

窓際に残された広美の奥を、流れる背景のように生徒達が行き来している。

立ち尽くす広美。

ポニーテールの少女は手元のチキンカツを見やり、僅かに唇を動かした。

「思いがけないドラマ…。いやいや」

占いの言葉を打ち消すようにポニーテールを振り、広美も背景の流れに身を投じた。

メインキャストがいなくなった窓から、ななは顔を背けて隣を見た。

「Fin」

そう言って、広美の吹き替えを担当したオレンジ髪的女子生徒は、肩越しに背後を睨む。

「守人。少しは演技しろ。ただ読むだけでは面白くないぞ」

「大変申し訳ございません！」

ジェットコースターのような速度で深々と頭を下げ、

「この影山守人、再び同様の失態をしないよう、一層精進し、お嬢様のお力になる事が出来るように努力させて頂きます！」

と、誠心誠意そのものの声と口調と表情で、執事は主の言葉を待った。

美優貴は、やれやれといったように唇を曲げ、髪を耳にかけた。

「…まあいい。許す。次からは気をつける」

「この影山守人、慚愧の念に耐えません…」

ますます頭を下げる守人に、

「許すと言っている。頭を上げろ」

と、弟の悪戯をたしなめる姉のようになり、柔らかな微笑みで言う。

「申し訳ございません…」

美優貴の隣で無言を貫いていたななが、ポツリと、

「あのさ」

「ん？」

と、美優貴はななに注意を向けた。

真上近くの暖かな太陽の下、ななの訝るような目元が相反する印象を与える。

「今のつて、読唇術よね」

「ああ。そうだな」

サラリと美優貴。

「何で、そんなの出来るのよ？」

フムと言つて、美優貴は首を捻る。

斜め上を向き、目を閉じる。

おどけるように笑いながら、

「まあ、大した事ではない」

と、美優貴は言う。

「答えになつてねーわよ」

「そうか？」

「そうよ」

北校舎、南校舎、部室棟、東校舎に囲まれた中庭は、多くの生徒から発せられる音と気配がバスターミナルのように集まっている。

絶えず移動する生徒達。

北校舎から流れ出る人の流れに混じり、りる香が中庭に現れた。すぐに美優貴のベンチに近付く。

「お待たせえ」

「遅かったな」

「うん。トイレが混んでたんだあ。思わず、男子トイレに入ろうかなつて考えちゃったよう」

「やってないわよね？」

と、即座になな。

りる香は二ヘラと笑い、

「やってないよう」

と、呑気な口調。

りる香は美優貴、なな、守人の順にのんびりと顔を動かし、

「あれ？影山君、何かあったの？」

と、思い込んだ目つきの守人に訊いた。

ハツとした様子で眼鏡の位置を直し、即座に通常のポーカーフェイスに顔を作る守人。

冷静な声で、

「いえ、何でもありません。お心遣い、ありがとうございます」と、一礼で応じた。

「それならいいやあ」

りる香の一連の動作を、微笑みながらも観察するように見つめていた美優貴が唇を動かした。

「りる香」

「何？」

ニヘラとりる香。

「1つ、頼みたい事があるんだ」

目を丸くして首を傾け、りる香は、

「頼みたい事？」

「そうだ」

ニツと口元を結んだ美優貴。

その横で、ななの眠たそうな瞳がりる香と美優貴の間を移動する。りる香の無防備な顔。

美優貴の自信に満ち溢れた顔。

無表情のななはベンチに座り直し、考えを巡らせるように、人差し指で鼻の頭を軽く叩いた。

第33幕：神前

放課後。

北野神社。

境内。

空には、青の中に黄昏の色が流し込まれようとしている。

西に引き寄せられつつある太陽。

木々の色はまだ青い。

夕暮れを迎えようとしている街の息遣いが、神社の中に微かに漏れる。

日曜日と同じ神社だったが、顔ぶれは違っていた。

賽銭箱の前には、美優貴、有喜、ななが並ぶ。

面接を受ける大学生のような顔で、伊庭が3人と向かい合っている。

守人は賽銭箱の向かって左横に控えていた。

そして、もう1人。

「すまないな、ブラザー。わざわざ呼び出して」

と、美優貴は高杉に言った。

高杉は賽銭箱の裏、地面から本殿へと上がる木製の階段の最上段に腰掛けている。

荒寺を根城としている山賊の頭目のように、どっしりと構えている。

緩めたネクタイを揺らしながら、高杉は立ち上がり、

「気にするな。何かワケがあるんだろ？」

そうだと言って、美優貴は伊庭をチラリと振り返り、

「これから伊庭は大事な用事がある。送り出す時に1人でも多く、同じ性別の男がいれば、心持ちが違うと思ってな」

高杉はトントんと階段を下りながら、

「なるほどな」

「何で私が呼ばれたのか、分かんないんだけど」

と、仏頂面で不機嫌な表情と声でななが抗議する。

ジロリとやる気のなさそうな目を美優貴に向けるなな。
そのななに、

「まあまあ。 ななちゃん、クールダウンクールダウン」

と有喜はニコニコしながら、ななの肩に腕をまわして言った。

「私は冷静で、テンションは下がってますよ」

「おやおや？もうクールとダウンはしてるのか」

ななは制服のスカートに片手を突っ込み、携帯電話を取り出す。
背面のディスプレイには、17時23分を示す数字の列。

「何で、こんな時間にこんな場所に」

「まあまあ。 乗り掛かった船だよ」

「乗せられた船ですよ」

「同じ船なら、腹決めちやおう決めちやおう」

「先輩も引つ張り込んだ1人ですよ」

「そうなのそうなの？」

ななの平静な抗議と、有喜の茶化するような返答。

2人の会話を横目に、美優貴は正面の伊庭を見据えた。

「伊庭」

玉座から謁見を許された者へ声をかけるような、威厳のある静かな声。

「はいっ！」

大役を任された、経験の浅い使者のように、伊庭は全身を固くする。

短く、やわらかな風が吹く。

風が、美優貴の髪を撫でる。

しっかりと開かれた美優貴の瞳。

悠久の時を過ごした砂漠の王墓オウボのような、存在感のある眼光。

蒼天を割る輝きを持つ、日輪のような眼光。

その両の目の銃口を伊庭に向け、美優貴は言葉を続けた。

「これから、お前は彼女に告白する。覚悟はいいか？」

凍り付いた関節を徐々に溶かしていくように、伊庭はゆっくりと頷いた。

「よし」

美優貴は伊庭に向かって歩き出した。

大地を踏みしめ、氷像と化した伊庭に言葉を向ける。

「最後の特訓だ」

足を止めた美優貴。

腕を伸ばしても、僅かに届かない距離にいる伊庭を見上げ、

「まあ、特訓と言っても時間があるワケではない。最後の言葉、
とでも言い換えよう」

と語りかけるように言って、右手を腰のくびれに当てた。

ジッと、ブラックホールの太陽のような瞳で伊庭を見つめる美優貴。

伊庭は目立たない喉仏をゴクリと動かす。

相対する2人。

本殿付近のメンバーは、思い思いの表情で美優貴の背中と伊庭の顔を眺めている。

高杉は精悍に、守人はポーカーフェイスで、有喜は楽しげに。

ななは仏頂面、無表情、不機嫌、無愛想な鉄仮面で。

ギャラリーに視線を割く事も無く、美優貴は形の整った薔薇色の唇を使役した。

「もし、お前の告白が上手くいかなくても、相手を傷付けるような事はするな」

「傷付ける…？」

「そうだ」

美優貴は頷く。

「恋人同士になった場合、お互いを思いやる事は当然だ。しかし、自分の思いが届かない場合、人は迷いの道に入る。悲しみ、嘆き、怒り、恨み…。とても美德とは言えない感情に支配される」

美優貴の前に立ち尽くす伊庭は、年下のコーチの言葉にジツと耳を傾けている。

美優貴の明瞭な言葉は続く。

「しかし、美德ではないとは言え、これらの感情は元より人の持ち合わせた物。捨てる事は出来ない。悲しい時には泣いてもいい。怒る時には声を荒げてもいい。それが人だ。重要なのは、自分がその感情とどのように向き合うかと言うことだ」

黄金色の風が吹く。

「例えば、お前の思いが彼女に届かなかつたとする。お前は悲しむだろう。もしかしたら、お前は怒るかもしれない。その時に、彼女に対して呪いの言葉を吐くな。人間性を貶めるような事はするな。彼女の命を脅かすような事はするな。彼女は、お前を裏切ったワケでも罨にかけたワケでもない。お前が彼女に思いを寄せて告白したのと同様に、自分の気持ちに従っただけだ。その気持ちに罪はない」

本殿の屋根に雀が2羽、飛んできた。

「もし、相手を傷付けるような事をしてみろ。その行為は相手を傷付けるだけでなく、『彼女に恋い焦がれた過去の自分』までも傷付ける事になる。振られた上に、昔の自分にまで刃を振り落としてしまつては、それこそ『やってられない』だろう?」

最後の言葉だけを冗談めかして言つて、美優貴は髪を耳にかけた。「彼女に恋した自分を誇れ。自分が恋した彼女を誇れ。卑下するな。卑屈になるな。彼女に心惹かれた時が、自分にとって輝き満ちた時間だったと確信しろ。それが出来るのなら、いくらかでも泣き言を聞いてやる。もし、告白が上手くいったら、後は2人で決めていけ。寄り添う2人に口出しする程、私は野暮ではないのでな。…さて、伊庭」

見えない手に肩をガツシリと掴まれ、揺さぶられたように、伊庭はハツとした顔で、

「はいっ!」

美優貴は悠然として、神社の石畳の上に立っている。

「改めて訊くぞ。…『覚悟』はいいか？」

黄金色の風が吹く。

清廉で厳めしい本殿の屋根の上に休んでいた鳥のペアが飛び立った。

美優貴の言葉を打ち付けられたように、伊庭は目を見開いて立ち尽くす。

伊庭の目の前。

グレーの制服をキチンと着こなした美優貴がいた。

甲冑に身を包んだ女騎士のように背筋を伸ばし、真っ直ぐに伊庭の目を見つめる美優貴。

太陽の光を避け、物陰に身を隠そうとする物の怪のような反射的な動きで、伊庭は視線を逸らす。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

風が、場の雰囲気呑まれたように、止んだ。

伊庭は下を向き、定位置を維持している眼鏡に右手を伸ばしかけて、止まった。

指先は、レンズの間のブリッジに触れる事無く、寸前で二の足を踏んでいる。

伊庭は自身の手を見つめた。

開くでも無く、握るでもない、中途半端に形作られた右手。

隣の中指よりも関節2つ分だけ長く伸ばされた人差し指。

ゆっくりと、伊庭の瞼が閉じる。

深く息を吸い込み、細く吐き出す。

全身に巡る不安を吐き出し、その不安を握り潰すように右手を固める。

握り締めた拳を、力を込めたまま下ろした。

顔を上げ、閉じていた両眼を開く。

視線の先には、美優貴。

美優貴の背後には4人の付き添い人。

その背後には神社の本殿。

大きく張り出した屋根の下、暗がりとなった本殿内部の明かりが、ガラス戸の向こうに見える神前を照らす。

視線を美優貴へと戻す。

美優貴は表情一つ変える事無く、揺るぎない瞳で伊庭を見つめている。

美優貴の2つの太陽を逸らす事なく見返し、伊庭は唇の門扉を開いた。

「…覚悟は、出来ています」

無言の美優貴。

数秒の後に、満足そうに口元を結び直した。

「それなら、よし！」

明るい口調で言つて、美優貴はブレザーのポケットに手を滑り込ませた。

「今までの復習だ。いいか？」

「はい」

「告白する言葉は？」

「飾り立てるよりも、気持ちをさらけ出す言葉を」

「伝えるべき気持ちは？」

「『恥』ではなく、『愛』を」

「告白の作法は？」

「身を焦がす程に熱く、虚構等有り得ぬ程に白く、決闘に挑むが如く堂々と」

「よし！」

そう言つて、美優貴はポケットから手を出した。

美優貴の手には、重ねられた2枚のカード。

青と黒の線が交差した柄の、縦に長いカードをかざして、

「伊庭。お前はタロットカードを知っているか？」

「タロットですか？」

予期していなかった美優貴の問い掛けに、伊庭は困ったような表情を浮かべて、

「名前は知ってますが、占い方とか、カードの意味とかは知りません」

美優貴は伊庭の言葉を気にする風でもなく、

「まあ、そんなものだろうな。知らないからと言って引け目を感じることはないぞ。知らないほうが、よりシンプルに感じる事が出来る事もあるからな」

そう言つて、右手のタロットカードを分けた。

右手に1枚、左手に1枚。

美優貴は手首を返した。

表の絵柄が伊庭に向けられる。

「伊庭、お前から見て左側のカードはどんな印象を受ける？」

美優貴の右手のカード。

『恋人』（ザ・ラウ、アーズ）のカード。

伊庭は、難解な問題文を前にしたようにカードを見つめ、

「…恋人、ですか。幸せな男女のように見えます。色が明るいですし」

「そうか。では、右側のカードはどうだ？」

伊庭は右側の――美優貴の左手の――カードに視線を移した。

黒を背景とした暗い色調。

カードの左右には、生まれたままの姿をした男女。

その頭には鬼のような角が生え、それぞれの首には猛犬をつなぎ止めるかのように頑強そうな鎖が巻かれている。

鎖に繋がれた男女を従えるように、中央には異形の生物。

頭にはカーブを描いた山羊のような角、背中には蝙蝠のような巨大な翼。

悪意に満ちた眼差しを向ける生物の名前は、絵柄の一番下に書かれていた。

『悪魔』（ザ・デビル）。

伊庭は眉間にシワを寄せて、

「これは、いい印象は受けませんね。この真ん中のいるのが悪魔ですね？」

と、カードを指差す。

美優貴は頷き、

「お前の言う事は正しい。片方は幸福、もう一方は不幸。『恋人』と『悪魔』。シンプルなイメージ、カードの名前の通りだな」

軽く視線を落とし、2枚カードを混ぜる。

「私から言う事は、最早無い。今から行うのは、ただの運試しだ。お前が幸福を引き寄せる事が出来るかどうか、な」

ピタリとシャッフルする手を止める。

手首を起こす。

裏を向いたままのカードが、跳ね橋が上がるようにしてゆっくりと伊庭を向いた。

トランプの兵のように伊庭に対峙した2枚のカード。

突然現れた2枚の兵に戸惑う視線を送る伊庭。

「安心しろ」

美優貴の言葉に、伊庭はパツと顔を向ける。

視線の先の美優貴はニヤリと笑い、

「よくあるように、両方とも同じカードという事は無いぞ。私は

手品師ではないからな。どちらかは、確実に『悪魔』だ」

「安心しろって言われても……」

愕然として首を振る伊庭。

「『恋人』なら、その勢いのまま行けばいい。『悪魔』なら悪運を打ち破るくらいの心構えで行けばいい。ほら、グズグズしないでさっさと選べ」

伊庭は2枚のカードを見、美優貴の笑顔を見、困り果てた顔を美優貴の背後に向けた。

守人は直立不動のまま、眼を伏せる。

高杉は腕を組み、精悍な顔で両目を瞑る。

笑顔の有喜は、木彫りの猿のように両目を隠す。

ななは無愛想な顔に、眠たそうな眼で伊庭を見つめ返す。

表情を隠すギャラリーから恨めしそうに顔を逸らし、伊庭は2枚の敵と相見える。

恐る恐る手を伸ばす伊庭。

ネジがゆるんだメトロノームのように2枚の間をゆらゆらと往復させる。

数秒の後。

伊庭の指先が、美優貴の右手のカードに、触れた。

指先に力を入れ、引き抜く。

生唾を呑み、バツと手首を返した。

「あっ」

伊庭の手にしたカード。

一組の男女。

カードのタイトルは、『恋人』。

伊庭は驚いた顔を上げた。

「お前の勝ちだ」

美優貴の誇らしげな声。

「流れはお前にある。しかし、乙女心と秋の空、そして女神の微笑みは、移ろいやすいが世の常だ。流れが変わらない内に早く行け。ああ、せつかく皆が来てくれたんだ。皆、伊庭に一言くれないか？」

と、背後を振り返る。

「ご武運を」

と、一礼の守人。

「…俺は、惚れたはれたはよく分かりませんが、惚れた相手なら本気でやらないと締まりが悪い、って事は分かります。腹決めて行つて下さい」

と、武人然として言い切る高杉。

「まあまあ、先輩なら大丈夫大丈夫。美優貴ちゃんと特訓もしま

したしね。もし駄目だったら、その時はパーツと大失恋パーティーでもしましょうよ。みんな付き合いますから」

口の鉛筆を指にはさみ、ヒラヒラと泳がせて有喜は言った。

「お大事に」

と、なのなまっ平らな声。

なのな鉄面皮と荒野のような声を、伊庭は情けないような、拍子抜けしたような顔で受け止めた。

その顔のまま、美優貴に顔と体を向ける。

空の太陽は、黄昏の色合いを強くしていた。

色がついた光の下、美優貴は神妙な顔つきで口を開いた。

「…一連の始まりは、私の質問だった。それから先は、私がお前を焚き付け続けた。野暮な真似をしたとは思うが、それでもお前は付いて来てくれた」

僅かな、間。

美優貴は柔らかに、微笑んだ。

「感謝する」

優しさと強さが入り混じったような、微笑。

小春日和を思わせる美優貴の笑顔に、伊庭は動作を止めた。

空白。

一瞬の後に、伊庭は視界の焦点を合わせる。

大地の底から万感の思いを吸い上げるように、背筋を伸ばし、深く息を吸う。

呼吸を止める。

両目を閉じ、薪割りの斧のような速度で深々と頭を振り下ろした。

「ありがとうございました！」

地面に叩きつけられた伊庭の謝辞。

美優貴は向けられた伊庭のつむじを見下ろし、

「…礼にはまだ早い。全て終わってから聞いてやる。それに、礼の言葉は相手を見て言うものだ」

しまった、という表情で顔を上げた伊庭に、美優貴は手のひらを

向ける。

通行止めをするようなポーズ。

美優貴はニツと笑い、

「礼は後だ。行け」

「…はいっ！」

伊庭は、もう一度素早く頭を下げると、ギャラリーに視線を向けた。

決勝を前にした球児のような顔つきで、並ぶ顔をグルリと見回し、背を向けた。

鞆とカードを手に、走り出す伊庭。

大鳥居に向かって離れていく伊庭の背中を、満足そうな、寂しそうな顔で美優貴は見つめる。

夕暮れの色調が濃くなる住宅街に、伊庭が小さく混じった。

伊庭を見つめる美優貴の背中。

その背中に、なながフラリと近付いた。

気配に気付いた様子で、美優貴は振り向く。

「どうした？」

ななは無愛想な顔のまま、美優貴の左手に手を伸ばした。

ウエストに当てられた左手。

その指先をはさまれたカードを引き抜く。

手にしたカードを寝入りそうな眼で眺めてから、ジロリと美優貴を見やった。

美優貴は大胆不敵な笑みを浮かべて、

「どうした？」

と、再度訊ねる。

手にしたカードを有喜達に見せるように、ななは横に腕を軽く伸ばす。

「嘘つき」

ななの淡々とした言葉。

指先のカードの数字は6。

そこに悪魔はいなかった。

第34幕：お迎えに

広美はタオルで汗を拭くと、落ち着かない様子で辺りをキョロキョロと見回した。

伊庭が美優貴達と別れる、少し前。

女子テニス部、練習の休憩時間。

束縛された時間からの解放を象徴するかのような、適度な疲労に満ちた喧騒がコート周辺に広がる。

一様にジャージ姿の女子部員達は思い思いの時間を過ごしていた。

コートで自主練習に余念の無い者。

水道や食堂の自販機に向かう、水分補給を求める者。

ベンチに閻魔の様に座っている、顧問の醍醐に技術指導される者。フェンスに寄りかかり、四方山話に花を咲かせる者。

その中で、広美は独り、ソワソワと顔を巡らせていた。

小さい子どもが入っている、風呂の浴槽に浮かぶアヒルの玩具のように落ち着きの無い広美に、丸顔の麻実がペットボトル片手に近付いた。

「広美？」

横を向いていた広美は、ビクンとポニーテイルを震わせ、

「なっ、何？」

と、麻実にフクロウのような顔を向ける。

取り繕った様な顔。

森の賢者の顔をジッと見つめ、麻実はポツリと、

「…何を隠してる？」

瞬き2つ。

広美は回遊魚の動きのように目を動かし、

「何も？無いけど」

麻実は一歩詰め寄る。

「何を隠してる？」

広美は一步退く。

「何も？」

「吐け」

「だから……」

「吐・け」

自分よりも小柄な麻実に、フェンスに押し付けられるように詰りめ寄られる広美。

サスペンス・ドラマのクライマックス、崖の上に追い詰められた犯人のような状態。

麻実の視線から逃れるように、爪先立ちになった広美は首を伸ばし、空を仰ぐ。

「あの、えつとさ……。今何時かな？」

と、問いの矛先を変える広美。

友人のささやかな抵抗に、麻実はフェンスを鷲掴みにしている自身の手元に視線をチリリとやる。

ピンクの細いロープで繋がれた、ミサंगाのようなスポーツウオッチ。

その文字盤に大きく並ぶ数字は、17:22。

尋問者の瞳で広美を見上げ、

「5時22分よ」

と、脅迫者の声で麻実は答える。

動かせる範囲で視線を振り回し、

「へえ……。そうなんだあ」

と、弱々しく答える広美。

沈黙。

周りの開放的な雰囲気から隔絶されたかのような一角。

足の裏を擦るようにして、にじりよる麻実。

押し潰した広美を見上げ、

「吐・け」

フェンスと麻実にプレスされた広美。

泣き出す直前の子どものように唇を結び、両目を閉じる。

直後。

「あのう、すみません」

と、可愛らしくのん気な声が、尋問者と容疑者の耳に小さく届いた。

広美と麻実は声の発生源に顔を向ける。

奥のコート寄りのフェンスの辺りにいる広美から見て、右手側。

顧問が数人の選手に熱血的な指導をしている、更に向こう。

開け放された出入り口。

そこに、制服姿の女子がいた。

眼鏡をかけた小柄な生徒。

通学鞆を両手でぶら下げ、観光客のように周りを見回している。

周囲の部員達の好奇の視線に気付いた様子は無い。

ベンチに座り、身振り手振りで情熱的なコーチングをしていた醍醐は、その女子生徒に気付くと、熱い流れのまま体を向けた。

女子生徒は、醍醐に気付くと、気抜けする笑顔をニヘラと向けた。

笑顔を向けられた醍醐は、自らの情熱を発散させるように両手を

動かした後、

「…何か、用か？」

と、行き場を失ったやる気を押し出すような声で訊いた。

女子生徒はトタトタと醍醐に近付き、

「はい。松先輩をお迎えに来ました」

「松を迎えに…？」

間。

ゆつくりと言葉が脳に到達した様子で、だんだんと醍醐の顔色が変わる。

堅く、青くなった表情で、

「…と言う事は、酒匂川の…」

と、先ほどとは別人のような小声で呟く。

女子生徒は小首を傾げ、

「何ですか？」

醍醐はバツと首を振り、

「いや、何でもなし。話は聞いているから、連れて行っていいぞ」

「そうですか。松先輩はどこにいるんですか？」

醍醐は周囲を素早く見て、

「あそこで、押し潰されてる方が松だ」

と、広美を指差す。

「分かりました。ありがとうございます」

ペコリと頭を下げて、女子生徒は広美に向かってトコトコと歩き出した。

現状を維持したまま、広美と麻実は女子生徒を見つめた。
のん気に歩いて、女子生徒は広美に近付いた。

ペコリとお辞儀の女子生徒。

「はじめまして。松先輩ですね？お迎えにきました」

プレスされたまま、広美は疑問そのものの顔と声で、

「そうだけど…。あなたは？」

と、訊く。

女子生徒はニヘラと笑った。

「紙屋りの香です。先輩に頼まれてきました」

この時、広美と麻実の状態にはじめて気が付いた様子で、
りる香は2人を見比べた。

「仲良しなんですねえ」

烏が遠くで大きく鳴いた。

第35幕：取り舵いっぱい

「えっと、伊庭先輩に頼まれて、来てくれたの？」

「はい。そうです」

「迎えに行ってくれ、って？」

「はい。そうです」

夕暮れの学園。

校舎の影が濃くなった石畳の道を、広美とりる香は並んで歩いていた。

どこか落ち着かない様子の広美は、ジャージにウィンドブレーカーを羽織り、ラケットケースやスポーツバッグを手にした帰宅姿だった。

右肩にかけたスポーツバッグのジッパーを指先でいじりながら、右隣のりる香をチラチラと見やる。

りる香は広美の視線に気付いた様子もなく、鼻歌でも歌い出しそうな気色で前を向いていた。

広美は足元に視線を落とした。

「…えっと、紙屋さん？」

広美の不安そうな声に、りる香は顔を向けた。

「何ですか？」

広美は声と同じように、浮かない顔つきで、

「…伊庭先輩の事、よく知ってるの？」

と言つて、広美はチラツとりる香を覗き見る。

広美の問い掛けに、りる香はゆっくりと首を捻った。

斜め上を見つめるともなく見つめて、うん、と唸る。

「詳しくは知らないですねえ」

「…へ？」

りる香の答えに、広美は首を起こした。

「この間、初めて合ったんです」

「この間？」

呆氣にとられた様子の広美に、りる香は二ヘラと笑いかけた。

「いい人ですよねえ」

無邪氣、無防備そのもののりる香の笑顔。

その笑顔を、広美は呆氣にとられた顔で見つめる。

正門に向かい、ゆつくりと坂を下る2人。

その正門の先には、一台の黒いタクシーが、2人を待ちわびるようにして停車していた。

「あのさ」

「ん？」

「どうして、りる香に迎えに行かせたの？」

伊庭がいなくなった後の神社。

美優貴達5人は、各々鞆やバッグ―なの手には重箱、守人の手にはバスケットもを―ぶら下げ、石畳の上を歩いていた。

石に影法師を落としながら、美優貴は左隣を歩くななの問いに、

「簡単な事だ。相手がりる香なら、彼女もそこまで警戒しないだろう。最初は警戒するかもしれないが、すぐに薄らぐはずだ」

「確かに確かに」

と、美優貴の右横で有喜が軽やかに口を出す。

くわえ鉛筆をピコピコと揺らし、

「見てるこつちが心配になるような娘だからね、りるちゃんは。

お菓子で誘拐できそうな雰囲気があるしね。適役適役」

と、楽しそうに言う。

美優貴は頷き、

「うつちゃんやブラザーでは、警戒させるかもしれないからな。

『色々』」

「確かに確かに」

「私や守人では論外。なの場合は、論外の上だ」

「確かに確かに」

「どーゆー意味です」

5人分の足音が境内に響く。

夕暮れ時の喧騒が、染みるようにして境内に届く。

突然。

美優貴の右後ろにいた守人が足を止めた。

「どうした、守人？」

主の疑問に、執事は地面に鞆を置くと、内ポケットに片手を伸ばした。

ブレザーの内側から現れた右手には、細身の携帯電話。

背面ディスプレイに明かりが点り、バイブレーターで小刻みに震えている。

「お嬢様、申し訳ありません。少し離れさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「許す」

「ありがとうございます」

一礼すると、守人は美優貴達からスツと離れた。

石畳から離れ、色が濃くなりすぎた木陰の下に立った守人。

「ただだけど、上手くいくかな？」

と、石畳の上で立ち止まった有喜は軽く訊ねる。

「そればかりは分からないな。しかし、1時間もすれば分かる事だ」

と、美優貴は達観したような微笑みで言う。

「ななちゃんは気にならない？」

「どーでもいーです」

と、ななの愛想も何も無い答え。

高杉は両目を細め、

「惚れた腫れたは分からねえ。俺は、松の下着の好みぐらいしか分からねえしな」

「黙れっつーのよ」

美優貴はああと言って、

「聞き忘れていたが、松先輩の下着の好みは…」
スッパアァン。

自身の後頭部を強襲したななに、

「何をする！」

と、美優貴は牙をむく。

ななは指先の滴をはらうように手を振ると、

「訊くんじゃねーわよ」

「口で言えば済む事だろう！」

「それじゃ、私の気が済まないのよ」

美優貴とななの口頭合戦を気にする風でもなく、有喜と高杉は会話を続けた。

「そう言うつつちゃんはどう思う？」

「分かんない分かんない。あ、そうだそうだ。高杉ちゃん、この後どうする？」

「この後？」

「この後」

「…一度、学校に戻る。取り返さねえといけねえ物があるからな」
守人が木陰から離れた。

守人の様子を気付いた様子で、美優貴はななへの口撃を止めた。

「終わったか？」

真剣な守人の表情。

瞬間。

守人の表情に、美優貴は顔色を変えた。

玉座に座る者の顔で、家臣を問い質す。

「何があつた？」

数秒前とは180度違った、重く、落ち着いた口調。

主の問いに、守人は視線を主の周りに走らせた。

美優貴は周りを囲むメンバーをスッと一瞥してから、
「構わん。言え」

「かしこまりました」

一礼の後、守人は口を開いた。

「円舞学園駅に配備している者から報告がありました。報告によると、伊庭先輩は未だに姿を見えていないようです」

眉をピクリと動かし、美優貴は鞆を持った手をウエストに当てた。

「確かか？」

「はい。現時点で各改札口、及びホームから目視出来る範囲には確認出来ません」

「そうか。他には？」

「何もございません。他の進行には問題はありません。作戦通りに進行しています」

「問題があるのはそこだけか…。守人、今の時刻は？」

再び守人は鞆を置き、ブレザーの内側に右手を差し込め、今回は銀色の懐中時計を取り出した。

朱色の光を反射する滑らかな表面の時計。

開かれた文字盤に目を落とし、

「17時32分です」

「5時半か…」

美優貴は視覚を一時的に遮断した。

目を閉じたまま、柔らかく口をすばめて、自由な方の手のひらをこめかみに当てた。

髪のとれをなぞるように、指先の群れを後頭部に向けて滑らせる。

細く、吹くようにして息を吐き出した後、美優貴は視覚を叩き起こした。

猛禽の瞳が蘇る。

「作戦の変更をする。プランA1からプランM3に変更。本部のオノデラ小野寺に伝えろ！」

前線に立った猛将のような語気。

「かしこまりました」

話の流れに取り残されたなな達を尻目に、オレンジの髪の指揮官は参謀に命令を続ける。

「小野寺への連絡がついたら、次は先崎をこちらに向かわせる。先崎にも連絡はいくだろうが、こっちから伝えた方が早い。今作戦は道の流れを把握する事が重要だ。抜かるな！」

「かしこまりました」

一礼すると、守人は再び主から離れた。

守人が携帯電話を取り出すのを眺めながら、ななは鼻の頭をトンと叩いた。

「…あのさ」

「ん？」

と、肩越しに美優貴。

「何が起こってるの？」

「大した事ではない。伊庭が駅についていないだけだ」

「それは分かってるわよ。作戦とか、本部とかについて訊いてるのよ」

ああと言って、美優貴は体を向けた。

長い髪が揺れる。

「伊庭の告白がスムーズかつドラマティックに行われる為に、私の部下を各所に配置した。隣の駅とはいえ、無事に公園に着かなければ意味が無いからな」

と、美優貴はサラッと言う。

ニヤニヤとし始めた有喜。

「本来から36分発の電車に間に合うように、ここを送り出したのだが…。現時点で駅にいないとなると、電車には間に合わないかもしれない。そう考えて、作戦の変更をただけの事だ」

ニヤッニヤッし始めた有喜。

「野暮にもほどがあるんじゃない？」
とななは言う。

美優貴はフツと笑い、

「野暮は承知の上だ。だが深く静かに、そして密かに行えば、相手に分かる事はない。知らなければいいだけの話だ。それに…」
ここで美優貴は片手をバツと横に伸ばす。

屈強な騎兵隊の志気を鼓舞する將軍のような語気、舞台の花形のような明瞭とした声で、

「一度乗った船ならば、港に着くまで終われない!!」
力強い、間。

仏頂面のなな。

笑いだすのを堪えるように、体をひくつかせる有喜。
腕を組んでいた高杉は、染み入ったように目を瞑ると、静かに頷いた。

通話を終えた守人が、木の下から離れた。
背中を向けていた美優貴が、クルリと振り向く。

「よし、では伊庭を探しに行くぞ。ここから駅までは歩いてても10分とかからん。伊庭は少しの間かもしれないが、走っていたからそれよりも時間がかからんはずだ。それでも、まだ着いていないとなると、何かトラブルに巻き込まれた可能性がある。今、搜索に有利な場所に私達はある。急ぐぞ、守人」

「かしこまりました」

守人は甲冑に身を包んだ騎士のような忠誠心に溢れる礼と共に、

「この影山守人、全身全霊にて御命令を全う致します」

「よし。…皆はどうする？」

と、振り向いた美優貴に、

「私も行く行く!」

と、有喜は新しい玩具を買った子どものように言う。

「俺も行くぞ」

と、歯切れのいい声で高杉。

武士のように両目を開き、

「構わねえか?ブラザー」

「もちろんだ。ブラザー」

「それじゃそれじゃ、全員参加って事で」

「ちよつと待って」

話を荒縄でまとめようとした有喜を、ななが無表情で止める。

「私は行くって言っただけですよ」

有喜はニコニコと笑いながら、

「乗りがかった船だよ」

と、前にも言った台詞を繰り返す。

不機嫌そうに口を開きかけたなな。

それを、

「鈴森」

と、高杉が遮る。

眠りを起こされた肉食獣のように、ジロリと視線を向けたななに、

「ここまできたら、行く所まで行こうじゃねえか」

再び口を開きかけたなな。

そのななの肩に、有喜はスルリと腕を回す。

しかめっ面の鉄仮面に、笑顔を近づけ、

「まあまあ、ななちゃん。ここは一つ、船旅を楽しもうよ」

と、有喜は楽しげに言う。

ななは眉間にシワを寄せ、肩にしっかりとかった有喜の指先を

チラッと見た。

「よし、では皆で行くか」

上級生の波状攻撃の後の、刹那の隙を突かれたななは、

「ちよつと…」

そのななの肩をガツチリと掴み直した有喜はニコニコと、

「了解了解」

高杉は短く、

「おう」

美優貴は嬉しそうに頷いた。

「よし。時間がない。急ぐぞ！」

マントを翻すように、長い髪を舞わせ、美優貴は大鳥居に向かう。

威風堂々、颯爽とした足取り。

若き王者に付き従う従者のように、守人が美優貴の後に続く。その後ろに、高杉と有喜、有喜に捕獲されたななが横並びで続いた。

青い空の色が薄くなる。

境内の落ち着いた静けさ。

大鳥居の外では、人の作り出す音や気配が満ちている。

一步一步、段々と喧騒に近付いていく中、ななはため息をついた。運動が苦手な学生が、体育祭の前夜につくようなため息。

「…氷山にぶつかって、沈まなきゃーけど」

第36幕：暗黒街に1人の騎士

円舞学園の最寄り駅、円舞学園駅。

学園の名前をつけられただけあり、円舞学園の多くの生徒の姿が改札付近を行き来している。

学園に面した北口側は駅前の賑わい。

南口側は、住宅街の落ち着きが勝っていた。

一日の終わりを迎える準備を整えつつある駅前は、一年の終わりを迎えようとする年末の空気のミニチュアのような雰囲気を作り出していた。

街灯が灯る。

飲み屋が営業中の暖簾を掲げる。

腹の虫を挑発する香りが、飲食店から抜け出る。

商店街も活気づいていた。

その中。

商店街の外れの一角。

小さなビルとビルの間。

陽の光がビルの壁面に斜めに差し込む、コンクリートにつつまれた細長いスペースに伊庭はいた。

奥行きはあるが、大人4人が横に並ぶのがやっとなくらいの幅の空間。

その空間で、伊庭は身を固くし、うろたえた視線を周囲に動かしていた。

伊庭の周囲。

文字通り、伊庭の周りを男達が囲んでいた。

6人の男。

全員一様に、量の多い短い黒髪。

威嚇する12個の三白眼。

着崩した円舞学園の制服。

前を開けたブレザーと、シャツの下には、全員一様に深紅のＴシャツを着ていた。

「先パイよお」

と、伊庭の正面を陣取っていた小太りの男が口を開いた。

ポケットに手をつ突っ込んだ小柄な男は、下から這いずり上がるように伊庭を見上げ、

「だからさあ、後輩を助けると思ってたよお。ちっと力ネかしてくんねえかなあ？」

と粘着質な声で訊く。

伊庭は口を真一文字に結び、強ばらせた喉をゴクリと動かす。

「いいじゃん、少しぐらいさあ。だってよ、元々先パイがオレ達にぶつかってきたのが悪いんじゃない？」

伊庭の右横の背の高い細面の男が、伊庭の肩を叩きながら気安い口調で言う。

「悪いことしたならさ、態度でしめさなきゃ。先パイだってさ、分かってるでしょ？どうなるかさあ」

伊庭は再び生唾を飲み込む。

「んまあよお。オレ達アどっちでもいいんだけどなあ。お小遣いくれりゃラッキーだし、くれなきゃくれねえで…。ねえ、リーさん？」

そう言って、小太りの男は背後を振り返った。

小太りの背後。

閉鎖された空間の一番奥に、１人の男が立っていた。

腕組みをした、シャツの第一ボタンまで留めた黒髪の男。

前髪は短い。

必要以上に力を込めて目を瞑っている男は、無言で自身の前方空間を突いた。

バシッと、激しく衣服の擦れる音が伊庭の耳に届いた。

マツチを擦る音が、何十倍にもなったような、素早さを伴った動作音。

その音を生み出した男の拳は、目元と同じように必要以上の力にブルブルと震えていた。

男は突き出した拳を返し、手のひらの方を天に向け、握ったままの指先を甲殻類の脚のように蠢かせた。

ボキボキッ。

指の関節が、小枝を踏みつけたような音をたてる。

「分かりました、リーさん」

小太りは、リーダーの意を察した様子で、陰湿な笑みを見せた。

「先パイさあ、オレ達も大変なんだよ。円学^{エンガク}にはさあ、三傑^{サンゲツ}って、マンガみてえなヤツらがいるからさあ」

「そうそう。オレ達としては、そいつらをブツ潰さないとデカい顔出来ないのよ。…とにかくさ、『色々噂をたてて』さ、あぶり出なくちゃいけないのよ。大御所はなかなか相手してくれないからねえ」

と、細面が補足する。

小太りがニタリと笑い、

「んまあ、先パイには噂の元にもなつて貰いたいの」

伊庭、完全硬直。

「せいぜい大袈裟に言つて下さいよ。内容は…」
細面が顎を長い指で撫でる。

「…ルーキーのブルーツ・リーとその一味にやられた、って感じで」

興味のない映画のキャッチコピーでも口にしたような言い方で言うと、伊庭の背後と左側を取り巻いていた2人組みに、顎でしゃくってみせた。

四角い顔をした男と、細い目をした七三分けの男が、頷いて通りの方へと動きだした。

6人の中でも体格のいい2人が見張りの役目に消える。

伊庭の周りの男達が、薄ら笑いを浮かべて指の関節を鳴らし出す。リーは火中の木炭のように静かに燃え、伊庭はエンジンをかけた

ばかりの芝刈り機のように膝を震わせ始めた。

小太りが口元を歪ませ、握り拳を振り上げる。

数秒後の光景から逃れるように、伊庭は目元のシャッターを固く閉ざした。

拳が、落ちる。

転瞬。

「そこまでだ!!」

一喝。

大型の津波のような、破壊力。

空気が震え上がる。

狭い空間を割るような一喝に、その場にいた者は――拳を振り下ろしていた者さえも――動作を止めた。

空気を破った声が、更に続ける。

「大事が控えていると言っのに、何を遊んでいる？伊庭？」

若い女の声。

「何言っただ、コラッ」

「ワケ分かんねえんだよ」

見張りに立った2人が、態勢を立て直した様子で威嚇を始める。

女は怒りに満ちた男2人の存在を認識していないかのように、

「伊庭。私の声が聞こえないのか？」

と、見張りの言葉に答えない。

女の態度に、2人の怒声があがる。

背後からの呼び掛け、怒声に身を鋼鉄にしながら、伊庭は錆び付

いたボルトのように、ゆっくりと首を背後に向けた。

ギシギシと音をたてそうな程にぎこちない動き。

伊庭の視界が徐々に変わる。

珍入者に訝るような注意を注ぐ、伊庭を取り囲む男達。

薄暗い影を作るコンクリートの壁。

大柄な体、背を丸めて威嚇する見張り2人の肩が盛り上がった背中。

その先。

壁に包まれた空間の外、傾いた陽光を浴びて、屈強そうな男達の怒声を涼風のように受けている人物。

鞆をぶら下げた手を腰に当てた人物。

円舞学園の制服。

女生徒。

長い、オレンジ色の髪がなびく。

影になった顔の右側、右目が、強く光った。

閉ざされた岩の隙間からもれた微風のようなかすれ声を、伊庭はしぼり出した。

「…コーチ」

迷路の先に光を見つけた遭難者のような顔をした伊庭に、美優貴は威風堂々とした不敵な笑みを見せる。

「探したぞ」

その美優貴の背後には、神社で伊庭を見送った他の4人が陣取っている。

「テメエ等、何様だコラァ！」

「やんのか！」

見張りの2人の罵声に、伊庭の周りを囲んだ男達の威嚇が加わる。美優貴の背後で、ななは周りをチラリと見回す。

大通りからそれた小路に、通行人はいなかった。

「何？この状態」

ななの平坦な独り言に、

「なるほどなるほど。あれがあれが」

と、ななの隣の有喜が軽やかな声を出す。

「何がですか？」

「ほらほら、この間『ないあがら』で先輩が言ってたでしょ。新入生がどうのこうのって」

「そう言えば、言っていましたね」

そう言って、ななは声を荒げた同級生達に、ぶっきらぼうな鉄板

面を向けた。

有喜はくわえ鉛筆を揺らしながら、片手を望遠鏡のように丸めて、右目に当てた。

「あの奥にいるのがリーダーだね。あのリーダーの顔は知ってる。中国拳法が使えるとか使えないとか」

「どっちですか」

怒声、罵声の中から異質な声が上がった。

「おい、アレ高杉じゃねえか？」

異変に気付いたような声。

「高杉？あの？」

「…まさか」

「バカ言っくんじゃねえよ」

「いや、絶対そうだって」

「間違いねえか？」

赤いシャツの一味に動揺の波が広がる。

男達の注意が美優貴から、なのの左側に立った高杉に向けられた。当の高杉は無言で、視線を仁王立ちで受け止めている。

竹林で、剣術の荒修行に身を投じている浪人のような眼差し。

その高杉を、ななは横目でジロツと見た。

「…間違いねえ。高杉だ！」

最初に高杉に気がついた、色黒の男が断言した。

殺人事件の犯人を名指しする名探偵のように高杉を指差し、叫んだ。

「『円舞三変人』（エンブサンヘンジン）の1人！『フィールドの出版禁止用語』、高杉慎一郎だ！！」

間。

間。

間。

男達が息をのむ。

ギロリとツンドラ地帯のような双眸を高杉に向け、

「何言われてるんですか？」

と、不快感そのものの声でななは訊く。

精悍な顔をした高杉は、真正面を向いたまま、

「…そう言う事になってる」

「なってる、じゃねーわよ」

と、ななの真っ平らな声の反論。

ななの右横で、有喜が笑いを堪えている。

「他にも後2人、似たようなヤツがいるらしい」

「訊いてねーわよ」

「他の2人は誰だか知らねえ」

「だから、訊いてねーわよ」

ななの右横で、有喜が笑いを堪えている。

高杉は両目を瞑った。

「まあ、大袈裟な言われ方をされてるが…」

目を開き、ななのブリザードのような視線にしっかりと顔を向けた。

「安心しろ。俺はただの助平に過ぎねえ」

「安心できる要素が1つもねーわよ」

雪の女王の横で、有喜が笑いに震えている。

美優貴が再び口を開いた。

「もういいか？」

男達の注意が、美優貴に戻る。

三白眼の一斉掃射に臆した様子を露ほど見せず、

「お前達が困んでいる男は、これから大事な用事が控えている。

こんな所で時間を潰している暇は無い。こちらに引き渡してもらおう」

片手を差し出し、堂々とした声で言う。

「いい加減にしろよ、このバカ女！」

悪態をつき、美優貴の右前にいた四角い顔の男が一步進み出た。

野球選手のように皮膚の厚い拳を握り、指の関節を鳴らす。

美優貴は、靴の裏についたガムを見るように軽く眉を寄せた。
直後。

無言で美優貴の後ろに控えていた守人が動いた。
完全に気配を消していた守人は、無駄の無い優雅とも言える動作で、美優貴と男の間に入った。

右手で鞆とバスケツトの取っ手を一緒に持ち、何も持っていない左手を体の横にぴったりとつけている。

男は、この時初めて守人の存在に気が付いた口調で、

「なんだ、テメエ？」

守人は言葉を返さない。

影になった眼鏡の奥の、黒曜石のような瞳が四角い顔に向けられている。

守人の無言を、挑発と受け取った様子で、男は荒々しく息を吐いた。

「何とか言ってみろ、テメエ！」

守人の胴まわり位はありそうな、筋骨隆々とした右腕が、攻撃への予備動作に移行し始めた。

握り締められた拳。

肘が引かれる。

腰が捻られる。

拳が上昇する。

刹那。

木立のように立ちはだかっていた守人が、右足を踏み込んだ。

男の大振りで大袈裟な動きとは、全く違う速度。

脇を締めた、左腕の僅かなテイクバック。

その指先は、人差し指と中指が立てられた剣指^{ケンシ}。

男より後に動いたにも関わらず、男の拳が完全に振りかぶられる前に、守人の腕が伸びた。

踏み込み、捻り、突きが三位一体と化した一撃。

フェンシングのサーベルの刀身のように無駄も隙も無い守人の攻

撃が、男の肩と腕の付け根に埋まった。

肩の関節。

四角い顔が、変わった。

守人の指が男から抜かれた時、男の顔はスリラー映画の主演俳優のような顔になっていた。

右腕。

骨が、炎天下に放置されたソフトクリームになったように、男の腕がドロリと垂れた。

絶叫。

反響。

壁が、異常の声をはねのける。

切れそうになる程に口を広げ、男は崩れ落ちる。

肩を押さえ、膝をつく。

横にいた仲間が駆け寄る。

守人はマンホールのフタでも見るように、無機質な瞳でその様子を見下ろしていた。

第37幕：王者の聖剣

ななは普段よりも僅かに目を開け、目の前の光景を見た。
絶え間なく続く呻き声。

有喜は痛そうに顔をしかめて鉛筆に歯型を作り、高杉は両目を力ツと見開いている。

仲間の異常に、見張りの相棒はどうする事も出来ず、青ざめた顔で痛みの元凶の肩の上にたどたどしく両手を浮かせる。

美優貴は無反応だった。

守人は、肩が外れた男の横を通った。

革靴の音を小さくたてて、守人は赤いシャツの一味に近付く。
闇夜に抜かれた日本刀のように、暗く、冷徹な守人の眼。
のつぺらぼうのように、何の感情も浮かんでいない顔。

男達は、身内の者が数秒前に受けた仕打ちと、いまだに響く、痛みに唸る声で顔を引きつらせている。

「伊庭先輩。こちらへ」

言うのが早いが、守人は伊庭の腕を掴んで来た道を戻り始めた。

「お、おいっ……」

赤シャツ一味の内、小太りの男が手を伸ばしかけたが、守人の気色に気圧されたように、動きを止めた。

守人に連れて行かれる伊庭は、混乱している様子で、ただただ周りを見回している。

バシッ。

赤シャツの一味が、タイミングを合わせたミニアキヤットのよう
に場の奥に首を動かした。

一味のリーダー、リーが体の前で右拳を左手で包んでいる。
拳を放し、自身の手のひらを打つ。

再び、バシッと乾いた音が響いた。

鞭に威嚇された猛獣のように、一味は顔つきを引き締めた。

恐怖を更に強い恐怖で打ち消し、男達は美優貴達の方を睨む。

「お嬢様。お連れしました」

「ご苦労。下がっている」

「かしこまりました」

赤いシャツ一味の威嚇が、遙か彼方の野犬の遠吠えであるかのよう
うに、意にも介していない2人のやり取り。

守人に救い出された伊庭は、命からがらの体で、^{テイ}

「コーチ、俺…」

と口を開きかけたのを、美優貴が手で制する。

チラと伊庭を見上げ、

「いい。もう少し待て」

「…待つって、何を…？」

伊庭の疑問符のついた呟き。

直後。

美優貴達の背後、一方通行の狭い道。

そこに1台の車が、静かに止まった。

黄昏色にさらされた、鮮やかなピンクのキャディラック。

左側の窓がスーツと下に飲まれ、ハンドルを握った先崎林太郎の
柔和な微笑みがそこに現れた。

「お待たせ致しました。お嬢様」

美優貴は先崎に背中を向けたまま、

「ご苦労。伊庭、乗れ」

「乗るって、コレに？」

美優貴とピンクの車を交互に見る伊庭。

美優貴は頷く。

「この車が、お前を運命の場所に連れて行く。本来ならば、私も
一緒に行ってやりたいところだが…」

言葉を切り、不敵な形に唇を歪める。

視線の先には、美優貴を食い千切りそうな目で睨む男達。

「この者達が、ただでは帰してくれなさそうだな」

それまで、キャデillacを眺めていた有喜が、
「それならそれなら。私が美優貴ちゃんの代わりに伊庭先輩を送
ってくるよ」

と、パツと話に入り込む。

美優貴は肩越しに有喜を見た。

有喜の楽しい顔。

2秒ほどの間、美優貴はジッと有喜の顔を見つめてから、

「分かった。うつちゃん、耳をかしてくれ。守人」

最後の言葉だけで、自分の執事に命じる美優貴。

執事は主の意思を受け取り、キャデillacの後部座席のドアを
開け、

「伊庭先輩。お乗り下さい」

落ち着かない様子で、伊庭は座席におさまった。

守人の一撃以降、展開を胡散臭さそうな瞳で眺めているなな。

そのななの前で、美優貴と有喜の短いやり取りが交わされた。

軽く腰を曲げ、美優貴に耳を寄せる有喜。

何事か囁く美優貴。

有喜はボリボリと頭をかきながら、体を起こした。

事前に悪戯の準備が露見してしまった小学生のような、パツの悪
そうな笑顔で、

「参った参った。美優貴ちゃんにはかなわないなあ」

美優貴は優しく微笑み、

「大事の前だからな。頼んだぞ」

「了解了解。それじゃ、行つてきまゝす」

有喜はななと高杉に向かつて、手で挨拶すると、軽やかなステッ
プで車に――伊庭が横の席にずれて――乗り込んだ。

守人がドアを閉めると同時に、静かな音をたててキャデillac
が走り出した。

狭い路地、角を曲がるとすぐに車体は見えなくなった。
エンジンの音が遠のく。

路上には美優貴、なな、守人、高杉が残された。

「用事は済んだか？」

奥まった、日陰の部分から小太りの男のキーの高い声が、棘のあ
る声で訊く。

守人に肩を外された男は苦悶の表情で、相棒に支えられて仲間の
元に戻った。

「待たせたな」

と、美優貴は肩が外れた男を見やり、

「下手に触らずに、病院に行く事だな。相手がよかった。綺麗に
治る」

男は大柄な背中を丸め、青ざめた顔で、仲間の陰に隠れた。

「覚悟は出来てんだろおな、コラ！」

再び、小太りが牙をむく。

「そうだコラア」

「全員ブツ殺してやんよ！」

「覚悟しろや」

口々に罵詈雑言を浴びせる男達。

美優貴は相変わらず、微動だにしていない。

その美優貴の後ろで、

「先輩」

と、ななは高杉に真っ平らな声をかけた。

「おう？」

「全員って私達もですか？」

「かもしれねえ」

「先輩、喧嘩強いですか？」

「…俺はただの助平に過ぎねえ」

「頼りにならねーわね」

前を向いたまま、言葉を交わしていた2人。

その2人の背後から、守人が無言で進み出た。
身を固くする男達。

「待て。守人」

美優貴の言葉に、守人は美優貴の横で足を止めた。続きを待つように、守人は主に顔を向ける。

「私が出る。お前は下がって2人を守れ」

「かしこまりました」

美優貴が差し出した鞆を受け取る守人。

美優貴は前に出て、完全にコンクリートの狭間に入った。

男達の緊張が和らぐ。

「オイオイ。聞いたかよ」

人を小馬鹿にした笑い顔を見せ合い、嘲笑を交わす。

美優貴は何も答えない。

「大丈夫なの？」

と、ななが守人の背中に訊く。

守人は背後に横顔を見せて、落ち着き払った声で答えた。

「ご安心下さい」

ななは仏頂面を、再び美優貴に向けた。

男達の下卑た笑い声は止まない。

美優貴はブレザーの内側に右手を滑り込ませる。

取り出したのは、1つの革手袋。

ナチュラル・カラーの分厚い、頑丈そうな手袋。

手の甲には、翼を広げて蒼天を斜めに切り裂く1羽の猛禽、隼の押印。

素手を守る目的に忠実に従った、無骨な手袋を左手にはめて、手の首のボタンをバチンと閉める。

今度は手袋をした左手を、ブレザーの内側に忍ばせた。

既製品ならば存在しないはずの右の内ポケットから、同じデザインの手袋を取り出す。

美優貴のイニシャル、Mの文字が装飾された燦し銀のボタンをしめ、指の柔軟体操を始めた。

馬鹿にした態度で笑い続ける男達。

両手を開いたり閉じたりしながら、美優貴はポツリと呟いた。

「…『人間』相手の実戦は久しぶりだな」

ニヤニヤ笑いながら、小太りの男が近付く。

「何？何か言ったか？」

ポケットに両手をつっ込んだまま、美優貴に近付く。

5 m程だった距離が縮まる。

4 m。

3 m。

2 m。

1 m。

小太りは、更に足を進めた。

刹那。

男の両足が大地から消えた。

ハンプティ・ダンプティのような体が浮く。

猛牛に敗北した新人の闘牛士のように吹き飛んだ体。

数秒間の飛行時間。

体を折り曲げ、固い大地に背中から落ちる。

着陸後も威力は消えず、マット運動の開脚後ろ回りの形で後退を

続けた。

酒樽を転がすような音。

ドンという衝撃音。

突き当たりのビルの壁にぶつかり、男の回転は終わった。

勢い良く後頭部をコンクリートの壁にぶつけ、反動でガクンと首

をうなだれる。

10 m以上の瞬間移動。

風が遅れて巻き起こる。

男達のリーダー、リーは自分のすぐ横を回り、すぐ後ろの壁に

到着した手下を驚愕の表情で凝視した。

一味の他のメンバー―肩が外れた男も―身内の大移動のなれの果てを、ポカンと口を開けて見つめている。

ななと高杉も、守人が肩を外した時と同じ顔を繰り返した。

守人は普段通りの無表情。

あと1人の人物。

右足を踏み込み、左拳を突き出して停止している人物。

男が旅立った原因、航空券を手渡した人物。

「ん？やりすぎたか」

場の注目が、その人物に集まる。

隼瀬美優貴はキョトンと両目を丸くした。

構えを解き、片手を腰にあてがう。

「大分抑えたんだが…。やはり、獣と人では勝手が違う」

研究者のような口調。

その、背中を向けたままの美優貴を見て、ななは独り言のように、

守人に語りかけた。

「…確かに、心配なさそうね」

第38幕：無邪気な女と名前に酒のある女

「車の中って、眠くなりますよねえ」

「そうだね」

「あつ、それに、電車の中も眠くなりますよねえ」

「そう言えば、そうだね」

「春ですねえ」

タクシーの車中。

後部座席に収まつたりる香と広美の会話。

ラジオも何もかけられていない車の中。

右側に座つたりる香は、少し眠たそうにニヘラと笑っている。

隣の広美は、年の離れた従姉妹でも見るような、保護者的な笑顔を返した。

運転席でハンドルを握る若い男は、背景の一部であるかのように、無言で車を操っている。

和やかな空気が満ちていた。

りる香は窓の外に顔を向けた。

「そう言えば、まだ赤信号に引っかけたてませんねえ」

「そう言われてみれば、そうかも」

ポニーテールを浮かせて、広美も窓の外を見やる。

太陽が、街に朱色のスプレーを吹き付けている。

ガラスに映った広美の顔。

どこか不安げな、後ろ足に重心が置かれた表情

「伊庭先輩、何の用事なんだろう…」

と、広美は消音に近い声で囁いた。

「いい事ありますよ」

「えっ？」

りる香の脳天気な声に、広美は振り向く。

りる香は、初めて飛行機に乗った幼児のように、窓にへばりつい

ている。

ニヘラ笑いをガラスに映し、

「赤信号に一度も引つかからないで、行きたい所に行けるのって嬉しいですよえ。絶対、いい事がありますよう」

無邪気な言葉、笑顔、後頭部。

不安に差し水された様に、広美は曇った顔を和らげた。滑らかに、車が交差点を左に曲がった。

ゴン。

ガチン。

りる香は額と眼鏡をぶつけた。

街を疾走するピンクのキャデラック。

車線変更を繰り返し、車の間を縫うように進む。

車内の揺れはほとんど無い。

運転席の先崎は柔和な微笑みを崩さず、手慣れた様子でハンドルを握っている。

後部座席の2人は無言。

左側に座った有喜は、腕と長い脚を組み、鉛筆をピコピコと動かしている。

隣の伊庭。

男達の威圧から逃れ、幾分か落ち着いた様子でシートに収まっている。

伊庭は眼鏡を押し上げた。

「…酒匂川」

「はいはい？」

と、笑顔の有喜。

伊庭は石橋を叩きながら摺り足で渡るような口振りで、
「わざわざ、君が来たんだ。何か話があるんだろう？」
と、横目で有喜を忍び見る。

その有喜。

ニカツと笑い、自分の胸を締め付けていた腕をパツと解いた。

「ご名答ご名答！」

傍らに置いていた鞆に手を伸ばし、金具を外す。

跳ねるように鉛筆を動かして、鞆を引つ掻き回す。

伊庭は、再び眼鏡を押し上げて、有喜の行動を見守った。

「あつたあつた」

そう言つて、有喜は一枚の白い紙をつまみ出した。

有喜はコホンと空咳1つ。

ニツと白い歯を見せて、

「どうもどうも。『ワルツ・タイムズ』の酒匂川と申します。伊庭先輩の行った、松広美さんへの告白の特訓。その特訓の場所、及び先程1年生のやんちゃなグループに囲まれた時のリアクシヨク。その他、この件に関わる先輩の不利益になるような情報は、一切口外致しません。その代わりその代わり。何も言わず聞かず考えず、こちらの書類にサインして下さいませんか？」

軽やかな口上と共に、取り出した紙を伊庭に差し出す。

伊庭は受け取り、視線を落とした。

『誓約書』。

『私、写真部副部長伊庭悠志は、今年度に行われる全ての運動部の大会で撮影した写真を、優先的に『ワルツ・タイムズ』に提供する事を誓います。』。

「いやいや、運動系のイベントは『エンスポ』が強くて強くて。

『ワルツ・タイムズ』（ウチ）としては、いい写真がなかなか手に入らないんだなあ。おかげでおかげで、編集長はカンカンカンカン」と、誓約書を読む伊庭の横で有喜は言う。

伊庭はフウと溜め息をつき、自分の鞆からペンケースを取り出した。

英語の教科書を取り出し、膝の上に置く。

教科書の上に誓約書をのせて、ボールペンをノックした。

「…今年、卒業した先輩に言われたよ」

伊庭の言葉に、有喜は興味を引かれた様子で目をパチクリと動かし、

伊庭は悟ったように微笑み、

「『^{バックス}居眠り酒神』。酒匂川には逆らうな、ってね」

寝癖頭をボリボリとかき、『居眠り酒神』は、

「…いつも思うですけどね。オジサンの神様の名前じゃなくて、
せめてせめて、女神様の名前にしてほしいんですよねえ」

と、まんざらでもない様子で、抗議した。

第39幕：その隼、千の苦難を退ける

怒声があがる。

拳が空を切る。

制服が翻る。

美優貴は、対峙した色黒の男の右拳を、顔面すれすれでかわした。左頬の横を通った手首を掴み、軽く引く。

「オラアあッ？」

怒声の語尾が奇声に変わる。

バランスを崩し、前のめりになった男。

男の額を、美優貴は右手で小さくノックした。

コンツと生まれた、軽い音。

男の瞳は、どこか遠い空を向き、脚はグニヤリと地面に落ちた。

尻がつき、背中がつき、頭がつく。

仰向けに、大の字に倒れた男を見下ろしてから、美優貴はフツと顔を上げた。

「次は誰だ？」

リーを除き、無事に立っているのは2人だけだった。

七三分けと、鼻の穴の大きな男が、固い顔を見合わせる。

2人は見合わせ、美優貴の足元に転がった同胞を見た。

横の壁に逃れた、肩が外れた男―四角い顔を取れそうな程に横に振っている―を見て、背後のリーダーを見た。

リーダーは憤怒の形相で歯を食いしばり、噴火直前の活火山のよう

うに震えている。

「次は俺だコラアあ！」

紙一重で裏返りそうな声を出して、七三分けが腕を回した。青ざめた顔で名乗り出た男に、美優貴は不敵な笑みを見せた。ほうと言って、男に向かって歩き出す。

戦地が奥へと移動し、戦火から逃れたなな。

「影山君」

「はい」

肩越しに答えた守人。

「彼女、強過ぎない？」

「かもしれません」

「彼女も、影山君みたいな武術でも習ってるの？」

守人は、ななの問いに答えず、主に視線を戻した。

奥の戦場で、攻撃をかわし続ける美優貴。

ダンスのステップのように流麗な足さばき。

クルリとターンして、なな達の方に体を向けた。

話が聞こえていたかのように、守人を見て、コクンと頷く。

美優貴にかわされ続け、体力が無駄に消費された男は、息を荒げている。

「アアアッ！！」

背中を見せた美優貴に対し、ここぞとばかりに両手を伸ばす。のしかかるような勢い。

死角からの攻撃に、美優貴は膝を曲げると、背後に跳んだ。

距離が狂わされた男。

両手いっぱいに広げた体の真ん中に、美優貴の体が飛び込む。

同時に。

男の額に、美優貴の左手の甲が向かう。

後ろ手のノック。

男は隼の刻印を眼前にして、首を後ろに反らした。

上半身が、後ろに向かって観覧車の上部のような半円を描いて、倒れた。

ドシンと米俵が落ちたような音をたてて、地面に落ちた男。

右手を腰に添え、左手をノックしたままのポーズの美優貴。

肩越しに背後を見やる。

挑発するような目元、口元。

生き残った男は震え上がる。

一味のリーダーは、新たな怒りに身を震わせている。

再び、なな達に背中を向けた美優貴。

守人は口を開く。

「お嬢様が習得なさっている流派の名前は『隼千拳』（シュンセンケン）という流派の武術です」

「隼千拳？」

突然、高杉が聞き返した。

「知ってるんですか？」

と、なな。

「いや、知らねえ」

「黙ってるつつーのよ」

「現在、隼千拳の使い手は3人しかいません。お嬢様、お父様の旦那様、そしてお祖父様である、旦那様の3人です」

「3人だけなの？」

「はい」

守人は続けた。

「隼瀬の主となる方を、私達使用人は、『隼の意志に選ばれた人物』と認識しています。隼の道は王者の道。隼瀬の党首となる人物は、各分野に覇をとえ、王となる。王となるべき人物を、隼は見抜くのです。隼千拳の開祖も、かつての隼瀬の党首でした。その党首は、拳の道を突き進み、そして隼千拳を編み出したのです。あまりの強さに秘拳とし、後の党首の護身術として残したのです。先人達が残していた技術、それは代々1人だけに伝えられる一子相伝の秘術。隼瀬には、その様な技術が数多く存在します」

校歌斉唱の時、1人だけパンクロック・アレンジで歌い出した問題児でも見るような眼で、

「…へえ」

と、ななは気のない相槌を返す。

「この間言ってた、『隼の眼』って言うのもそうなの？」

「厳密に言うと違いますが、『隼の眼』も隼瀬の党首の力には変

わりありません」

「へえ……」

その横で、

「なるほどな」

と、高杉が合点がいった様子で頷いた。

「分かったんですか？」

「おう」

「……へえ」

ななは、鼻の頭をトントンと叩きながら、

「だいたい、隼の意志って何？鳥がそんなに偉いわけ？神がかり的なモノの比喻にしても、一家総出で信じるなんておかしいわよ」

守人は答えない。

「先祖代々受け継がれた技とか、隼の道とか、『隼の眼』とか……。そんなの迷信とか妄想にしか聞こえないわよ。誇大妄想。影山君達
が、全部大袈裟に見てるだけよ」

と、クールに言う。

口を開きかけた守人。

直後。

サンドバッグが落ちた様な、ドンツという重く、鈍い音が遮る。

ななは、戦地に視線を移した。

地面に伏した男達。

壁に背をつけた、負傷兵。

唯一残った、一味のリーダー。

そして、オレンジ髪の伝承者。

革手袋に両手を包み、無傷で戦う美優貴の背中。

「しかし……」

主の姿を感激の瞳で見つめ、守人は震え出すのを堪える様な声で、

「これは、現実です」

守人の言葉を聞き、ななは眠たげな瞳を美優貴に向けた。

「お前で最後だな？」

挑発するように美優貴が言った。

リーは倒れていった部下達に、鋭く視線を巡らせる。骨が砕けんばかりに握った拳。

両の拳を震わせ、自分のYシャツに手をかけた。

胸元に指をかけて、シャツを開いた。

ブチイと音をたて、鳳仙花のようにボタンが弾ける。

壁や地面にプラスチックの円盤が襲いかかる。

顔の近くに飛んできたボタンを美優貴は、スッと顔を動かして避けた。

リーは布きれとなった白いYシャツを丸めて、地面に叩きつけた。肩に黒いラインが入った黄色のタンクトップと、引き締まった筋肉に包まれた腕が露わになる。

拳から人差し指を立て、突き刺すように美優貴を指差した。

「うお前は、何者だ!？」

怒気をはらんだ、滑舌の悪い声。

怒りの指を向けられた美優貴。

「無礼者」

軽く頭を逸らし、玉座から反逆者を見下ろすような眼で、

「人に名前を訊く時には、自分から名乗るものだ。貴様のような無礼な輩に、私は名前を教えたくはない。だから、私の事は好きに呼べ」

威厳をたたえた厳しい口調。

そして、美優貴はニツと笑った。

「もつとも、もし貴様から名乗っていたところで、私は名乗るつもりは毛頭無かったがな」

瞬間。

リーが跳んだ。

甲高い声。

怪鳥のような奇声を高らかにあげ、右の蹴りを美優貴に見舞う。後ろに下がる美優貴。

長い睫の5cm先を、リーの回し蹴りが通過する。
回転しながら着地したリー。

クルリと回り、大きく左足を踏み込み、裏拳を放つ。
再び、美優貴はバックステップで退く。

遅れて動いた髪にすら、リーの拳は当たらない。

リーは一層甲高い怪鳥音を発し、右の正拳突きを繰り出す。
踏み出された右足、突き出された右手。

リーの拳は当たらない。

会心の一撃をかわされ、リーは驚愕の表情で顔を上げる。

リーの間合いの半歩外に立つ美優貴。

顔の横で、人差し指と親指で5cm程の空間を作ると、フツと笑う。

足りない距離。

挑発。

こめかみに青筋を浮き上がらせ、リーの気合いを込めた声と右の蹴りが美優貴を襲う。

進んだ分、美優貴は退く。

右の蹴りが1つ。

2つ。

3つ。

美優貴は背後に移動する。

戦線が守人達に近付いた。

戦場までは2m。

3連続の蹴りの後、リーは右足を軸に、左の後ろ回し蹴りを放つ。

美優貴は右足を退いた。

重心は前。

上体を反らす、スウエー・バック。

蹴りが空を裂く。

爪先が、遅れて動いた髪を掠める。

美優貴の眼前を通過する蹴り。

リーの回転。

攻撃の足が、地面に向かう。

爪先が、ついた。

瞬間。

美優貴は上体を起こした。

退いていた足を踏み出す。

体を前のめりに倒す。

まだ、リーのかかとはついていない。

その右足、体重が乗ったままの左足。

リーの両脚の股に、美優貴は腕を回す。

ガツシリと掴んだ脚。

「ハッ！」

短い気合いと共に、美優貴は体を起こす。

リーの体が地面を離れた。

「ハオツ!？」

目を見開くリー。

体は益々上昇する。

美優貴は更に、一步踏み出した。

自分より大柄なリーを持ち上げ、美優貴は体を後ろに逸らし、

「ハアッ！」

勢いをつけて、地面に叩きつけた。

薪割りのような手合い。

叩きつけられた地面が鳴る。

左脚の拘束を解き、美優貴は右手を攻撃に備えた。

肘が引かれる。

腰を捻る。

そして、動きをピタリと止めた。

動きに遅れて髪が揺れる。

沈黙。

数秒の後に、美優貴は左手の拘束を解いた。

重力に素直に従った脚がボタンと落ちる。

美優貴は体を起こし、足元を見下ろした。

見事な大の字を地面に描き、青木は白目を剥いていた。
フルッ・リ

フウと小さく息をつき、美優貴は敗者に背を向けた。

主の帰還を一礼で迎える守人。

「この程度で他人に拳を振るうとはな」

と、美優貴は呆れたような口調で言う。

「ブラザー。見事だ」

「私は火の粉を払っただけだが、賛辞の言葉はありがたく頂戴しよう」

固く握手を交わした義兄弟。

だんだんと目を潤ませ始めた守人。

その様子を、ななは、シュルレアリズムの絵画でも見るような眼で見つめていた。

第40幕：黒猫の群れ

「お嬢様！」

呼びかける声に、美優貴の顔が動いた。

美優貴以外の面子が背後を振り返る。

小道を、美優貴達の方に向かって走ってくる1人の男がいた。

水色の作業着に、黒いキャップ帽を被った若い男。

作業着にもキャップにも、『黒猫引越し社』と社名がプリントされている。

短髪で体格のいい男は、キビキビとした動作で美優貴の前に立つと、

「大変遅くなりました、申し訳ありません。お迎えにあがりましたッ！」

軍人のような最敬礼と腹から出した声で言った。

すぐ隣で大声を出した引越し業者を、迷惑そうな眼で見るなな。ななのリアクションを見てから、

「ご苦労。だが、あまり大きな声を出すな。何kmも離れているワケではないんだからな」

と、男をたしなめる。

男は緊張の面持ちで、

「Yes, ma'am」

と、声を落として言った。

「小野寺は？」

「こちらです」

男は先にたち、元来た道に戻りはじめた。

「一体何なの？」

と、ななが美優貴に訊いた。

「すぐに分かる」

美優貴と守人が男に続く。

高杉も、当然のような顔をして続いた。
ななは顔には出さないが、迷った様子で鼻の頭を叩いた。
数秒後。

結局、美優貴達の後が続いた。

車一台分しかない、一方通行の道を進みながら、美優貴は、

「松本^{マツモト}。そう言えば、右腕の具合はどうだ？」

と、前を進む男に訊いた。

松本はハッと振り返り、

「ご存知だったのですか？」

と、驚きと喜びと申し訳なさかカクテルされた顔で言う。

「部下の事を知っておくのは、上に立つ者の役目の一部だ。第一

……」

男の顔を、美優貴は不敵に見返し、

「私を誰だと思っている？」

心服した表情で、松本は右の腕に左手を当てる。

「……お心遣い、ありがとうございます。かすり傷です。ドクター

も、半月程で治ると言っていました」

「そうか。だが、無理はするな」

「Yes, ma'am」

一般家屋と商店が入り雑じった小路が終り、飲食店が軒を連ねる
目抜通りへと美優貴達は足を踏み入れた。

その、小路のすぐ左脇に一台のトラックが停車していた。

大型の10tトラック。

美優貴達の位置からは、車の背後しか見えない。

トラックのコンテナの扉には『黒猫引越し社』の文字と、乳母車
から顔と尻尾を出した黒猫のキャラクターが描かれている。

松本はトラックの方に向かった。

美優貴達も続く。

巨大な車体作り出す影の中、トラックの左側を東は進み、コン
テナの端で足を止めた。

コンテナに取り付けられたドアを開き、

「足元にお気をつけ下さい」

と、松本。

美優貴はステップに足をかけ、左手でコンテナ端の手刷りを掴み、コンテナの中に入り込んだ。

守人、高杉も乗り込む。

再び、どうするか迷ったように鼻を触るなな。

そのななに、

「どうぞ、お早く」

と、松本が急かすような口調で言う。

ななは、口を曲げてステップに足をかけた。

「D1からD7まで異常無し！」

「56番、状況を報告せよ。56番、状況を報告せよ」

「B入口より侵入者発見。現場に至急急行せよ。繰り返す…」

「了解。引き続き警戒を」

「第6区間より報告。『モニク』、車体確認。第6区間より報告。

『モニク』、車体確認。予定時刻との誤差無し」

飛び交う声。

絶え間ないキータッチの音。

デスクワークに忙殺された、人の音。

ななが踏み入ったコンテナの中は、引越し業者のコンテナではなかった。

薄暗い車内。

並びに並ぶディスプレイ。

床を張り巡らされたコードの川。

向かいの壁には、駅の広告を思わせる巨大なモニター。

長く続いたデスクに向かう、屈強そうな10数人の男―2、3人の女性もいる―達。

紺色の戦闘服に黒いブーツ、キャップ、タクティカル・ベストに身を包み、真剣そのものの表情でモニターに向かっている。

タクティカル・ベストには『S・C・A・T』の文字、なな達に向けた左側の二の腕の部分には、尻尾をS字に立てて座った黒猫のエンブレム。

軍の特殊部隊の作戦本部が丸々移動したような光景が、引越したラックの中にあつた。

「…何、コレ」

と、仏頂面のなな。

「おお、お嬢様！」

低音の太い声があがる。

入口の正面、縦に置かれた短いデスク―他のデスクは横に2列並んでいる―に腰掛けていた男が腰を上げて、美優貴達を迎えた。

50代くらいの風貌。

鍛え上げた筋肉の上に、年齢相応のぜい肉がつている。

刈り込んだ明るい灰色の髪の上には黒いベレー帽、四角い鼻の下には、豊かなカイゼル髭。

そして、額の髪の生え際から右目から顎にかけて、深く大きな傷跡がゴツゴツとした厳格そうな顔にはしっていた。

大きな傷跡の男は最敬礼をして美優貴を迎えた。

「小野寺。ご苦労だったな」

と、自分よりも僅かに背の高い男を見上げ、美優貴は言った。

小野寺は豪快な笑い声を上げて、

「想定範囲内です。何の問題ありません。我々『S・C・A・

T』（スキヤット）は、素人連中とは違いますよ」

美優貴はフツと笑い、

「隼瀬の軍だ。素人では困る」

美優貴の返しに、小野寺は楽しそうに笑った。

男は顔を部下達の方に向け、口を開きかけたが、

「挨拶はいらん。作業の手を止めさせなくていい」

と、美優貴が遮る。

「ブラザー、なな。紹介しよう。小野寺だ。小野寺、私の友人達だ」

と、美優貴は2人に言う。

紹介をされた小野寺は、

「お初にお目にかかります。私は隼瀬家の警護隊、『S・C・A・T』の総司令を命じられております、小野寺群青と申します。以後、お見知りおきを」

そう言つて、ビシツと敬礼をした。

「高杉慎一郎です」

「…鈴森ななです」

小野寺は主の学友を嬉しそうな眼差しで見つめてから、真剣な顔を美優貴に向けた。

「お嬢様。そろそろ出発します。お席を」

小野寺の申し出に、美優貴は、

「私と守人はいい。ブラザーとななに席を用意してくれ」

「はつ。では、お2人共。こちらへどうぞ」

小野寺の招きに2人が動く。

小野寺がついていた、上官専用の長いデスクに空いている席は2つ。

高杉は奥の席に。

ななは、1分程前まで小野寺が腰掛けていた席に案内された。

背もたれに手をかけ、バンジージャンプを強要されたアイドルのようなスピードで、小野寺を見るなな。

「ここですか？」

大きな傷跡―左のこめかみにも、右目と同じような深さの傷があった―の軍人は困ったような表情で、

「申し訳ありません。必要最低限の席しか用意していないものですから」

と、弁解した。

ななは、改めてデスクを見下ろした。
モニター並び、ボタンが整列し、数本のマイクがそそり立つデスク。

指揮官のために設えたようなデスク。

お飾りの指揮官になるのを拒んでいるななに、

「なな。座ってくれ。出発できない」

と、美優貴は声をかける。

「お早く」

と、小野寺も急かす。

横の席では、高杉が眼を瞑り、腕を組んでいた。

ななは、ため息をつくと、作戦責任者に就任した。

どっしりとしたシートにななが収まると同時に、小野寺がデスクのマイクに向かって、短く、

「出せ」

短い、大きな揺れ。

足元が揺らぐ。

各員デスクの端を掴み、発進の振動を耐える。

その中。

「小野寺。状況を教えろ」

と、揺れなど気にしていない様子で、片手をウエストにあてがつた、いつものポーズで美優貴は訊いた。

前線視察に来た女將軍のような気色。

小野寺も、軍人の顔つきで、

「現在、『エース』『モニク』共に、石神沢運動公園まで移動中です。到達予定時間は『エース』、ヒトナナゴヨン。『モニク』、ヒトナナゴハチ」

「現在の位置は？」

「出せます。少し誤差が生じますが」

「構わん」

「メインモニター、出せ！」

小野寺の命令に、

「Yes, sir!」

と、上官席から最も離れた、最前列奥に座る隊員が大声で答える。数秒後。

それまで、尻尾をS字に曲げた黒猫の姿しか映し出されていなかった巨大モニターの映像が変わった。

石神沢運動公園周辺の地図。

緑色の地図の中、公園と公園の周りが数cm、黄色く染められている。

緑の街には白い道が縦横無尽に張り巡り、その白く細い道を、2つの赤い点が、点滅しながらゆっくりと移動していた。

公園がある方角に向かって移動する点。

公園に近い方には、点の上に『エース』の表記。

遠い方には『モニク』の表記。

「公園の状況は？」

「制圧は完全に終了しています。現在は64全区画の巡回及び警戒。全ての出入口の閉鎖。公園周辺の巡回及び警戒を続行中です。

今の所、大きな報告はありません」

「各施設のシステム掌握も抜かりないな？」

「掌握済みです」

「ポイントAは？」

「動作確認を含め、ポイントA周辺の、全工程は終了しています。いつでも実行できます」

小野寺の全ての答えに満足した様子で、美優貴は表情を幾分か和らげ、頷いた。

「よし。引き続き、指揮を頼むぞ」

「Yes, ma'am」

眉間に縦筋を作り、やり取りを聞いていたなな。

「…あのさ」

「ん？」

「何なの、コレ」

美優貴は、解せないように首を捻り、

「分からないか？」

「分からないから訊いてるのよ」

美優貴は頷き、

「そうか。では説明しよう。説明と言っても簡単な話だ。伊庭の告白に横槍が入らないように、公園を貸しきって、部下を配備させた」

間。

「は？」

「公園を貸しきった」

と、美優貴は繰り返す。

「まあ、念のため各交通機関にも部下は配備したし、公園の周囲50mも無人にはしてあるから、純粹に公園だけを貸しきったワケではないがな」

「貸しきった？周りも？」

地動説を主張したガリレオに対する、天動説派の学者のような口振りでななは言う。

そのななに、

「そうだ」

と、美優貴は何ともないように答える。

「どうやって？」

答えず、美優貴は肩越しに後ろを振り向く。

薄暗い作戦本部の中、立体の影のように気配を消していた守人が、静かに口を開いた。

「『石神沢運動公園の施設整備における地質調査の結果、公園のほぼ中心部に大型の金属反応が確認された。大戦中に投下され、そのままにされた不発弾の可能性がある為、調査を行う。不発弾だった場合、速やかに解体作業に移行する為、付近の住民は避難するよ』」。以上の勧告を行いました」

美優貴はななに顔を戻した。

「だ、そうだ」

ななは眉間の皺を倍加させ、

「不発弾？」

「そうだ」

「嘘でしょ？」

ななの言葉に、美優貴は意味ありげな笑みを浮かべた。

「…本当にあったの？」

美優貴は答えない。

間。

気付いたように、ななは両目を僅かに開いた。

「まさか、それも用意したの？」

美優貴は、髪を耳にかけた。

「…さあな」

笑みを浮かべ、世間話でもするような何気なさで話をする美優貴を見つめ、ななは鼻の頭を叩いた。

「貸し切るって…」

再び。

ななは何事かに気付いた様子を見せる。

「まさか、日曜日のあの神社も…？」

ヒトケ
人気の無かった神社。

「さあな」

と、美優貴ははぐらかす。

「…大袈裟過ぎる。おかしいわよ、どう考えてもやり過ぎだっつ

ーのよ」

低い声でななは言う。

相変わらずの笑みで、美優貴は、

「そう大袈裟な作戦でもないぞ。『S・C・A・T』の全隊員の内、半分も参加させていない。作戦の規模としては大きなものではない」

「そーゆー問題じゃねーわよ」

ななはバツサリと美優貴の発言を叩き切り、

「こんな車用意したり、公園とか神社貸しきったり、何十人も使ったり…。他人の告白１つにでしゃばりすぎるわよ。異常だっつーのよ。どうして、こんな事までするのよ？」

司令部の騒音が、僅かに、おさまる。

席に座り、美優貴に体を向けるなな。

ななの眠たげな視線を下方から受ける美優貴。

非難と、非難めいた視線。

たじろぐ様子も無く、美優貴は答える。

「自分で言うのもなんだが、私の家は金持ちでな…」

全ての苦難を打ち払うかのように、美優貴は高らかに声を上げた。
「だから、加減が分からだ！」

第41幕：石神沢公園の夏。そして現在

巨大なまち針のような時計が、5時を告げている。

午後5時にも関わらず、陽は高い。

木々は青く、気温も高い。

アブラゼミの怒り狂ったような声。

夏。

石神沢運動。

「元気出しなよ、広美」

「うん…」

「準優勝だよ？もつと喜んでもいいんじゃない？私なんか2回戦敗退なんだから」

「うん…」

麻実の励ます声と、広美の沈んだ声。

2人は噴水広場にいた。

古ぼけた噴水は、水の音をたててはいない。

ペンキの剥げた水の憩の場には、『故障中』の小さい看板がかけられている。

広美は噴水まわりのブロックに腰掛け、沈んだ顔で地面を見ている。

麻実は広美の正面に立ち、そんな友人を気遣う顔で見下ろしていた。

2人共、円舞学園のジャージに、テニス部のウィンドブレーカー、スポーツバッグ、ラケットケース。

回りには、同じような格好をした他校の生徒が、ちらほらと歩いている。

麻実は頭を軽く振ると、広美の顔を覗くように、膝を曲げてちょこんと身体を小さくした。

「いつまでへこんでても、しょうがないでしょ。次、また頑張れ」

ばいいじゃない。皆帰っちゃったし、私達も帰ろうよ」

友人の言葉。

それでも、広美の暗雲は晴れない。

「…うん。そうだね」

「…」

麻実は無言で立ち上がり、問題児を相手にした保母のように頭をかいた。

フウと勢いよく息を吐き出し、

「…ジューズでも買ってくるわ。待ってて」

荷物を広美の傍らに置き、麻実は広美に背中を向けた。

小柄な背中が走り去る。

広美は、麻実の言葉に対して、自分の足に答えた。

「…うん」

ポニーテイルがへたりと背中についている。

組み合わせた両手。

「…あそこで、あんな打ち方しなければなあ」

ポツリと呟く広美。

「あの球は拾えたなあ…。ひっかかったなあ。本当に強い

…」

ポツリ、ポツリと独り言をもらす。

ため息。

「あの、ちょっといいかな？」

深く、長いため息が終わるタイミングをはかったかのように、声

がかかった。

広美は顔を上げない。

「…あの、松さん？」

間。

自分に声がかけられた事を自覚した広美は、

「はいっ？」

と、声を出す準備が出来ていない声を出した。

裏返しそうな声。

間。

「…すいません。変な声だしちゃって」

沈んだ顔に気恥ずかしさをにじませて、広美は立ち上がった。

「いや、大丈夫だよ」

と、相手は若い男の声で言った。

チラッと上目遣いで相手を見る広美。

眼鏡をかけた男。

円舞学園の制服姿。

肩には大型のカメラをかけ、腕には『エンブ・スポーツ』の腕章。

男の姿を見て、

「新聞部の方ですか？」

と、広美はおずおずと訊いた。

「いや、写真部だよ」

男は自分の腕に視線を動かし、

「…新聞部って思われても仕方ないかもしれないけどね。色々

あるんだ」

そう言いながら、男は腕章の安全ピンに片手を伸ばす。

「はあ…」

腕章を外しはじめた男を、心を許していない顔で窺いながら、

「あの、私に、何か…？」

と、小さな声で広美は訊く。

安全ピンと格闘していた男は、腕章を外すのを諦めた。

「君に、一言感想を言いたくてね」

「…感想？」

「うん。いいプレーだったよ」

静寂。

「え？」

と小さく、広美。

男は眼鏡を押し上げ、

「いいプレーだったよ。正直に言って、今日一番魅力的なプレーだったと思う。がむしゃらで、元気で、諦めない所がね。1日でファンになったよ」

広美は顔を上げる。

信じられないといった顔。

驚きと疑問と喜びが三国分裂した顔で男を見つめる。

「ただ、それだけ言いたかったんだ」

と、男は少し照れくさそうな声で言った。

遠くの方から、若い男の声がした。

「伊庭せんぱゝい。帰りましょ」

眼鏡の男は声がした方を見やり、

「それじゃ、これで。これから頑張つて。応援してるよ」

広美に告げると、小走りに去っていった。

立ち尽くす広美。

男の背中中は小さくなり、やがて数人の学生と合流した。

学生服の群れとなり、フィールドアウトしていく。

広美は、壮大なイリュージョンを見た小学生のような顔で、ただ立ち尽くしていた。

それでもセミは鳴いている。

「それで、先輩は何て言ってたの？」

「はい。噴水広場で待つて欲しいそうです」

「噴水広場？」

「はい」

現在。

石神沢運動、正面入口。

真っ直ぐに伸びる並木通りに横付けするように、タクシーは停まっている。

車外に立つ広美は、困ったような顔で、背後の銀杏並木を振り返

る。

青々とした木々。

通りを、運動の必要がなさそうな程に、屈強そうな身体をした男がジョギングしている。

車内のりる香は、袋に入っているカンガルーの子どものように顔を突き出し、

「１人で、噴水広場にいてくれれば、それでいいそうです」

「…他には何も聞いてない？」

「はい」

と、りる香は二へう。

「…分かった」

うつむいたら広美は上目遣いにりる香を見て、

「一緒に来てくれない？」

りる香はフクロウのような目で首を捻り、

「どうしてですか？」

「だって、１人じゃ不安で…」

「大丈夫ですよ」

と、りる香は更に身をのり出し、

「すぐに伊庭先輩が来るんですから。１人じゃないですよ」

「えっと、そう言う事じゃなくてね」

と言つて、広美はりる香の顔を見る。

りる香は、緊張感も警戒心も皆無の笑顔を向けている。

裏の無さそうな、無防備な顔。

広美は口元を、小さく結ぶ。

「…分かった。噴水広場で、先輩を待つてる。送ってくれて、ありがとう」

「いいんですよ。私はただ、頼まれただけですから」

「でも、ありがとう」

広美は肩にかけたバッグの紐をギュツと握り、

「それじゃ、行ってくるね」

「はい！」

広美は、公園に向かって歩きはじめた。
しっかりとした足取り。

並木道に、等間隔に置かれたベンチの1つでは、体つきのいい男
が、賢そうなドーベルマンの躰をしている。

広美の背中が小さくなる。

その背中に、りる香はブンブンと手を振っていた。

手を振る事に夢中になっている様子のりる香を、ルームミラー越しに見やり、

「どなたかと、待ち合わせですか？」

と、運転手が訊いた。

りる香は振り回していた右手を引っ込めて、

「そうなんです。何だか、お願い事があるみたいで」

「お願い事？」

「はい」

りる香は、小さくなっていく広美を、無邪気に見つめながら、

「今年の文化祭にやる劇の、ヒロイン役をお願いしたいんだそうです。」

「ヒロイン役、ですか？」

と、意外そうな顔の運転手。

「そうなんです。何でも、学年が違うから、出演依頼をしないと駄目なんだそうです」

ここで、りる香は運転手の方に体を向けた。

ルームミラーに、りる香の顔が映る。

本人にしては真剣そうな表情で、ミラーを見ると、

「誰にも言ったら駄目ですよ」

と、人差し指を唇に当てた。

第42幕：What is this thing called love?

「報告！『エース』の到着確認！『エース』の到着確認！」

「よし！引き続き、『エース』はお嬢様のご学友を無事に送り届ける！最後の最後まで気を抜くな！」

「Yes, sir！」

部下の報告に、小野寺は首を動かし、

「『モニク』はどうだ？！」

と、別の部下に訊く。

声と電子音が飛び交う中、

「現在、第9区間を通過しています。予定時間との誤差はありません！」

と、数少ない女性隊員が大声で答える。

「よし！」

指揮官席の横で、補佐役のように立ちながら、激を飛ばし続ける小野寺。

その小野寺を、指揮官席のななは、うるさそうな瞳でジロリと見る。

小野寺の右隣には美優貴。

腰に片手を添えた、いつものポーズで、巨大なモニターに視線を送っている。

前線視察の女将軍。

司令部の中には、美優貴を盗み見る隊員も、少なくなかった。

小野寺は、隊員達の熱のこもった視線に気付く度に、

「作戦に集中せんか！」

「Yes, sir！」

小野寺は苦虫の連隊を噛み潰したような顔で髭を撫でる。

小野寺の様子をチラリと見て、

「私は邪魔か？」

と、美優貴はからかうように言う。

「いえ！決してその様な事はッ」

と、慌てて小野寺は答える。

「お嬢様は、今作戦の計画立案から参加されています。本来ならば、お嬢様が直接指揮をなさっても、おかしくありません！作戦中の心構えと言うものは、日常の訓練で養われるもの！私の指導不足に他なりません！」

傷跡だらけの軍人を、美優貴は優しく見やり、

「お前らしい答えだな？小野寺」

「はっ」

「報告します！」

若々しい隊員の声が、2人の会話に割って入る。

「どうした！」

一列目の手前にいる若い隊員が、

「『モニク』が第10区間に到達しました！まもなく到着します！」

「余計な事は口にするなッ。事実だけを伝えろ！」

「Yes, sir！」

走行中の車が揺れた。

隊員達はデスクの端をつかみ、小野寺はデスクに片手をつく。その中。

「小野寺。そろそろ作戦開始だな？」

と、微動だにせず美優貴が言う。

「はっ」

小野寺は姿勢を正し、

「つきましては、お嬢様。作戦開始のお言葉を頂けないでしょうか？」

「ん？」

美優貴は髪を耳にかけ、

「それは指揮官である小野寺の仕事だろう。今作戦では、基本的

に私はただの一兵卒に過ぎん。指揮官のお前が言わねば示しがつかんぞ」

「お言葉ですが」

小野寺は頑ななまでに姿勢を正しす。

「それでもお嬢様はお嬢様です。指揮を私に委ねられたとは言え、我々の上官に変わりありません。それに、何よりも兵の士気が違います。私の言葉では、お嬢様のお言葉の半分の効果も得る事が出来ないでしょう」

小野寺の厳めしい顔を横目で見て、美優貴は口の端を釣り上げる。

「『お前に任せる』という上官の言葉を反古にする気が。全く、^{アルジ}主思いの部下を持ったものだ。…まあいい」

「ありがとうございます」

真横で行われた美優貴と小野寺の会話を、ななはジロリと見つめていた。

チラツと左の高杉を見やる。

「…」

終始無言の高杉。

幕末の動乱の中、最も名を馳せた男の顔つきで見つめる先。

そこには、『S・C・A・T』の女性隊員の姿があった。

真面目な顔でモニターに視線を走らせ、インカムマイクに話しかける若い女性。

左目もとの泣き黒子が印象的な隊員を見つめる高杉。

ななは、毛虫でも見るように高杉を睨むと、左手の手刀を見舞った。

ゴンツ。

「…何だ、鈴森」

「何となくです」

「何となくか」

「そうです」

「そうか」

「なな。横を借りるぞ」

と、美優貴が2人のやり取りに入る。

美優貴はななの背後から、デスクのマイクに顔を近付ける。

ななの顔、すぐ右横に美優貴の顔が並ぶ。

オレンジ色の長い髪。

頬が触れ合いそうな程に接近した2人。

ななは、真横の美優貴をチラリと見た。

至近距離。

端正な横顔。

鼻筋が通った横顔。

長い睫毛。

薄暗い中、月夜の真珠のように瞳が光る。

美優貴は髪を耳にかけ、芸術品のような人差し指を伸ばした。

マイクのボタンがカチツと音をたてる。

「私だ」

「愛とは何か。また、恋とは何か。この問いに対して、私は諸君らに答える術を持たない。私は幼い。それは分かる。私が幼いがゆえに、答えられないと諸君は考えるかもしれない。しかし、私はそうは思わない。私よりも長い月日を生きてきた諸君でも、この問いに対する明確な答えを持つてはいないと、私は考えている。それは何故か？それはつまり、明確な答えがあるならば、今日までこの疑問が生き残るはずが無いからだ。」

あえて恋愛という言い方ではなく、愛と恋という言い方をするが、この2つの行為に対して、人類は長きに渡って研究を重ねてきた。まさに、人類の歩みそのものと言ってもいいかもしれない。裸で石を振り回していた古代から、ボタン1つでミサイルを飛ばせる現在までだ。それでも、愛と恋に対しての創作や想像、理論がとどまる事はない。もしも、明確な答えが生まれているのなら、それは数学

の公式のように整えられ、絶対的な物として人々の頭に残されているだろう。しかし、それはなされていない。この事は、1つの事実を表していると言っていていいだろう。つまり、愛とは恋とは分からないものだ。

人とは個だ。集団社会で育ち、似通った感覚を持っていたとしても、完全に同じ人間は存在しない。個と個。愛とは恋とは、個と個の接触に他ならない。そして、川原の小石のように、それぞれの形は千差万別。触れ合う箇所が違うのだ。触れ合う箇所が違うのであれば、受ける印象が違うのもまた当然。違うのであれば、公式に当てはめる事など出来ない。

分からない物。だがしかし、今までの歴史の中で、人類は多くの不可思議な物事を打ち破ってきた。そして、打ち破るには武器が必要だ。人類の手にした最大の武器。それは探求心に他ならない。分からない。だからこそ、考える。それは、愛と恋とて同じ事。

「考えてしまつては、愛では無い。恋では無い」

と言う言葉もあるが、それでも人は、考えずにはいられない！！愛とは恋とは素晴らしい！答えを探し、求める、人類が挑むべき最大の命題！これは1人では取り組めない難問だ。だからこそ、私は、この命題に取り組もうとしている人間の後押しをしたい！難攻不落の命題に、挑もうとする若き魂の後押しをしたいのだ！私は、その為に、隼の翼で飛ぶ事を決めた！そして、諸君らは勇猛果敢にして、万人に誇るべき私の部下だ。…だからこそ、諸君らに命じる！

「お前達も私の部下なら！！隼の狩りを見せてみる！！！！」
車内を破る関の声。

隊員達が叫ぶ声で司令部が揺れる。
美優貴は体を起こし、部下の鼓舞された光景を満足そうに見回した。

ななは耳に栓をして、戦意高揚した司令部を眺める。

眉間にシワ寄せたなな。

その横で、

「…流石だ、ブラザー」

と、高杉が漏らす。

染み入ったように両目を瞑り、

「鳥肌がたつたぜ」

耳栓したまま、ななは背後を見やる。

背後。

小野寺が厳つい顔の目を少女漫画のように潤ませ、闇の一角では、守人がナイアガラのような涙でハンカチを濡らしていた。

騒ぎは段々と統一感を出してくる。

唸り声から、1つの名詞へ。

…お嬢様っ。

お嬢様ッ。

お嬢様ッ！

お嬢様ッ！！

「お嬢様ッ！！お嬢様ッ！！お嬢様ッ！！」

自分の仕事も忘れた様子で、司令部は美優貴への賛美をヒートアップさせる。

戦士の心が燃え上がる。

赤壁の大火のような熱を放つ部下に向かって、美優貴は右手を振りかざす。

聖剣を手にした、王者の顔。

瞳は隼。

血気にはやる部下を見回し、王は時の始まりを告げた。

「恋愛空間隔離作戦『エデン』！作戦開始！！」

「Yes, ma'am！！！！！！」

第43幕：告白

疾走するキャデillac。

最後の氣力を振り絞り、ノロノロと家路を進む車の群れを走り抜く。

十字路に差し掛かった。

信号機は青。

その上には、石神沢運動が右手にある事を示す標識。
右に曲がる。

桜並木の一直線。

桜の花は萎れかかり、必死に枝にしがみついている。

世代交代の波が押し寄せる木々の向こうには、並木通りの延長の
ように、石神沢運動公園の正面入口。

車内の伊庭は、緊張がぶり返したように、深呼吸をした。

横では有喜がくわえ鉛筆で外を眺めている。

人の通りのない桜並木。

夕時の散歩を楽しむ人影も、夕飯時の買い物を終えて買い物袋を
ぶら下げた主婦もいなかった。

キャデillacは突き進む。

桜並木を通り抜け、そのまま滑るように公園の敷地に突入した。

「え？」

と、窓の外にいた筋肉質の警備員を見送り、伊庭は驚きの声をあげる。

「このまま入って、いいんですか？」

ハンドルを操る先崎は、微笑んだままで答えない。

困惑の表情で伊庭は眼鏡を押し上げた。

窓に映った伊庭のリアクションに、外を眺める有喜はにやつく。

公園内の並木道、等間隔に並んだベンチには、ちらほらと公園の
利用者の姿が見受けられた。

読書をする者、ジョギングをする者。

どの利用者も、ダイエットの必要がない風貌をしていた。

並木道が途切れた。

木々で狭められていた道が開ける。

道は小さなロータリーを形作り、右と左の2手に別れている。

ロータリーの中心には、円形の花壇をバックにした色褪せた案内板が、寂しげに地図を拡げている。

ロータリーの回りには、客のいない売店、屋外のテーブル。

フランクフルトののぼり旗が、風に見捨てられてうなだれている。

ロータリーの看板に、横付けするように、キャデラックは停車した。

驚いた顔の伊庭に、

「お急ぎですか？」

と、先崎は柔らかな声で訊く。

「それは、そうです。人を待たせていますから……」

答えながら、伊庭はズボンのポケットに手をつ込み、

「……何時だ？」

と呟く。

ルームミラー越しに、携帯電話を取り出した伊庭を見つめながら、先崎は口を開いた。

「『急ぐ』という字には、下に心があります。貴方の、今の気持ちが足に宿れば、その速度は自動車のそれを優に越えるでしょう。それに……」

顔を上げた伊庭。

鏡に映る若者に、先崎は柔和そのものの笑顔を送った。

「公園は、車の走る所ではありません」

静寂。

伊庭は開かずにいた携帯電話を握り、ポケットに戻した。

「……告白は、走って現れるものと相場が決まっている」、ですね」

と呟き、伊庭は微笑んだ。

鞆を掴み、ドアを開ける。

外気が車内に入り込む。

「送ってくれて、ありがとうございます。酒匂川、君にも」

有喜は二カツと歯を見せて、

「いいですいいです」

先崎は微笑みと会釈で答えた。

「……いつてきます」

決意が、身体に染み込んだような伊庭の声。

ボタンとドアを閉めて、伊庭は走り出す。

迷う事無く、左の道へと走り出す。

小さくなっていくグレーの制服を眺めながら、

「他の人に聞かれたら、馬鹿にされるでしょうね？今の会話」

と、有喜は羽毛の調子で言う。

「車で行った方が早いに決まってる、って」

「愚かな行為をするのは、恋をする者の特権ですよ」

と、肩越しに先崎は答える。

長い脚を組んだ有喜は、鉛筆をピコピコと動かし、

「自分で仕向けておいて、ですか？」

と、楽しげに訊く。

「これはこれは」

有喜の返しに、先崎はフツと、可笑しそうな息をもらした。

「年寄りのお喋りと、お節介が過ぎましたかな？」

広美は顔を上げた。

強烈な夕陽。

水の音。

広美は眩しそうに眼を細めて、広場にある時計を見た。
光を反射するガラスの向こうに、針が時を刻んでいる。

5時58分。

石神沢運動公園の噴水広場。

煉瓦が敷かれた、円形の広場。

広場を囲う芝生の四方には、背の高いポールが刺さり、その上にはスピーカーがぐくりつけられている。

オレンジ色に染められた広場。

広美以外に人気は無い。

広場の中央には、大きく浅い人工の池。

その更に中心部には、台形を逆さにしたような形の噴水。

巨大な噴水からは、空に挑むように水が吹き上がり、その力強い水流を飾るように、いくつもの細い水の線が、外に向かって放射線を描いている。

バシャバシャと戯れるような音をたてて、水は水面に飛び込んでいく。

その騒がしい人工の池の周囲を、側溝に使われるようなグレーチングがグルリと囲んでいた。

広美は広場をゆっくりと見回し、

「変わったなあ……」

と、呟いた。

伊庭は走った。

息を切らす。

ネクタイが揺れる。

両手を振る。

暴風にもてあそばれるハンカチのように鞆を揺らし、ジョギングコースを走り抜ける。

アスファルトで舗装された道。

道の回りを芝生が覆い、人工的に植えられた木々が、等間隔に緑を見せる。

夕陽が強い。

伊庭は眼を細めて、目的地を目指し、走る。

広美は下を向いていた。

下を向き、ゆっくりと足を動かす。

肩にかけたバッグのジッパーをいじりながら、グレーチングの上をなぞるようにして歩く。

小さな子どもが、線路を走る汽車の真似をするような動き。速度は遅い。

ゆっくり、ゆっくりと歩き続ける。

水の音。

湖を左側に見た列車のように、広美は進む。

どこか、遠い所を見た眼。

ぼんやりとした顔。

一周すると、広美は顔を上げた。

再び、時計を見上げる。

短針と長針が一直線になって円を割っている。

6時。

「6時か……」

広美は呟く。

瞬間。

足音が広場に届いた。

短い、音の間隔。

強い音。

走る足音。

革靴が地面を打って、走る音。

初めは小さく、段々と大きく。

近づく音。

広美は、身を固くして音が生まれている方角を見詰めた。

噴水広場に繋がる、3つの道の内の1つ。

広美の真正面にある道。

その道から、音は向かっている。

そして、音の所有者。

伊庭悠志。

伊庭は広美の姿を見ると、徐々にスピードを緩めた。

広美の前、2m程の所に立ち止まり、伊庭は膝に両手をついた。
激しい呼吸。

「…ごめん。ハア、遅く、なつて」

息を整えつつ、謝罪の言葉を述べる伊庭。

広美はブンブンとポニーテイルを揺らし、

「いえ、私も来たばかり、ですから」

と、うつむき気味で答える。

「それなら、よかった。ハア」

伊庭は身体を起こした。

大きく息を吸い込み、吐き出す。

1度、2度。

その間に、手探りで身だしなみを整える。

この時になって、伊庭は噴水広場を見回した。

珍しそうに広場を見て、

「…随分、変わったね」

「…はい」

答えながら、広美も伊庭の視線に従った。

水の音。

波紋が乱れる水面。

夕陽。

陽光が、水にキラキラと輝いている。

「覚えてる？」

呼吸が落ち着いてきた伊庭が訊く。

「えっ？」

「去年の夏」

広美は下を向いて、

「…夏の大会ですか？」

「そう。俺が、初めて君に話しかけた時」

「…はい。覚えてます」

「あの時、君に言っただよね。ファンになった、って」

「…はい」

「…今日も、君に言いたい事があったから、来てもらったんだ」
伊庭の言葉に、広美は顔を上げた。

不安そうな、困ったような、緊張したような、表情。

夕陽を塗りたくられた上からでも分かる程に、顔が赤い。

上目遣いで自分を見る広美と、伊庭は真っ直ぐに向き合う。

姿勢を正す。

身体の前で、拳をギュツと握った。

「俺は、君が、好きだ」

告白。

水の音。

「俺と、付き合ってください」

告白。

水の音。

「お願いします」

頭を下げる。

広美、全身硬直。

眼を丸くし、呼吸を止める。

伊庭は頭を下げたまま、動かない。

金縛りにかけられた広美。

金縛りにかけられた伊庭。

静寂。

静寂。

静寂。

水の音だけが、慌ただしい。

広美は、瞬きを繰り返した。

徐々に、石化がとけだした様子で、瞳がグルグルと回り始める。
回遊魚となった眼のまま、小さな声で、

「…えつと、あの、先輩？」

「…何？」

と、頭を下げたまま、伊庭は聞き返す。

「つ、付き合うつて、事は、先輩と、私がつて、事です、か？」

小さな声、ぶつ切りになった言葉で広美は訊く。

「そう」

「つ、つまり、私が、先輩の、あの、その、彼女、に…？」

「そう」

顔色をレッドゲージの危険領域に到達させる広美。

口元をグニヤグニヤと歪ませ、潤んだ瞳がグルグルと回る。

バッグの肩紐を、アナコンダのように握り締め、

「私、なんかで、いいんですか？」

と、震える声で訊く。

伊庭は顔を上げない。

「『なんかで』なんて、言わないで欲しい。君がいいんだ」

「…！」

広美の顔が、火が出るように赤くなる。

半鐘が鳴り響きそうな程に、顔を真っ赤に燃やし、広美はうつむいた。

息が、震えている。

水の音だけが騒がしい。

広美が、僅かに唇を動かす。

「…私」

言葉が途切れる。

「…私で、よければ」

小さな、返答。

長年放置されたブリキの人形のように、伊庭はギシギシと身体を起す。

「すぐのような、信じられないような、顔と声で、

「…本当に？」

広美はうつむいたまま、コクンと、頷いた。

OK。

伊庭の顔色が変わる。

緊張から、喜びの笑みへ。

瞬間。

強烈な音が2人を襲った。

虚をつかれた様子で、2人は周囲を見る。

音の出所。

噴水、中央。

中央から力強く吹き出していた水流が、数秒前よりも、さらに深く空に突き刺さっていた。

倍以上の高さに到達した水の群れは、プール開きを迎えた子どものように水中に飛び込む。

更に。

2つの出来事が2人を襲った。

1つは上から。

ピアノの音。

間をつなぐドラムの音。

2人は顔を上げたまま、回りを見回す。

広場の四方に取り付けられたスピーカーから、音楽は流れている。

2人を襲う、もう1つの出来事は、広美の足元。

噴水を囲んでいた、グレーチング。

その中から、ゆっくりと何かが吐き出された。

「な、何？」

驚きの声を上げる広美を、立ち上る物が包み出す。
人工の霧。

胸元まで、霧に包まれる広美。

噴水は高々と上がる。

その回りを、霧が彩る。

演奏は続く。

アップテンポな、スイング。

ピアノ、ベース、ドラムのトリオ。

『What is this thing called love?』（恋とは何でしょう？）

「一体、何が…？」

伊庭は視線を動かし、不意に、動きを止めた。

斜め上を見上げ、

「…そうか。6時なのか」

時計。

広場の時計は、『未だに』6時だった。

伊庭は眼鏡を押し上げ、

「派手だな…。毎時間こんな感じなのかな？」

と、霧の中の広美に訊いた。

広美は答えない。

一際、高く上がった水の頂点を見詰めている。

夕陽。

全てをオレンジ色に染めている。

木々。

芝生。

煉瓦。

ベンチ。

高く上がった水。

その回りの、添え物のような小さな曲線。

水面。

霧。

全てが、オレンジに染まっている。

オレンジ色の霧に包まれながら、広美は呟いた。

「…まるで、美優貴ちゃんみたい」

オレンジの世界。

演奏は続く。

『What is this thing called lo

ve?』(恋とは何でしょう?)

第44幕：『愚者』（ザ・フル）

「報告。ポイントAの稼働を確認。正常に作動しています」

「よし。引き続き、警戒を怠るな」

「Yes, sir」

作戦司令部。

報告の声は疎らになり、司令部は静かになっていた。

「お嬢様」

小野寺の声に、巨大モニターを眺めていた美優貴は、

「ん？」

「ポイントA、噴水広場の全システムの稼働を確認しました。成功です」

「そうか」

美優貴はモニターから顔を背け、

「引き続き、警戒を頼む。2人が公園から出るまで、抜かるなよ」

「Yes, ma'am」

「守人」

壁の一部と化していた守人が、薄闇の中で進み出る。

美優貴は手袋を外して守人に渡した。

「私は外の空気を吸ってくる。お前はここに残れ。何かあったら伝える」

「かしこまりました」

一礼の守人を残し、美優貴はドアに向かった。

小野寺が扉を開け、外気と外の光が車内に押し込んでくる。

美優貴が外に向かって、ピヨンと飛んだ。

扉が閉められる。

再び、車内は暗くなった。

騒ぎが治まったが、黙々とデスクワークの音が満ちる車内。指揮官席に座ったななは司令部を見回す。

全隊員、真面目そのものの表情でモニターに向かっている。
ジロリと横を見た。

隣の席の高杉は、眼を瞑り腕を組んでいる。
眠ったように動かない。

ななは座り心地が悪そうに、椅子に座り直し、テーブルに右肘をついた。

右手の上に顎をのせ、人差し指で鼻の頭を叩く。
トントントン。

眠たげな眼を閉じ、ななはのっそりと立ち上った。

「如何されましたか？」

守人が訊く。

ななはやる気のない眼を守人に向けて、

「ちよつと、そこまで」

「かしこまりました」

守人は先に立って歩き、ドアノブを回した。

重そうなドアがギイと開く。

風が入る。

ななは、少し高さのある車内から、トンと地面に降り立った。
ドアが閉められる。

少女が2人、出ていった。

ドアを閉めた守人は、所定の位置へと戻る。

同時に。

「影山」

と、沈黙を守っていた高杉が語りかけた。

「はい」

「俺も出てくる。ブラザーの様子が気になるからな」
そう言つて、高杉は腰を上げた。

「かしこまりました」

「待ちなさい」

と、小野寺の制止。

高杉と守人は、小野寺に視線を送る。

傷跡だらけの軍人は、モニターを見詰めて、口髭に隠れた口を動かした。

「古い考えだと笑われるかもしれませんが、女には女にしか分からない事がある。こういう時、男は口出しするべきではありませんん」

2人は、無言で小野寺を見詰めた。

高杉は、小野寺に従うようにして、再び椅子に腰をおろした。

壁に寄り添う守人は、主を思うように瞳を閉じた。

僅かに風が吹いている。

石神沢運動公園、駐車場。

広い駐車場には、黒猫引越し社のトラック以外停まっていない。

夕陽にそまる、平らな地面。

平らな世界に、小さな車止めがささやかな変化を与えている。

駐車場の前の車道を走る車は1台もない。

歩く人も1人もいない。

静寂。

静寂。

静寂。

夕暮れに染まりながら、ななは首をゆつくりと動かした。

トラックは、駐車場に入つてすぐの所に、指示の線を見無視して停められている。

駐車場の入口には、遮断機のついた駐車券を発券する器械。

その横には、自販機が2台並んでいた。

更にななは首を動かす。

ゆつくりと動かし、止めた。

一点を見詰める。

50m程先、駐車場から公園内へと続く道。

その道から最も近い場所の車止めの上に、美優貴が独り、立っていた。

頭を上げ、公園の木々の上を眺めている。

なの場所からは背中しか見えない。

ななは、美優貴の姿を確認すると、自販機の方へ身体を向けた。

スカートのポケットから、小さな小銭入れを取り出す。

太極図に『丁』と『半』の字が組み込まれたデザインの、丸い小銭入れ。

ジッパーを開け、中から500円玉をつまみ出す。

2台並ぶ内の右側の自販機に小銭を入れた。

チャリンと軽い音をたてる。

暖かいミルクティーのボタンを押した。

ガコンと、素っ気ない音をたてて、取り出し口に小さなペットボトルが落ちてくる。

ななは取り出し口からペットボトルを取り出し、再度、同じボタンの指を伸ばしかけた。

指が止まる。

眠たげな眼が、一点を見詰める。

『HOT』

ジローツと他の商品を見回す。

首を回し、隣の自販機に眼を向ける。

似たようなラインナップ。

しかし、そちらにあるミルクティーは、冷たい物だった。

『COOL』

ななは小銭の返却レバーに手を伸ばした。

2つのちびたペットボトルを手に、ななはブラブラと歩いた。

オレンジの平坦な地面を進む。

駐車場を突っ切るなな。

真つ直ぐ先には、オレンジ色の髪を見せる1人の少女。
その背中に向かって、ななは声をかけた。

「美優貴」

「ん？」

「ん」

振り向いた美優貴に、ななはペットボトルを差し出す。
冷たいミルクティー。

「ん？」

「あげる」

受け取りながら、

「くれるのか？」

と、美優貴は不思議そうに訊く。

ななは、自分のペットボトルを開けながら、

「あげる」

美優貴は、ジッと手の中のペットボトルを見詰めて、

「そうか。ありがとう」

「別に」

ななは美優貴が陣取っている物の、横の車止めの上に乗った。
ペットボトルを口元に運ぶ。

ななの様子を見て、美優貴はペットボトルを軽く振った。

2人は公園を向いている。

「…ねえ」

「ん？」

「これで良かったの？」

「これで良かった」

「そう…」

ななは、ペットボトルを傾ける。

美優貴はペットボトルのフタを取る。

2人は視線を交わさずに、公園の方を向いている。

「あのさ」

「ん？」

「ずっと、疑問だった事があるんだけど、訊いていい？」

「どうした？」

「入学式の時に、あんた、私を見て、変なりアクションしたじゃない。アレ、何だったの？」

「アレか……」

美優貴はミルクティーを口に含む。

コクンと一口。

「何のことは無い。ただ、なの髪型が母に似ていただけだ」

「お母さんに？」

「母に」

美優貴は再び、ミルクティーを口に含む。

一口。

「母は亡くなった」

ななは、スツと顔を美優貴に向ける。

「亡くなった？」

横顔の美優貴は頷く。

「私だけでは無い。守人もそうだ。私達は2人共、母親がこの世にいない。昔の話だ」

端正な横顔には、何の表情も浮かんでいない。

「私の記憶の中の母の髪型と、なの髪型が似ていた。ただそれだけだ。気にしなくていい」

そう言って、美優貴はペットボトルを傾ける。

一口。

ななは、美優貴から視線を外した。

「…そう」

ななもペットボトルを傾ける。

一口。

美優貴は空を見上げた。

「もうすぐ、陽が沈むな」

つられるように、ななも空を見上げる。

そらは、暗い色が強くなっていた。

僅かな光は、オレンジ色が薄まり、透明感の高い黄色へと変わり始めている。

儚く、美しい輝き。

「マジックアワーか」

美優貴は呟く。

「恋には魔法が必要ならば、マジックアワーは丁度いい。…私の魔法は品切れだ」

木々の向こうで見えない輝きを見詰めながら、美優貴はティータムを続ける。

ななは、ペットボトルのフタを閉めた。

「…あんたってさ」

「ん？」

「本当、不器用よね」

美優貴は眉をピクリと釣り上げる。

「何？」

「だから、不器用だっつーのよ」

ななの真っ平らな言葉に、美優貴は口の端をねじ上げる。

「私が？不器用だと？」

ななは美優貴をジロリと見る。

「そうよ」

美優貴はペットボトルのフタを閉め、

「よし。見ている」

と、ペットボトルを車止めの上に置いた。

クルリとななの方に身体を向けて、スカートのポケットに手を入れる。

取り出したのは1枚のタロットカード。

右手に収まったカードは、『悪魔』（ザ・デビル）。

美優貴は親指以外の指先を揃え、手のひらをななに向ける。

観光案内をするバスガイドのようなポーズ。
押さえる指の無いカードは、手に貼り付いたように、落ちない。
右手の手のひらに展示された名画のように、カードがななを向いている。

美優貴は左手をゆつくりとかざした。

左手を上から下をへと動かす。

瞬間。

悪魔が消えた。

絵柄が変わる。

カードの絵柄は『恋人』（ザ・ラヴァーズ）。

再び、美優貴は手をかざす。

ゆつくりと、上から下へ。

今度は、カード自体が無くなった。

美優貴は、ななに悪戯っぽい笑顔を向ける。

仏頂面で不機嫌そうな顔のなな。

美優貴は何も無い事を証明するように、両手をヒラヒラと動かしながら、車止めからトンと降りた。

軽やかにななに近付き、爪先で立つ。

「失礼」

芝居がかった口調で言っ、ななの胸ポケットに指先を伸ばした。
人差し指と中指がポケットの中にスルリと忍び込む。

ゆつくりと、指が外に出た。

その指先には、1枚のタロットカード。

裏面をななに見せたまま、美優貴は自分の顔の前にカードを移動させる。

丸めていた手首を、起こした。

カードの絵柄。

1人の男と1匹の犬。

旅人のような姿をした男は、歌でも歌っている様子で上を向いている。

手を広げて、足を役者のようにピンと伸ばして。

足元も見ず、陽気に歌う男の道。

その先は、崖だった。

カードの数字は0。

『愚者』（ザ・フル）。

自分の額にかざすようにして絵柄を見せて、美優貴はニヤリと笑った。

「誰が不器用だと？」

仏頂面のなな。

口のへの字に曲げて、ペットボトルを口元に運んだ。

「…訂正するわ。美優貴」

「ん？」

「あんた、馬鹿よ」

「何イ?!」

光の中に美優貴はいた。

人工の、強烈な明かり。

周りは闇。

テニスコートの中に、美優貴は独り立っていた。

コートの上の時計を見やる。

7時27分。

両手で鞆をぶら下げて、美優貴は独り立っている。

コートには、ネットが張られているだけで、他には何も転がっていない。

ボールはカゴに入り、ベンチの横に置かれている。

美優貴は、コートの中を見回した。

長年住み慣れた我が家から離れる学生のように、ゆっくりと。表情は穏やかだった。

口元が、柔らかく結ばれている。

無音のコート。

そのコートに、闇の中から物音が届いた。

地面を踏み締める音。

ジャリジャリと音をたてて、コートに近づく音。

徒歩のスピード。

突然。

スピードが早まった。

間隔が狭まる。

闇を誰が走り出した。

美優貴は自分の胸に、ソツと手を当てた。

胸元に視線を落とす。

唇を開く。

「…行こう、羊飼殿。名誉の退却だ」

『お気に召すまま』の道化の台詞。

自分の胸の中にしまった心に語りかけように、美優貴は言った。

顔を上げる。

足音が近づく。

美優貴は、闇の中から現れる人物を、優しい微笑みで待っていた。

エピソード

「りる香、昨日はすまなかったな」

「いいよう。先輩、優しかったし」

「そうか、それは良かったな」

翌日、水曜日。

昼休み。

1年7組の教室には、昼食時の喧騒が満ちていた。

美優貴の机には、なの机と、わざわざ前から運んできたりる香の机が繋がられていた。

寄せ合った机には、それぞれの持ち主が腰掛けている。

美優貴の後ろには、バスケットを持った守人が、執事然とした姿勢で控えている。

そして、もう1人。

「いやいや、昨日は大変だったね」

美優貴とりる香の間に割り込むようにして、誰かの椅子に馬乗りになった有喜が言った。

弁当箱を広げてはじめていたりる香は、

「あれ？うつちゃん先輩も何かあったんですか？」

有喜はニカツと笑い、

「そうそう。大変だったんだよ」

「そうなんですかあ」

と、二ヘラのりる香。

りる香の無邪気過ぎる笑顔を横目に見ながら、ななは重箱の包みをほぐく。

美優貴は、まだ昼食の準備をしていない。

「そう言えば、先輩達はどうなったの？」

フタを手にしたりる香は訊く。

「ん？」

美優貴は首を傾げて、

「結局、保留になったそうだな。第一、演劇の希望が通るかどうかわからないからな」

りる香は、ふうんと口を尖らして、

「あわてんぼさんだねえ。決まってからお願いすればよかったのに」

「全くだ」

美優貴とりる香の会話に、有喜はニヤニヤと笑う。

美優貴は、ああと言って、

「そう言えば、うつちゃん」

「何何？」

「ブラザーはどうした？」

余計な事を言うな、と言っ言葉を体现したような視線を、ななは美優貴に向けた。

有喜はピコピコとくわえ鉛筆を動かし、

「反省文書いてるよ」

「反省文？」

「うんうん」

「内容は？」

「内容は、『授業中に写真集を見ててすみません』」
納得したように美優貴は頷き、

「流石だ、ブラザー」

「流石じゃねーわよ」

りる香は首をフクロウにして、

「え？資料集って見ちゃいけないの？」

と、完全に聞き間違えた事を訊く。

「りる香」

「何？」

「黙ってて」

「何だとう」

頬つぺたを膨らますりる香に、ケラケラと笑う有喜。

ななは鉄仮面を美優貴に向けた。

未だに昼食の準備をしていない。

代わりに、机の上には3冊の文庫本があった。

「食べないの？」

「ん？ そうだな」

文庫本を脇に寄せ、肩越しに守人を見やる。

守人は静かに一礼すると、主の机を整えはじめた。

「失礼致します」

テキパキと、優雅な手つきで食卓を整える守人を見て、

「格好いいなあ」

と、りる香は素直な感想をもらす。

「そうか？」

「そうだよ」

「だそうだ。守人」

守人は眼を伏せて、

「私には、勿体無いお言葉です」

と、僅かに頬に桜の花を散らせて言う。

守人の様子を、美優貴と有喜は悪戯っぽい笑顔でうかがっている。

突然。

「あつ、そうだ」

と、りる香はすつとんきょうな声を上げて、

「格好いいで思い出したんだけど、美優貴ちゃん、スーツ格好い

いねえ」

「そうか？」

「そうだよ。うつちゃん先輩もそう思いますよね？」

「うんうん。美優貴ちゃん、いつもあんなキツチリした服着てる

の？」

美優貴は腕を組み、

「そうだ。いつもあんな感じだな」

「それは勿体無い勿体無い」

有喜は鉛筆を指ではさみ、

「もつとカジュアルな感じの服も着てみなよ。似合うと思うなあ」
りる香はブンブンと頷き、

「絶対似合うよう」

「そうか？」

「似合う似合う」

ファッションの話に花が咲く。

友人達の会話をよそに、ななは何気なく、といった様子で、美優
貴の机の本に手を伸ばした。

3冊の薄い本。

3冊の詩集。

背表紙には、それぞれ『バイロン詩集』、『ハイネ詩集』、『ゲ
ーテ詩集』の文字。

ななは、一番上に置かれていたゲーテの詩集を手にとった。
表紙には、ささやかなイラスト。

裏には、『円舞学園図書館』の文字が印刷されたバーコードシ
ルが貼られている。

興味のなさそうな瞳で本を見やり、片手でパラパラとめくる。

「ねえ、なな」

りる香の声に、ななは顔を上げた。

「ななの好きなブランドって何だったっけ？あ、黒と白のやつ」
「…『チヨーク and ハンフリー』の事？」

「あつ、それぞれ」

ななの左手。

開かれたままの本。

そこに、短い詩があつた。

4行の文字列。

詩と詩の間を示す空白が、短い文章を、一際目立たせている。
タイトルは、『そら死に』。

『お泣きよ、おとめ、ここが恋の神^{アモル}のお墓です。

アモルはここでわけもなく、ふとしたことで死にました。

けどほんとに死んだのか。それは怪しい、アモルは

ふとしたことでわけもなく目を覚ますのが常だから。』

Fin .

エピローグ（後書き）

長い間ごらんいただきまして、本当にありがとうございます。いかがでしたでしょうか？

途中で長期休載という、実に情けない自体にも陥りましたが、何とか書き上げました。これもひとえに読者の方々、そしてキャラクター達のおかげです。本当にありがとうございます。

作者の稚拙かつワンパターンの小説を、まさに苦行のような時を過ごしていただいた皆様に、迷惑ついでもうひとつだけ。もしお時間よろしければ、感想やレビューなどしていただければ幸いです。どんな事でも結構です。何かご教授下さいませ。

いや、どんな事では言いましたが、作者は大変傷つきやすいので、できれば優しくお願いします。

長々と失礼しました。それでは皆様、また次回作でお会いしましょう。

「本文中の詩の引用」

『ゲーテ詩集』新潮文庫・昭和26年4月25日・高橋健二訳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1566g/>

いつか王子様かお姫様が

2011年3月15日09時20分発行